山口県埋蔵文化財センター調査報告　第53集

下右田遺跡

（神里地区）

２００６

財団法人　山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第53集

下右田遺跡
（しもみぎた）

（神里地区）
（かみさと）

２００６

財団法人　山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、一般県道大内右田線道路改良・住宅工事に伴い、山口県から委託を受けて財団法人山口県ひとづくり財団が実施した下右田遺跡（神里地区）発掘調査報告書です。

下右田遺跡（神里地区）の所在する佐波川右岸では、下右田遺跡や右田・一丁田遺跡、大日古墳などの遺跡が数多く見つかっており、これまでの発掘調査によって、たくさんの貴重な遺構・遺物が確認されています。このことから、豊かな水と肥沃な土地を背景に、縄文時代や弥生時代から現在に至るまで人々の暮らしが連綿と続いてきたことがうかがわれます。

今回の調査においても、条里制に関係すると思われる溝をはじめとして、古代から中世までの遺構や遺物が数多く出土しました。これらの遺構や遺物は、佐波川流域で暮らしていた人々の生活の様子を解明するための大変貴重な資料です。

本書が、文化財保護に関する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、ふるさとづくりの基礎資料として、広く活用されることを願うものであります。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成に当たって御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年３月

財団法人　山口県ひとづくり財団

理事長　村 岡　正 義

例　言

1　本書は、平成17年度に実施した、山口県防府市大字高井に所在する下右田遺跡（神里地区）の発掘調査報告書である。

2　調査は、一般県道大内右田線道路改良・住宅工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が、山口県防府土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。

3　調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　文化財専門員　城　島　史　朗

文化財専門員　椿　　英　一

4　調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県防府土木建築事務所並びに地元関係各位から、協力・援助を得た。

5　本書の図１は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「防府」を複製使用した。図２は、防府市教育委員会作成の原図を元に作成した。図３は山口県防府土木建築事務所提供の地図を元に作成した。

6　本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、標高は海抜標高（m）である。

7　出土遺物のうち石材鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員　亀谷　敦氏に依頼した。記して謝意を表す。なお、鑑定方法は表面観察によるものである。

8　本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。

9　図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10　土器実測図中、断面の黒塗りは須恵器を表す。

11　本書で使用した遺構略号は次の通りである。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＸ：不明遺構

12　本書の作成及び執筆は、城島、椿が分担して行い、編集は城島が行った。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境…… 1
Ⅱ　調査の経緯と概要…… 4
Ⅲ　調査の成果…… 7
　1　遺構…… 7
　2　遺物…… 49
Ⅳ　まとめ…… 79

挿図目次

図 1　遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 1
図 2　下右田遺跡調査地 …… 3
図 3　調査区設定図 …… 5
図 4　トレンチ土層断面図 …… 6
図 5　ＳＢ１実測図 …… 8
図 6　ＳＢ２・３実測図 …… 9
図 7　ＳＢ４・５実測図 …… 10
図 8　ＳＢ６実測図 …… 11
図 9　ＳＢ７・８実測図 …… 12
図 10　ＳＤ９－Ⅰ実測図 …… 13
図 11　ＳＤ９中央トレンチ土層断面図 …… 14
図 12　ＳＤ７・８・10 実測図 …… 15
図 13　ＳＫ 17 実測図 …… 16
図 14　ＳＫ 14 実測図 …… 17
図 15　ＳＫ５・６・19・20 実測図 …… 18
図 16　ＳＫ９・12 実測図 …… 19
図 17　ＳＫ 31・32・33 実測図 …… 20
図 18　ＳＫ 10・16・23・24・25・29 実測図 … 21
図 19　ＳＰ 13・36 実測図 …… 22
図 20　ＳＰ 110・112・119・135・152・157
　　実測図 …… 23
図 21　ＳＸ１実測図 …… 24
図 22　ＳＢ９実測図 …… 25
図 23　ＳＢ 10 実測図 …… 26
図 24　ＳＢ 11・12 実測図 …… 27
図 25　ＳＤ９－Ⅱ実測図 …… 28
図 26　ＳＤ９－Ⅱセクション１・２実測図 … 29
図 27　ＳＤ９－Ⅱセクション３・４実測図 … 30
図 28　ＳＤ９－Ⅱセクション５実測図 …… 31
図 29　ＳＤ９－Ⅲ・５実測図 …… 32
図 30　ＳＤ３・11・12 実測図 …… 33
図 31　ＳＫ 201・203・204・205 実測図 …… 34
図 32　ＳＰ 351・337・348・349 実測図 …… 35
図 33　ＳＸ２、砂礫堆積層１実測図 …… 37
図 34　ＳＢ 13・15 実測図 …… 38
図 35　ＳＢ 20・21 実測図 …… 39
図 36　ＳＢ 19・16 実測図 …… 40
図 37　ＳＢ 14・17・18 実測図 …… 41
図 38　ＳＤ 14・15・16 実測図 …… 42
図 39　ＳＫ 301・320・322 実測図 …… 43
図 40　ＳＫ 302・303・304・305・306・307
　　実測図 …… 45
図 41　ＳＫ 311・312・313・315・318・321
　　実測図 …… 46
図 42　第１面溝状遺構出土土器実測図 …… 50
図 43　第１面土坑出土土器実測図(1) …… 51
図 44　第１面土坑出土土器実測図(2) …… 51
図 45　第１面柱穴出土土器実測図(1) …… 51
図 46　第１面柱穴出土土器実測図(2) …… 52
図 47　ＳＸ１出土土器実測図 …… 52
図 48　第１面遺物包含層出土土器実測図 …… 53
図 49　第１面下層確認トレンチ出土土器実測図 54
図 50　第２面溝状遺構出土土器実測図(1) …… 56
図 51　第２面溝状遺構出土土器実測図(2) …… 57
図 52　第２面溝状遺構出土土器実測図(3) …… 58
図 53　第２面溝状遺構出土土器実測図(4) …… 59
図 54　ＳＫ 201 出土土器実測図・…… 59
図 55　第２面柱穴出土土器実測図 …… 59
図 56　第２面砂礫堆積層出土土器実測図(1) … 61
図 57　第２面砂礫堆積層出土土器実測図(2) … 62
図 58　第２面下層確認トレンチ出土土器実測図 62
図 59　第２面遺構面検出時出土土器実測図 … 63
図 60　ＳＫ 301 出土土器実測図…… 63
図 61　第３面砂礫堆積層出土土器実測図 …… 65
図 62　第３面遺構面検出時出土土器実測図 … 65
図 63　出土石製品・鉄製品実測図 …… 67
図 64　本遺跡出土の柱状高台皿 …… 81
図 65　下右田遺跡概出の柱状高台皿
　　および高台付皿…… 82
※付図　下右田遺跡（神里地区）遺構配置図

表目次

表１　掘立柱建物跡一覧…… 47
表２　溝状遺構一覧…… 47
表３　土坑一覧…… 48
表４　土器観察一覧…… 68
表５　石製品観察一覧…… 78
表６　鉄製品観察一覧…… 78
表７　ＳＤ９－Ⅱ出土土師器の色調…… 81
表８　ＳＤ９－Ⅱ出土土師器の法量分布…… 81

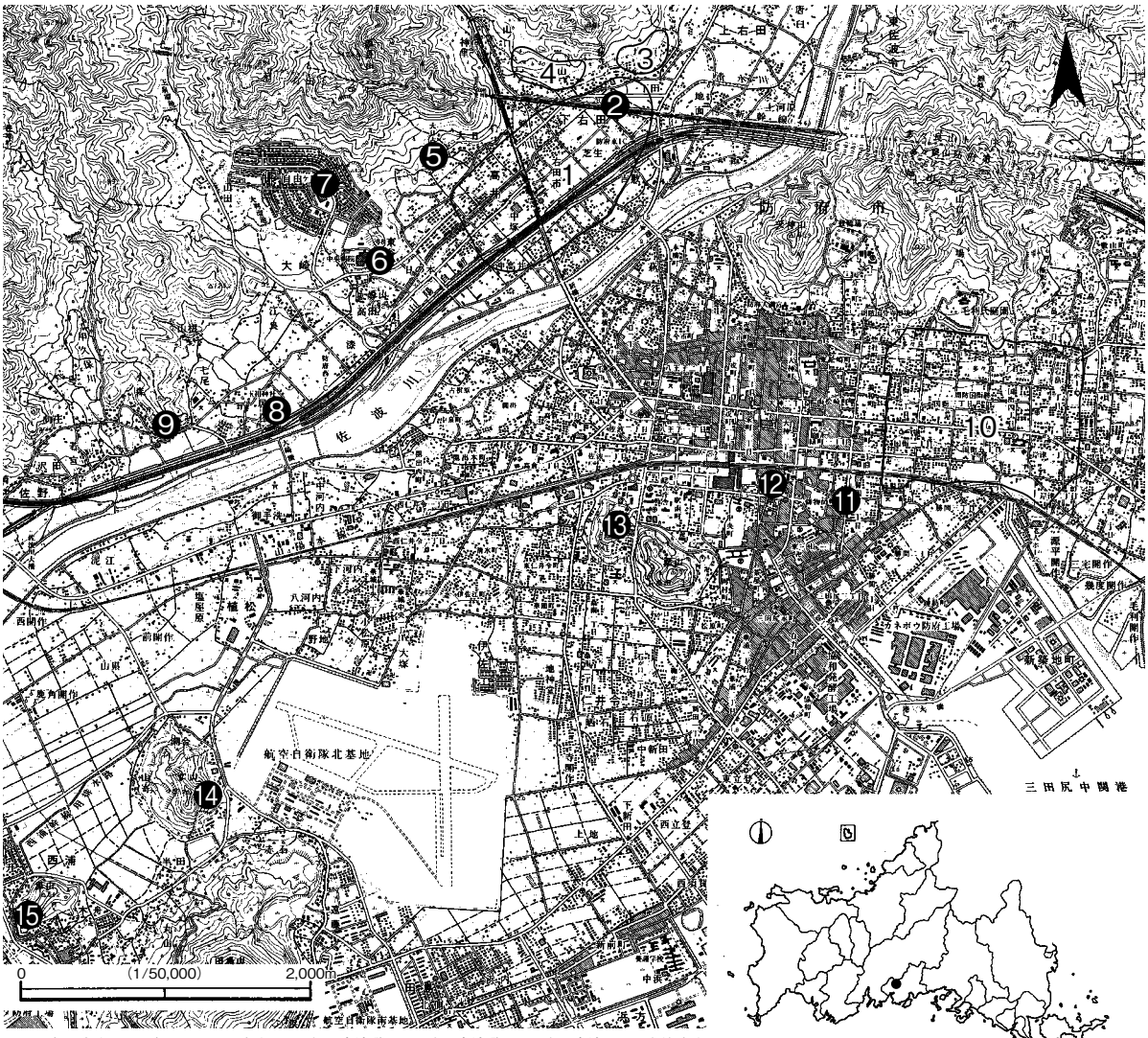
図版目次

図版 1　調査区遠景
図版 2　調査区全景
Ⅰ地区第１面完掘状況
Ⅱ地区第１面完掘状況
図版 3　Ⅰ地区掘立柱建物群
ＳＢ７・８完掘状況
図版 4　ＳＤ９－Ⅰ完掘状況
ＳＤ９中央トレンチ土層断面
図版 5　ＳＤ９－Ⅰ土器出土状況
ＳＤ 10 土器出土状況
図版 6　ＳＫ 17 土器出土状況
ＳＫ 14 土器出土状況
ＳＫ５土器出土状況
ＳＫ６完掘状況
ＳＫ 10 土器出土状況
図版 7　ＳＫ 12 土器出土状況
ＳＫ９土器出土状況
ＳＫ 31 土器出土状況
ＳＫ 32 土器出土状況
ＳＫ 33 土器出土状況
図版 8　ＳＫ 19 土器出土状況
ＳＫ 16 土器出土状況
ＳＫ 23 土器出土状況
ＳＫ 24 土器出土状況
ＳＫ 25 完掘状況
図版 9　ＳＰ 119 土器出土状況
ＳＰ 112 土器出土状況
図版 10　ＳＰ 36 土器出土状況
ＳＰ 152 土器出土状況
ＳＰ 157 土器出土状況
ＳＰ 13 土器出土状況
ＳＸ１土器出土状況
図版 11　Ⅰ地区第２面東側完掘状況
Ⅰ地区第２面西側完掘状況
図版 12　Ⅱ地区第２面トレンチ掘削状況
ＳＢ９・10 完掘状況
図版 13　ＳＤ９－Ⅱ土器出土状況
ＳＤ９－Ⅱセクション１土器出土状況
図版 14　ＳＤ９－Ⅱセクション２土器出土状況
ＳＤ９－Ⅱセクション３土器出土状況
ＳＤ９－Ⅱセクション４土器出土状況
ＳＤ９－Ⅱセクション５土器出土状況
ＳＤ９－Ⅲ完掘状況
図版 15　ＳＤ９－Ⅲ杭列完掘状況
ＳＤ 11・12 完掘状況
図版 16　ＳＫ 201 土器出土状況
ＳＸ２完掘状況
図版 17　ＳＰ 337 土器出土状況
ＳＰ 349 土器出土状況
図版 18　砂礫堆積層１完掘状況
支脚出土状況
図版 19　Ⅰ地区第３面完掘状況
Ⅰ地区第３面東側完掘状況
図版 20　Ⅰ地区第３面中央完掘状況
Ⅰ地区第３面西側完掘状況
図版 21　Ⅰ地区掘立柱建物群
ＳＤ 14・15 完掘状況
図版 22　ＳＫ 301 土器出土状況
ＳＫ 320 土器出土状況
図版 23　ＳＫ 303 完掘状況
ＳＫ 306 完掘状況
ＳＫ 311 完掘状況
ＳＫ 312 完掘状況
ＳＫ 313 完掘状況
ＳＫ 307 完掘状況
ＳＫ 321 完掘状況
ＳＫ 322 土器出土状況
図版 24　出土遺物(1)
図版 25　出土遺物(2)
図版 26　出土遺物(3)
図版 27　出土遺物(4)
図版 28　出土遺物(5)
図版 29　出土遺物(6)
図版 30　出土遺物(7)
図版 31　出土遺物(8)
図版 32　出土遺物(9)
図版 33　出土遺物(10)
図版 34　出土遺物(11)
図版 35　出土遺物(12)
図版 36　出土遺物(13)
図版 37　出土遺物(14)

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

下右田遺跡（神里地区）は、山口県のほぼ中央部に位置する防府市大字高井に所在する。防府市は、南を周防灘に面し、北に右田ヶ岳（426m）、北西に西目山（312.4m）、佐波川を挟んで北東に矢筈ヶ岳（460.9m）を背景にして、三方を花崗岩や緑色片岩からなる山地に囲まれている。その中央を、中国山地に源を発した佐波川が緩やかに市域を二分して周防灘に注ぐ。佐波川は下流域に広大な沖積平野を形成し、近世の干拓事業と併せて、県下最大の防府平野を作りだしている。下右田遺跡（1）は、佐波川右岸の沖積低地において広範囲に展開する縄文時代晩期から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の背後には、花崗岩の露出した右田ヶ岳や西目山が迫り、その間を下って流れる剣川が、扇状地を形成して佐波川へと注いでいる。宅地開発や道路建設に伴って、旧来の様相を変化させてきているが、道路や水田畦畔など随所に条里地割りの痕跡を見ることができる。今回調査区となった神里地区は、下右田遺跡の推定範囲から見れば、剣川を西に臨む遺跡の北西部に位置している。



1．下右田遺跡　2．右田・一丁田遺跡　3．塚原古墳群　4．片山古墳群　5．大日古墳　6．大崎遺跡
7．奥正権寺遺跡　8．玉祖遺跡　9．向山古墳群　10．周防国府跡　11．鋳物師大師塚古墳　12．車塚古墳
13．井上山遺跡　14．女山古墳群　15．黒山古墳群

図1　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

２　歴史的環境

防府市は周知の埋蔵文化財が極めて豊富であり、弥生時代の高地性集落として知られる井上山遺跡(13)、２基の横穴式石室を持つ前方後円墳車塚古墳（12)、古代の周防国府跡（10)、国分寺跡など、県下でも有数の遺跡が存在する地域となっている。

市街地は、奈良時代に周防国府が置かれ、中世まで政庁として地方の政治、経済、文化、軍事の中心地として栄えたところとして知られている。付近には国府と関係の深い総社・国分寺などが位置する。延喜４年（904年）に松崎天神（防府天満宮）が建立され、文治２年（1187年）には、周防国は造営領国として東大寺領に編入された。そして､俊乗坊重源が東大寺再建の指揮を執った所でもある。阿弥陀寺など今でもその足跡を辿ることができる。中世以後、大内氏、毛利氏の支配下に置かれるが、陸、海上交通の要衝としての地位は揺るがず、軍及び商都としての発展を見せてきた。

一方､佐波川右岸の下流域においては､古くから連綿と続いてきた人々の営みを見ることができる。この地域で人々の生活が営まれていたことが確認される時期は縄文時代に遡る。早期の遺跡としては西目山山麓に位置する奥正権寺山遺跡（7）がある。ここでは、楕円文の押型文土器が出土している。更に大崎遺跡（6）からは後期の土器としては特徴的な、磨消縄文を施した土器が見つかっている。晩期の遺跡としては下右田遺跡、奥正権寺遺跡がある。これらの遺跡からは多くの土器が出土し、貯蔵用の土坑も確認され、定着的なムラとして発展しつつあったことが推察できる。

弥生時代になると、稲作の影響であろうか、低地へと集落が広がっていったことがわかる。下右田遺跡では前期に遡る遺構や遺物が発見されている。小川の遺構も確認されており、こうした水資源を利用して水田を営んだものと思われる。中期に入ると、ムラ同士の政治的緊張から軍事的、防衛的性格の強い集落が出現する。高地性集落の出現である。防府平野の独立丘陵に位置する井上山遺跡と佐波川を挟んで対峙する大崎遺跡がそれである。住居跡の他、貯蔵穴や環壕の一部も見つかった。後期になると、下右田遺跡がその規模から鑑みて、周防部瀬戸内地域の拠点集落としての様相を呈してくる。都市計画道路の事前調査では、わずか幅15m、長さ400mの調査区内に100棟もの住居跡と集落を巡ると思われる溝が検出されている。

古墳時代においては、佐波川右岸の丘陵地に国指定の前方後円墳大日古墳（5）をはじめとして、片山古墳群（4)、塚原古墳群（3)、向山古墳群（9）などの古墳群が点在する。肥沃な農業生産基盤を背景に在地勢力の進展をうかがうことができる。この時期の集落としては、下右田遺跡にわずかに確認されているが、弥生の大集落として発展してきた下右田の集落は、存続するもののその規模は小さくなる。この時期の集落の実態については更に今後の調査に期待したい。

古代に入ると、律令国家は、口分田を班給する必要性及び耕地の拡大を目指して、条里制と呼ぶ方格地割りを一斉に展開した。佐波川右岸の扇状地形を有する下右田・高井・大崎地区は、今なお条里痕跡を比較的良好に遺存する地区である。佐波川の流路にほぼ直交する形で、方位を東に振った方格状地割りが広がる｡下右田遺跡におけるこれまでの調査でも条里制に伴うと見られる溝も確認された。また、この時期の掘立柱建物跡も多数検出されている。

中世に入ると、この地域は、右田の右田氏、大崎の杉氏と言った、大内家有力家臣の支配するところとなる。下右田遺跡における集落の規模は拡大し、中世農村の特色を色濃く反映した村落へと発展

する。山陽自動車道の事前調査では、掘立柱建物跡約250棟、環溝屋敷９例等を確認し、中世農村の形態を解明する上で貴重な資料を提供した。この時期における集落は大崎遺跡（木船地区）、奥正権寺遺跡においても確認されている。後に毛利氏の支配を受けるが、村落の性質は変わることなく米の大生産地として現代に至っている。佐波川のもたらす豊かな水運と、南に開けた肥沃な扇状地形が、古来より、人々の生活と食料生産を支え、大農村地域へと発展を促してきたものと考えられる。

今回の調査区は、下右田遺跡の北西部にあたり、これまでにまとまった調査があまり行われていない地区である。縄文から近世にかけての複合集落遺跡の全貌を明らかにする上でも、今調査が貴重な資料を提供できるものと考えられる。

［参考文献］

防府市教育委員会『防府市史　通史Ⅰ　資料Ⅱ』（2004年）　　防府市教育委員会『右田村史』（1954年）

山口県教育委員会『山口県史資料編　考古１・２』（2004年）

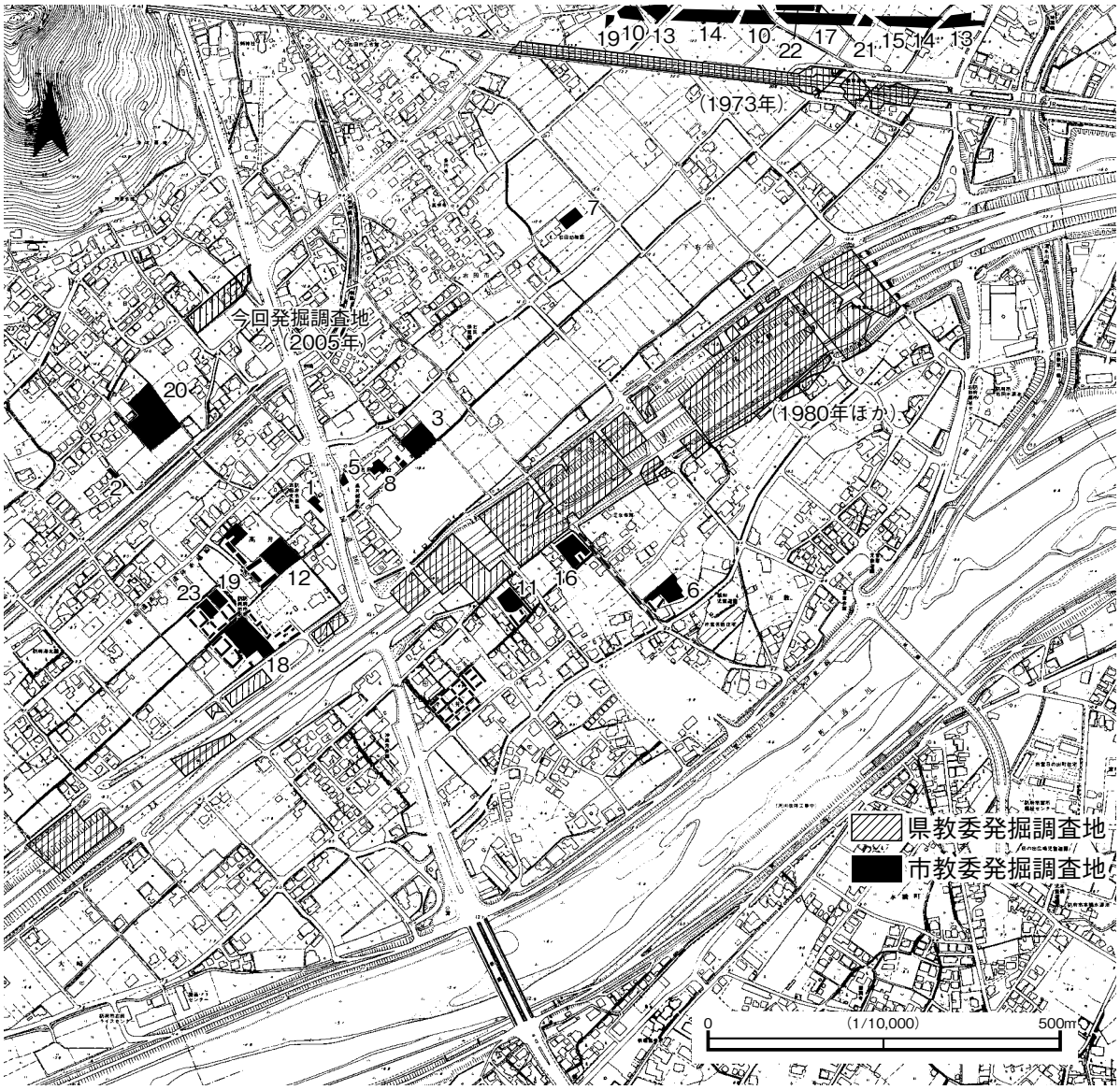


図２　下右田遺跡調査地（平成18年３月末現在）

Ⅱ　調査の経緯と概要

一般県道大内右田線道路改良・住宅工事に先立ち、山口県教育委員会は、平成16年11月に埋蔵文化財の有無などを確認するため、事前の試掘調査を行った。その結果、遺構の埋存が確認されたことから、関係機関と協議を行い、神里地区約2,100㎡について発掘調査を行うこととなった。

調査は、山口県防府土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

平成17年４月６日、発掘調査を始めるに当たって、山口県防府土木建築事務所との綿密な打ち合わせを行った。その結果、２面～３面ある遺構面を、順次重機によって掘り下げて調査することとなった。４月中旬には、防府市教育委員会、近隣の小中学校、警察署、消防署、自治会等に安全確保のための理解と協力を要請した。また、佐波川水系の剣川が近いことから、佐波川漁業協同組合と相談の上、泥水の流出を防ぐために沈泥水槽を設置することとした。

４月27日に作業員説明会を開催し、業務内容や勤務条件等についての説明を行った。５月６日には事務所を設置、５月９日に発掘機材を搬入し、調査開始に向けて環境を整備した。調査区が住宅地の中にあることや、最終遺構面が現地表面から２ｍ近く下がること等を考慮して、安全確保のために調査区周辺に防護柵を廻らせることとした。また、駐車場への進入路を確保する必要上、調査区を二つに分けることとなり、西側の広い地区をⅠ地区、東側の狭い地区をⅡ地区として区別することとした。

５月10日にⅠ地区の西側から重機による表土除去を開始し、５月19日から作業員を動員しての本格的な遺構の検出作業を進めた。Ⅰ地区の西側南東端とⅡ地区については、第１面の上に遺物包含層が堆積しており、重機による表土除去を遺物包含層の上で止め、人力による表土除去を行うこととした。

Ⅰ地区の最上面の遺構面には、中央少し東寄りに約50㎝の段差があり、西側と東側の遺構面の時期差を調べるために、段差部分にトレンチを設定し、土層を確認した。その結果、西側の最上面は東側の第２面に相当することが分かった。また、段差部分に幅４ｍほどの溝が調査区を横断するように走っていることが分かった。

５月下旬からは、最上面の遺構の掘り込み作業を開始し、その結果、古代末から中世初期にかけての遺構や遺物を多く検出した。その後、遺構の個別実測や写真撮影、７月６日の空中写真撮影を経て、７月中旬のグリッド実測をもって、最上面の調査を終了した。

重機による表土除去

グリッド実測終了区域から順次下層遺構面の確認のためのトレンチを設定し掘削した。Ⅰ地区東側とⅡ地区は、Ⅰ地区西側最上面に相当する遺構面を調査するために、Ⅰ地区は重機でⅡ地区は人力で表土を除去した。

７月下旬からⅠ地区東側とⅡ地区の第２面の遺構検出及び掘り込みに着手し、Ⅰ地区においては溝状遺構や柱穴、Ⅱ地区については砂礫堆積層等を検出した。遺構からは古代末から中世初期の土師器等が出土した。また、砂礫堆積層からは、弥生土器も検出された。

調査面の面積が比較的狭いことから、全景写真は高所作業車から撮影した。その後、個別の遺構実測やグリッド実測等を行い、８月上旬に第２面の調査を終了した。

発掘体験学習

最終面の調査に向けて、下層確認のためのトレンチを設定し、Ⅰ地区では約80㎝下に遺構面があること、表土中に砂礫の堆積層があり、第３面まで続いていることを確認した。Ⅱ地区では、第２面の砂礫堆積層が第３面まで続いていることを確認した。トレンチ調査の結果を踏まえて８月17日からⅠ地区で重機による表土除去を開始した。その後順次遺構検出･掘り込みを行い、掘立柱建物群や土坑、柱穴等を確認した。遺構からは古代末から中世初期の土師器等が出土した。また、砂礫堆積層からは、弥生土器や縄文土器も検出された。９月21日に第２回の空中写真撮影を実施し、グリッド実測終了後、下層確認トレンチによって最終面の下に遺構面の無いことを確認して、９月30日に現地での調査は全て終了した。

７月上旬の大雨や、９月の台風によって、遺構面が若干傷んだが、全般的には好天に恵まれ、順調に作業に取り組むことができた。また、地元の右田中学校の体験学習や山口市の歴史教室、博物館実習生の発掘実習、教員や中学生の職場体験等を受け入れ、地域の郷土学習の場としても活用していただけた。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測及び写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。

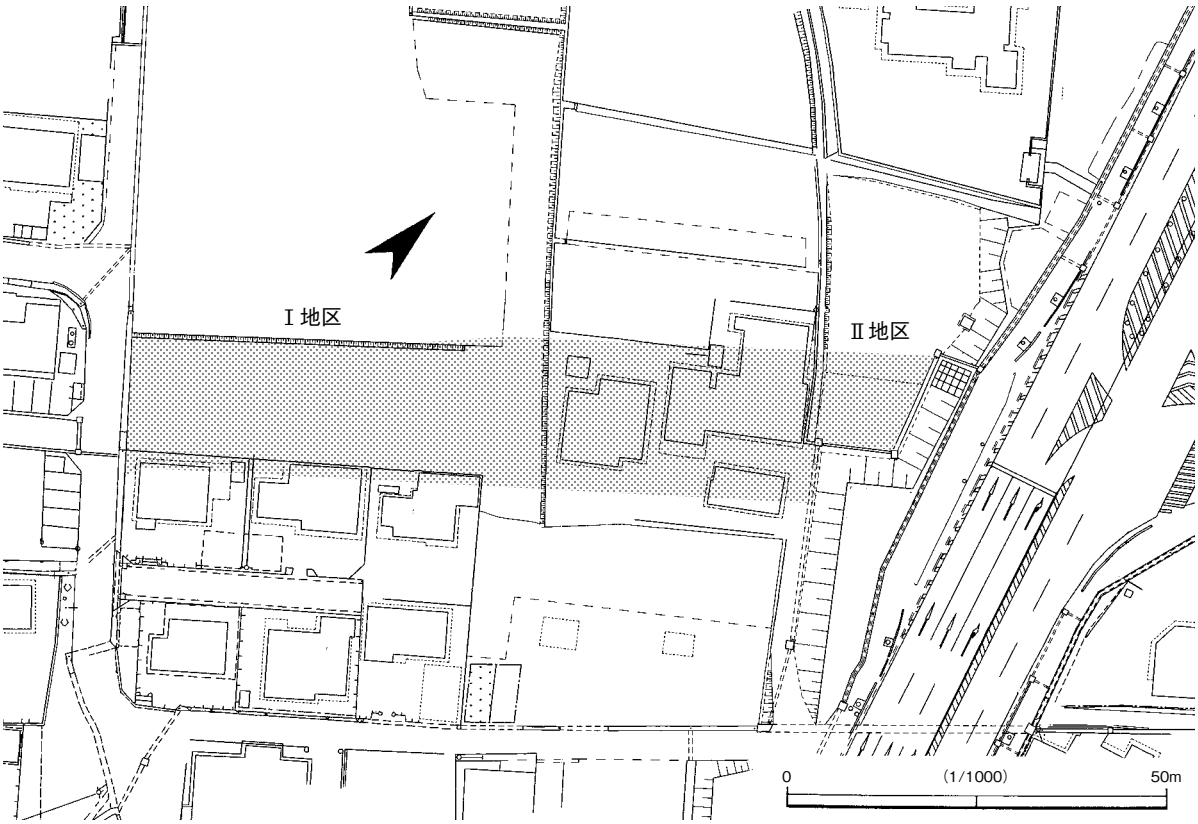


図３　調査区設定図

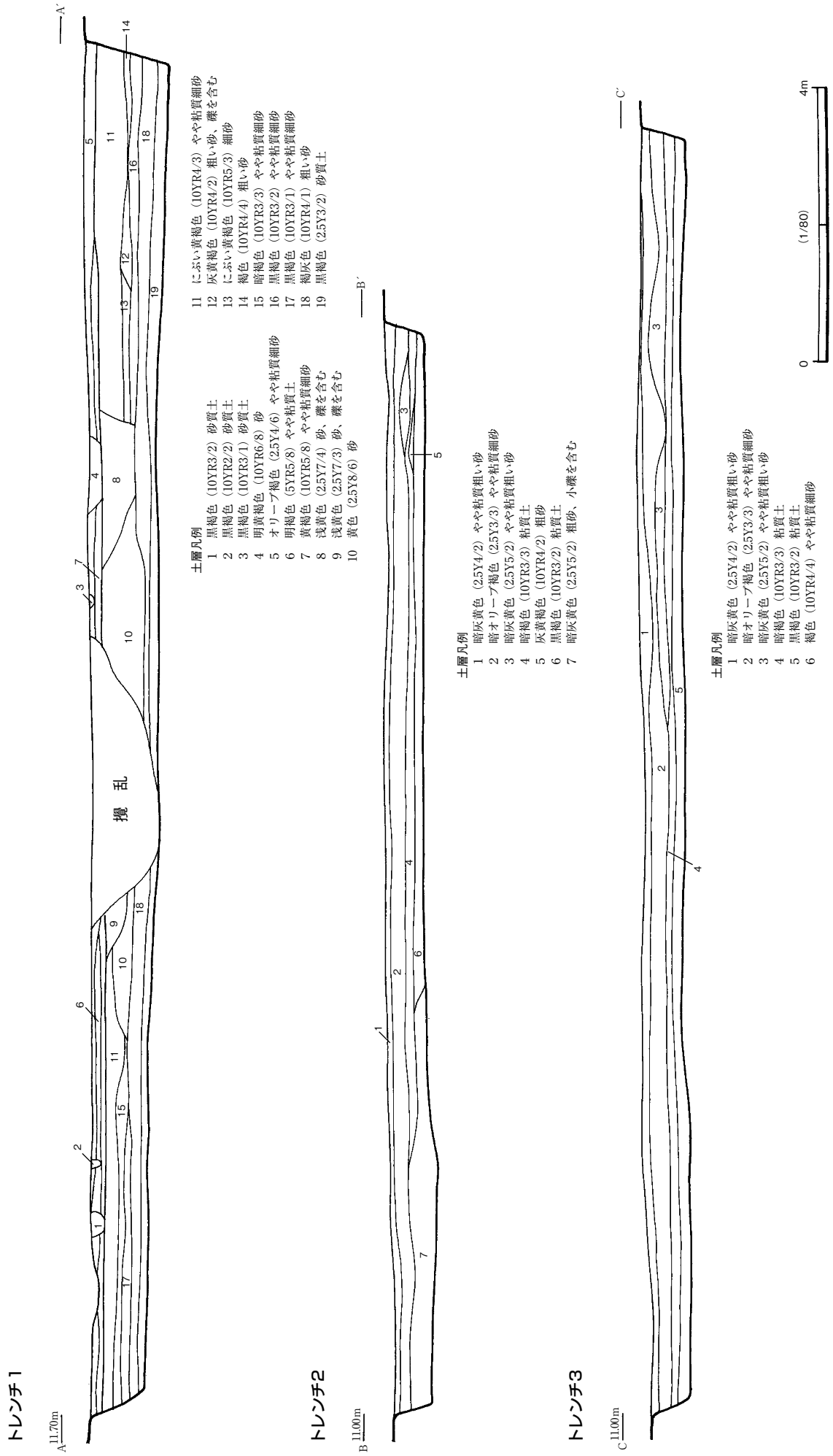


図４　トレンチ土層断面図

Ⅲ　調査の成果

１　遺構

調査区は東西方向に長く伸び、中心付近で旧水田の畦畔境による段が形成され、西半が一段低くなっている。Ⅰ地区東半及びⅡ地区は、表土下40～50㎝のところに厚さ約20㎝の遺物包含層が堆積し、その下に第１の遺構面を形成している。ここでは掘立柱建物跡や土坑など多くの遺構が検出された。更に20㎝程度掘り下げたところに第２の遺構面が広がりを見せる。この面はレベルからみて、Ⅰ地区下段表土下約60㎝のところに広がる遺構面と同一面であるとみてよい。この面では、今回の調査で最も多くの遺物が出土したＳＤ９－Ⅱをはじめ、大型の掘立柱建物跡などが検出された。また、更に70～80㎝程度掘り下げたところにも第３の遺構面が広がる。ここでは、掘立柱建物跡や土坑などの遺構が検出されたが、出土遺物はごくわずかであった。遺構面上の随所に砂礫の堆積が見られることから、幾度となく河川の氾濫が繰り返されたものと考えられる。遺構面は大きく分けて以上の３面に分けられるが、１、２面については層位関係や出土した遺物の時期などから、大きな時期差を想定することはできない。かなりの短期間に河川等の氾濫、堆積等によってこれらの遺構面が形成されたものと考えられるべきであろう。検出されたすべての遺構は、掘立柱建物跡21棟、溝状遺構18条、土坑44基、不明遺構３基、柱穴は約1100個に上る。以下、第１、２、３面それぞれについて紹介する。

（１）　第１面遺構

第１面において検出された遺構は、掘立柱建物跡８棟、溝状遺構４条、土坑19基、柱穴約260個、不明遺構２基である。これらの遺構は、出土遺物から13世紀代を中心としたものが大半であると考えられる。遺構面は、上層を遺物包含層に覆われ、比較的残存状況は良好であった。ＳＤ９以西の調査区については、後世の水田化のため全面削平を受け、遺構面の存在を確認できなかった。Ⅰ地区東半は３カ所に大きく攪乱を受けているが、遺構は全面から検出され、Ⅰ・Ⅱ地区共に遺構密度は濃い。

掘立柱建物跡（図５～９　図版３）

今回の調査では、多数の柱穴が確認され、その中から８棟の掘立柱建物跡が復元できた。建物跡は、調査区全体で検出されたが、Ⅰ地区東半北側には、全容は把握できないものの桁行５間に及ぶ大型の建物跡も確認された。棟方向からみて、いずれもほぼ同時期の建物と建て替えの所産であると考えられる。

ＳＢ１（図５　図版３）　Ⅰ地区東半中央部に検出された建物跡で、桁行２間（4.14m）、梁行２間（3.60m）、床面積14.90㎡を測る。棟方向はＮ48°Ｅである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形は逆台形を呈しているが、一部２段に掘り込まれた柱穴もある。遺物は土師器の杯（70）・皿、白磁の椀などが出土している。

ＳＢ２（図６　図版３）　Ⅰ地区東端に位置する建物跡で、桁行３間（6.24m）、梁行２間（3.80m）、床面積は23.71㎡を測る。棟方向はＮ46°Ｅである。重複しているＳＢ３とは、ほぼ同方向の棟方向を示す。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。柱穴から土師器片や須恵器片が出土した。

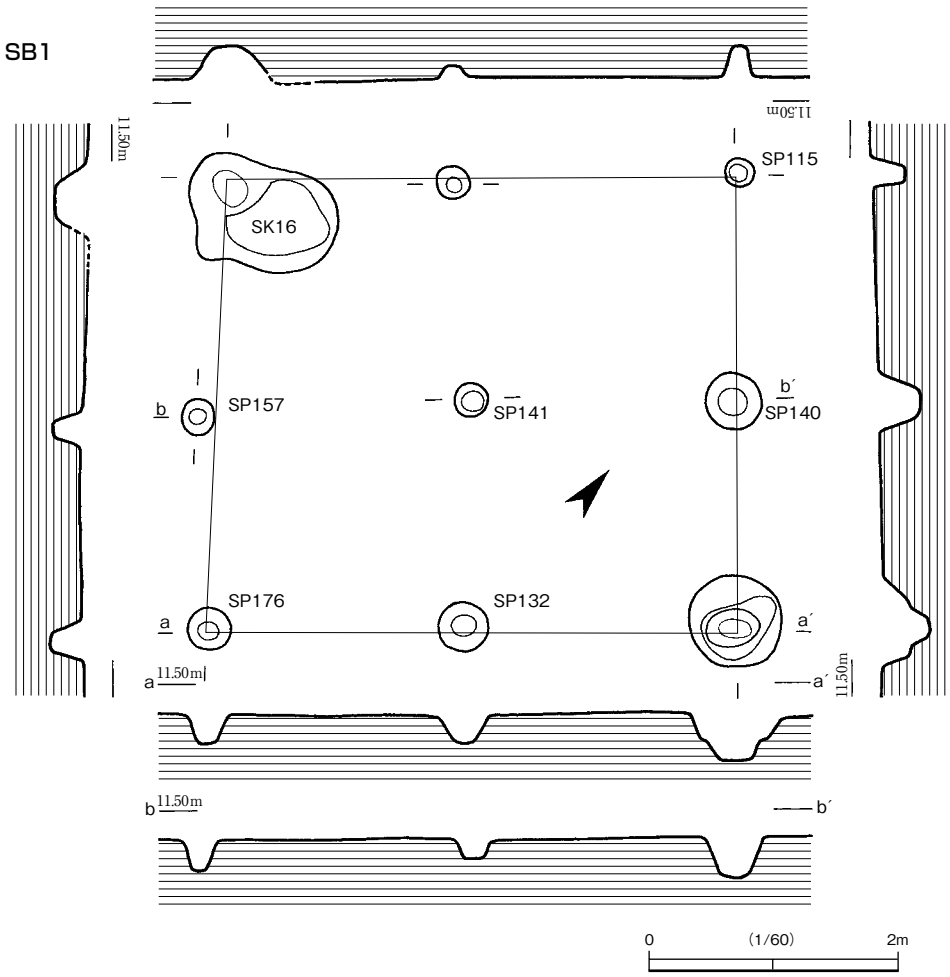


図５　SB1　実測図

ＳＢ３（図６　図版３）　Ｉ地区東端にＳＢ２とほぼ同方向に重なる建物跡で、桁行３間（6.30m）、梁行１間（4.16m）、床面積26.21㎡を測る。棟方向はＮ49°　Ｅである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。２個の柱穴からは、根石が検出された。出土した遺物は、土師器の杯・皿などである。前後関係は不明であるが、ＳＢ２との建て替えが考えられる。

ＳＢ４（図７　図版３）　Ｉ地区北東端に位置する建物跡である。西側を調査区境で切られているため全容は把握できないが、桁行１間（2.50m）以上、梁行２間（4.40m）の建物跡である。棟方向はＮ44°　Eである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。柱穴からは、杯や皿などの土師器片が出土した。

ＳＢ５（図７　図版３）　Ｉ地区東半北側に検出された建物跡である。北側は調査区境で切られているが、更に広がるものと推定され、桁行３間（6.71m）、梁行１間（1.80m）以上の広がりをもつと思われる。棟方向はＮ44°　Ｅであり、重複するＳＢ６とほぼ棟方向を同じくする。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状は逆台形を呈する。土師器片が出土した。

ＳＢ６（図８　図版３）　Ｉ地区東半北側に、ＳＢ５と重なって位置する建物跡である。この建物跡も北側が調査区外に広がるため、全容を把握することはできないが、桁行５間（10.60m）、梁行１間（1.80m）以上に及ぶ非常に大型の建物跡である。棟方向はＮ48°　Ｅである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形は逆台形状を呈する。南面西側には塀と見られる柵列が位置し、規模の大きさから考え

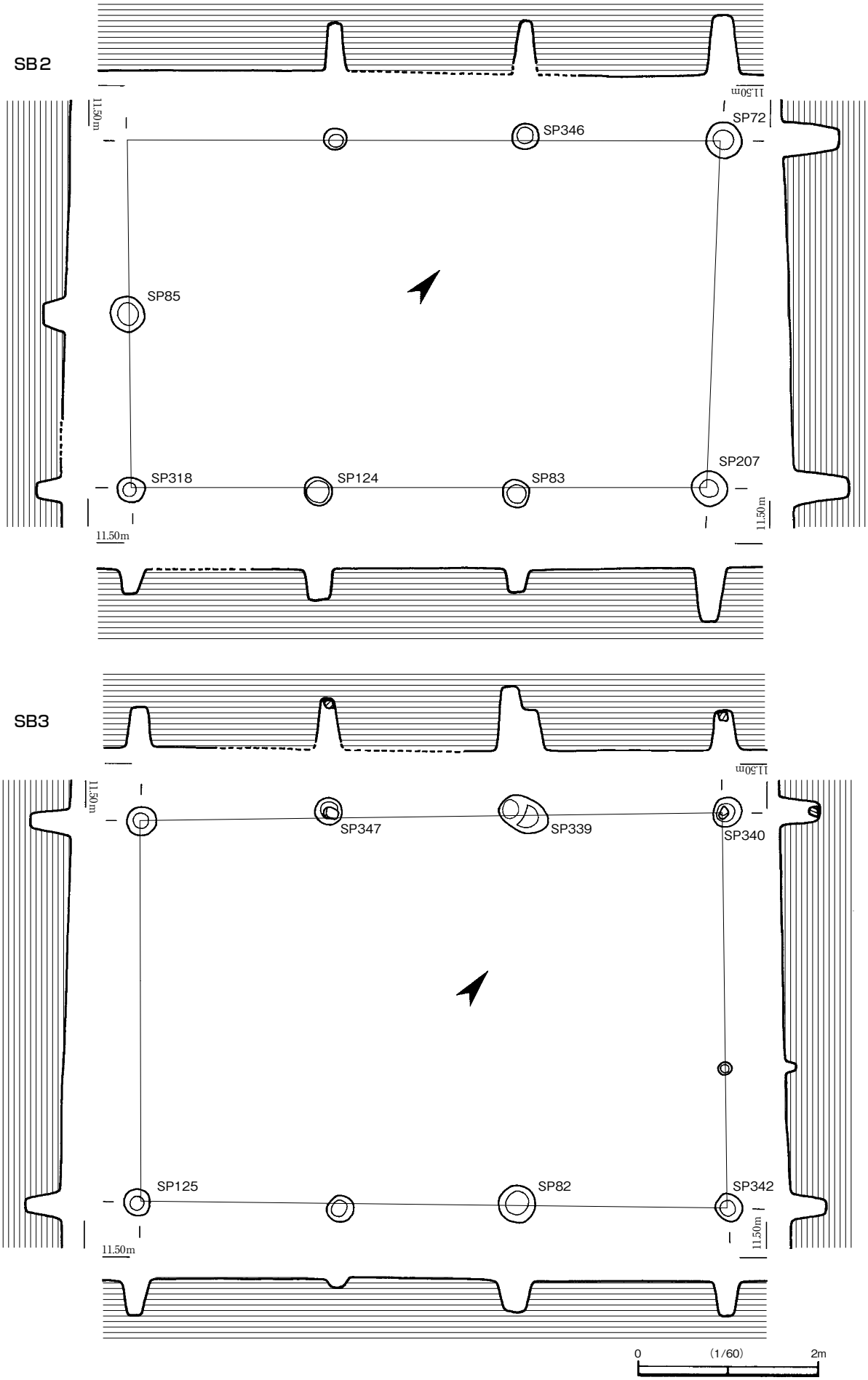

SB2
11.50m
SP346
SP72
SP85
SP318
SP124
SP83
SP207
SB3
SP347
SP339
SP340
SP125
SP82
SP342
0
(1/60)
2m

図６　SB２・３　実測図

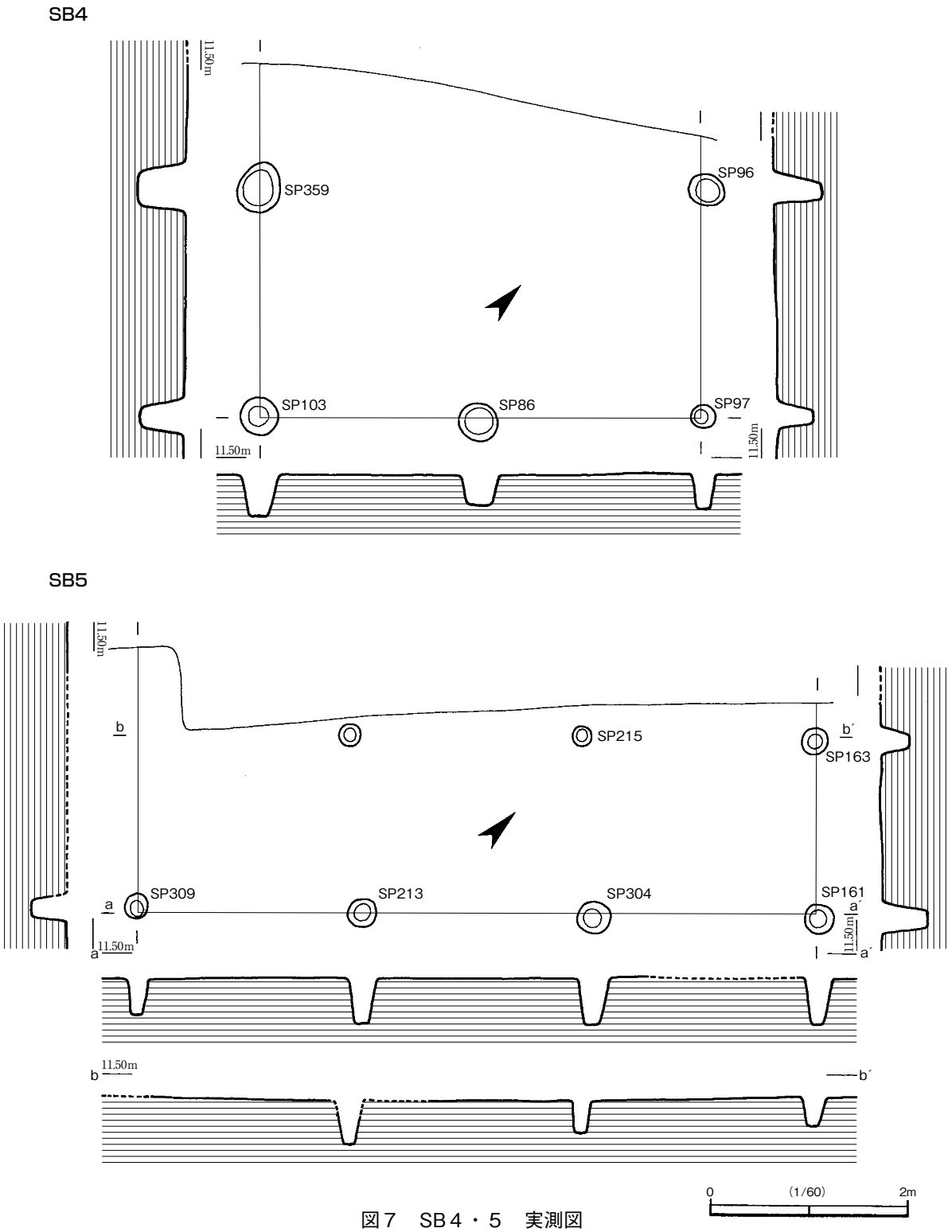


図７　SB４・５　実測図

て、この集落の中心的な建物であったと思われる。柱穴からは、土師器の杯（76）、須恵器、白磁が出土した。前後関係は不明であるが、ＳＢ５との建て替えが行われたものと考えられる。

ＳＢ７(図９　図版３)　Ⅱ地区東端に位置し、ＳＢ８と重なる。東端部を調査区境で切られている。桁行２間（6.10m）、梁行２間（4.80m）、床面積は29.28㎡を測り、棟方向はＮ46°Ｗである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状はおおむね逆台形状を呈する。柱穴からは、土師器の椀・杯（74）・皿（65）、白磁、鞴羽口が出土した。

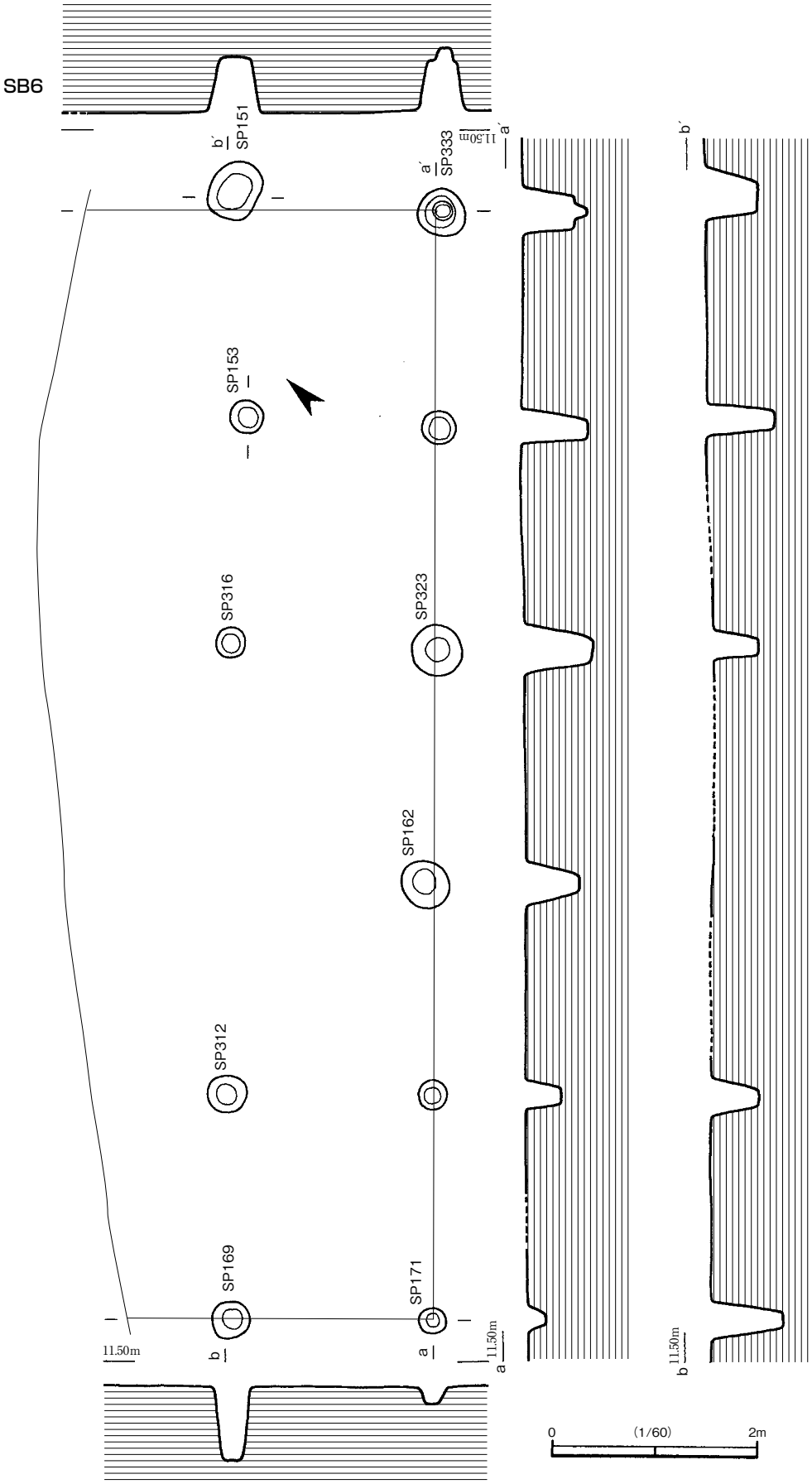
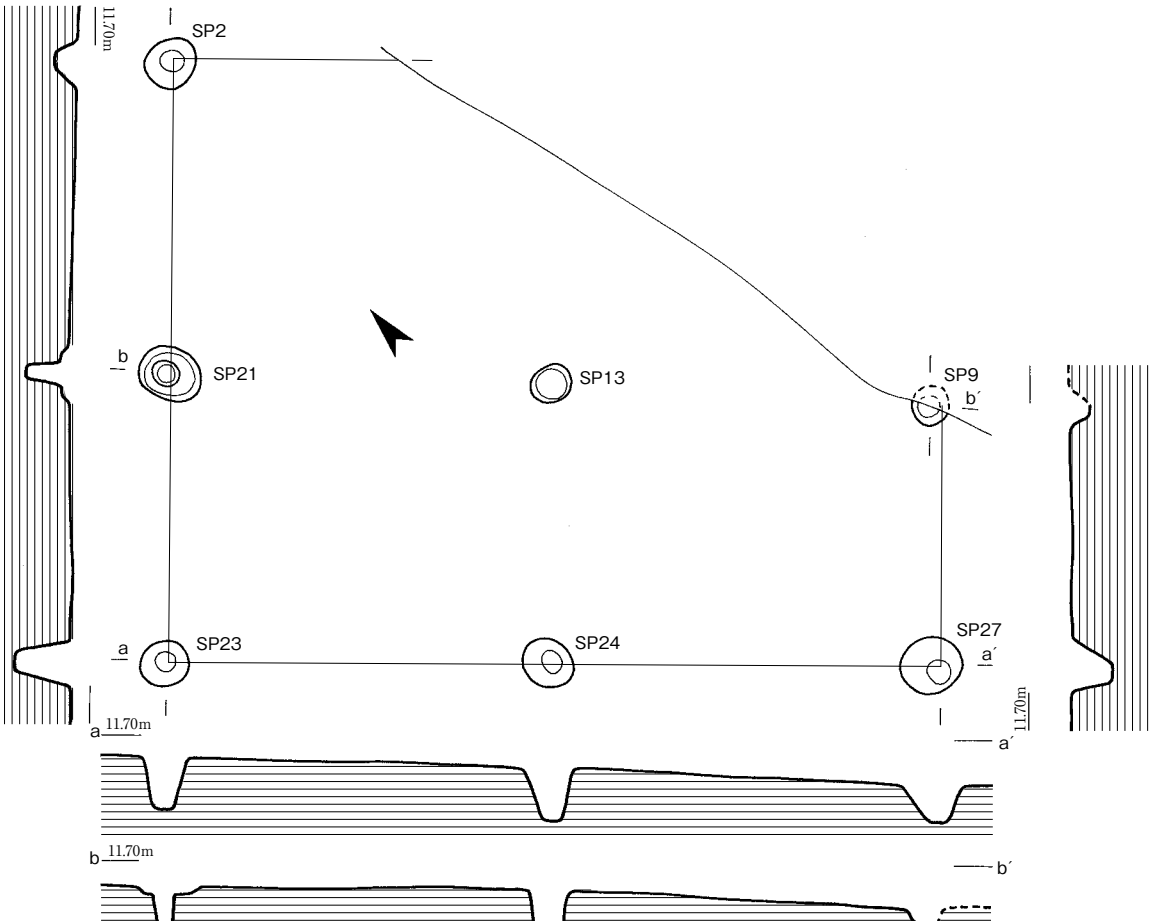

SB6
SP151
SP153
SP316
SP312
SP169
SP333
SP323
SP162
SP171
11.50m
0
(1/60)
2m

図８　SB６　実測図

SB7



SB8

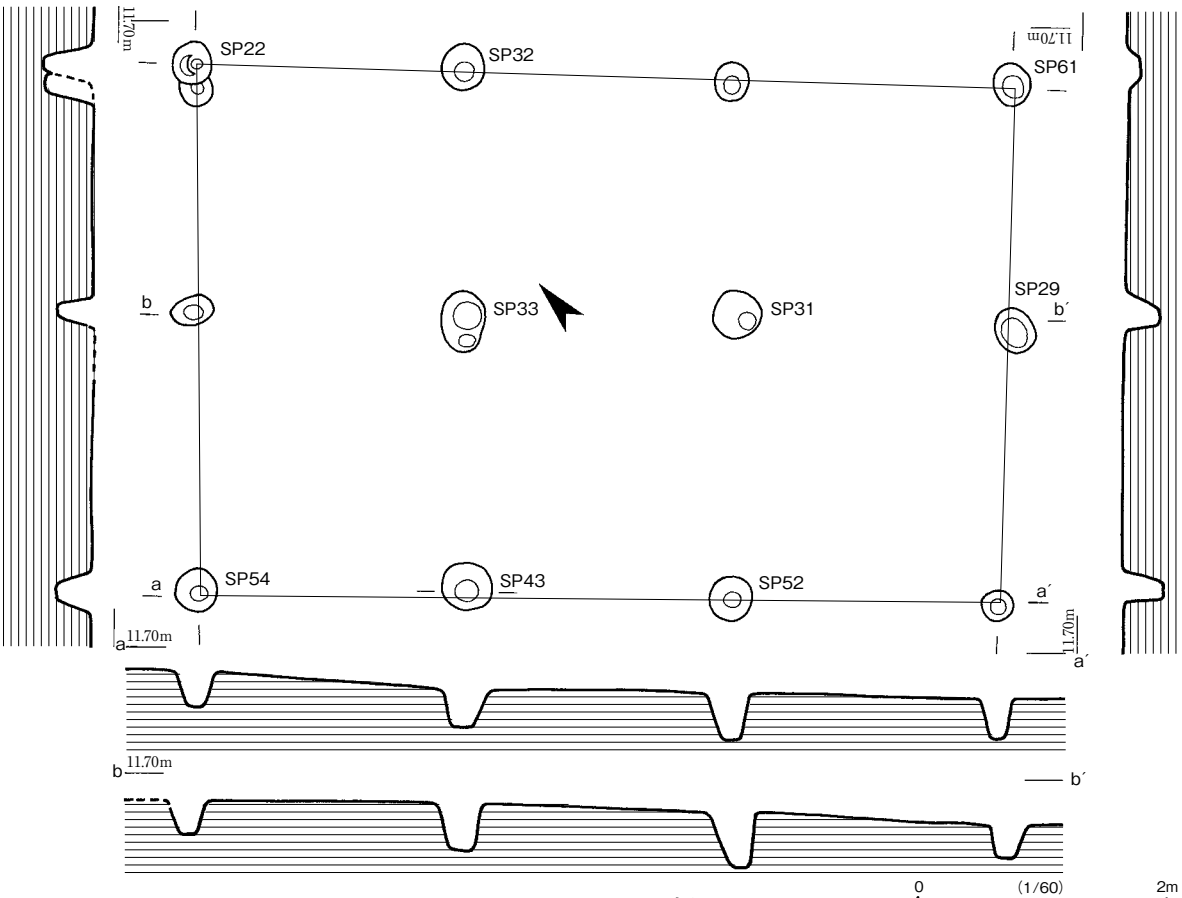


図９　SB７・８　実測図

ＳＢ８（図９　図版３）　Ⅱ地区中央東寄りに位置し、ＳＢ７と重なる。桁行３間（6.30m）、梁行２間（4.10m）、床面積は25.83㎡を測る。棟方向はＮ48°Ｗと、ＳＢ７と棟方向がほぼ同じである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状は逆台形状を呈する。柱穴からは、多くの土師器片や白磁の皿が出土した。前後関係は不明ながらも、位置関係からみて、ＳＢ７との建て替えの可能性もある。

溝状遺構（図10～12　図版４～５）

１面で検出された溝状遺構は、Ⅰ地区３条、Ⅱ地区１条の合わせて４条である。検出状況や出土遺物から判断して、いずれも平安時代末期のものと考えられる。中でも注目される溝は、調査区中央部に掘り込まれたＳＤ９である。下層確認のため３本のトレンチを入れたところ、掘り替えの痕跡がうかがえた。土砂、遺物の堆積状況から推察して、少なくとも３期にわたって利用されていたものと考えられる。上層からＳＤ９－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとした。

ＳＤ９－Ⅰ（図10･11　図版４～５）

Ⅰ地区中央を北西方向から南東方向へと直線的に走り、調査区を東西に分断する比較的大きな溝である。両端が調査区外に延びているため、全容を把握することはできない。しかし、北西側で市教委によるトレンチ調査の際、この溝の一部が検出されており、総延長は30mを越えるものと考えられる。現存規模は、長さ16.80m、幅1.28～1.76m、深さ0.21～0.48mの浅いＵ字型の断面形を持つ。南北の傾斜がほとんど見られないことや、黒褐色の粘質土が底に堆積した状況などから考えて、常時流水していたとは考えにくい。また、佐波川に直交する形で敷かれた条里制地割と方向を同じくするところ

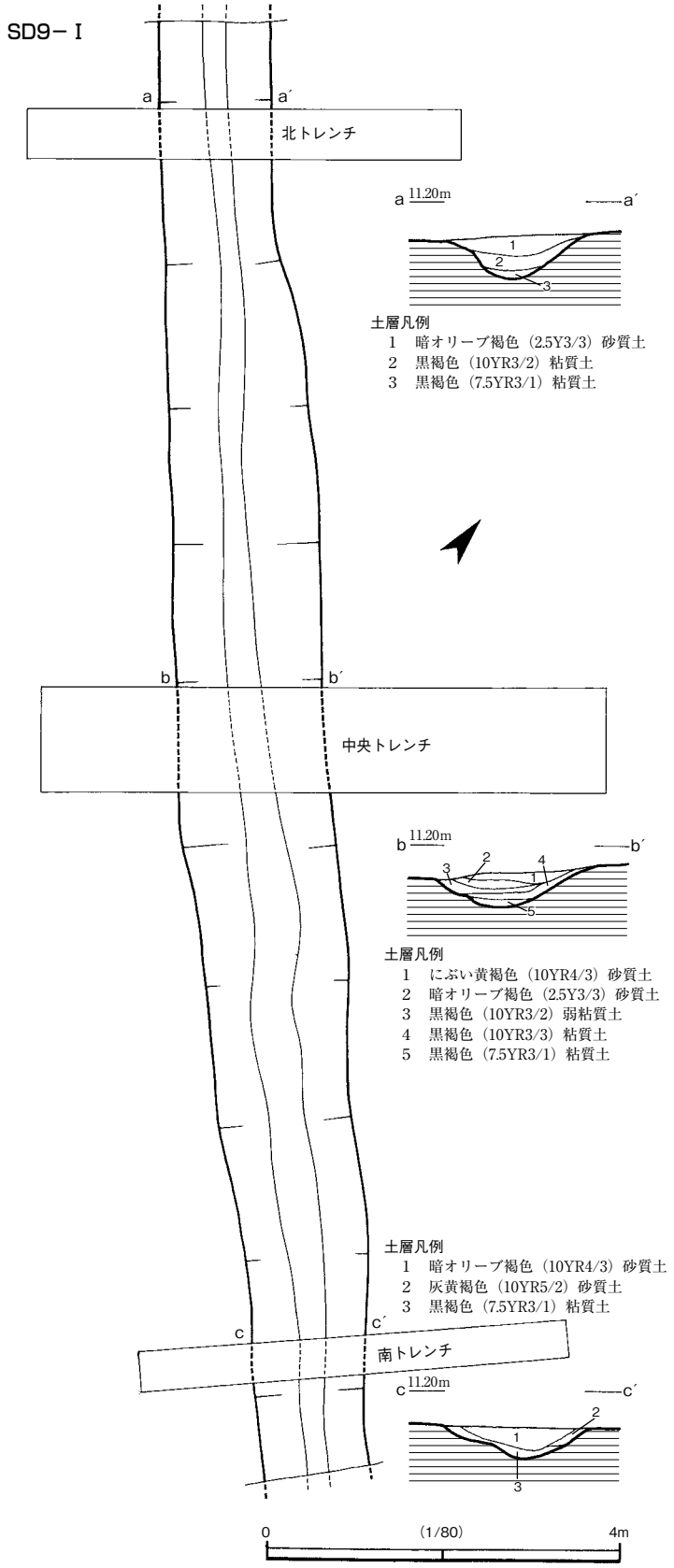


図10　SD9－Ⅰ　実測図

から、条里に伴う区割りの溝である可能性も指摘できる。遺物は、底に堆積した黒褐色の粘質土中から出土したものがほとんどである。弥生土器の支脚（14）、土師器の杯（10・11）・皿（1～9）、瓦質の鍋（12）、白磁の椀（13）が出土した。

ＳＤ７（図12） Ｉ地区東側の中央部に位置するＬ字状を呈する溝である。現存規模は、長さ6.63m、幅0.48～0.96m、深さ0.02～0.07mと比較的浅い溝である。埋土は黒褐色砂質土である。

ＳＤ８（図12） Ｉ地区東端から調査区に沿って南に延び、途中で分かれた一方はやや西に進んで終息する。端部には多量の砂が堆積する。もう一方は南に進んで調査区外に延びる。現存規模は、長さ16.50m、幅0.56～1.76m、埋土は黒褐色砂質土の単層であるが、西側端部には砂が堆積する。遺物の出土はない。

ＳＤ10（図12　図版５） Ⅱ地区南端を弧を描くように横切り、南に進んで幅を増す。両端は調査区外に延びる。現存規模は、長さ5.00m、幅0.88～3.28m、深さ0.18～0.26m。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土した遺物は弥生土器片、土師器の杯（16～19）・皿（15）である。土師器はほぼ完形であり、投げ込まれたものであると思われる。

土坑（図13～18　図版6～8）

第１面で検出された土坑はＩ地区が17基、Ⅱ地区が３基である。平面形は長円形を呈するものがほとんどである。このうち、形状、出土遺物から判断して、土坑墓の可能性のあるものが５基含まれる。Ｉ地区では、西側調査区沿いに大型の土坑が集中して検出された。遺物もこれらの土坑から多く出土している。以下、主なものについて紹介する。

ＳＫ17（図13　図版６） Ｉ地区東半北側に位置する土坑である。平面形は、北側がやや突き出した長円形を呈する。規模は長軸210㎝、短軸164㎝、深さ35㎝の比較的大型の土坑である。側面はほ

土層凡例

1　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
2　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土
3　黒褐色（10YR3/2）粘質土
4　黒褐色（10YR3/3）強い粘質土
5　黒褐色（7.5YR3/1）強い粘質土
6　暗褐色（10YR3/4）砂質土、礫を含む
7　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
8　黒褐色（2.5Y3/2）砂質土
9　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土
10　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
11　黒褐色（10YR3/2）砂混じりの粘質土
12　暗褐色（10YR5/2）強い粘質土
13　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土
14　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
15　暗褐色（10YR3/4）粘質土
16　黒褐色（10YR3/2）砂質土
17　黒褐色（2.5Y3/2）砂質土
18　暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土
19　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土
20　オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土
21　黒褐色（2.5Y3/2）砂混じりの粘質土
22　オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土
23　暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土
24　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
25　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土
26　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
27　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂混じりの粘質土
28　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
29　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土
30　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土、粘土を含む
31　褐色（10YR4/4）シルト
32　黒褐色（10YR3/2）粗い砂質土、シルトブロックを含む
33　黒褐色（10YR3/1）砂質土
34　灰黄褐色（10YR4/2）粗い砂質土
35　黒褐色（2.5Y3/7）砂質土
36　黒褐色（2.5Y3/2）砂質土、粗い砂粒含む

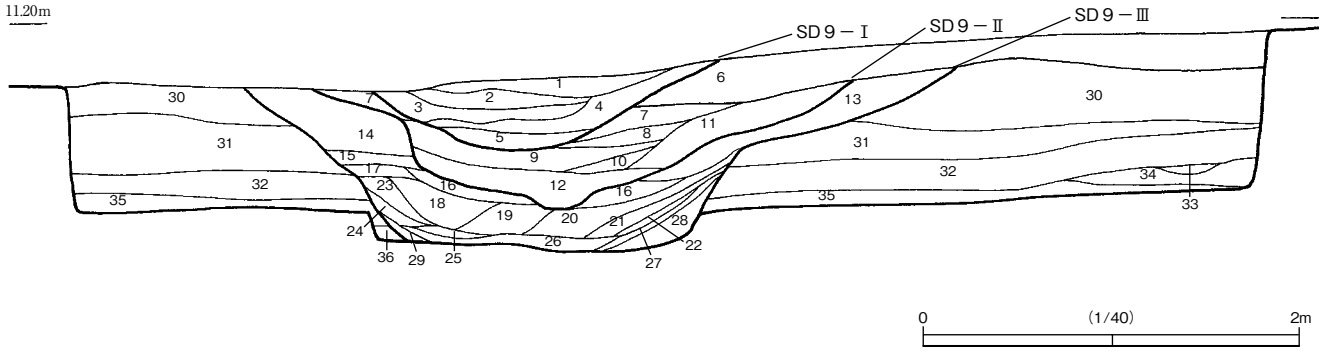


図11　ＳＤ９　中央トレンチ土層断面図

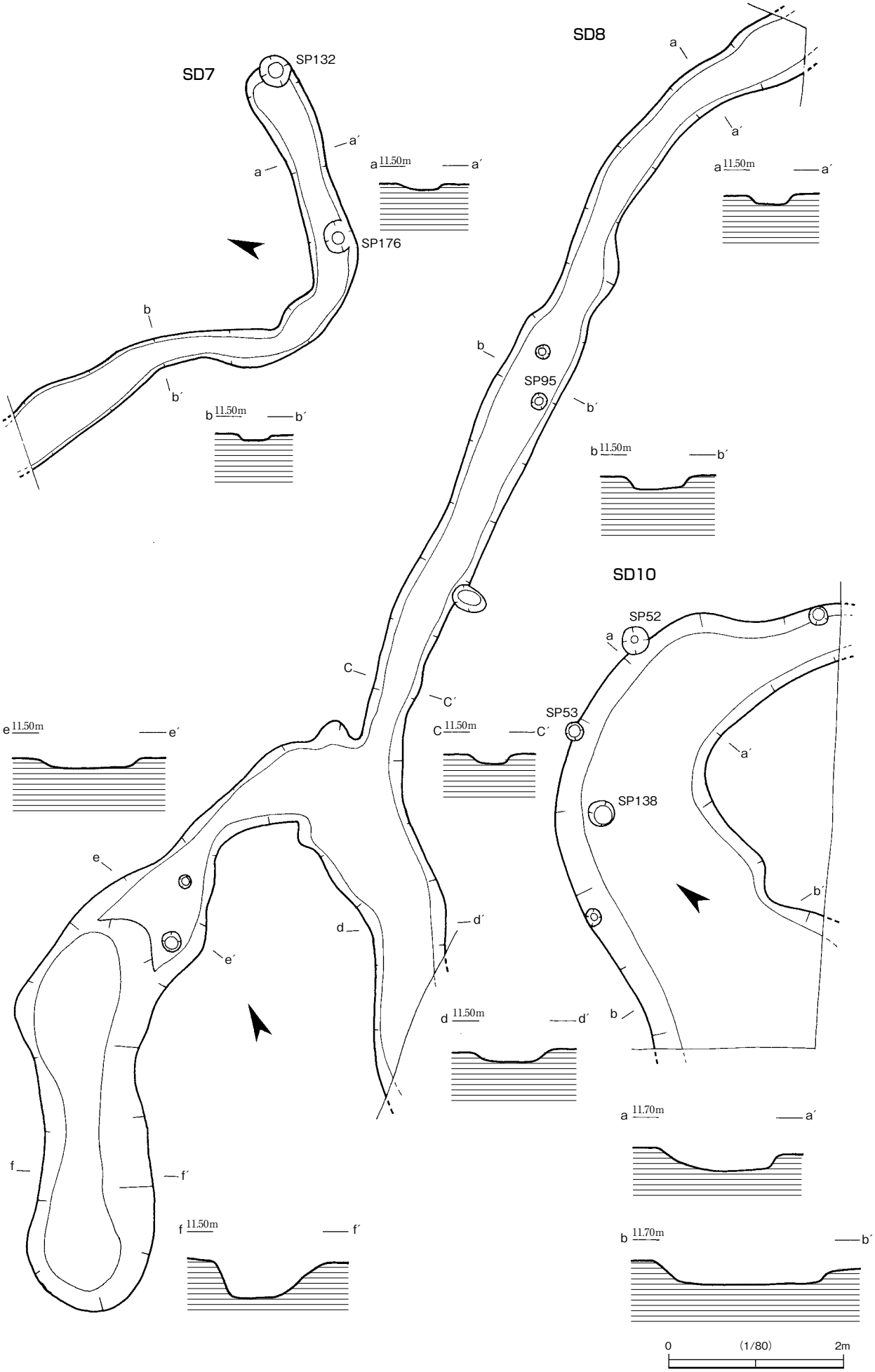


図12　SD7・8・10　実測図

ぼ垂直に掘り込まれており、東側面にテラスを形成する。土師器の杯（28～31）・皿（20～27）が多く出土した。完形の土師器も見られ、祭祀が行われた後、廃棄された可能性もある。

ＳＫ14（図14　図版６）　Ｉ地区東半北側、ＳＫ17に隣接して位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は、長軸240cm、短軸152cm、深さ36cmである。埋土中からは、多くの土師器片が出土した。中には比較的残りのよい皿（32～35）も出土した。また馬具の轡と見られる鉄製品（365）も出土した。形状、規模、出土遺物等、ＳＫ17とよく似ていることから、同様の性格を持つものと考えられる。

ＳＫ５（図15　図版６）　Ｉ地区東半北側、ＳＫ14に隣接して位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は、長軸180cm、短軸145cm、深さ18cmと、ＳＫ14・17と比べるとやや小型の土坑である。出土した遺物は弥生土器の支脚（37）、土師器の皿（36）である。

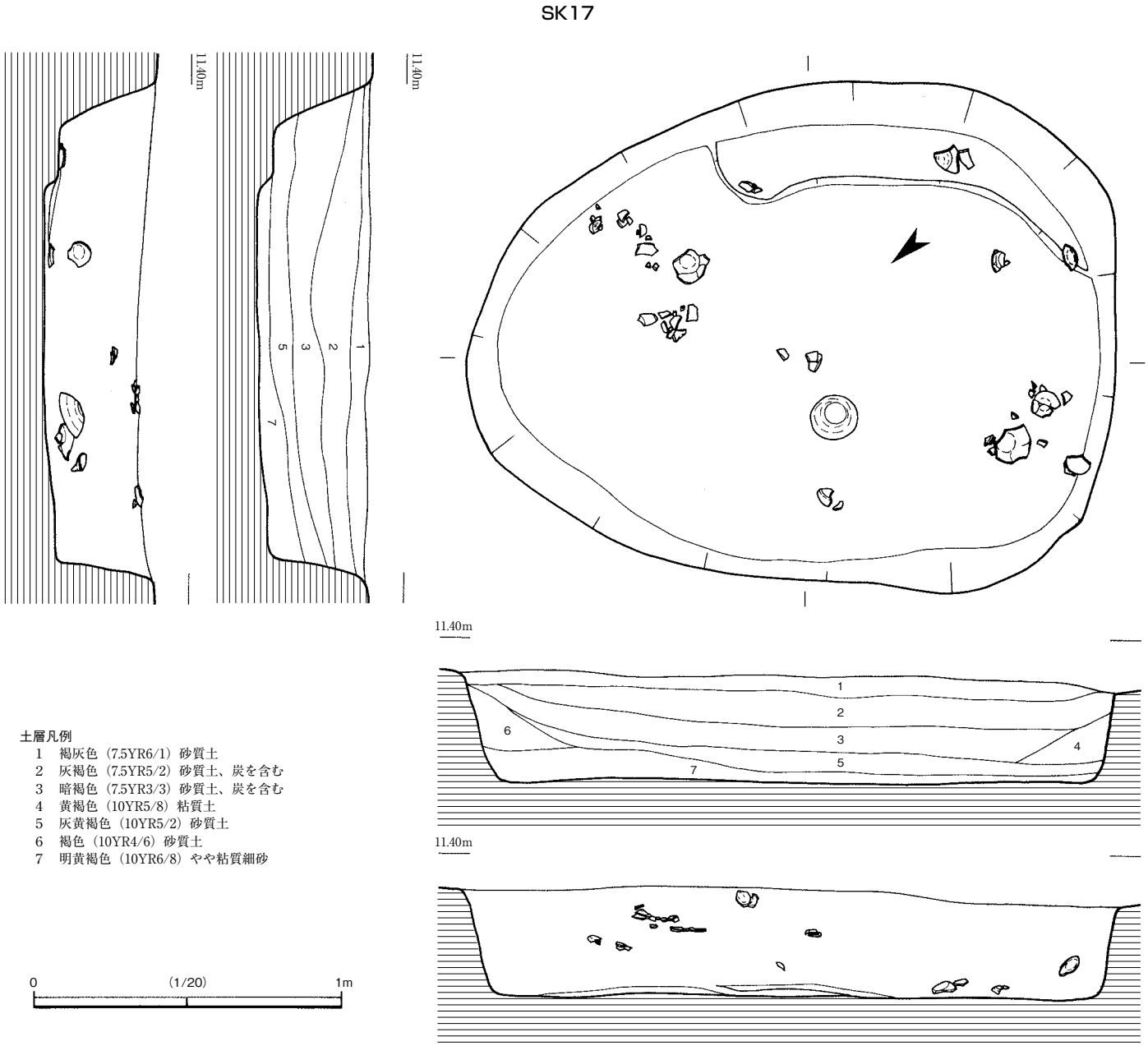


図13　SK17　実測図

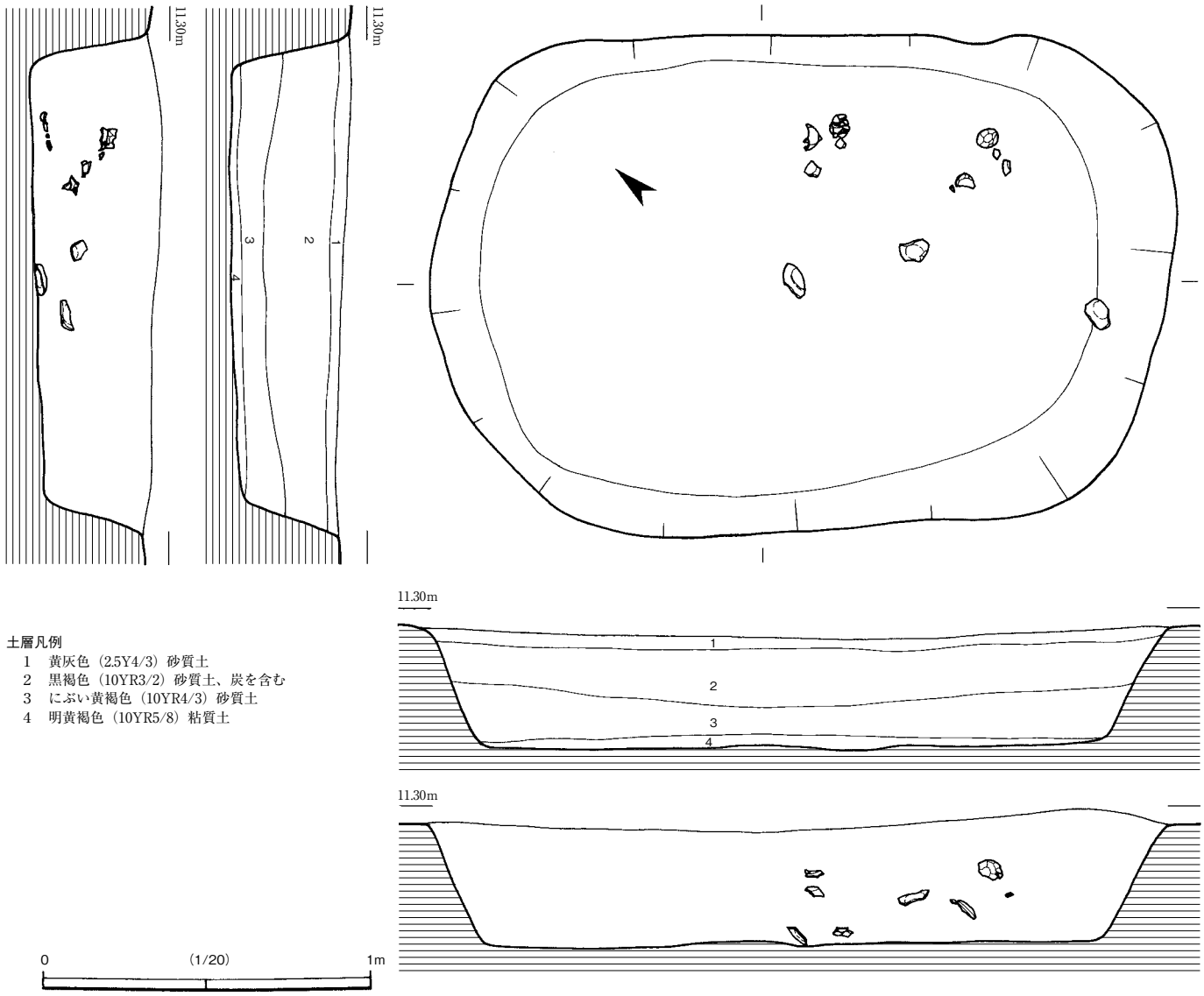


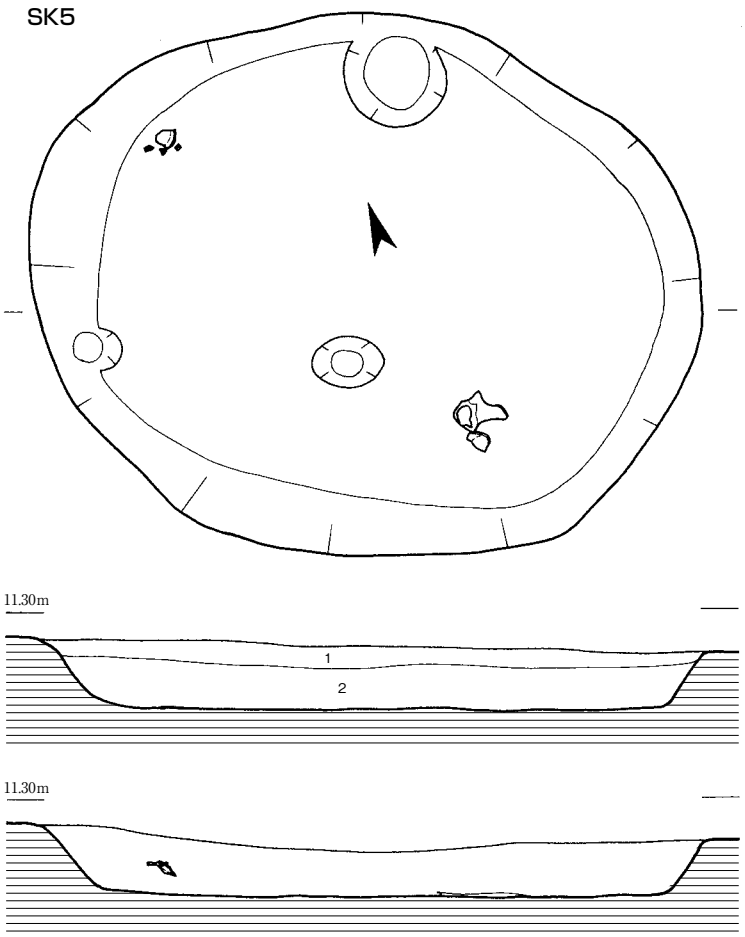
図14　SK14　実測図

ＳＫ６（図15　図版６）　Ｉ地区東半北側、調査区境に北半分を切られる恰好で位置する土坑である。平面形は、長円形を呈すると思われる。規模は、現存で長軸116cm、短軸98cm、深さ28cmである。底面には重複して柱穴が掘り込まれている。土師器、鉄鏃（359）が出土した。

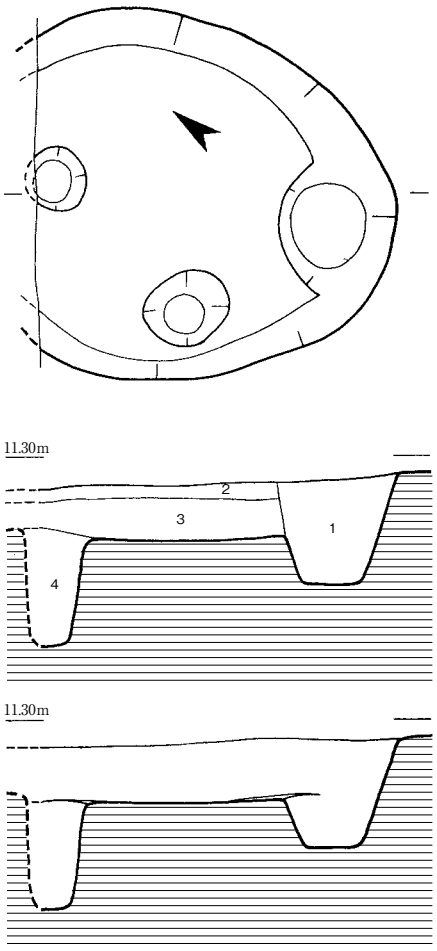
ＳＫ19（図15　図版８）　Ｉ地区東半中央部に位置する土坑である。平面形は不整形。規模は長軸101cm、短軸55cm、深さ42cmである。底面中央には重複して柱穴を有する。土師器の椀（41）・ミニチュアの甕（43）・皿（38～40）、白磁の椀（42）など多くの遺物が出土した。いずれも残存状態は良好で、祭祀に使用した後、廃棄された可能性がある。

ＳＫ20（図15）　Ｉ地区東半中央部に位置し、北半分を攪乱坑に切られた土坑である。平面形は長円形を呈していたものと考えられる。規模は現存で長軸187cm、短軸52cm、深さ12cm。皿状に掘り込まれている。土師器の皿（44～48）が出土した。

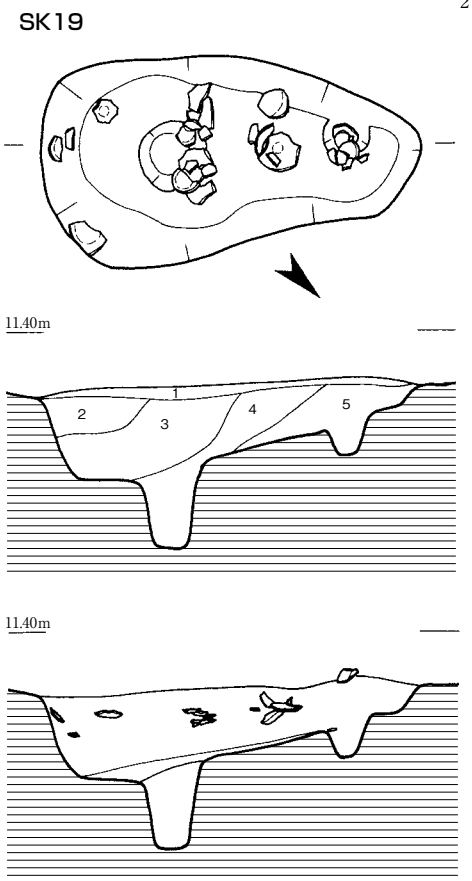
ＳＫ９（図16　図版７）　Ｉ地区中央部、ＳＤ９－Ｉを切るように位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸175cm、短軸81cm、深さ11cm。土師器が出土した。形状、出土遺物から判断して土坑墓の可能性も考えられる。ＳＤ９－１上から掘り込まれていることから、時期はそれ以降である。

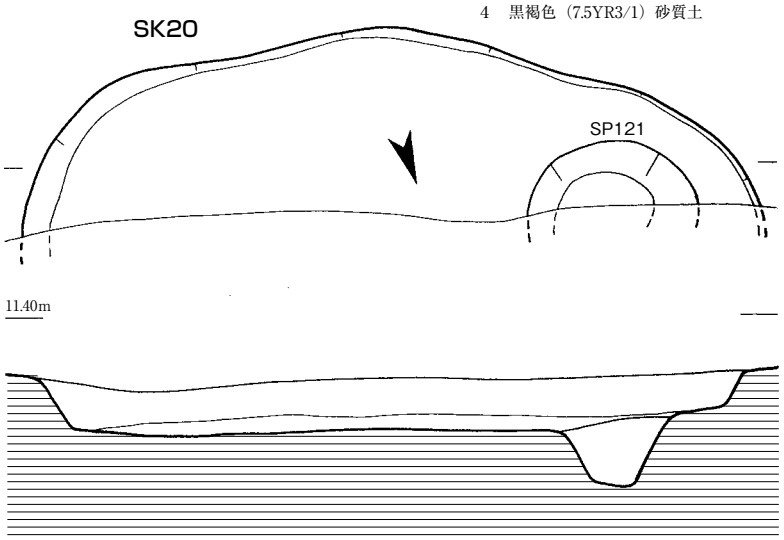


土層凡例
1　褐灰色（10YR4/1）やや粘質土
2　にぶい黄褐色（10YR4/2）砂質土



土層凡例
1　黄褐色（10YR5/8）砂質土
2　黒褐色（10YR3/2）砂質土
3　暗褐色（10YR3/4）やや粘質土
4　黒褐色（7.5YR3/1）砂質土





土層凡例
1　褐灰色（5YR4/1）砂質土
2　褐色（7.5YR4/3）やや粘質細砂
3　黒褐色（7.5YR3/1）やや粘質細砂
4　黒褐色（10YR3/2）粘質土、炭を含む
5　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土、炭を含む

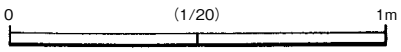


図15　SK5・6・19・20　実測図

ＳＫ12（図16　図版７）　Ⅰ地区中央北側、調査区境に接して位置する土坑である。平面形は長円形を呈し、規模は長軸247cm、短軸86cm、深さ20cmである。埋土中からは、多くの土師器片が出土した。底面からは土師器の杯（53）、刀子（364）が出土した。形状及び出土遺物から考えて、土坑墓の可能性も指摘できる。

ＳＫ31（図16　図版７）　Ⅱ地区西端に位置する土坑である。平面形は長円形を呈し、規模は長軸134cm、短軸68cm、深さ21cmである。ほぼ完形の土師器の皿（49）が出土した。重複して柱穴が掘り込まれている。形状、出土遺物から土坑墓の可能性が高い。

ＳＫ32（図16　図版７）　Ⅱ地区北西側に位置し、平面形は長円形を呈する土坑である。規模は長軸155cm、短軸80cm、深さ13cmである。重複して柱穴が掘り込まれている。出土遺物は土師器である。形状、出土遺物から、土坑墓の可能性もある。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

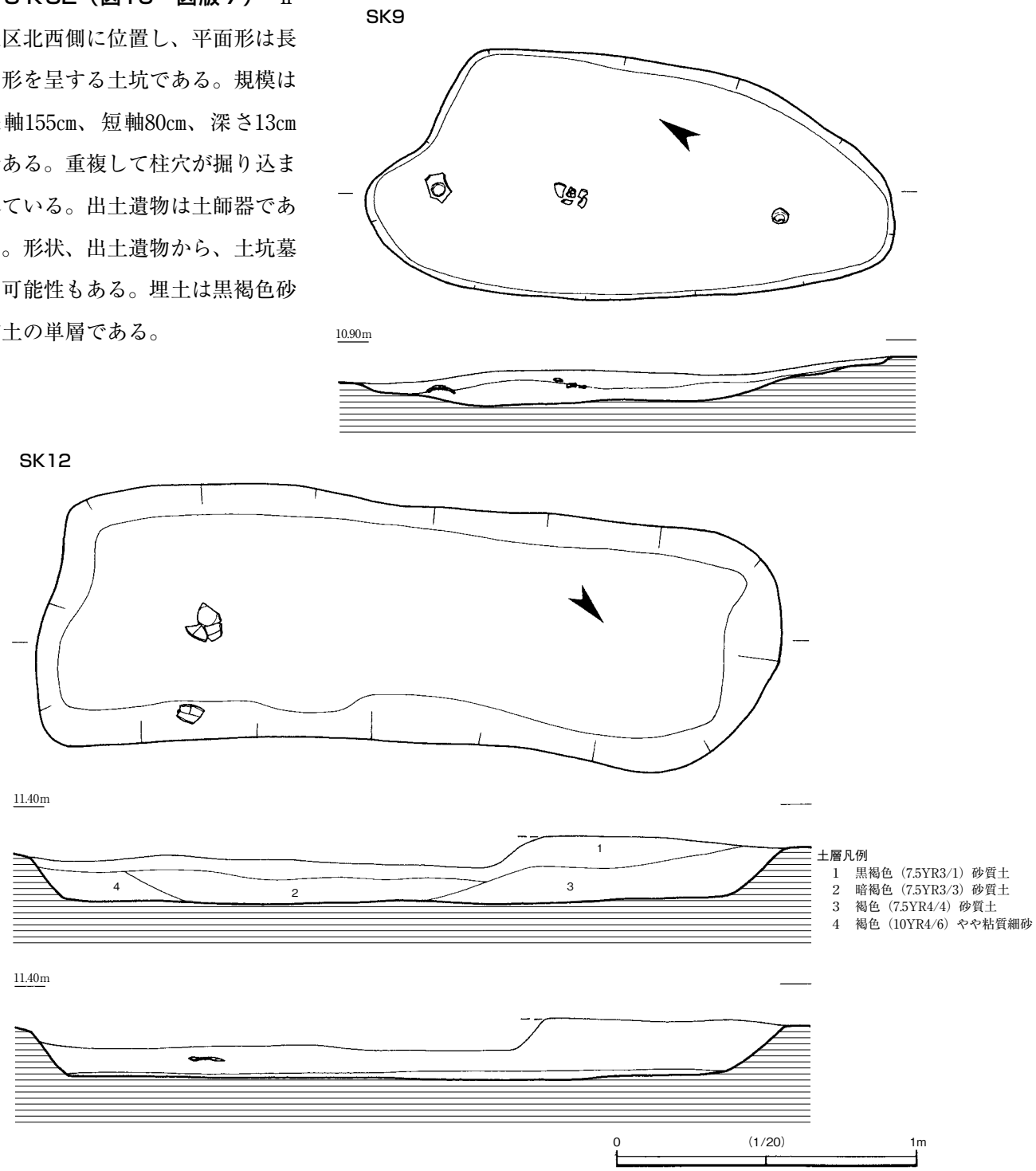


図16　ＳＫ９・12　実測図

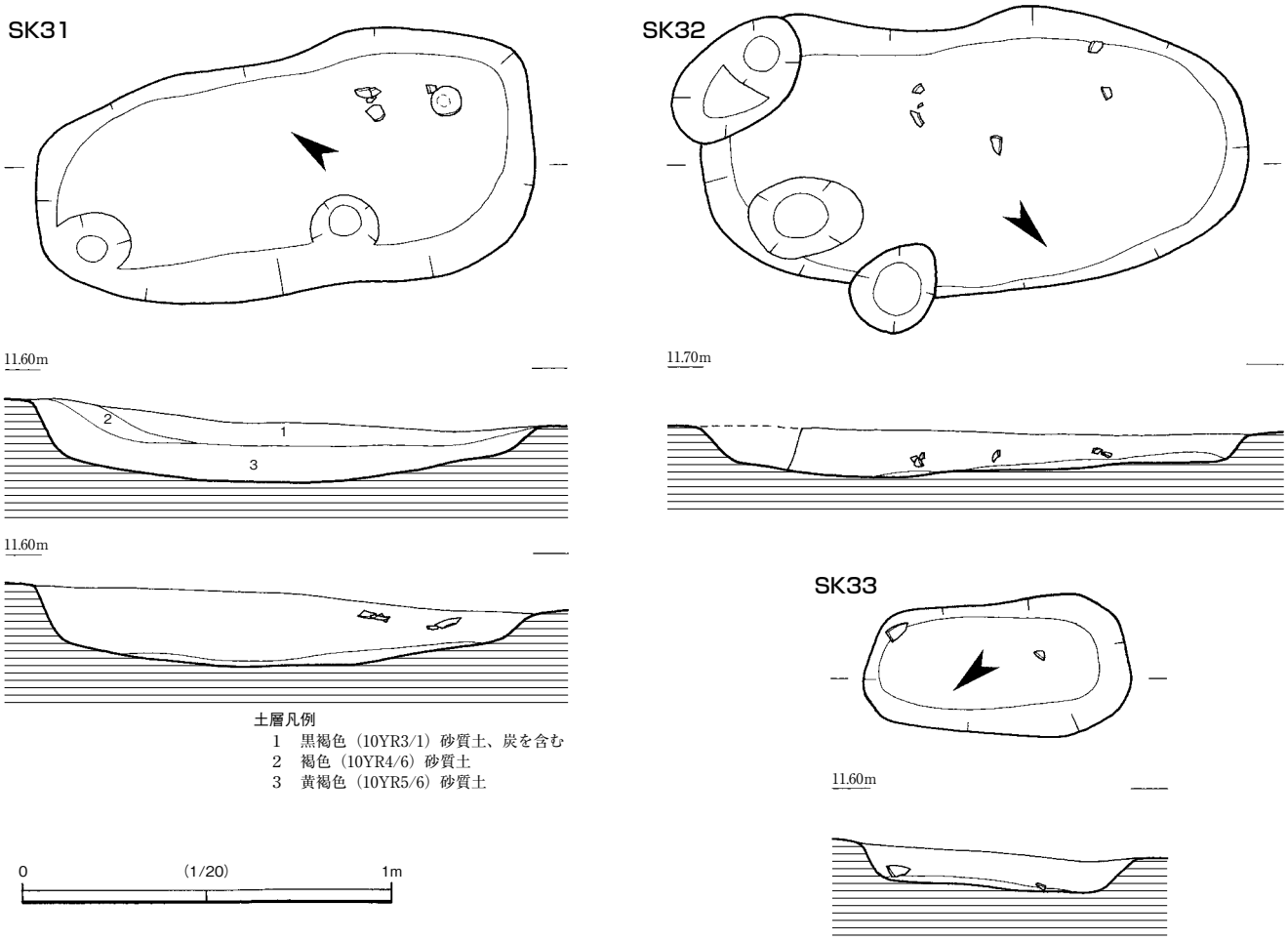


図17　SK31・32・33　実測図

ＳＫ33（図16　図版７）　Ⅱ地区中央部に位置する小型の土坑である。平面形は長円形を呈する。規模は長軸73cm、短軸38cm、深さ10cm。土師器が出土し、埋土は黒褐色砂質土の単層である。子供の土坑墓である可能性も指摘できる。

ＳＫ10（図18　図版８）　Ⅰ地区中央部に位置する平面形が円形を呈する土坑である。規模は、長軸85cm、短軸74cm、深さ50cm。底面南端に重複して柱穴が掘り込まれている。出土遺物は土師器片である。

ＳＫ16（図18　図版８）　Ⅰ地区東半中央部に位置する土坑である。平面形は不整形。規模は、長軸122cm、短軸88cm、深さ25cm。西端部に重複して柱穴が掘り込まれている。この柱穴はＳＢ１を構成するものである。遺物は土師器の杯（52）・皿（50・51）が出土した。埋土は黒褐色、やや粘質細砂の単層である。

ＳＫ23（図18　図版８）　Ⅰ地区北東部に位置する平面形が長円形を呈した土坑である。規模は長軸69cm、短軸42cm、深さ11cmである。遺物は土師器の杯が出土した。埋土は黒褐色、やや粘質細砂の単層である。

ＳＫ24（図18　図版８）　Ⅰ地区北東端部に位置する平面形が円形を呈した土坑である。ＳＫ25を切って掘り込まれている。段状に掘り込まれ、内面にテラスを巡らせる。内面に杭坑が穿たれてい

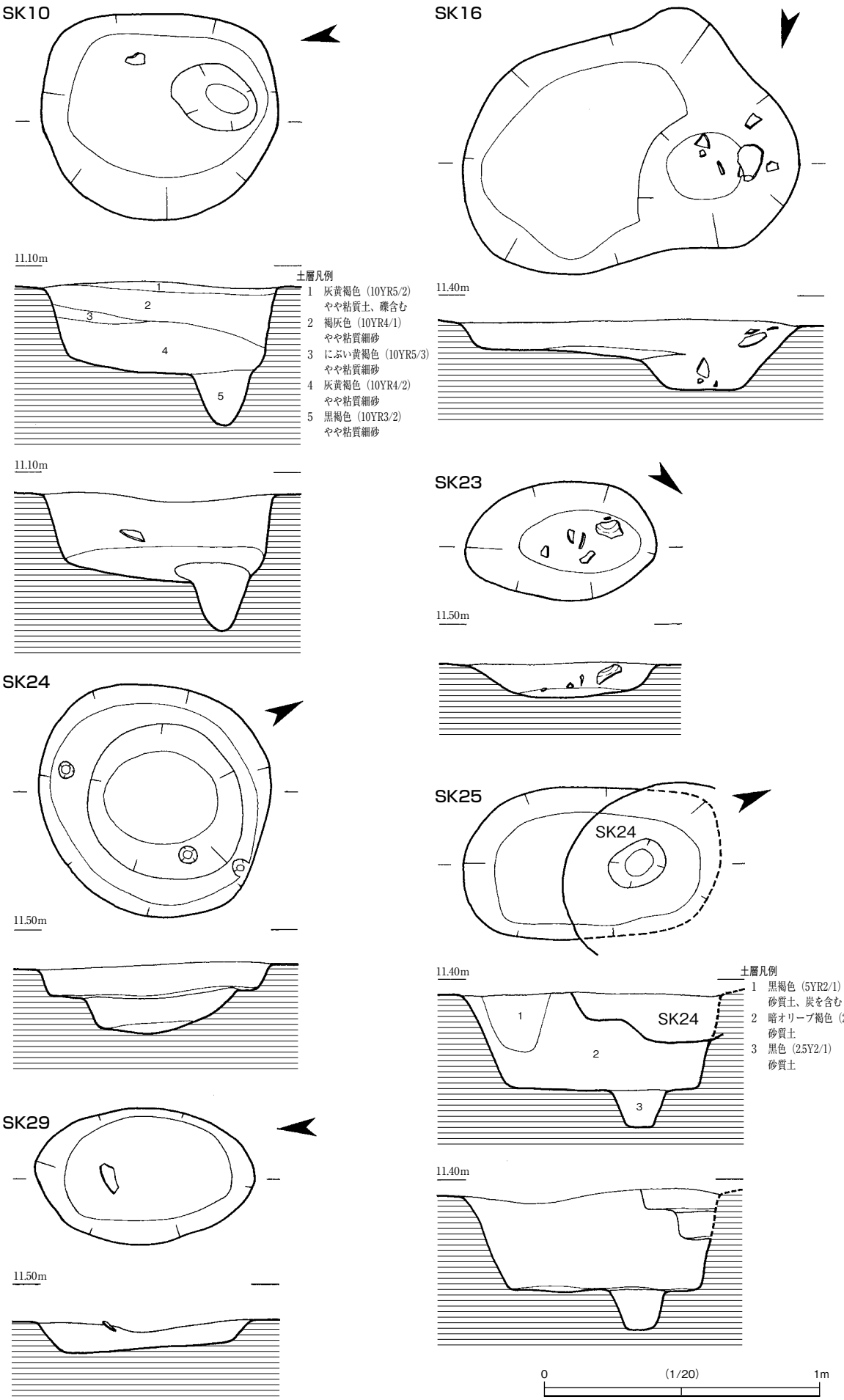


図18　SK10・16・23・24・25・29　実測図

る。規模は長軸92cm、短軸82cm、深さ25cmである。遺物は土師器が出土した。埋土は炭を含んだ暗褐色のやや粘質細砂の単層である。

ＳＫ25（図18　図版８）　Ｉ地区北東端部に位置する平面形が長円形を呈した土坑である。ＳＫ24に北上面を切られ、底面には柱穴が掘り込まれている。規模は長軸93cm、短軸54cm、深さ49cmである。出土遺物は土師器である。

ＳＫ29（図18）　Ｉ地区北東端部に位置する土坑である。平面形は長円形を呈し、皿状に掘り込まれている。規模は長軸80cm、短軸50cm、深さ10cmである。土師器が出土しており、埋土は単層で、灰黄褐色の砂質土である。

柱穴（図19・20　図版9・10）

第１面では約260個の柱穴が検出され、そのうち遺物が出土したものが192個である。Ｉ・Ⅱ地区ともに全体に分布しており、８棟の掘立柱建物跡を復元した。出土した遺物はほとんどが土師器である。比較的残存状況のよい遺物が出土した。以下、主なものについて紹介する。

ＳＰ13（図19　図版10）　Ⅱ地区北東部に位置する柱穴であり、ＳＢ７を構成する。規模は直径30cm、深さ41cm。土師器の杯（74）が出土した。

ＳＰ36（図19　図版10）　Ⅱ地区中央部に位置する柱穴である。規模は直径36cm、深さ49cm。完形の土師器の杯（75）が出土した。地鎮等に用いられた可能性もある。

ＳＰ110（図20）　Ｉ地区中央部に位置する柱穴である。規模は直径38cm、深さ24cm。土師器の杯（73）が出土した。

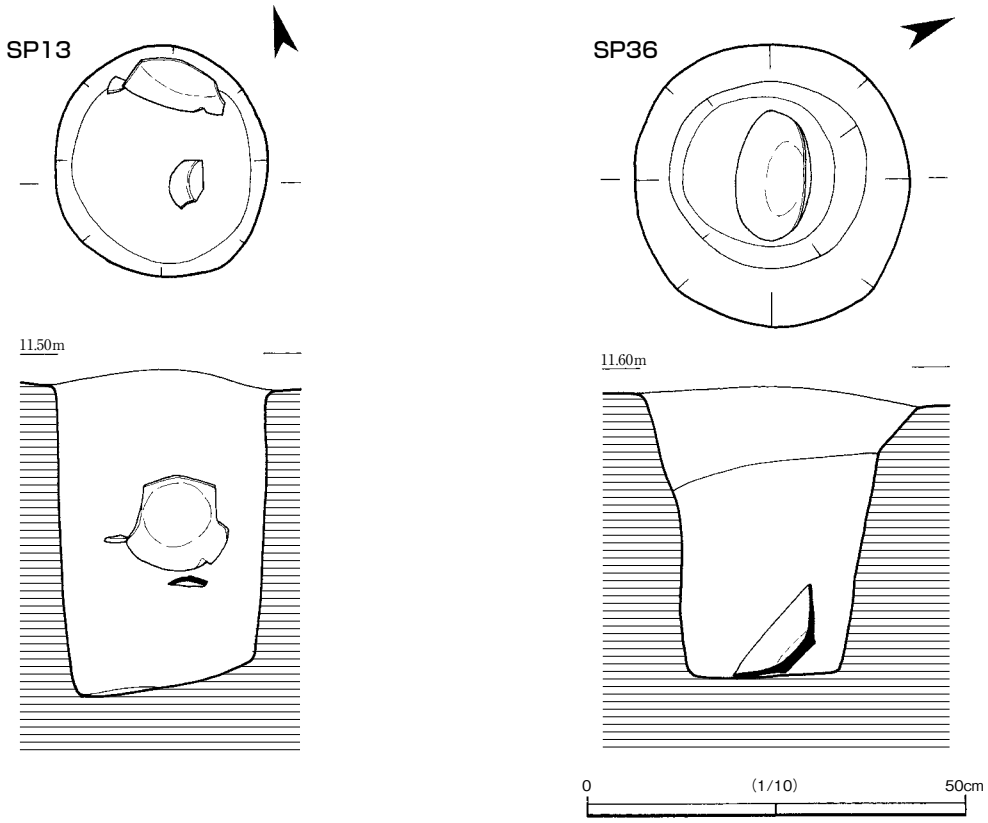


図19　SP13・36　実測図

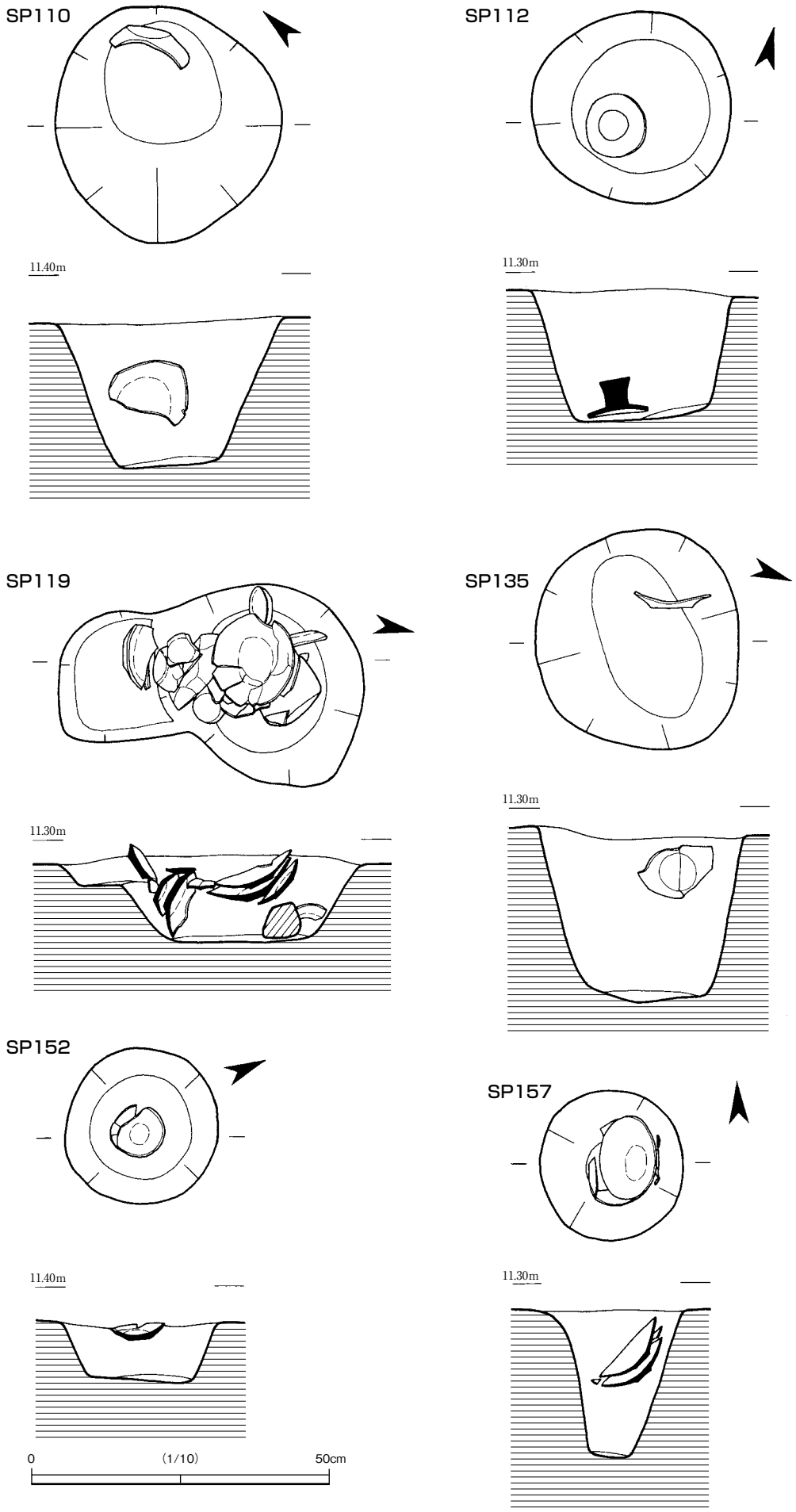


図20　SP110・112・119・135・152・157　実測図

ＳＰ112（図20　図版９）　Ⅰ地区中央部に位置する柱穴である。規模は直径33㎝、深さ22㎝。土師器の柱状高台皿（63）が逆さまに据えられた状態で出土した。完形品であることから地鎮に用いられたとも考えられる。

ＳＰ119（図20　図版９）　Ⅰ地区中央部に位置する長円形の柱穴である。規模は長軸50㎝、短軸35㎝、深さ15㎝。南端部にテラスを形成する。残存状態の良好な遺物が多く出土した。土師器の杯（57～60）・皿（54～56）はほぼ完形の状態で出土した。地鎮あるいは、祭祀等で使用した後廃棄されたものと考えられる。

ＳＰ135（図20）　Ⅰ地区中央部に位置する柱穴である。規模は直径37㎝、深さ29㎝。土師器の杯（77）が出土した。

ＳＰ152（図20　図版10）　Ⅰ地区西部に位置する柱穴である。規模は直径27㎝、深さ11㎝である。土師器の杯（72）が出土した。

ＳＰ157（図20　図版10）　Ⅰ地区中央部に位置し、ＳＢ１を構成する柱穴である。規模は直径25㎝、深さ25㎝。ほぼ完形の土師器の杯（70・71）が２枚重なった状態で出土した。地鎮等に使用された可能性がある。

不明遺構

１面においては性格を特定できない遺構が２基確認された。いずれもⅠ地区東側に位置する。そのうち１基を紹介する。

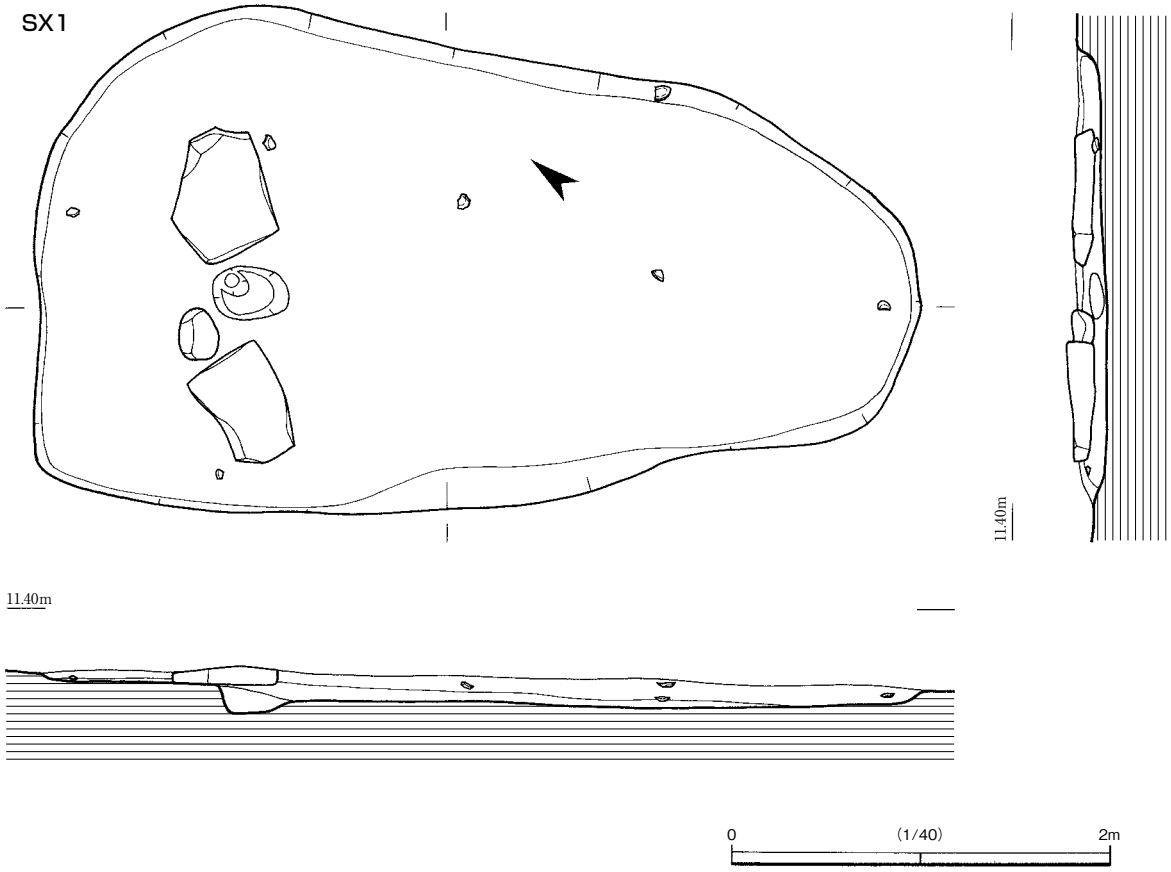


図21　SX1　実測図

ＳＸ１（図21　図版10）　Ｉ地区東端部に位置し、不整形に掘り込まれた浅い遺構である。規模は、長軸4.28m、短軸2.68m、深さ12cm。北側に約50cmの平らな礎石状の石を40cmの間隔で２基配置し、間に柱穴が掘り込まれている。出土した遺物は土師器の杯（80）・皿（79）である。重なるＳＢ２、３を切るように掘り込まれている。埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。

（２）　第２面遺構

調査区第２面において検出された遺構は、掘立柱建物跡４棟、溝状遺構10条、土坑５基、柱穴約240個、不明遺構１基である。これらは出土した遺物か12世紀末～13世紀前半代のものが大半を占めるとみられ、層位的には先行するものの、第１面との時期差はあまりないものと思われる。この時期の遺物が大量に出土したＳＤ９－Ⅱを除いては、出土遺物も少なく、遺構密度も１面に比べて低い。Ⅱ地区は中央を砂礫堆積層が分断し、遺構は柱穴14個を数えるのみである。

掘立柱建物跡（図22～24　図版12）

第２面においては４棟の掘立柱建物跡が復元できた。Ｉ地区西側に並列する２棟、東側に建て替えと思われる２棟である。棟方向から判断して、同一時期のものと考えられる。

ＳＢ９（図22　図版12）　Ｉ地区西側の中央、ＳＢ10と並んだ東に位置する建物跡で、桁行２間（4.18m）、梁行２間（3.86m）、床面積は16.13㎡を測る。棟方向はＮ43°Ｅである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。柱穴からは土師器が出土した。

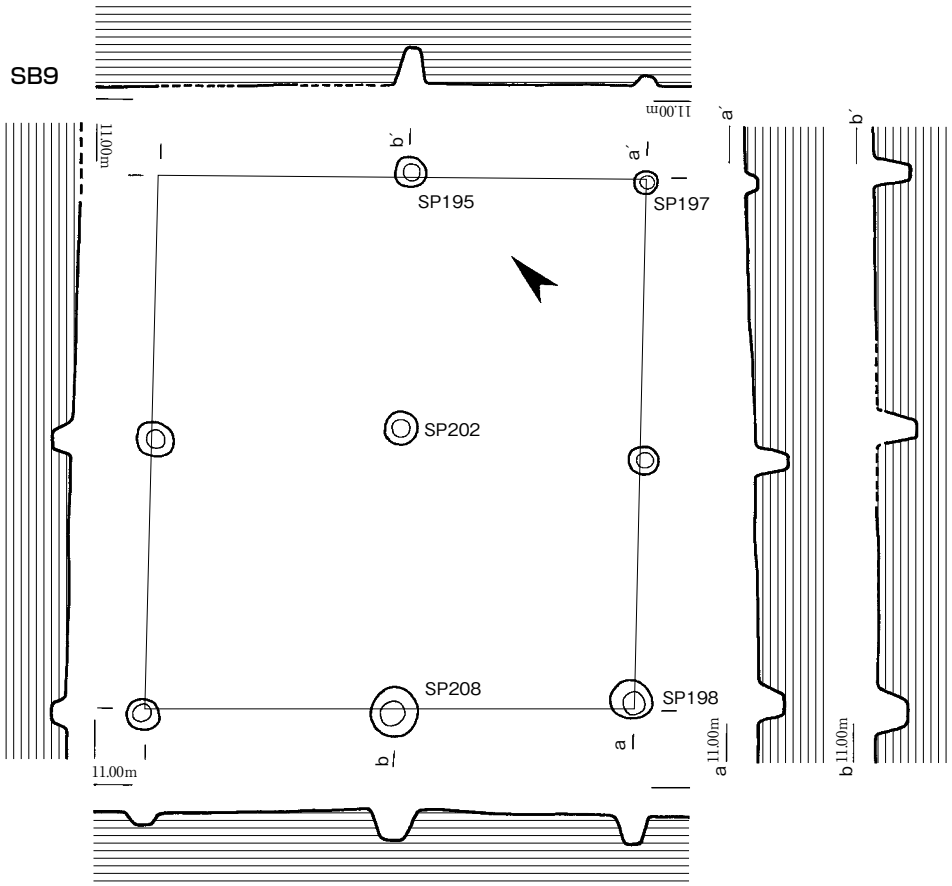


図22　SB9　実測図

ＳＢ10（図23　図版12）　Ｉ地区西側中央、ＳＢ９と並んだ西に位置し、桁行４間（8.30m）、梁行２間（4.70m）、床面積は39.01㎡を測る比較的大型の建物跡である。棟方向は、Ｎ44°Ｅである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。柱穴からの出土遺物は確認できなかったが、棟方向から考え、ＳＢ９とほぼ同時期の建物跡であると思われる。

ＳＢ11（図24）　Ｉ地区東側、北調査区境に切られて位置する建物跡で、桁行１間（2.20m）以上、梁行２間（3.50m）を測る。棟方向はＮ46°Ｗである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台

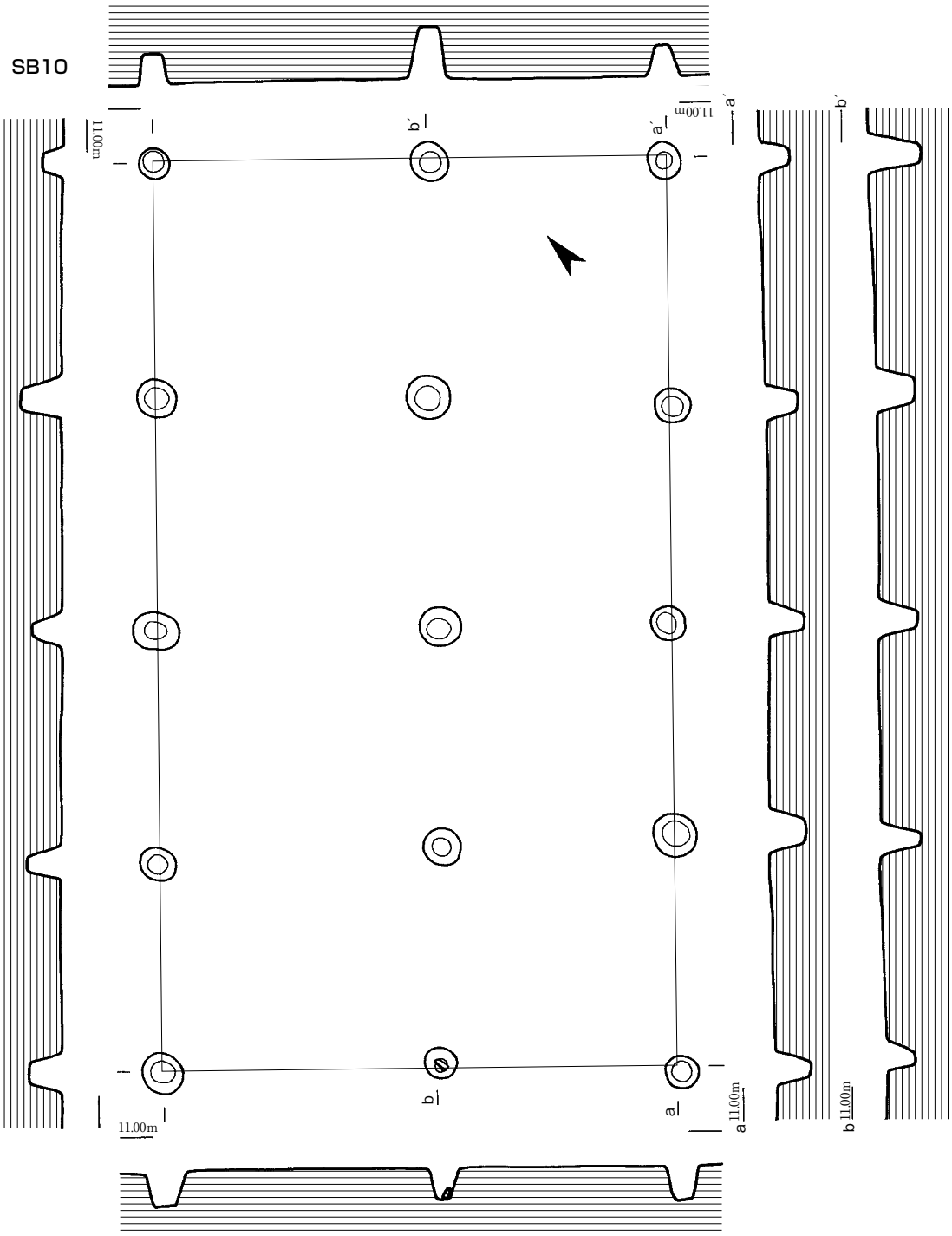
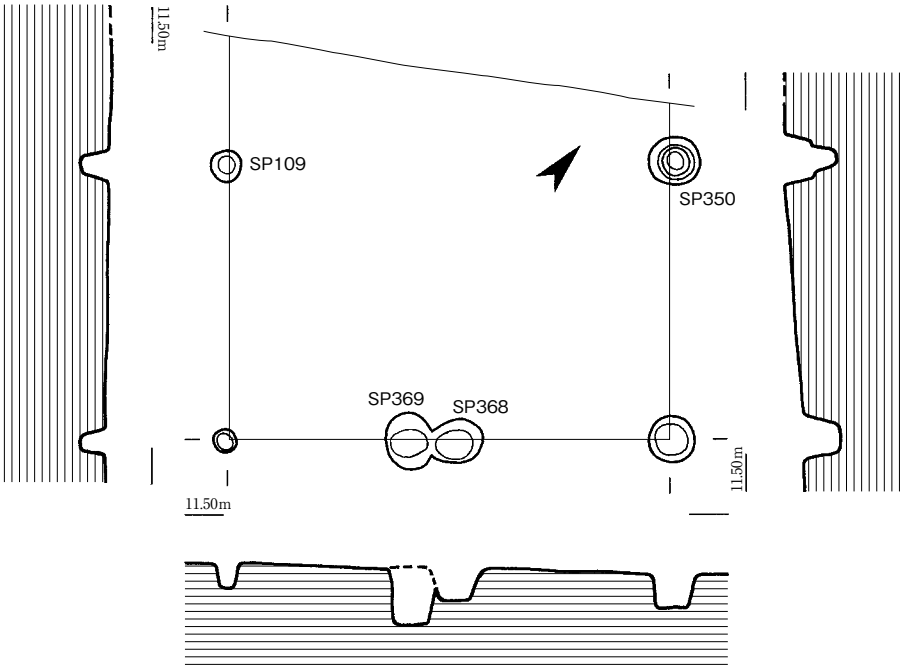


図23　SB10　実測図

SB11



SB12

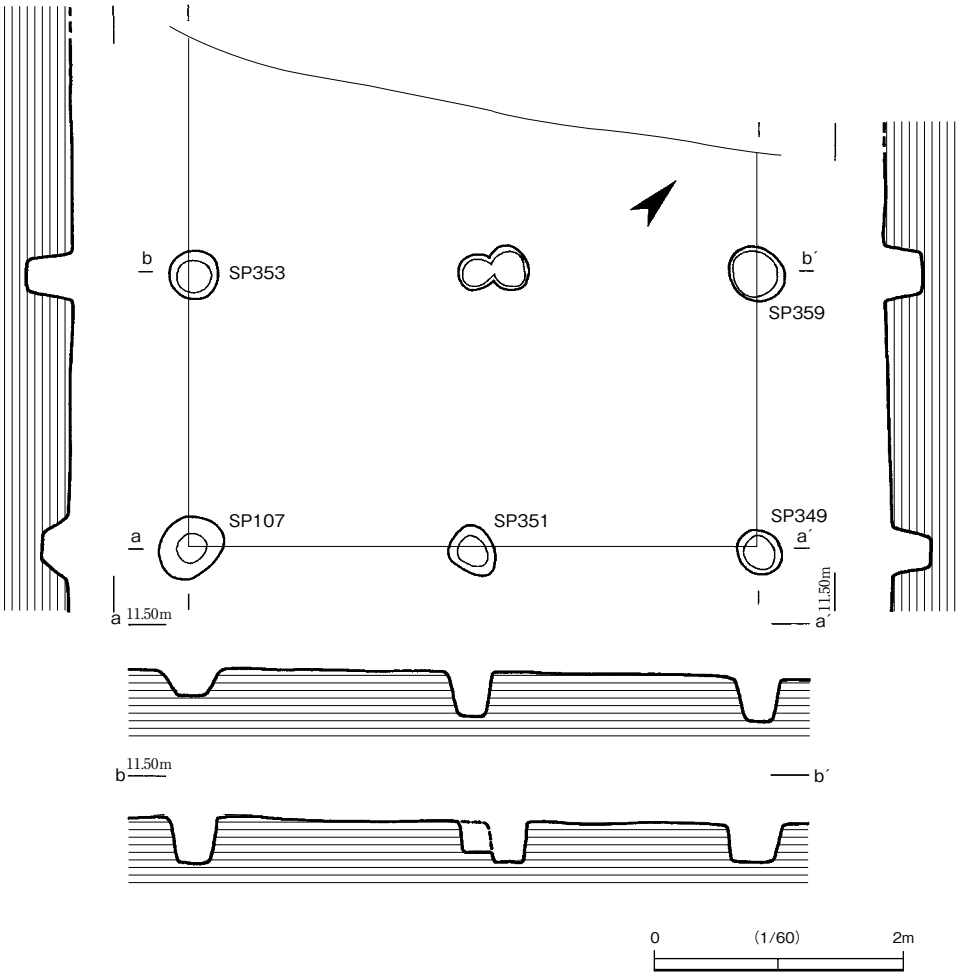


図24　SB11・12　実測図

形を呈する。柱穴からは土師器が出土している。

ＳＢ12（図24）　Ｉ地区東側、ＳＢ11とほぼ同位置に検出された建物跡である。桁行１間(2.20m)以上、梁行２間（4.50m）を測る。棟方向はＮ45°Ｗ、柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。柱穴からは土師器の皿（274）が出土した。ＳＢ11とほぼ同時期の建物であるとみられ、建て替えの可能性が高い。

溝状遺構(図25～30　図版13～15)

第２面において検出された溝状遺構は10条である。中でも注目すべき遺構はＳＤ９－Ｉ下層に検出されたＳＤ９－Ⅱである。今回の調査で最も多くの遺物が検出された遺構であり、本報告書に記載した遺物だけでも140点を超える。かなり一括性の高い良好な資料であり、そのほとんどが12世紀末～13世紀前半代におさまる土師器である。その他の遺構は、深さが浅く、砂礫を含み、南北方向に延びるものがほとんどである。また出土した遺物も流れ込みとみられる弥生土器を含むものが多い。以下、主な遺構について紹介する。

ＳＤ9－Ⅱ(図25～28　図版13・14)

ＳＤ９－Ｉ下層に検出されたＩ地区を東西に分断する溝である。今回の調査で最も大量の遺物が出土した注目すべき遺構でもある。現存規模は長さ16.80m、幅2.48～3.12m、深さ0.46～0.68mである。ＳＤ９－Ｉよりもその規模は大きく、掘り方断

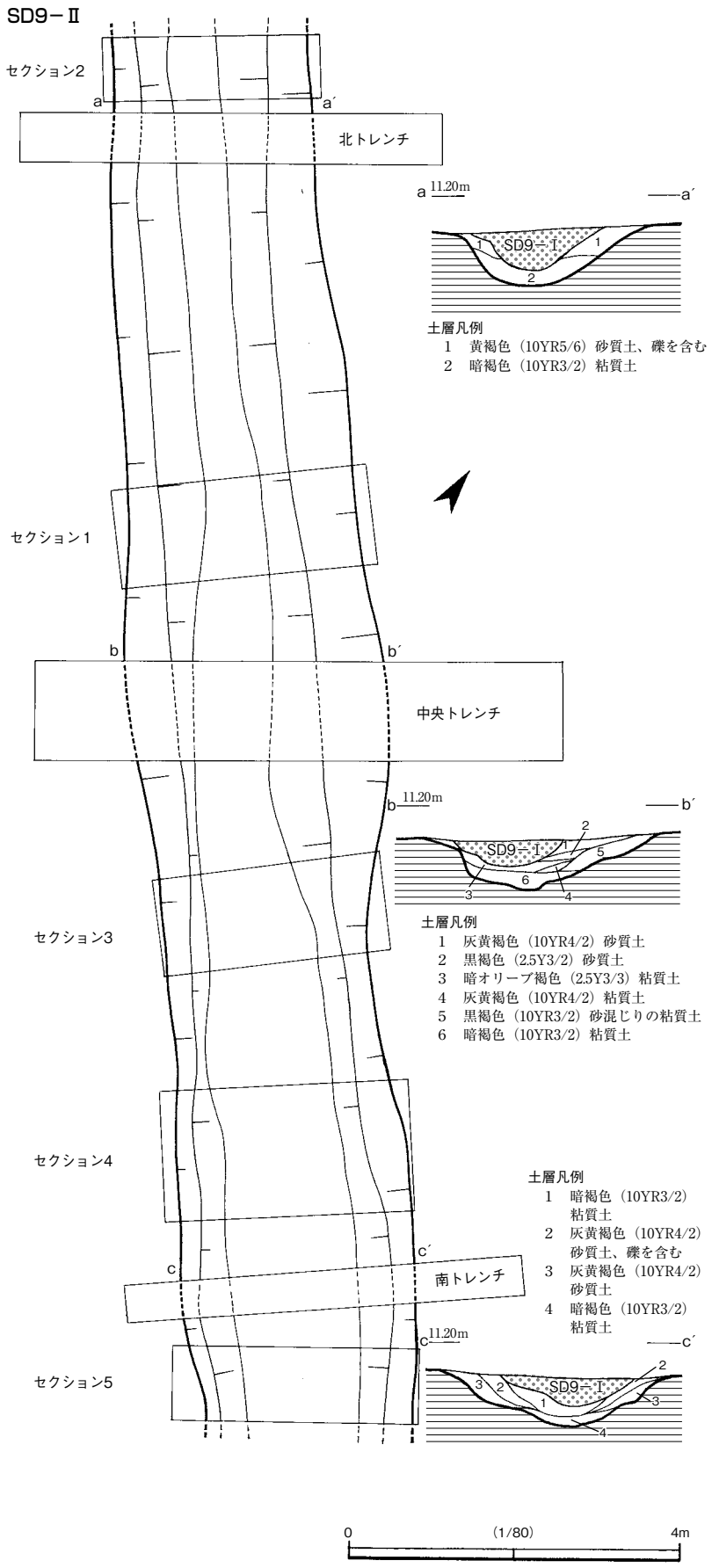
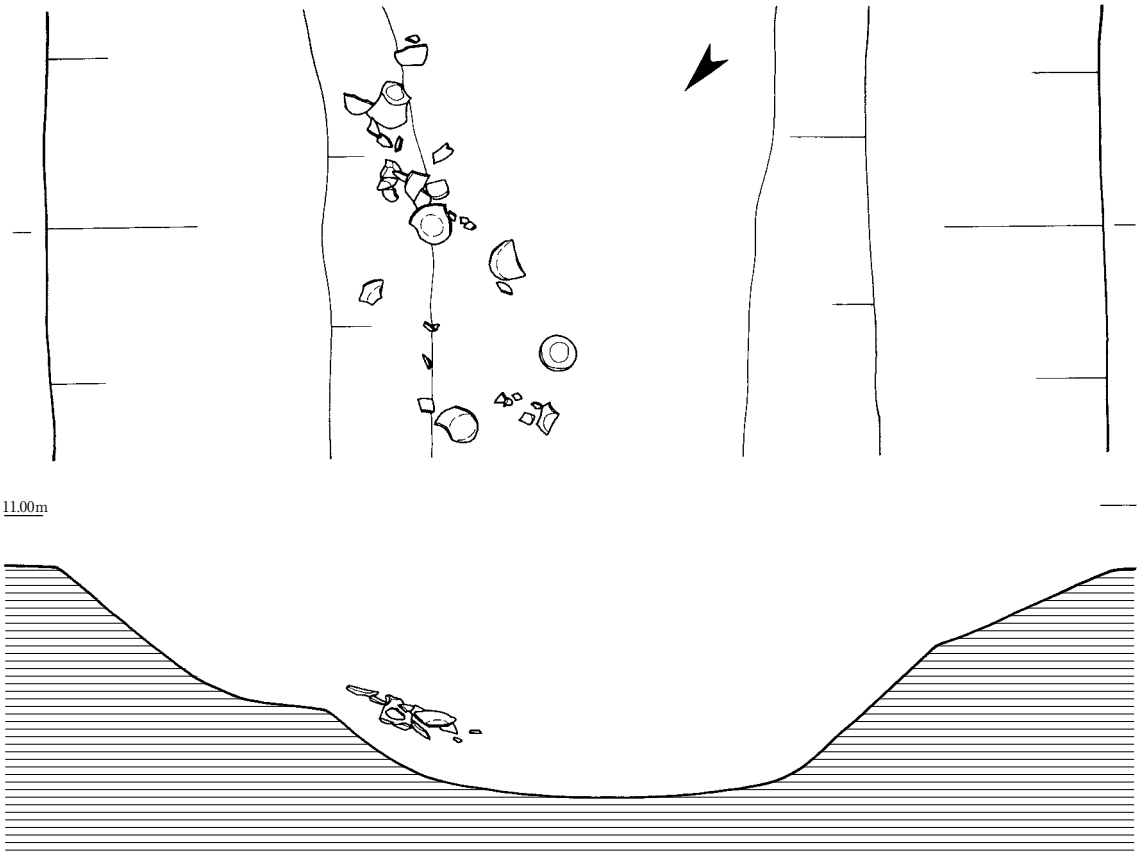


図25　SD9－Ⅱ　実測図

SD9－Ⅱ　セクション1



SD9－Ⅱ　セクション2

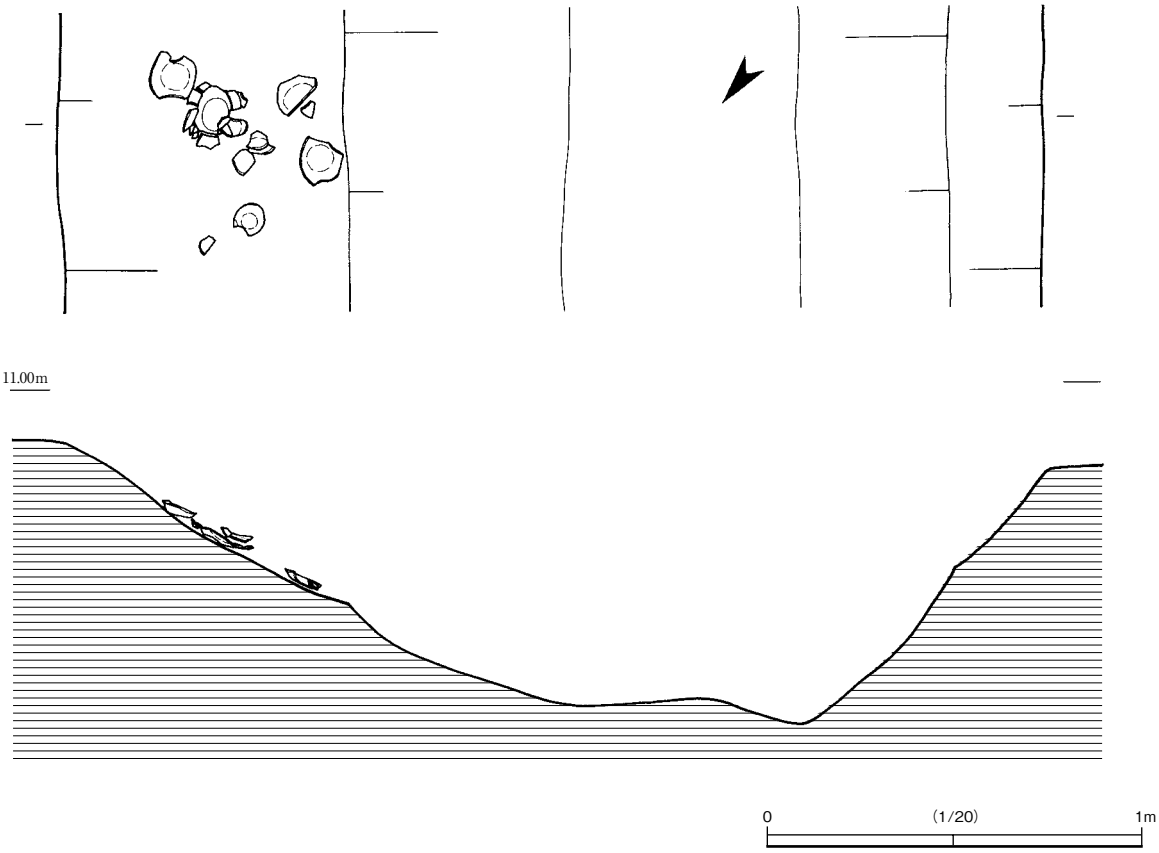
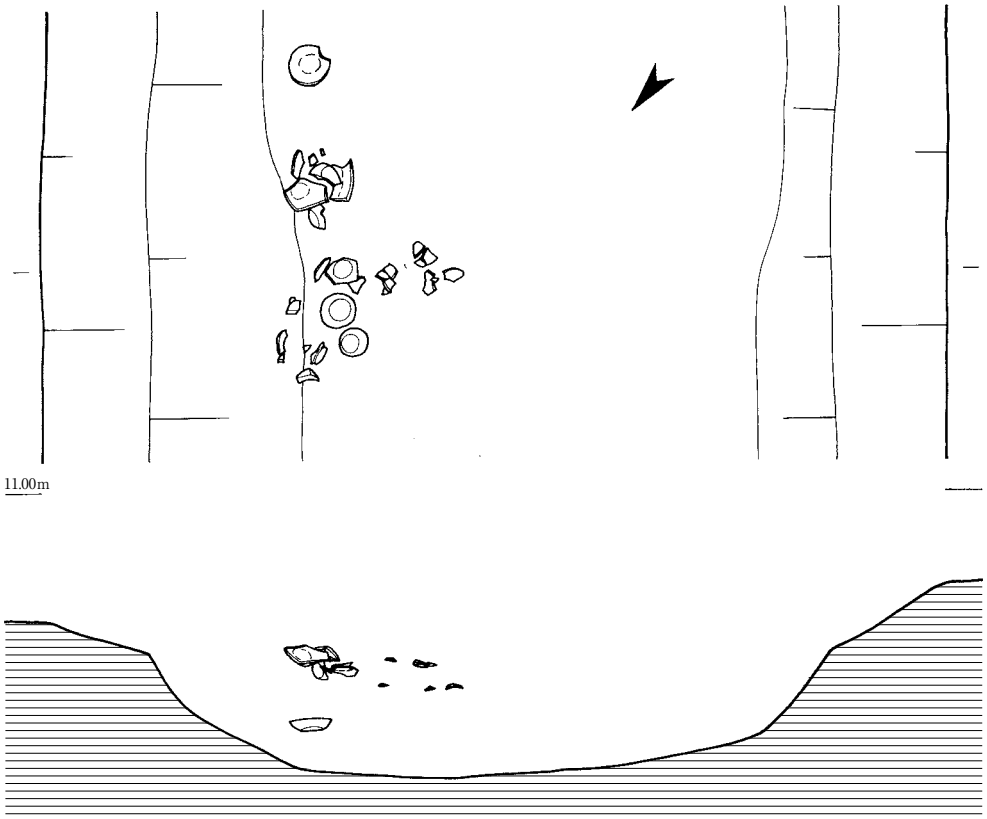


図26　SD9－Ⅱ　セクション1・2　実測図

SD9－Ⅱ　セクション3



SD9－Ⅱ　セクション4

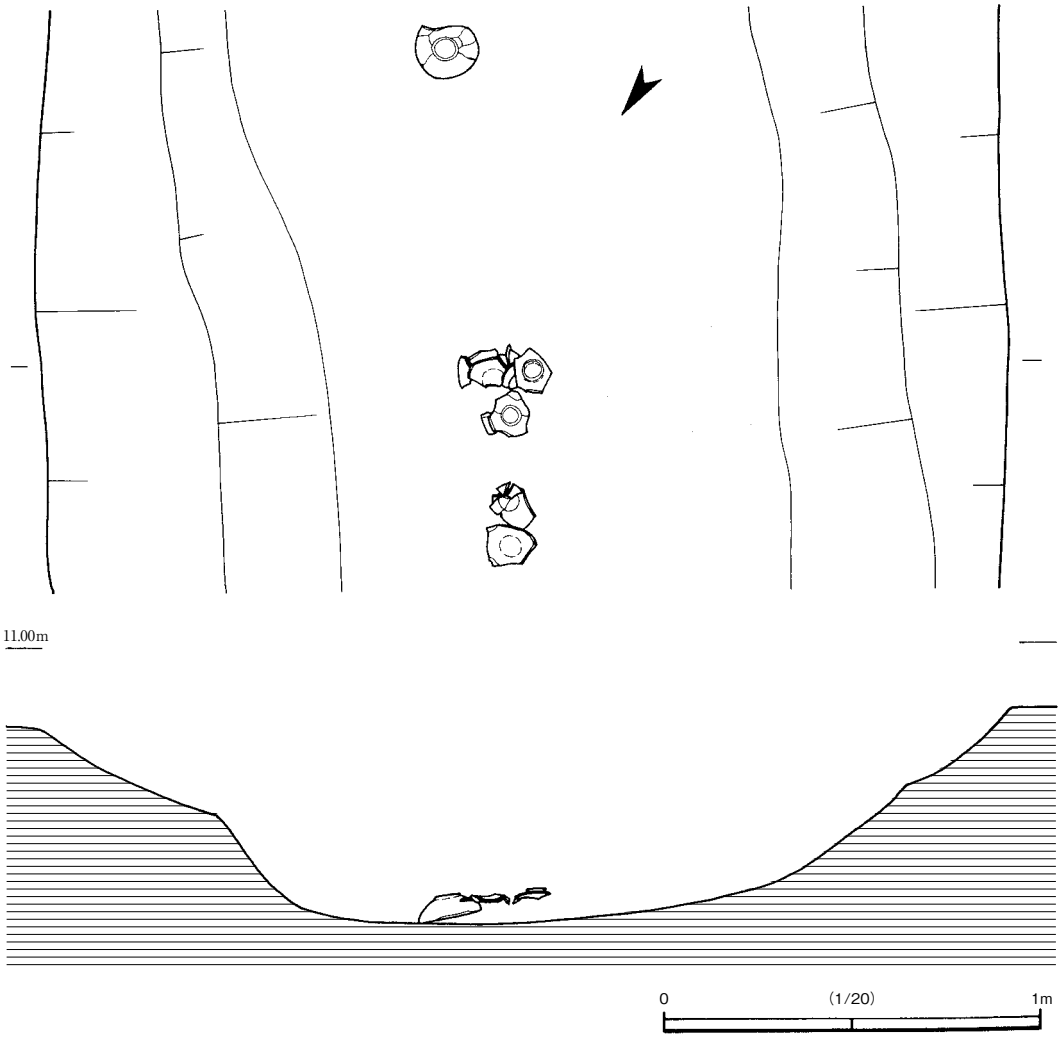


図27　SD9－Ⅱ　セクション３・４　実測図

SD9－Ⅱ　セクション5

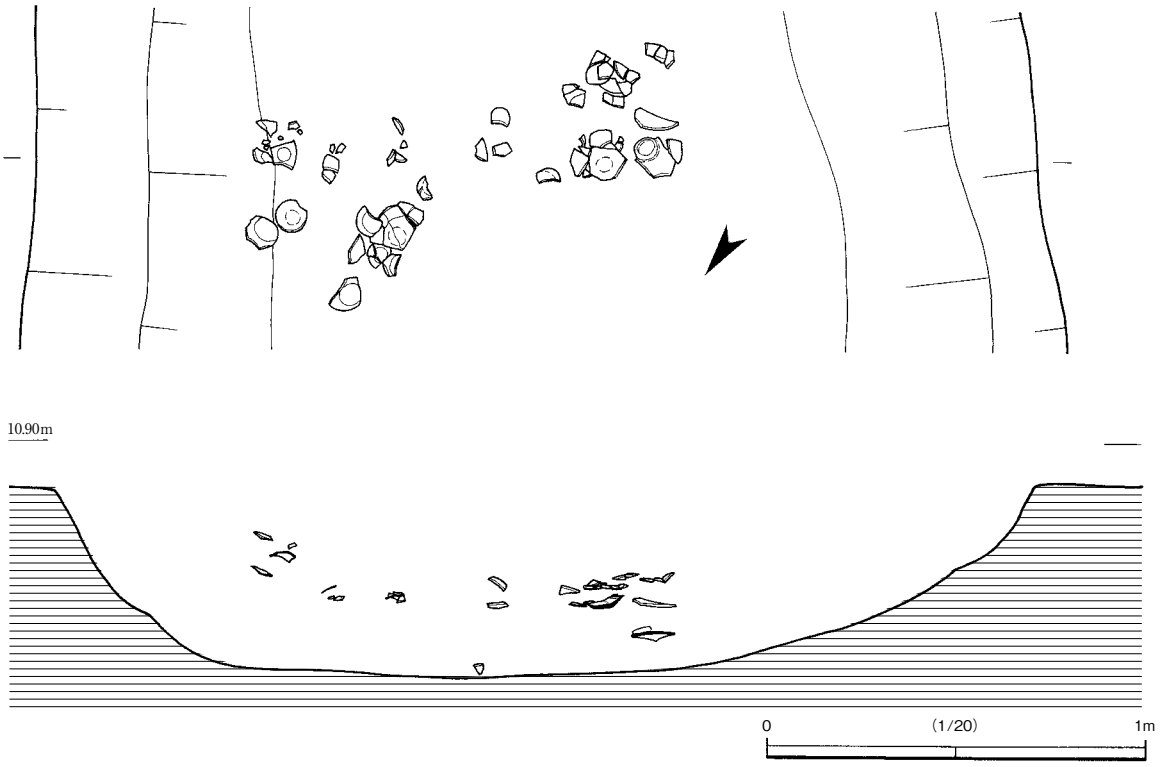


図28　SD9－Ⅱ　セクション5　実測図

面形は途中屈曲を見せるが、おおむね浅いU字型を呈する。埋土の堆積状況は、粘質土が底部に堆積しており、常時流水があったとは考えにくい。出土遺物は弥生土器の器台（255）、土師器の椀（235～247）・杯（200～234）・皿（111～199）・柱状高台皿（248）、土師質の鍋（249）、白磁の椀（250・252～254・皿（251）、鉄鏃（358）などが出土した。形状及び方向性などから考え、条里の区割りに伴う溝である可能性が高いと言える。

ＳＤ９－Ⅲ（図29　図版14・15）　ＳＤ９－Ⅱの下層に位置する溝である。現存規模は長さ16.80m、幅2.72～3.76m、深さ0.64～0.88mと、ＳＤ９－Ⅱよりやや大きめに掘られた溝である。掘り方断面形状は緩やかなU字状を呈する。南側両斜面には、土留めとみられる杭列が並び、石組みも一部現存するなど、堅固な造りとなっていたと考えられる。しかし、出土遺物は、ＳＤ９－Ⅰ・Ⅱに比べて少なく、土師器の高杯（258）・皿（256）・柱状高台皿（257）などわずかである。遺物の時期に大差がないとみられることから、この溝を掘った後、間もなくして、土砂が堆積したため新たにＳＤ９－Ⅱが掘り込まれたものと推察される。

ＳＤ５(図29)　Ⅰ地区中央付近よりＳＤ６と分かれて南に向かって延びた溝である。現存規模は、長さ20.63m、幅0.40～0.96m、深さ0.08～0.16mである。流れ込みとみられる弥生土器片が出土した。埋土は、黄褐色の礫を含んだ砂の単層である。

ＳＤ３（図30）　Ⅰ地区中央北寄りの所から南西に向かって延びる溝である。現存規模は、長さ21.88m、幅0.25～0.81m、深さ0.03～0.09mである。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

ＳＤ11（図30　図版15）　Ⅰ地区北端部から南に弧を描くように延びる溝である。現存規模は、

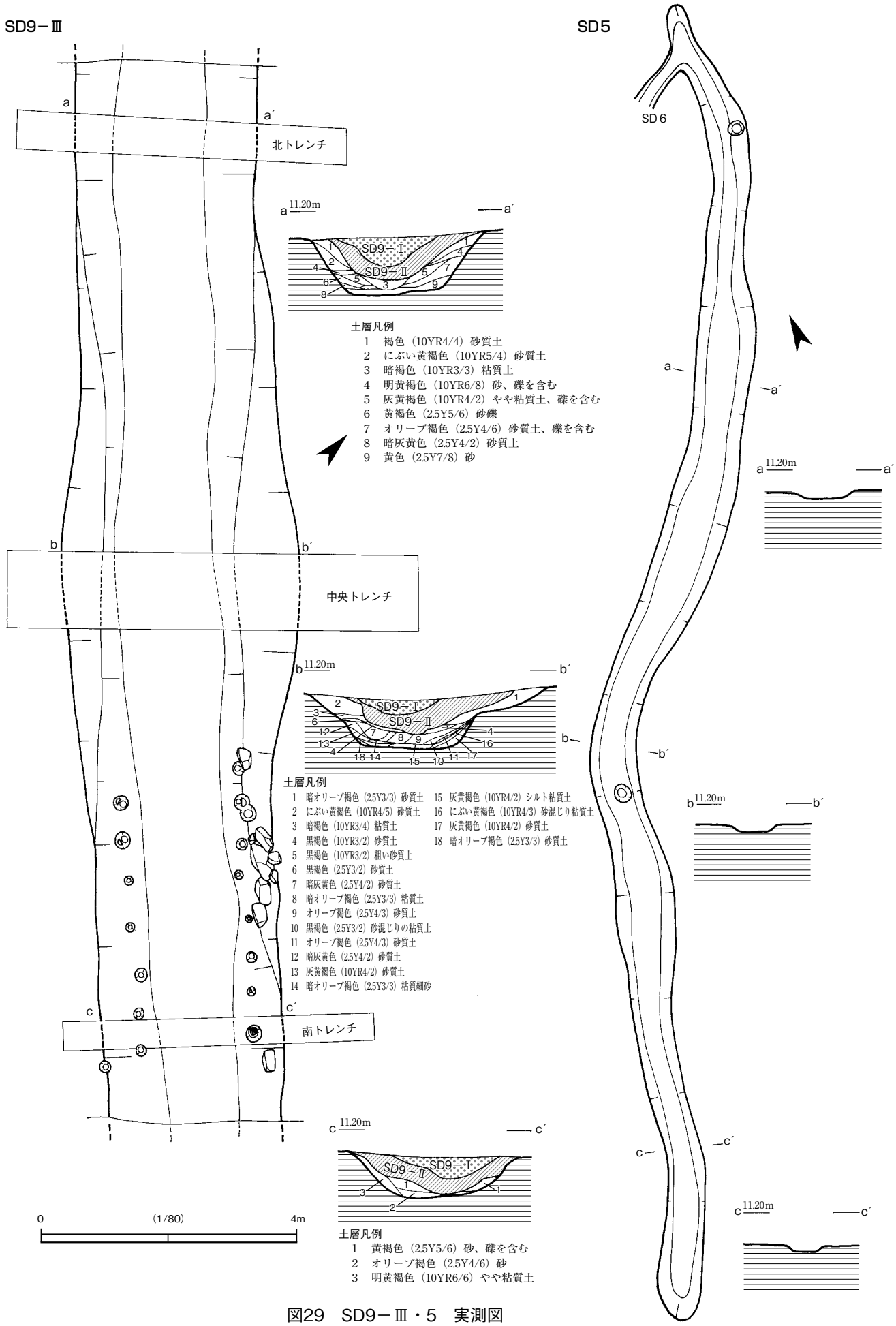


図29　SD9－Ⅲ・5　実測図

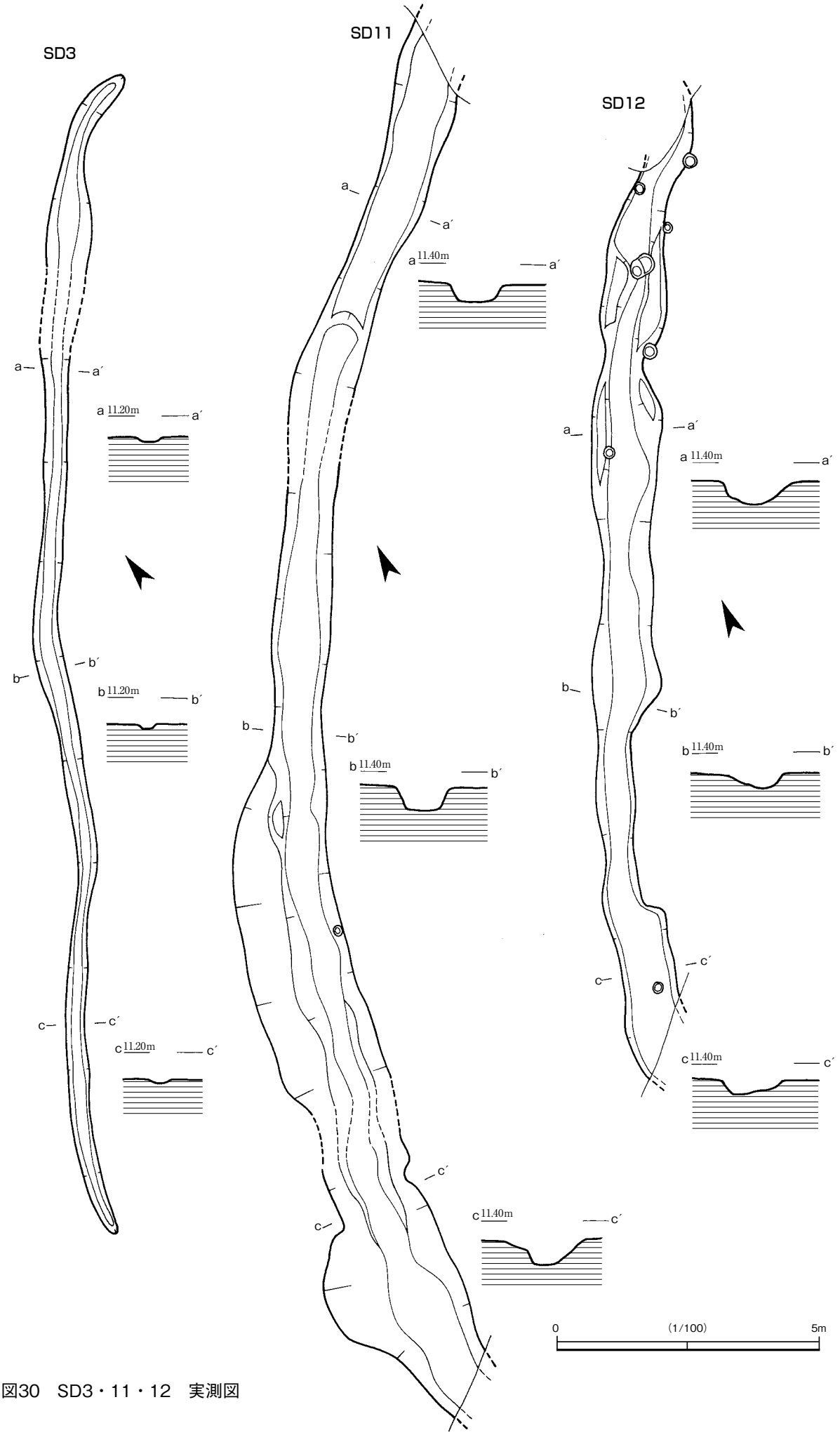


図30　SD3・11・12　実測図

長さ26.25m、幅0.75～2.63m、深さ0.09～0.60mである。弥生土器の壺（263・265）・甕（259～261）・壺ないし甕（262）・支脚（264）、土師器片が出土した。いずれも流れ込みと考えられる。埋土は黄褐色砂の単層である。

ＳＤ12（図30　図版15）　Ｉ地区北西端部からＳＤ11と並行するように南に延びる溝である。現存規模は、長さ18.75m、幅0.50～1.38m、深さ0.15～0.59mである。弥生土器の壺（266・267）・甕（268）、土師器片が出土した。ＳＤ11同様流れ込みであると考えられる。埋土は黄褐色砂の単層である。

土坑（図31　図版16）

第２面で検出された土坑は５基である。第１面と比較すると数も少なく、規模も小さい。遺物の出土もわずかである。いずれもＩ地区で検出された。以下、主なものを取り上げる。

ＳＫ201（図31　図版16）　Ｉ地区中央付近に南北軸に沿って位置する土坑である。平面形は長円形。規模は、長軸144cm、短軸62cm、深さ11cmである。出土遺物は土師器の皿（269～271）である。

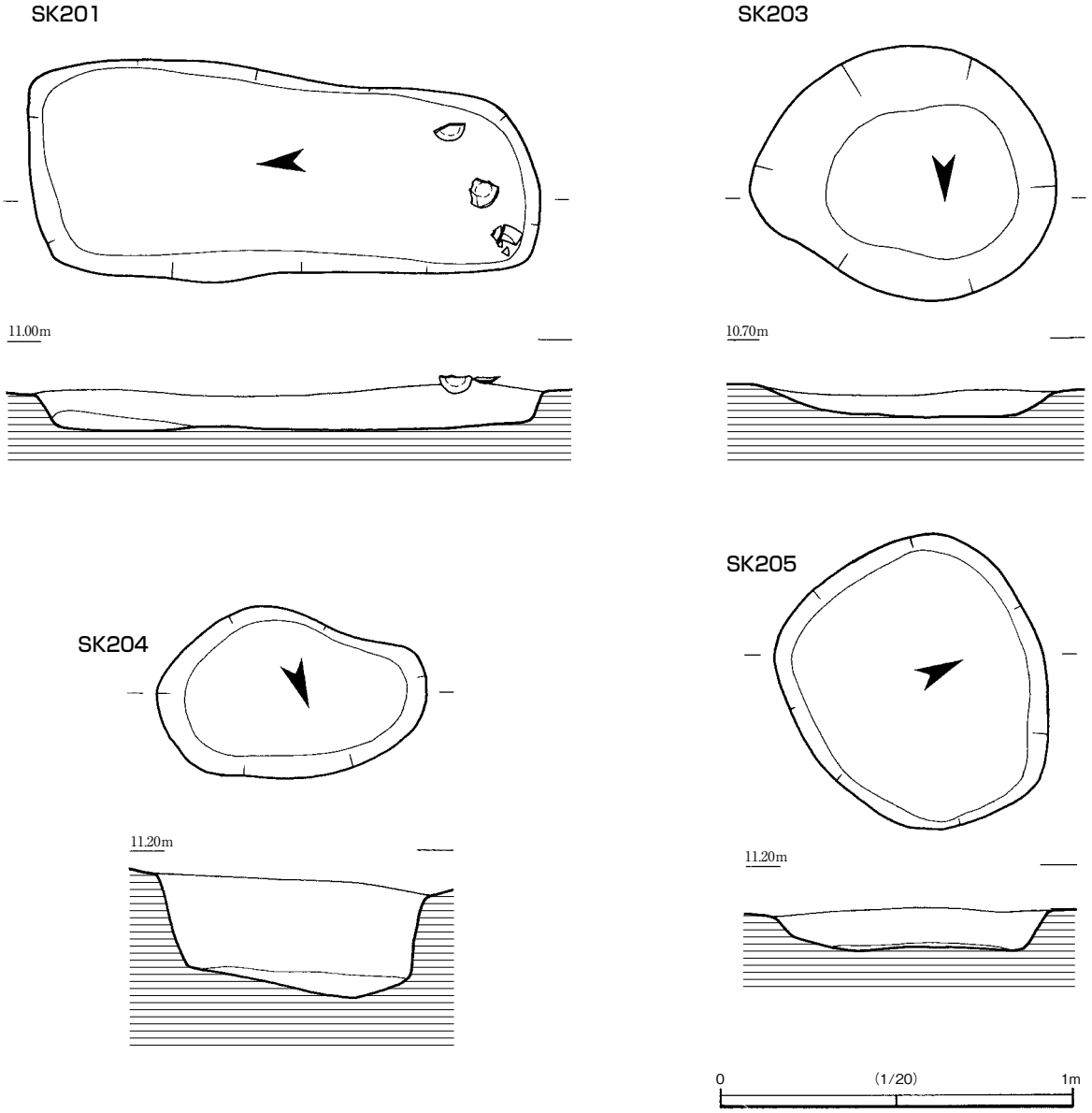


図31　SK201・203・204・205　実測図

検出状況及び、遺物から考えて、土坑墓の可能性がある。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

ＳＫ203（図31）　Ⅰ地区西端付近に位置する浅い皿状の土坑である。平面形は長円形。規模は長軸86cm、短軸73cm、深さ７cmである。出土遺物はなく時期は不明である。埋土は黒褐色砂質土である。

ＳＫ204（図31）　Ⅰ地区北東部に位置する土坑である。平面形は不整形である。規模は、長軸76cm、短軸48cm、深さ33cm。出土遺物はなく、時期は不明である。埋土は、黒褐色砂質土の単層である。

ＳＫ205（図31）　Ⅰ地区東側中央に位置する平面形が円形を呈する皿状の土坑である。規模は

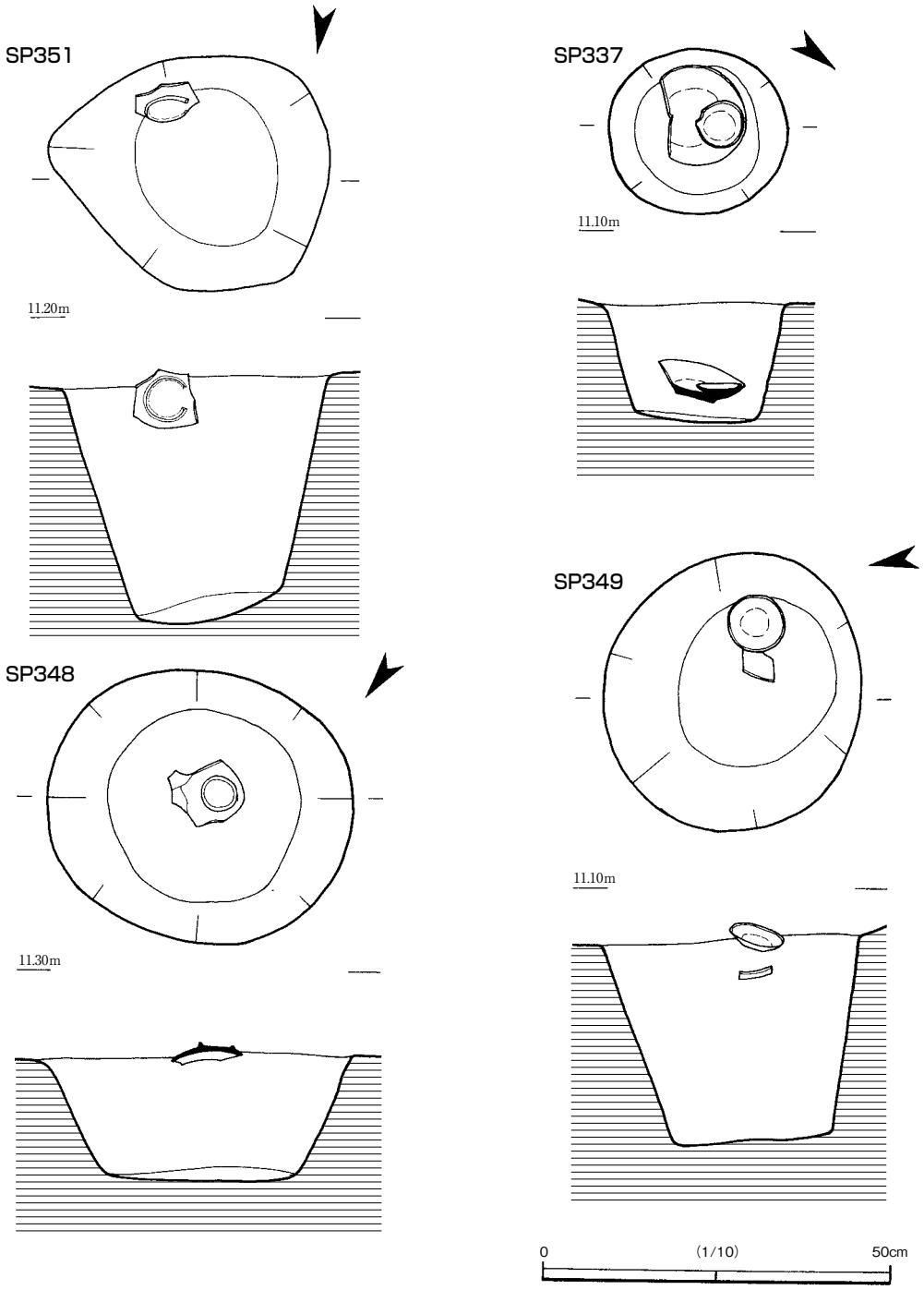


図32　SP351・337・348・349　実測図

長軸85㎝、短軸78㎝、深さ11㎝。出土遺物はなく時期は不明である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

柱穴（図32　図版17）

第２面においては約240個の柱穴が検出された。そのうち遺物が出土したものが59個である。分布状況は、Ｉ地区西側中央寄りと、東側中央付近に集中し、４棟の掘立柱建物跡を復元した。出土した遺物はほとんどが土師器である。以下、主なものについて取り上げる。

ＳＰ351（図32）　Ｉ地区北東部に位置し、ＳＢ12を構成する柱穴である。規模は直径40㎝、深さ37㎝。土師器の杯が出土した。

ＳＰ337（図32　図版17）　Ｉ地区東側、ＳＤ12を切って掘り込まれた柱穴である。規模は直径26㎝、深さ17㎝。土師器の杯（278）・皿（272）が重なった状態で出土した。地鎮等に使用された可能性もある。

ＳＰ348（図32）　Ｉ地区東側中央に位置する柱穴である。規模は、直径44㎝、深さ19㎝。土師器の椀が出土した。

ＳＰ349（図32　図版17）　Ｉ地区東側中央付近に位置し、ＳＢ12を構成する柱穴である。規模は、直径40㎝、深さ30㎝。土師器の皿（274）が出土した。

不明遺構（図33　図版16）

第２面では、Ｉ地区で用途を特定できない遺構が一基検出された。

ＳＸ２（図33　図版16）　Ｉ地区西端に広がる砂礫堆積層上面で検出された遺構である。平面形は円形を呈し、すり鉢状に掘り込まれている。上部は、水田化のため削平を受けており、欠損。現存規模は、直径92㎝、深さ22㎝である。内面には、５㎝程度の厚さに黄橙色の粘土が貼り付けてある。遺物の出土はなく、時期は特定できない。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

砂礫堆積層（図33　図版18）

第２面では、調査区の東西端に砂礫堆積層が確認された。とりわけ、Ⅱ地区で確認された砂礫堆積層１は、幅約５ｍにわたってⅡ地区を東西に横断し、深さは２ｍ近くに達する。両端は調査区外へと延び、河川の様相を呈する。底面は起伏に富み、流れが一様でなかったことをうかがわせる。河川等の氾濫によってできた流路に砂が堆積したものと考えられる。埋土は基本的に砂であるが、粒の大きさが異なる砂が幾層にも重なりを見せる。埋土中からは大量の遺物が出土した。中でも弥生土器の出土が多く、壺（279～286）・甕（287～297）・支脚（298）・高杯（299～301）が出土した。この他、白磁の椀(302)や土師器片も見つかった。いずれも摩滅が激しく流れ込みと思われる。また、石鏃(348)、磨製石斧（350）、打製石斧（352）などの石器も出土した。

（３）　第３面遺構

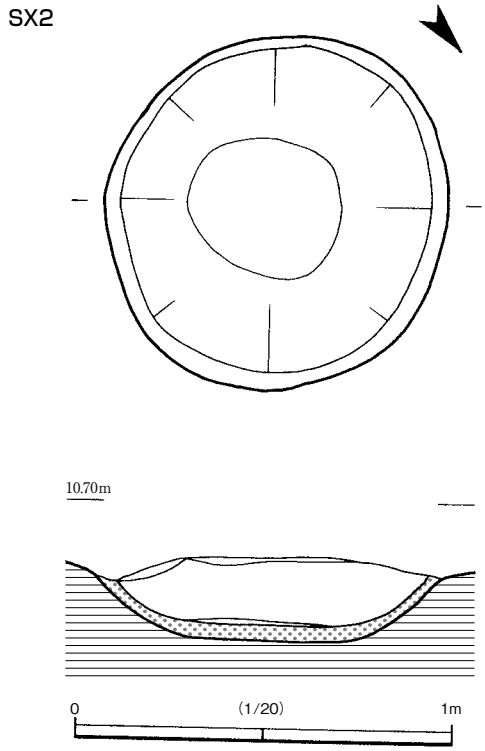
第３面で検出された遺構は、掘立柱建物跡９棟、溝状遺構３条、土坑20基、柱穴約560個である。遺構のほとんどがＩ地区西側に集中し、建物群を形成する。しかし、遺構の密度に比べ、出土した遺物の量は極めて少ない。随所に見られる砂礫堆積層からは弥生土器が多く出土したが、いずれも摩滅が激しく流れ込んだものと考えられる。また、この層からは縄文土器も出土した。各遺構からの出土遺物は少なく、本来の帰属時期を決定する資料に乏しいが、遺構面の層位や掘立柱建物跡の検出状況などから、第３面の遺構群は12世紀後半ないし、それ以前の段階のものと推察されよう。

掘立柱建物跡（図34～37　図版21）

この面における柱穴の数は３面中最も多く、９棟の掘立柱建物跡を復元した。そのうち７棟がＩ地区西端部に集中している。また、５棟は条里制地割りに沿った棟方向を示し、他の４棟との時期の違いを見せる。各々出土遺物は確認されなかった。

ＳＢ13（図34　図版21）　Ｉ地区西端部に位置する建物跡で、桁行１間（3.20m）、梁行１間（2.40m）、床面積は7.68㎡を測る。棟方向はＮ７°Ｗである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形は逆台形を呈する。

ＳＢ15（図34　図版21）　Ｉ地区西端部よりやや中央寄りに位置する建物跡である。桁行１間（3.20m）、梁行１間（3.06m）、



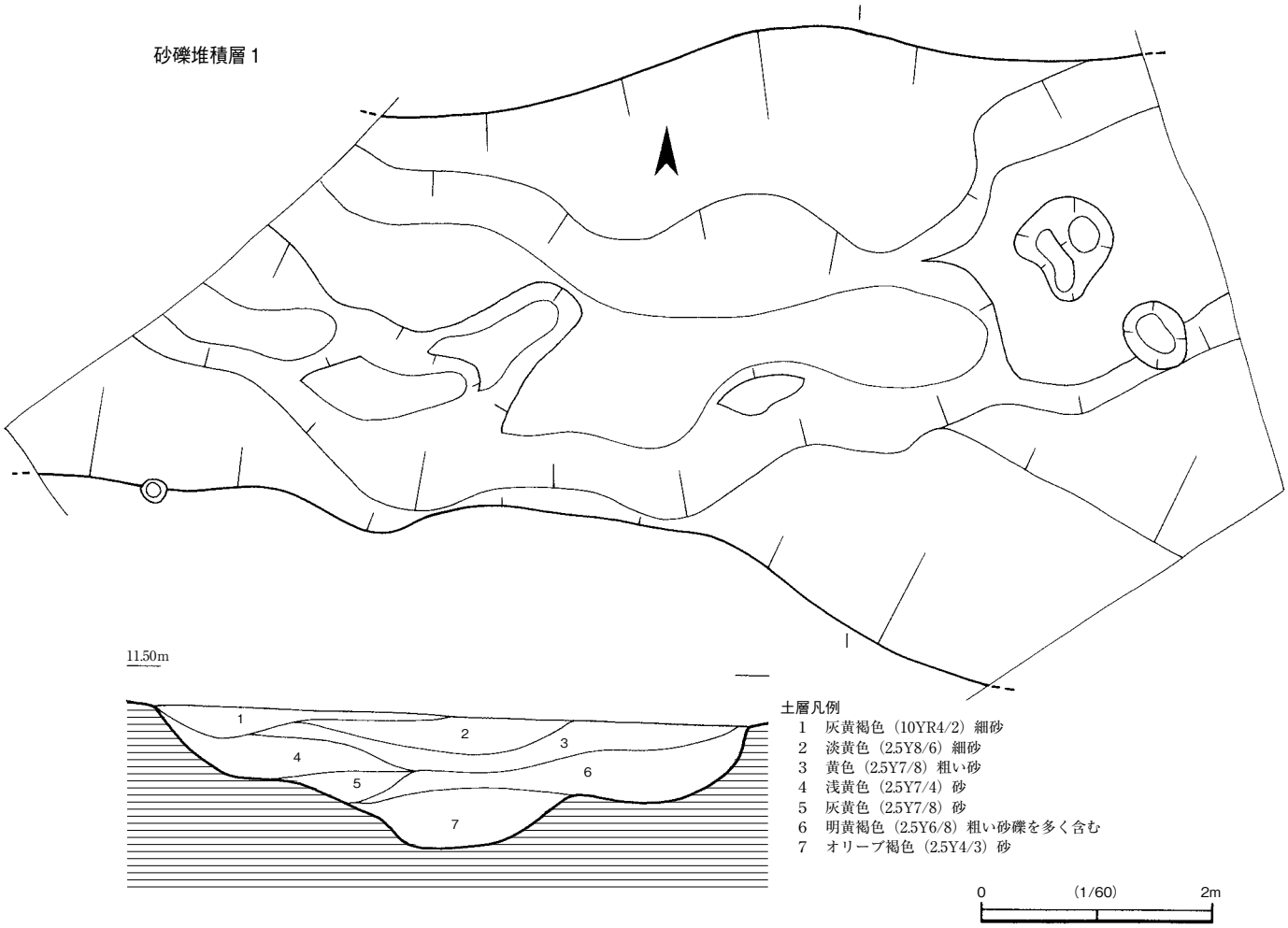


図33　SX2、砂礫堆積層１　実測図

床面積は9.79㎡を測る。棟方向はN25°Wである。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。

ＳＢ20（図35） Ⅰ地区中央やや東寄りに位置する建物跡である。桁行１間（2.70m）、梁行１間（2.40m）、床面積は6.48㎡を測る。棟方向はN34°Eである。柱穴平面形は長円形で、掘り方断面形状は、逆台形を呈する。

ＳＢ21（図35） Ⅰ地区東側中央部に位置する建物跡である。桁行１間（2.60m）、梁行１間（2.40m）、床面積は6.24㎡を測る。棟方向はN６°Eである。柱穴平面形は、長円形、もしくは円形で、掘り方断面形状は逆台形を呈する。

ＳＢ19（図36） Ⅰ地区西側中央寄りに位置する建物跡である。桁行２間（5.00m）、梁行２間（4.00m）、床面積は20.00㎡を測る。棟方向はN41°Wである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状は、逆台形を呈する。

ＳＢ16（図36　図版21） Ⅰ地区西側中央部に位置する建物跡である。桁行２間（3.90m）、梁行１間（2.60m）、床面積は10.14㎡を測る。棟方向はN40°Wである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状は、逆台形を呈する。

ＳＢ14（図37　図版21） Ⅰ地区西端部に位置する建物跡である。桁行２間（4.80m）、梁行１間（3.50m）、床面積は16.80㎡を測る。棟方向はN47°Eである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状は、逆台形を呈する。

ＳＢ17（図37　図版21） Ⅰ地区西側中央部に位置する建物跡である。桁行２間（5.10m）、梁行１間（3.10m）、床面積は15.81㎡を測る。棟方向はN48°Eである。柱穴平面形は円形、掘り方断

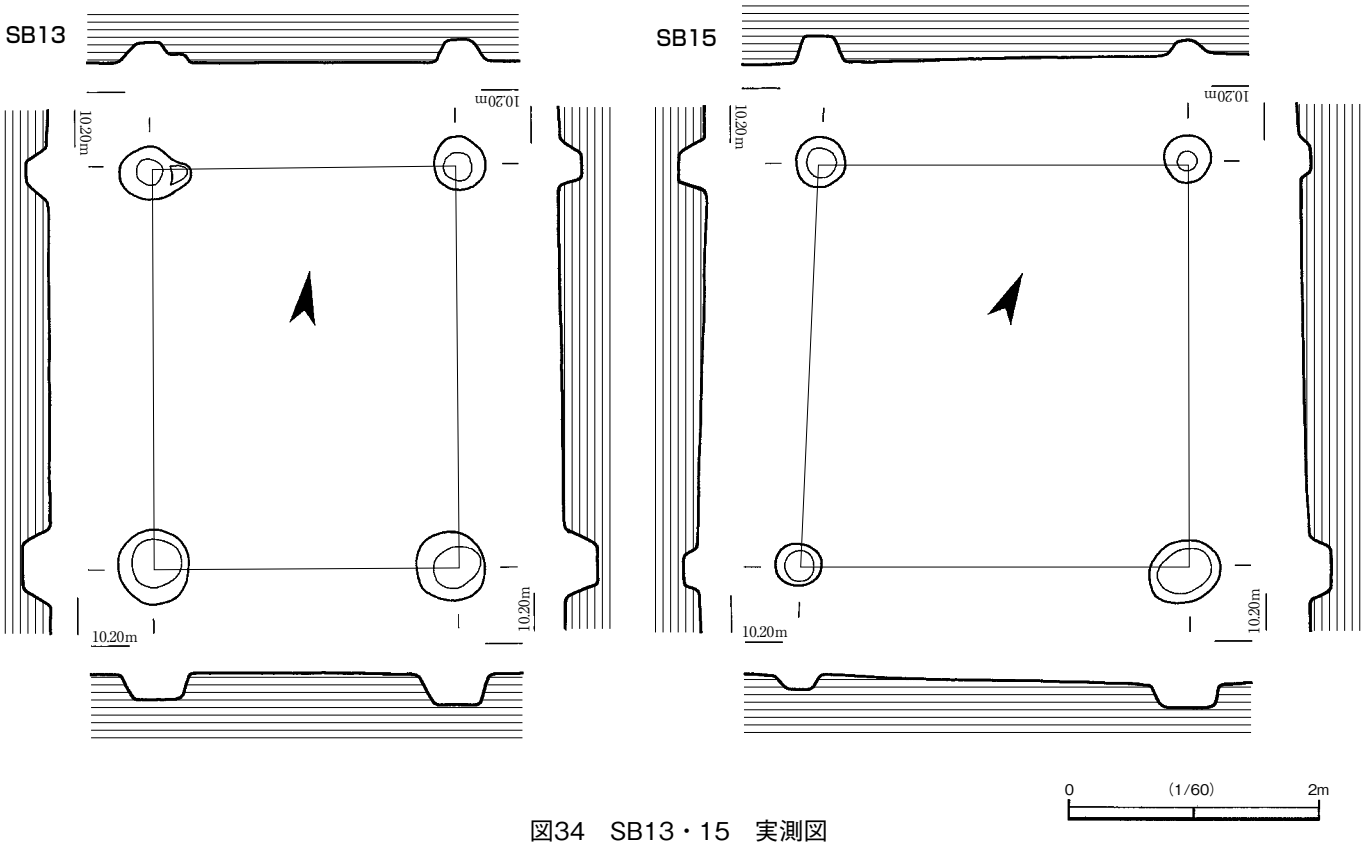


図34　SB13・15　実測図

面形状は逆台形を呈する。

ＳＢ18（図37　図版21）　Ｉ地区西側中央部にＳＢ16、17と重なって位置する建物跡である。桁行２間（6.00m）、梁行２間（4.40m）、床面積は26.40㎡を測る。棟方向はＮ49°　Ｅである。柱穴平面形は円形、掘り方断面形状は逆台形を呈する。ＳＢ16、17との前後関係は不明であるが、ほぼ同時期の建物であり、建て替えの可能性がある。

溝状遺構（図38　図版21）

第３面で検出された溝状遺構は３条である。いずれもＩ地区に位置する。中でも、並行して走るＳＤ14・15は道の両側に掘られた側溝であろうとみられ、当該時期における道の規模を知る上で貴重な資料である。第１、２面に掘り込まれていた条里に伴うとみられる溝状遺構は、この面では検出することができなかった。

ＳＤ14（図38　図版21）　Ｉ地区中央部に位置し、調査区を南北に横断する。中央及び南端部は消失しているが、両端共に調査区外に延びると考えられる。現存規模は長さ12.38m、幅0.25～0.75m、深さ0.04～0.13mを測る。ＳＤ15と2.4m隔てて並行して走っていることから、道の側溝である可能性がある。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

ＳＤ15（図38　図版21）　Ｉ地区中央部にＳＤ14と並行して走る溝である。中央及び、北端を消失しているが、両端共に調査区外に延びるものと考えられる。現存規模は長さ10.13m、幅0.25m～0.63m、深さ0.07～0.14mを測る。ＳＤ14と共に構成する道の側溝である可能性がある。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

ＳＤ16（図38）　Ｉ地区中央部に位置し、南端を砂礫堆積層に切られた溝である。現存規模は、

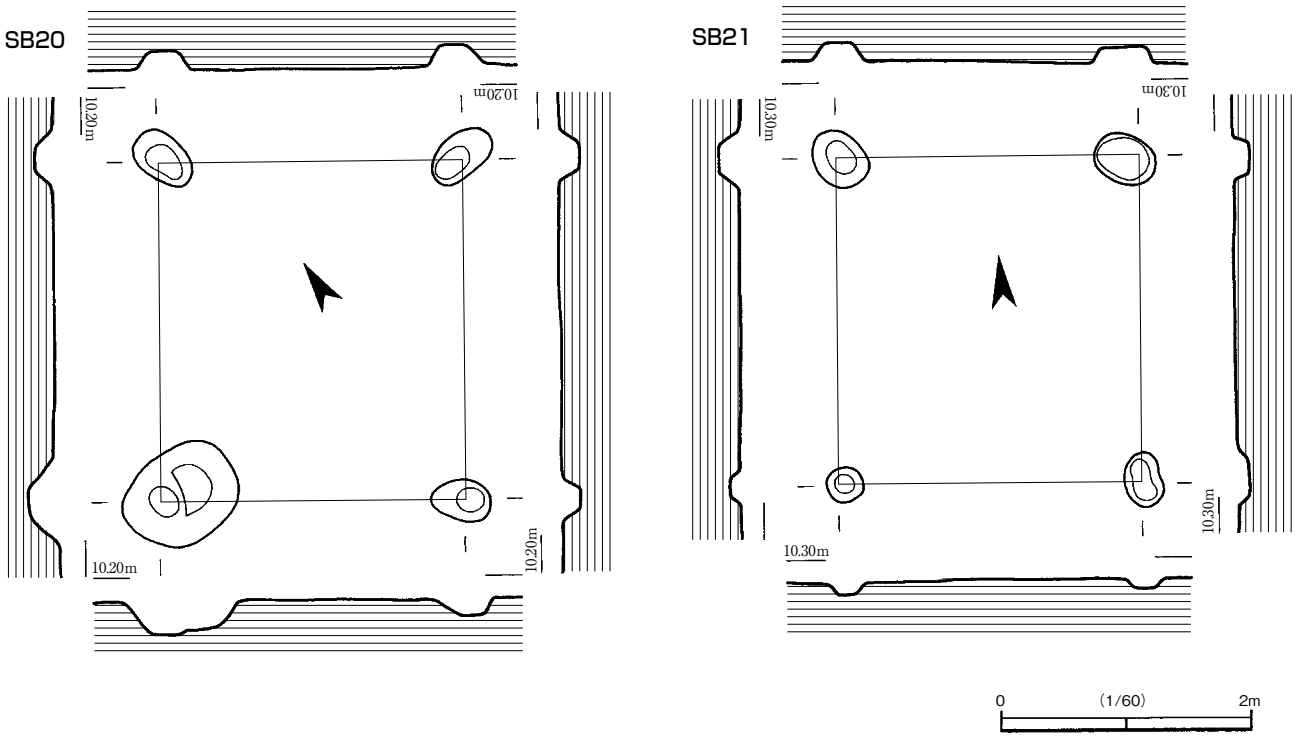


図35　SB20・21　実測図

長さ1.88m、幅0.38～0.50m、深さ0.17～0.23mを測る。弥生中期とみられる弥生土器の甕が出土しているが、検出状況から考え、時期は特定できない。埋土は灰黄褐色粘質土の単層である。

土坑（図39　図版22・23）

第３面で検出された土坑は、20基である。すべてＩ地区から検出され、分布状況はＩ地区全体に広がる。遺物の出土した土坑は少なく、わずかに５基を数えるのみである。平面形が長円形を呈し、皿状に掘り込まれたものが大半を占める。出土遺物には弥生土器が多いが、遺構面全体の検出状況から考え、混入品の可能性が強い。

ＳＫ301（図39　図版22）　Ｉ地区東端部に掘り込まれた平面形が円形を呈する土坑である。規模は、長軸124cm、短軸117cm、深さ50cmを測り、掘り方断面形状は逆台形を呈する。弥生中期とみられる弥生土器の壺の底部（341）が出土した。

ＳＫ320（図39　図版22）　Ｉ地区西端部に位置する皿状に掘り込まれた土坑である。平面形は長円形を呈する。規模は、長軸137cm、短軸65cm、深さ19cmである。弥生土器片が出土した。出土状況から見て流れ込みと考えられる。埋土は黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ322（図39　図版23）　Ｉ地区中央部に位置する不整形な土坑である。北側にテラスを形成する。規模は長軸101cm、短軸83cm、深さ12cm。出土遺物は弥生土器片である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

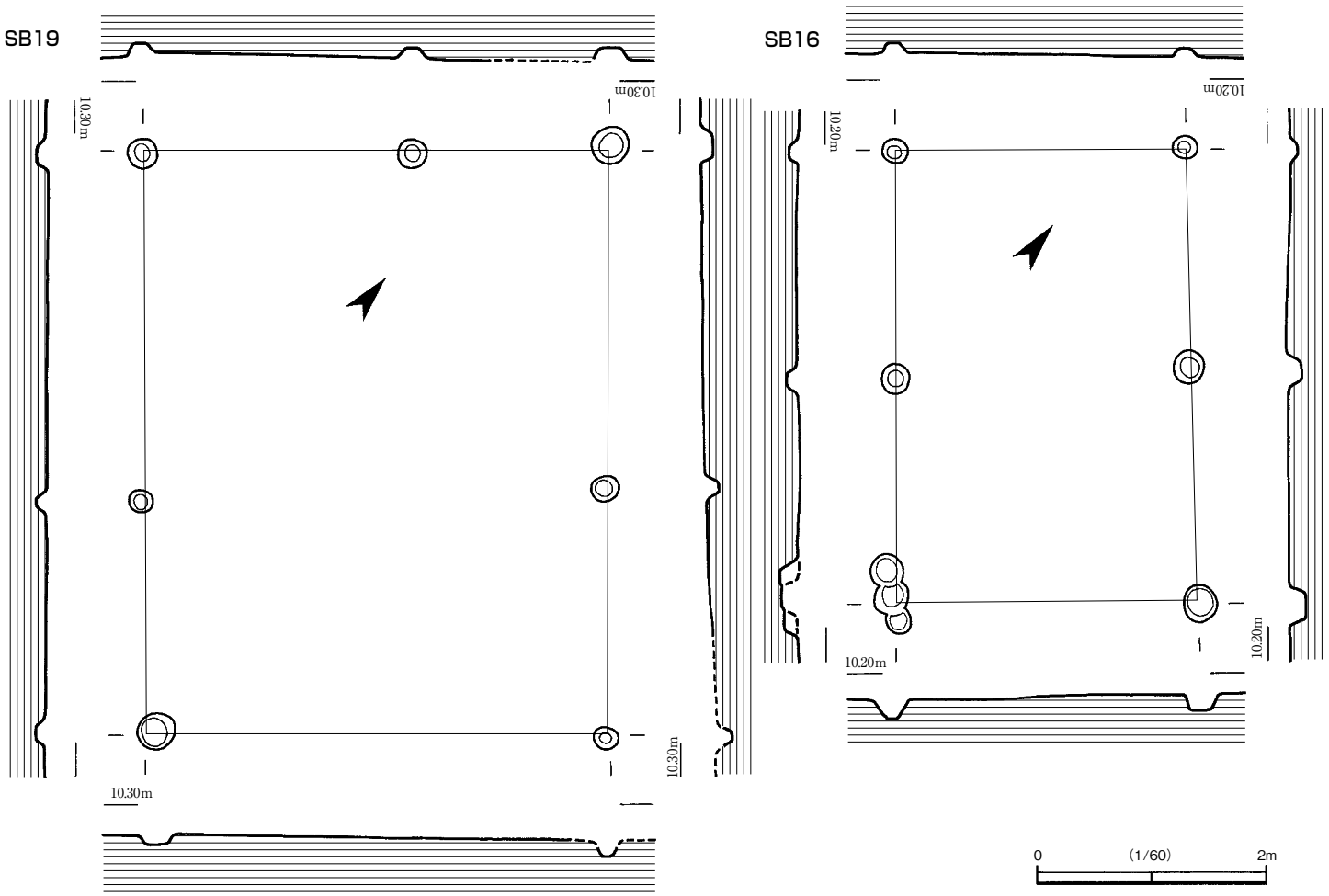


図36　SB19・16　実測図

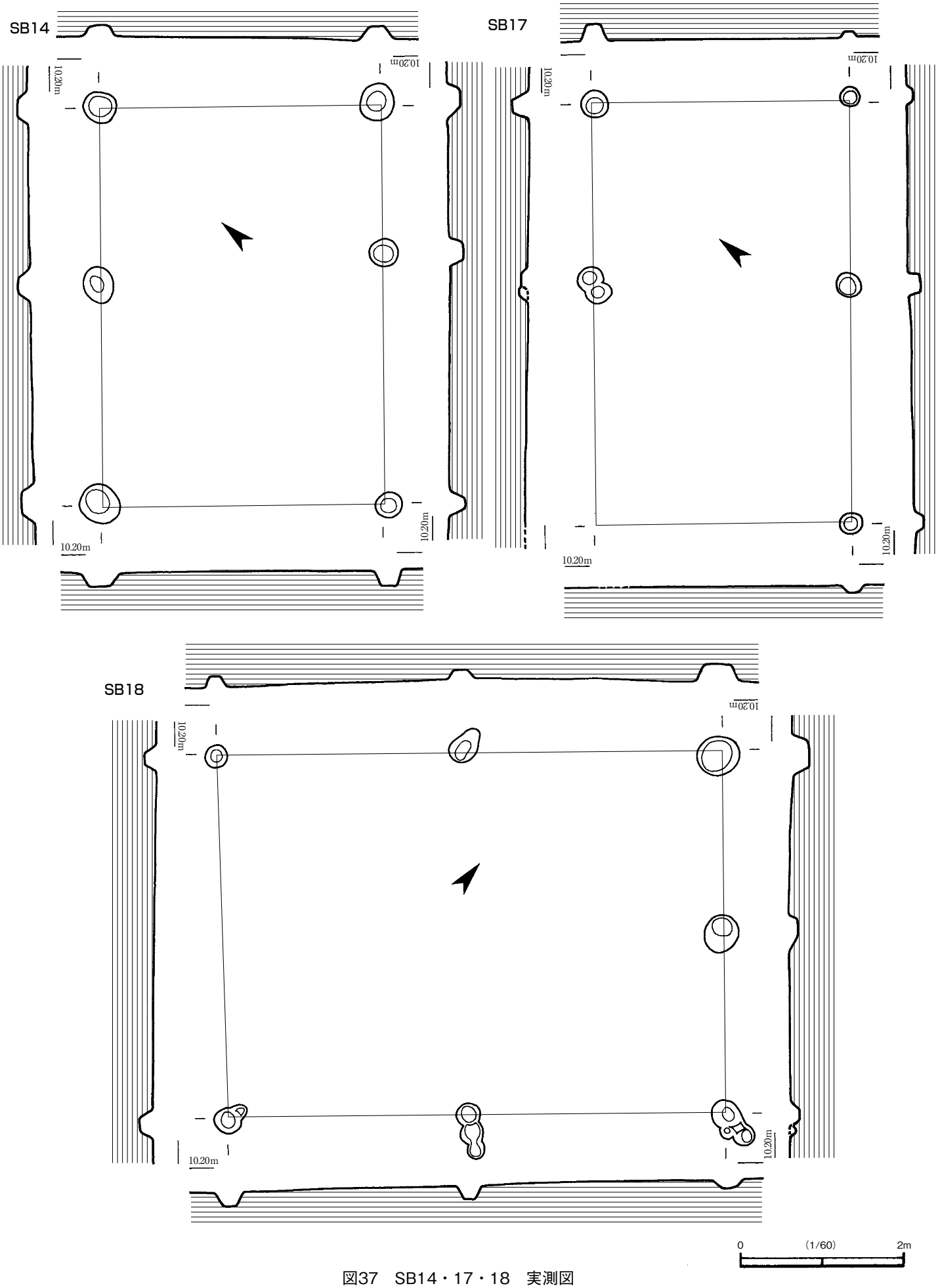


図37　SB14・17・18　実測図

ＳＫ302（図40）　Ｉ地区東端部、ＳＫ301と並んで掘り込まれた不整形な土坑である。南側にテラスを形成し、北側を一段深く掘り下げている。規模は長軸111cm、短軸78cm、深さ22cmである。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

ＳＫ303（図40　図版23）　Ｉ地区東南部調査区境に位置する不整形な土坑である。南側にテラスを形成する。規模は長軸88cm、短軸78cm、深さ26cmである。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ304（図40）　Ｉ地区東側中央部に位置する皿状に掘り込まれた平面形が長円形を呈する土坑である。規模は長軸115cm、短軸75cm、深さ18cm。埋土は黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ305（図40）　Ｉ地区中央部に位置する皿状に掘り込まれた平面形が長円形を呈する土坑である。西半分はＳＢ20を構成する柱穴が重複している。規模は長軸93cm、短軸75cm、深さ23cm。埋土

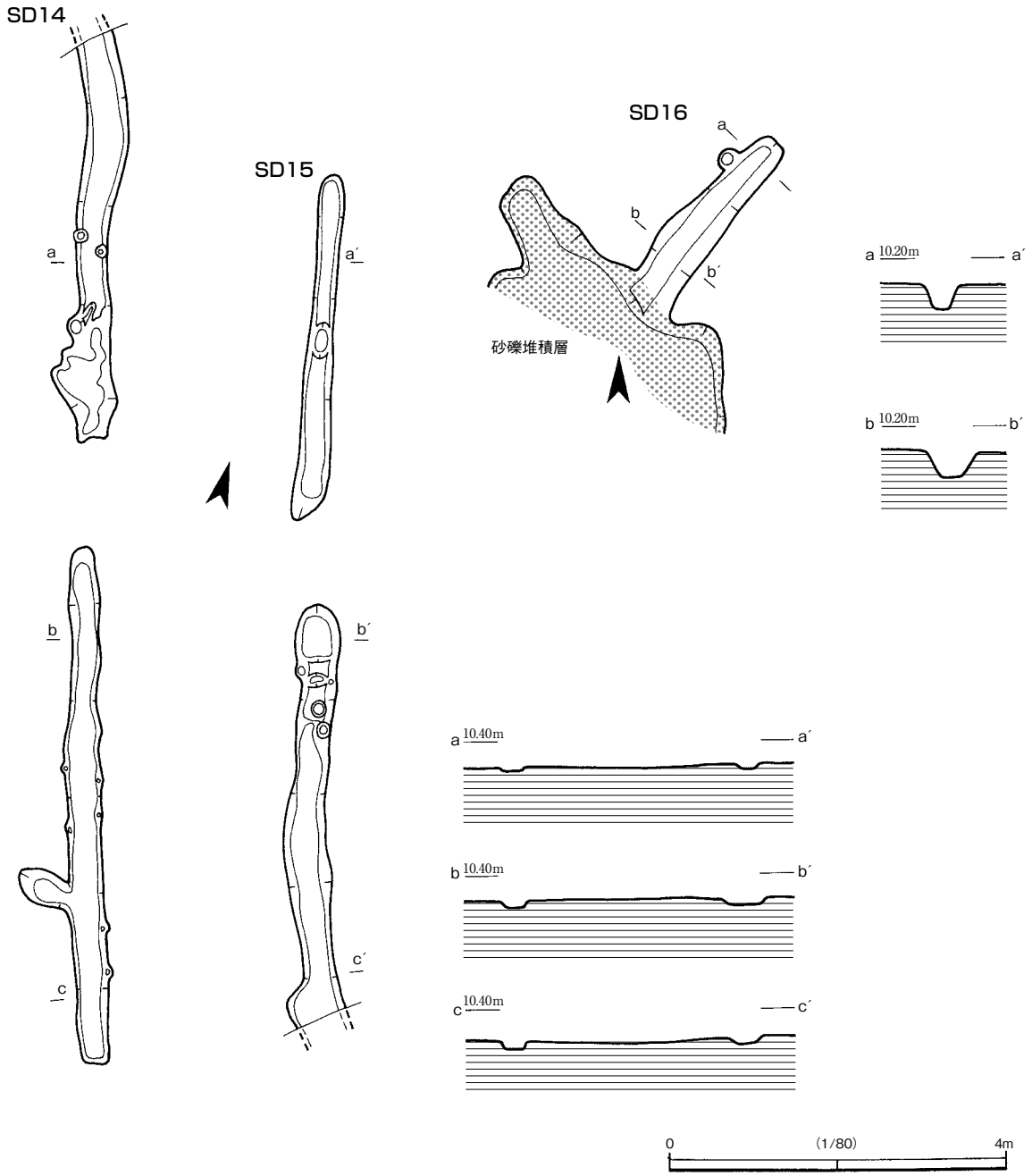


図38　SD14・15・16　実測図

はにぶい黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ306（図40　図版23）　Ｉ地区中央部に位置する平面形が長円形を呈する土坑である。規模は長軸127㎝、短軸82㎝、深さ５㎝と非常に浅い土坑である。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ307（図40　図版23）　Ｉ地区中央部に位置する皿状に掘り込まれた土坑である。平面形は長円形を呈し、西端部は柱穴で切られている。規模は、長軸88㎝、短軸77㎝、深さ15㎝。弥生土器片が出土した。埋土は灰黄褐色のやや粘質細砂単層である。

ＳＫ311（図41　図版23）　Ｉ地区西側中央寄りに位置する平面形が長円形を呈する土坑である。東側が深く掘り込まれ、西半分にテラスを造る。規模は長軸107㎝、短軸70㎝、深さ14㎝。埋土は炭を含む黄褐色のやや粘質細砂単層である。

ＳＫ312（図41　図版23）　Ｉ地区西側中央寄りに位置する平面形が長円形を呈する土坑である。皿状に掘り込まれており、規模は長軸105㎝、短軸70㎝、深さ14㎝。埋土は単層で、灰黄褐色のやや粘質細砂である。

ＳＫ313（図41　図版23）　Ｉ地区西側中央寄りに位置する皿状に掘り込まれた土坑である。平

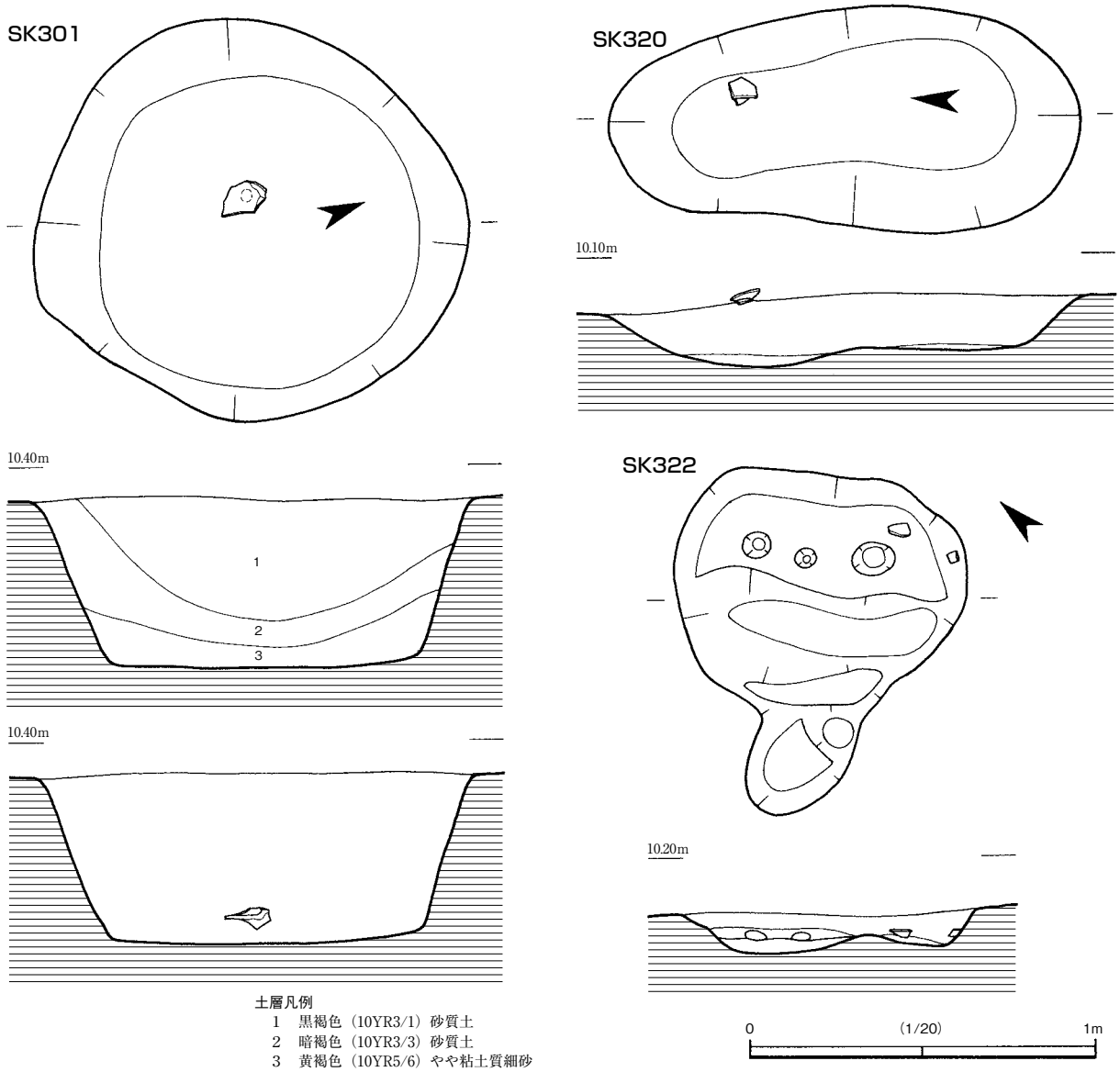


図39　SK301・320・322　実測図

面形は長円形、規模は長軸104㎝、短軸58㎝、深さ15㎝である。埋土は褐灰色砂質土の単層である。埋土中から弥生土器片が出土した。

ＳＫ315（図41） Ｉ地区西側やや中央寄りに位置する皿状に掘り込まれた土坑である。平面形は長円形、規模は長軸120㎝、短軸59㎝、深さ10㎝である。埋土は単層で、褐色のやや粘質細砂である。

ＳＫ318（図41） Ｉ地区北西部に位置する平面形が長円形を呈した土坑である。皿状に掘り込まれており、東側面には柱穴が重複して掘り込まれている。規模は、長軸105㎝、短軸73㎝、深さ12㎝。埋土は単層で、灰黄褐色のやや粘質細砂である。

ＳＫ321（図41） Ｉ地区西端部に位置する土坑である。平面形は長円形を呈し、中央に柱穴が重複して掘り込まれている。規模は、長軸84㎝、短軸55㎝、深さ31㎝。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

柱穴

第３面で検出された柱穴は約560個を数え、復元された掘立柱建物跡は９棟に上る。そのほとんどは、Ｉ地区の西側に集中している。しかし、そのうち遺物の出土したものは、わずか11個を数えるのみである。出土した遺物は、弥生土器片や土師器片があるが、いずれも摩滅が激しく、流れ込んだものと考えられる。

砂礫堆積層

第３面においても調査区の随所に砂礫の堆積層が検出された。これは、河川等の氾濫によって、第２面から第３面の間に流出した砂礫が堆積した痕であるといえる。検出状況や、トレンチ調査の結果からみて、砂礫の流出は調査区全体を各所で分断するように起こったものと考えられる。堆積した砂礫の中からは流れ込みと見られる遺物が多く出土した。Ｉ地区東側に広がる砂礫堆積層３からは、縄文土器の鉢（324）、弥生土器の甕（325～327）、土師器の杯（328）が出土した。また、西側に広がる砂礫堆積層４からは縄文土器の深鉢（329）、弥生土器の壺（330～333）・甕（334）・高杯（335・336）・支脚（337）・器台（338）、打製石斧（353）、敲石（355）、紡錘車（357）が出土した。

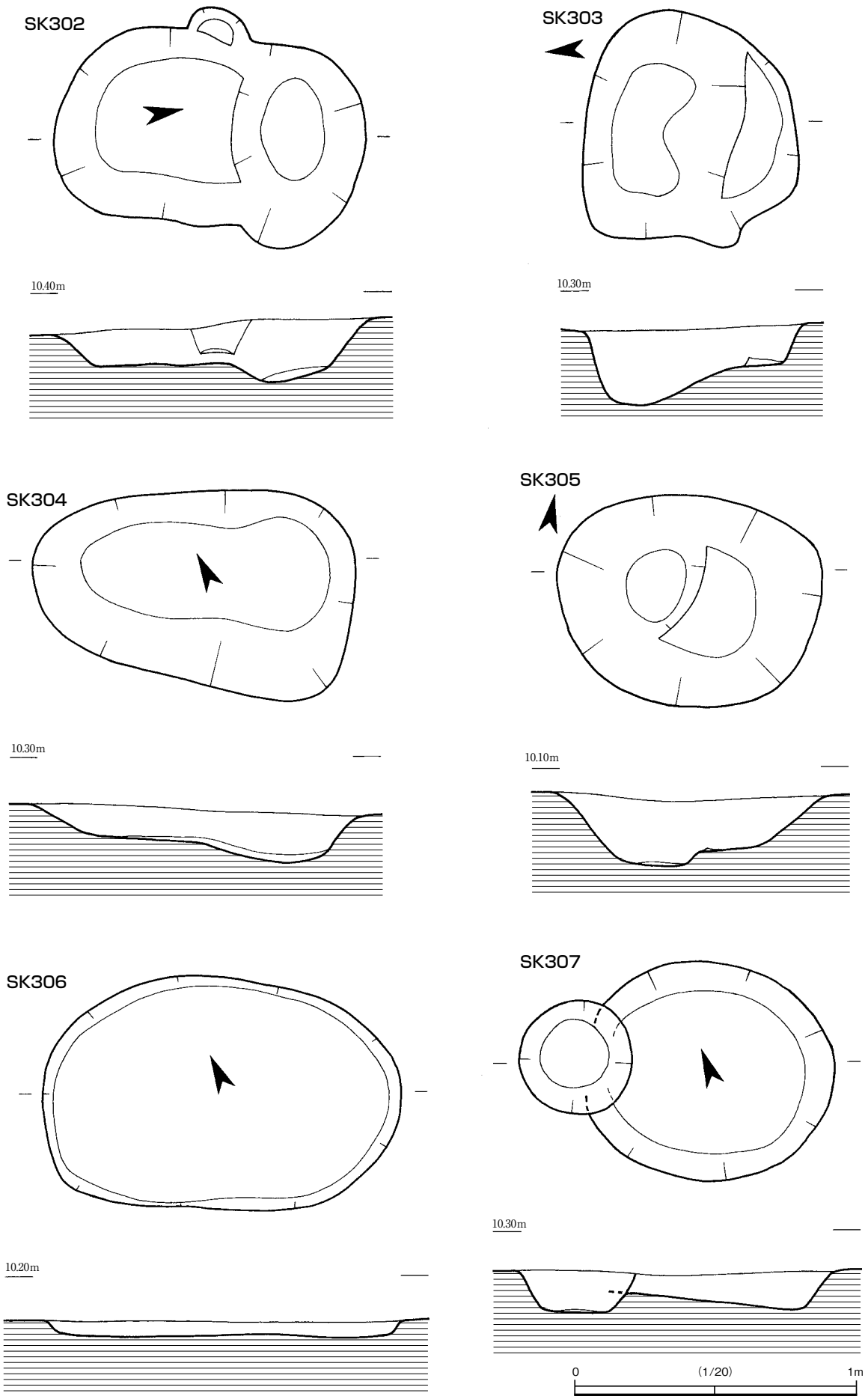


図40　SK302・303・304・305・306・307　実測図

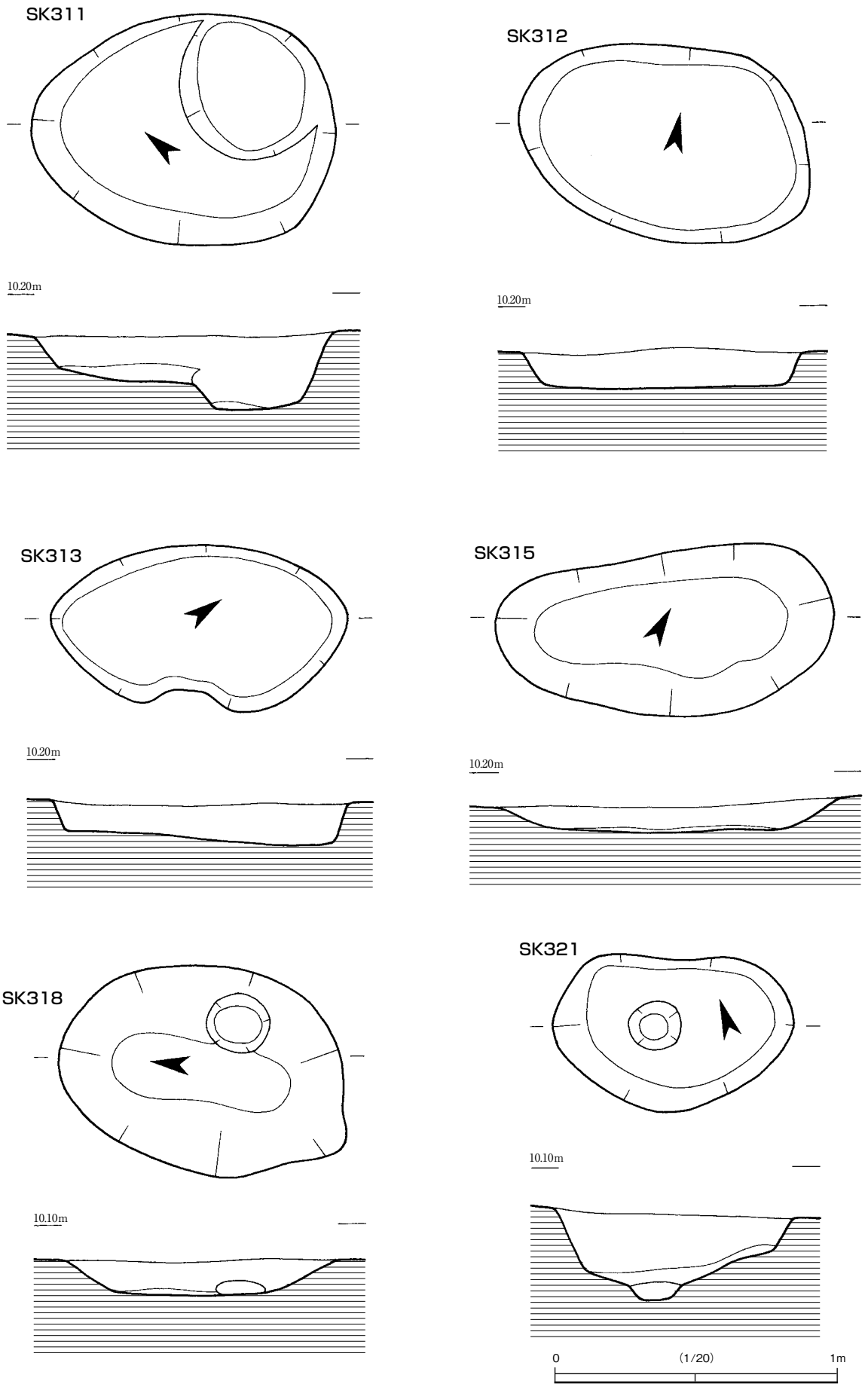


図41　SK311・312・313・315・318・321　実測図

表１　掘立柱建物跡一覧

遺構番号	面	地区	規模（間）	棟方向	柱間 桁行 建物の南東隅から（m）	柱間 梁行 建物の南東隅から（m）	面積（㎡）	出土遺物	時期
SB１	1	1	2×2	N48° E	4.14（2.00・2.14）	3.60（1.70・1.90）	14.90	土師器、白磁	12ｃ末～13ｃ前
SB２	1	1	3×2	N46° E	6.24（2.00・2.16・2.08）	3.80（1.90・1.90）	23.71	土師器、須恵器	12ｃ末～13ｃ前
SB３	1	1	3×1	N49° E	6.30（2.10・1.90・2.30）南西隅	4.16 南西隅	26.21	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SB４	1	1	1以上×2	N44° E	2.50以上	4.40（2.20・2.20）		土師器	12ｃ末～13ｃ前
SB５	1	1	3×1以上	N44° E	6.71（2.21・2.30・2.20）	1.80以上 北東隅		土師器	12ｃ末～13ｃ前
SB６	1	1	5×1以上	N48° E	10.60（2.14・2.06・2.20・2.10・2.10）	1.80以上		土師器、白磁、須恵器	12ｃ末～13ｃ前
SB７	1	2	2×2	N46° W	6.10（3.10・3.00）	4.80（2.30・2.50）北西隅	29.28	土師器、白磁、鞴羽口	12ｃ末～13ｃ前
SB８	1	2	3×2	N48° W	6.30（2.10・2.10・2.10）	4.10（2.20・1.90）	25.83	土師器、白磁	12ｃ末～13ｃ前
SB９	2	1	2×2	N43° E	4.18（2.00・2.18）	3.86（1.90・1.96）	16.13	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SB10	2	1	4×2	N44° E	8.30（2.10・1.90・2.00・2.30）	4.70（2.20・2.50）	39.01	なし	12ｃ末～13ｃ前
SB11	2	1	1以上×2	N46° W	2.20以上	3.50（1.70・1.80）		土師器	12ｃ末～13ｃ前
SB12	2	1	1以上×2	N45° W	2.20以上	4.50（2.30・2.20）	9.90	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SB13	3	1	1×1	N7° W	3.20	2.40	7.68	なし	12ｃ後半以前か
SB14	3	1	2×1	N47° E	4.80（3.00・1.80）	3.50	16.80	なし	12ｃ後半以前か
SB15	3	1	1×1	N25° W	3.20	3.06	9.79	なし	12ｃ後半以前か
SB16	3	1	2×1	N40° W	3.90（2.00・1.90）	2.60	10.14	なし	12ｃ後半以前か
SB17	3	1	2×1	N48° E	5.10（2.86・2.24）	3.10 北東隅	15.81	なし	12ｃ後半以前か
SB18	3	1	2×2	N49° E	6.00（2.90・3.10）	4.40（2.20・2.20）北東隅	26.40	なし	12ｃ後半以前か
SB19	3	1	2×2	N41° W	5.00（2.10・2.90）	4.00（1.70・2.30）北東隅	20.00	なし	12ｃ後半以前か
SB20	3	1	1×1	N34° E	2.70	2.40	6.48	なし	12ｃ後半以前か
SB21	3	1	1×1	N6° E	2.60	2.40	6.24	なし	12ｃ後半以前か

表２　溝状遺構一覧

遺構番号	面	地区	規模（m） 幅	規模（m） 長さ	規模（m） 深さ	出土遺物	時期
SD１	2	1	0.53～1.13	4.00	0.02～0.13	なし	12ｃ末～13ｃ前
SD２	2	1	0.45～0.88	12.50	0.03～0.11	弥生土器	12ｃ末～13ｃ前
SD３	2	1	0.25～0.81	21.88	0.03～0.09	なし	12ｃ末～13ｃ前
SD４	2	1	0.23～0.31	3.13	0.07～0.12	なし	12ｃ末～13ｃ前
SD５	2	1	0.40～0.96	20.63	0.08～0.16	弥生土器	12ｃ末～13ｃ前
SD６	2	1	0.21～0.50	10.50	0.08～0.16	弥生土器	12ｃ末～13ｃ前
SD７	1	1	0.48～0.96	6.63	0.02～0.07	なし	12ｃ末～13ｃ前
SD８	1	1	0.56～1.76	16.50	0.07～0.40	なし	12ｃ末～13ｃ前
SD９－Ⅰ	1	1	1.28～1.76	16.80	0.21～0.48	弥生土器、土師器、瓦質土器、白磁	12ｃ末～13ｃ前
SD９－Ⅱ	2	1	2.48～3.12	16.80	0.46～0.68	弥生土器、土師器、白磁、白磁	12ｃ末～13ｃ前
SD９－Ⅲ	2	1	2.72～3.76	16.80	0.64～0.88	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SD10	1	2	0.88～3.28	5.00	0.18～0.26	弥生土器、土師器	12ｃ末～13ｃ前
SD11	2	1	0.75～2.63	26.25	0.09～0.60	弥生土器、土師器	12ｃ末～13ｃ前
SD12	2	1	0.50～1.38	18.75	0.15～0.59	弥生土器、土師器	12ｃ末～13ｃ前
SD13	2	1	0.31～0.38	4.50	0.05～0.10	なし	12ｃ末～13ｃ前
SD14	3	1	0.25～0.75	12.38	0.04～0.13	なし	12ｃ後半以前か
SD15	3	1	0.25～0.63	10.13	0.07～0.14	なし	12ｃ後半以前か
SD16	3	1	0.38～0.50	1.88	0.17～0.23	弥生土器	12ｃ後半以前か

表３　土坑一覧

遺構番号	面	地区	平面形	規　模(cm)			出 土 遺 物	時　代
				長軸	短軸	深さ		
SK５	1	1	長円形	180	145	18	土師器、弥生土器	12ｃ末～13ｃ前
SK６	1	1	長円形	116	98	28	土師器、鉄鏃	12ｃ末～13ｃ前
SK９	1	1	長円形	175	81	11	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK10	1	1	円形	85	74	50	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK12	1	1	長円形	247	86	20	土師器、須恵器、刀子	12ｃ末～13ｃ前
SK13	1	1	長円形	115	90	6	土師器、須恵器	12ｃ末～13ｃ前
SK14	1	1	長円形	240	152	36	土師器、馬具(轡)	12ｃ末～13ｃ前
SK16	1	1	不整形	122	88	25	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK17	1	1	長円形	210	164	35	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK19	1	1	不整形	101	55	42	土師器、白磁	12ｃ末～13ｃ前
SK20	1	1	長円形	187	52	12	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK23	1	1	長円形	69	42	11	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK24	1	1	円形	92	82	25	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK25	1	1	長円形	93	54	49	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK29	1	1	長円形	80	50	10	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK30	1	2	円形	86	84	17	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK31	1	2	長円形	134	68	21	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK32	1	2	長円形	155	80	13	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK33	1	2	長円形	73	38	10	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK201	2	1	長円形	144	62	11	土師器	12ｃ末～13ｃ前
SK202	2	1	不整形	65	94	5	なし	12ｃ末～13ｃ前
SK203	2	1	長円形	86	73	7	なし	12ｃ末～13ｃ前
SK204	2	1	不整形	76	48	33	なし	12ｃ末～13ｃ前
SK205	2	1	円形	85	78	11	なし	12ｃ末～13ｃ前
SK301	3	1	円形	124	117	50	弥生土器	12ｃ後半以前か
SK302	3	1	不整形	111	78	22	なし	12ｃ後半以前か
SK303	3	1	不整形	88	78	26	なし	12ｃ後半以前か
SK304	3	1	長円形	115	75	18	なし	12ｃ後半以前か
SK305	3	1	長円形	93	75	23	なし	12ｃ後半以前か
SK306	3	1	長円形	127	82	5	なし	12ｃ後半以前か
SK307	3	1	長円形	88	77	15	弥生土器	12ｃ後半以前か
SK308	3	1	長円形	110	81	20	なし	12ｃ後半以前か
SK309	3	1	長円形	96	73	21	なし	12ｃ後半以前か
SK310	3	1	不整形	108	80	15	なし	12ｃ後半以前か
SK311	3	1	長円形	107	83	25	なし	12ｃ後半以前か
SK312	3	1	長円形	105	70	14	なし	12ｃ後半以前か
SK313	3	1	長円形	104	58	15	弥生土器	12ｃ後半以前か
SK314	3	1	不整形	134	110	21	なし	12ｃ後半以前か
SK315	3	1	長円形	120	59	10	なし	12ｃ後半以前か
SK318	3	1	長円形	105	73	12	なし	12ｃ後半以前か
SK319	3	1	不整形	81	51	21	なし	12ｃ後半以前か
SK320	3	1	長円形	137	65	19	弥生土器	12ｃ後半以前か
SK321	3	1	長円形	84	55	31	なし	12ｃ後半以前か
SK322	3	1	不整形	101	83	12	弥生土器	12ｃ後半以前か

２　遺物

今回の調査では、第１・２面の溝状遺構や土坑・柱穴から多くの椀・杯・皿等の土師器が出土した。遺構からの出土遺物では、青磁・白磁が次に多く、瓦質土器や須恵器はほとんど検出されなかった。また、上流からの流れ込みと考えられる４つの砂礫堆積層からは、多くの弥生土器に混じって縄文土器も検出された。以下、出土遺物の概要を述べる。土師器の杯・皿については、体部が若干内湾し器壁の厚めのものが主流であるので、例外的な器形をもつ個体について説明を加える。なお、遺物個々の法量や特徴等については別表にて掲載する。

（１）　第１面出土土器

溝状遺構（図42　図版24）

ＳＤ９－Ⅰ

１～９は土師器の皿である。口径が7.2～9.8cmで、ほとんどの個体が橙色を呈する。内外面とも回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。１・２・５・７は体部が直線的に、６はやや外反気味に立ち上がる。７の口縁端部は尖り、８は丸みを帯びる。９は、本遺跡出土の土師器皿の中で最大級の、口径9.8cm（復元値）を測る。10・11は土師器の杯である。体部の中央で張り出し、内外面とも回転ナデ調整。底部には回転糸切り痕が見られる。12は瓦質土器の鍋である。内外面ともナデ調整。口縁部は外側に屈曲する。本遺跡から出土した数少ない瓦質土器の一つである。13は白磁の椀である。残存部全面に施釉。口縁部は肥厚し外側に折り返す。14は弥生土器の支脚である。ハケ後ナデ調整。２本の角状突起がある。弥生時代後期のものと思われる。

ＳＤ10

15は土師器の皿、16～19は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が認められる。18は体部が直線的に立ち上がり、19はやや外反気味である。

土坑（図43・44　図版24・25）

ＳＫ17

20～27は土師器の皿である。口径7.6～8.4cmで、橙色及び灰白色を呈する。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。22は器壁が薄く、23は厚い。26は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が丸みを帯びる。28～31は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。29は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が丸みを帯びる。

ＳＫ14

32～35は土師器の皿である。口径7.8～8.2cmで、内外面ともに回転ナデ調整。底部には回転糸切り痕が見られる。33は体部が直線的に立ち上がる。

ＳＫ５

36は土師器の皿である。口径は8.2cmで、本遺跡出土の土師皿の平均的な値である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。37は弥生土器の支脚である。内面はナデ調整で、くびれ部に絞り痕がある。外面はハケ調整。弥生時代後期のものと思われる。

ＳＫ19

38～40は土師器の皿である。口径7.4～8.4cmで、橙色及び灰白色を呈する。内外面ともに回転ナデ

調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。39は口縁端部が丸みを帯びる。41は土師器の椀である。口径16.2cm、器高5.4cmを測り、出土した椀の中では大振りな個体である。内外面ともに回転ナデ調整で、断面三角形の貼付け高台が付く。口縁部は若干外反する。42は白磁の椀である。外面下方から高台にかけて露胎。底径6.7cm、高さ0.6cmの削り出し高台。43は土師器のミニチュア甕である。手捏ねによって整形されている。口縁部は肥厚して若干外側に向かう。古墳時代のものであると思われる。

ＳＫ20

44～48は土師器の皿である。口径7.8～8.4cmで、おおむね平均値に近い。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。44は体部が直線的に立ち上がる。

その他の土坑

49～51は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。49は体部が直線的に立ち上がる。52・53は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。52は体部が直線的に立ち上がる。

柱穴（図45・46　図版26）

ＳＰ119

54～56は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。56は器壁が厚く、口縁端部が丸みを帯びる。57～60は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。57は口径7.9cm、底径4.4cmと小さい。体部は大きく内湾して立ち上がり口縁端は若干外反する。他の杯とは大きく違う器形である。

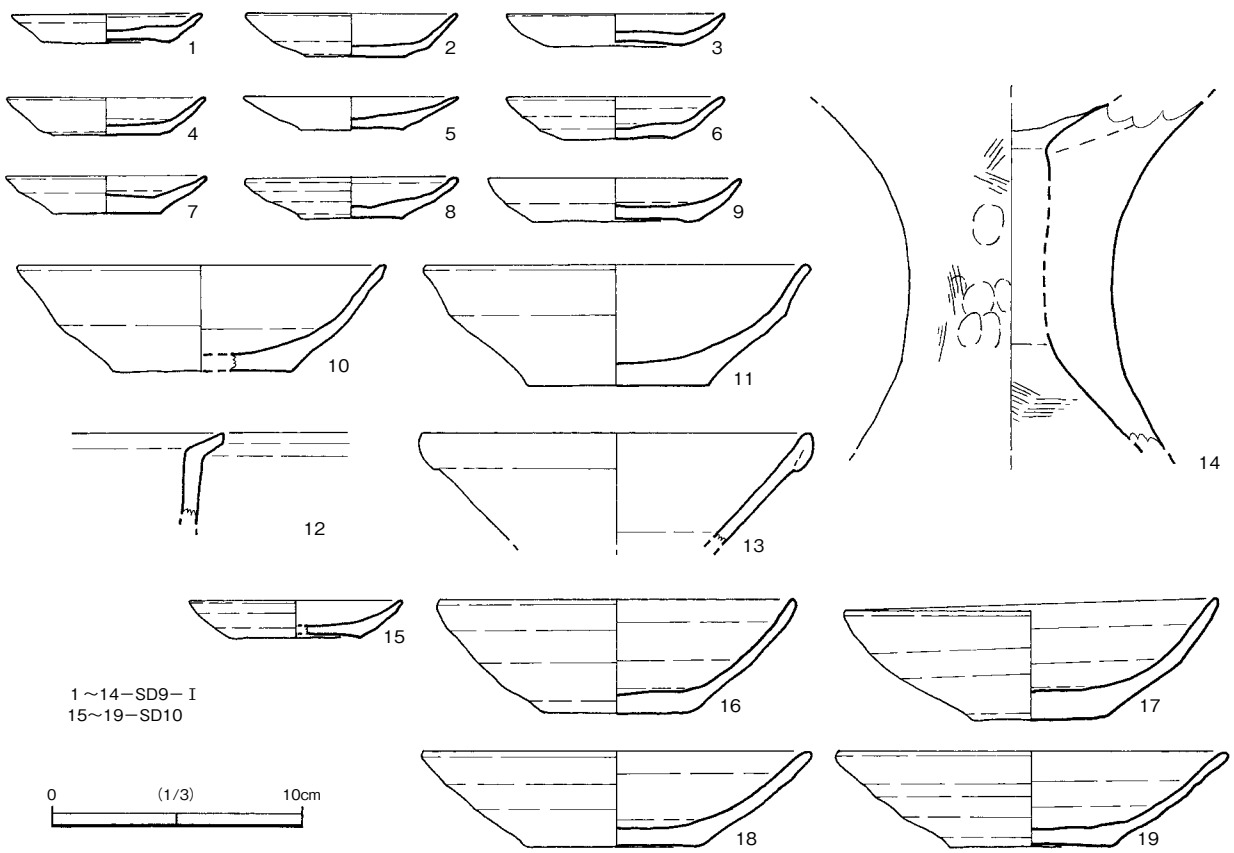


図42　第１面　溝状遺構出土土器実測図

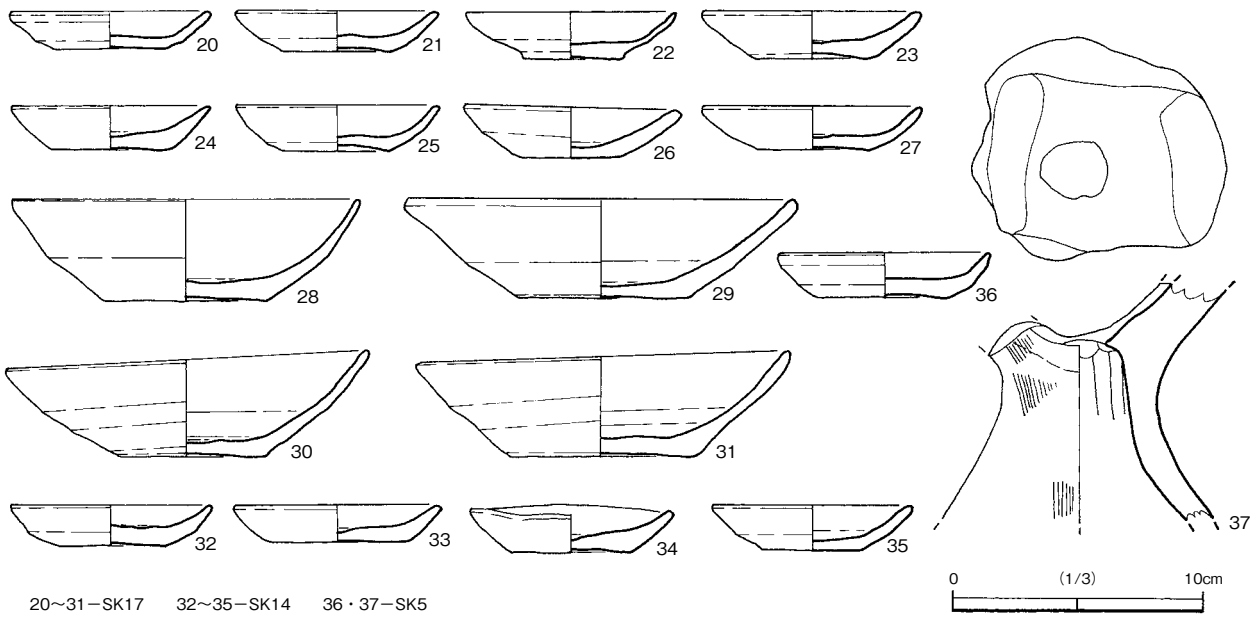


図43　第１面　土坑出土土器実測図（１）

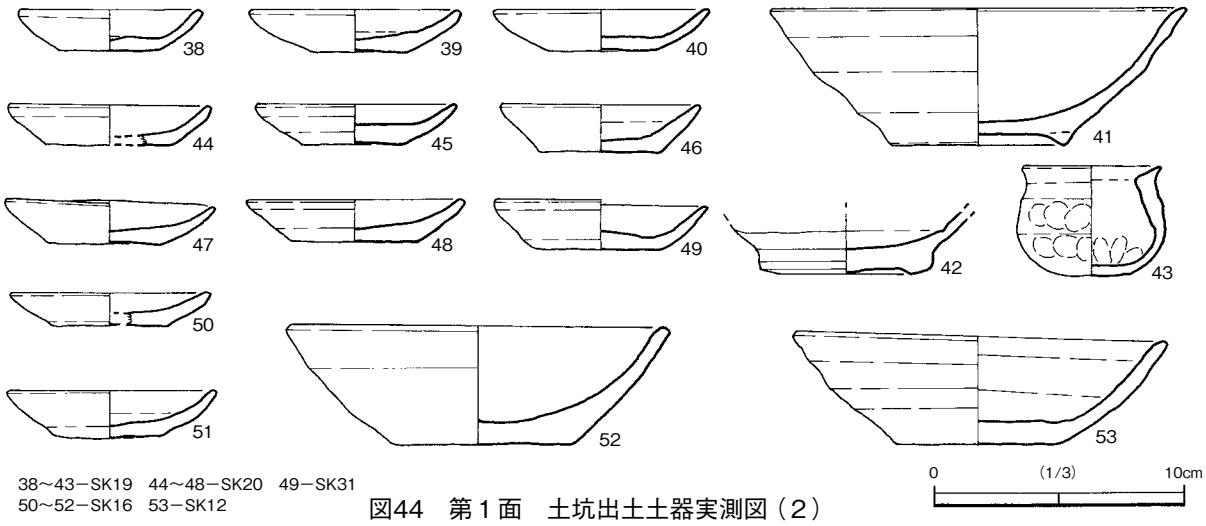


図44　第１面　土坑出土土器実測図（２）

ＳＰ190

61は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には右回転糸切り痕が見られる。口径11.6cm、器高3.6cmを測り、本遺跡出土の一般的な器形の杯の中では、最も小さい個体である。62は青磁の皿である。残存部全面に施釉がされ、内面見込み部と外面体部に櫛描文が見られる。

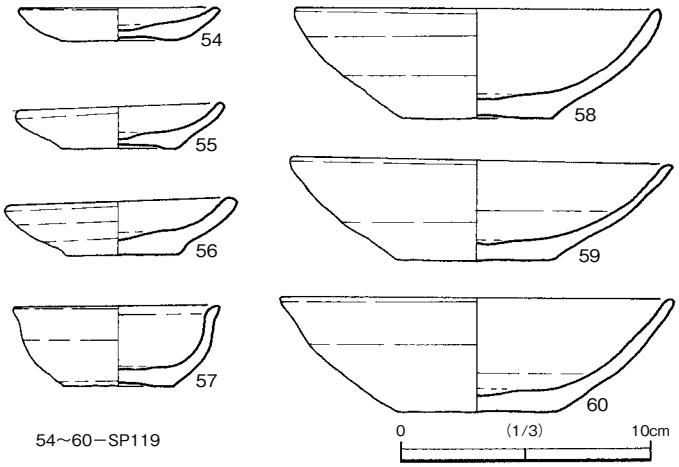


図45　第１面　柱穴出土土器実測図（１）

その他の柱穴

63は土師器の柱状高台皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には右回転糸切り痕が見られる。口径10.0cm、器高5.6cmを測る。皿部は浅く、若干外反する。高台部は寸胴で、中実である。64は弥生土器の複合口縁壺である。口縁屈曲部外面に刺突文の痕跡が認められる。65～68は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。67は左回転の底部糸切り痕が確認される。68は底径が6.6cmで、本遺跡出土土師皿の中で最大である。69は土師器の椀である。内外面とも回転ナデ調整で、貼付け高台が付く。70～77は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。76は体部が直線的に立ち上がる。78は鞴の羽口である。端部は被熱し、ガラス質成分が付着する。

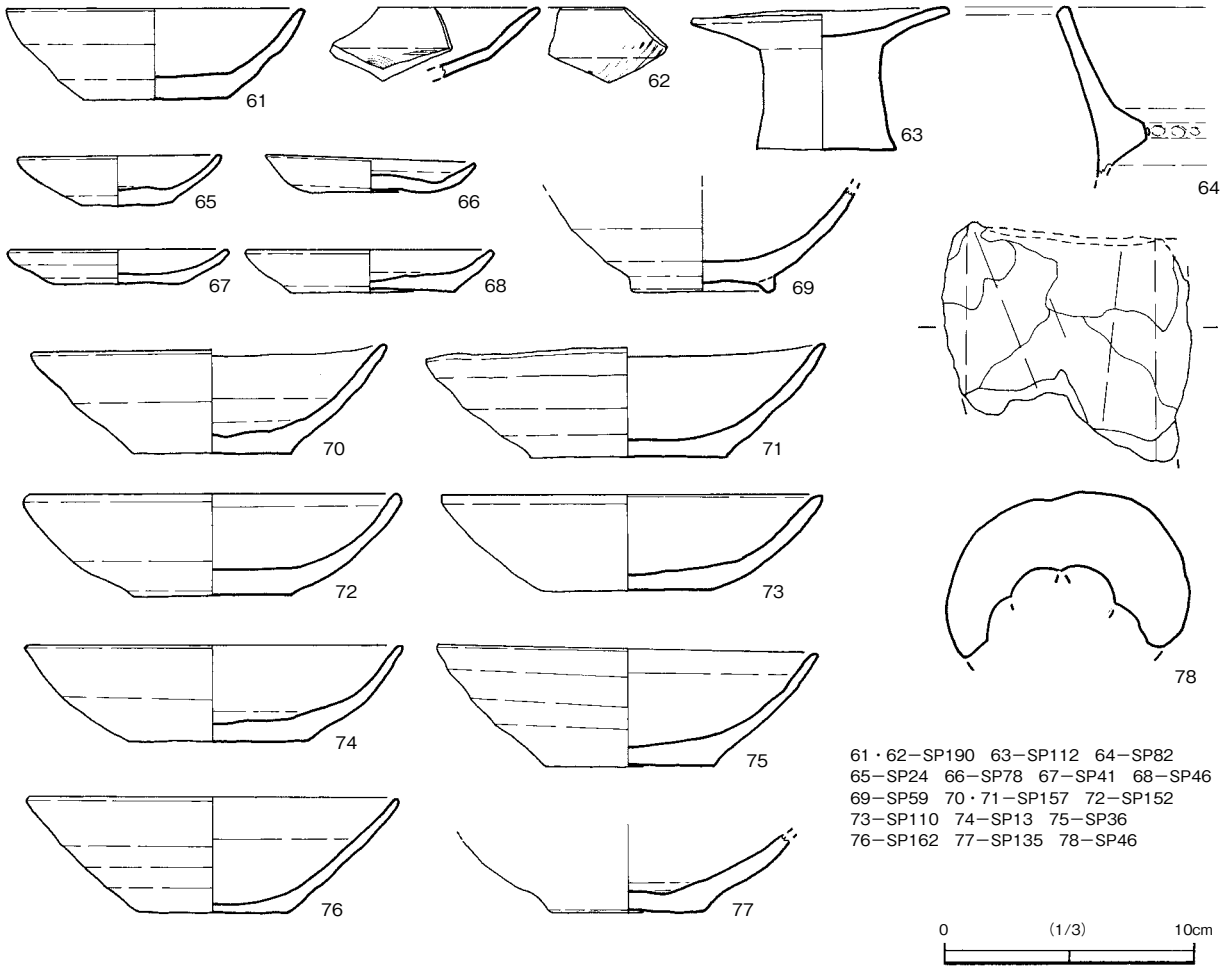


図46　第１面　柱穴出土土器実測図（２）

不明遺構（図47　図版27）

ＳＸ１

79は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。口径は7.8cmと若干小さめであるのに対して、器高は2.0cmと高く立ち上がっている。80は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が見られる。

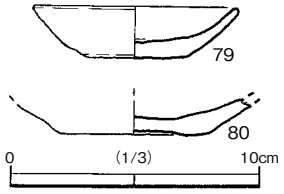


図47　SX1出土土器実測図

遺物包含層（図48　図版27）

81～88は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には右回転糸切り痕が見られる。口径8.0～8.5㎝、器高1.6～1.8㎝で、本遺跡出土土師器皿のほぼ平均的な大きさである。83・84・85は体部が直線的に立ち上がる。89・90は白磁、91・92は青磁の椀である。89は高さ0.8㎝の削り出し高台で、高台裏の削り込みが浅い。90は削り出し高台で、外底面に「二」の墨書が認められる。見込み部に蛇の目釉剥ぎが施される。91も削り出し高台。92は口縁部片で、外面に鎬蓮弁文が認められる。93は須恵質のこね鉢口縁部である。94は土師器の壺である。胴部内面にヘラケズリ調整を施す。複合口縁で、立ち上がり部は外に開く。古墳時代初頭のものと考えられる。

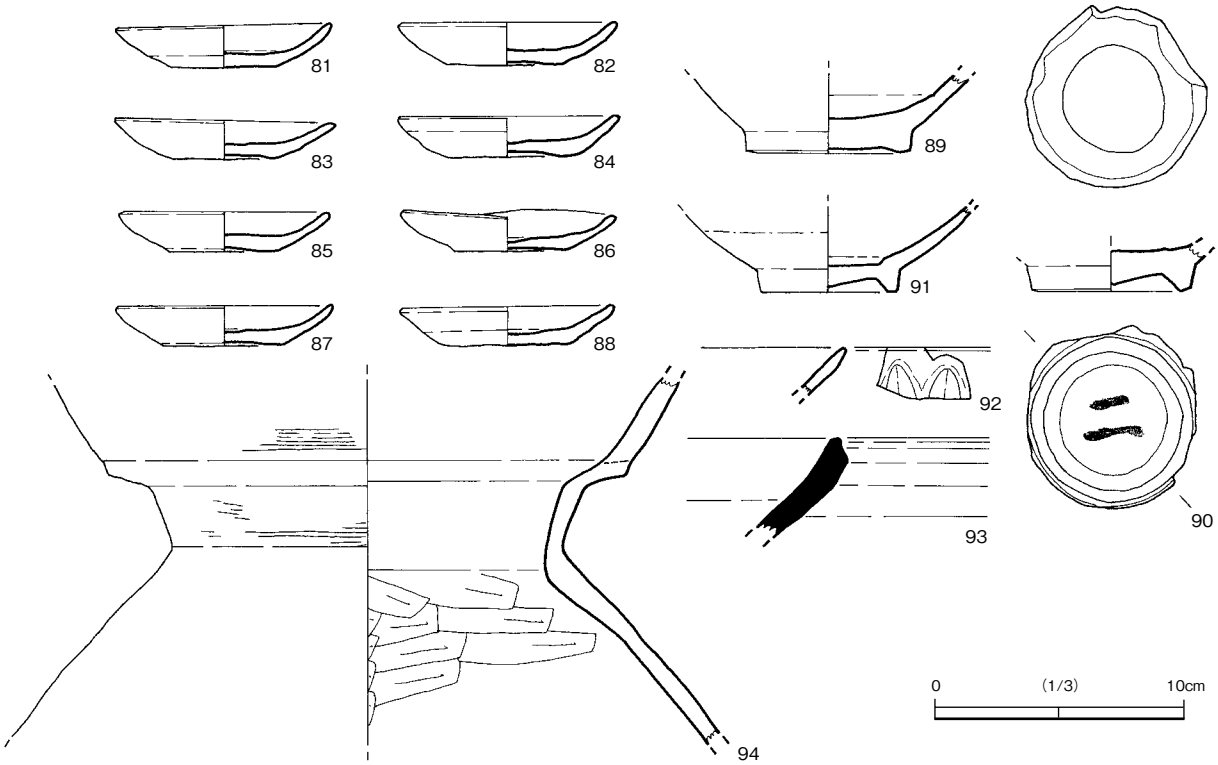


図48　第１面　遺物包含層出土土器実測図

下層確認トレンチ（図49　図版27）

95～99は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には右回転糸切り痕が見られる。95は口縁端が尖り、96は体部が直線的に立ち上がる。100～103は土師器の杯である。回転ナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕が認められる。橙色系の色調を呈する。104は青磁の皿である。内外面ともに釉が施され、見込み部に櫛描文が確認される。105は白磁の椀である。残存部の内外面ともに釉が施される。106は瓦質土器の足鍋である。内外面ともにハケ後ナデ調整を施す。底部にタタキ痕が認められる。本遺跡出土の数少ない瓦質土器の一つである。107～110は弥生土器である。107は甕の口縁片である。外面口縁下に６条のヘラ描沈線文、３～４条間及び６条下に刺突文が巡る。弥生時代前期のものである。108は大型の壺である。外面はハケ、内面はナデによる調整が確認される。頸部に粘土帯が貼り付けられ、刻目が巡る。弥生時代終末期のものであろう。109は高杯である。裾部に径１㎝の透孔が一つ、外面に指頭圧痕が確認される。110の裾部に接合痕が確認される。110は蓋の可能性も考えられるが、高杯であろう。２点とも弥生時代終末期のものであると考えられる。

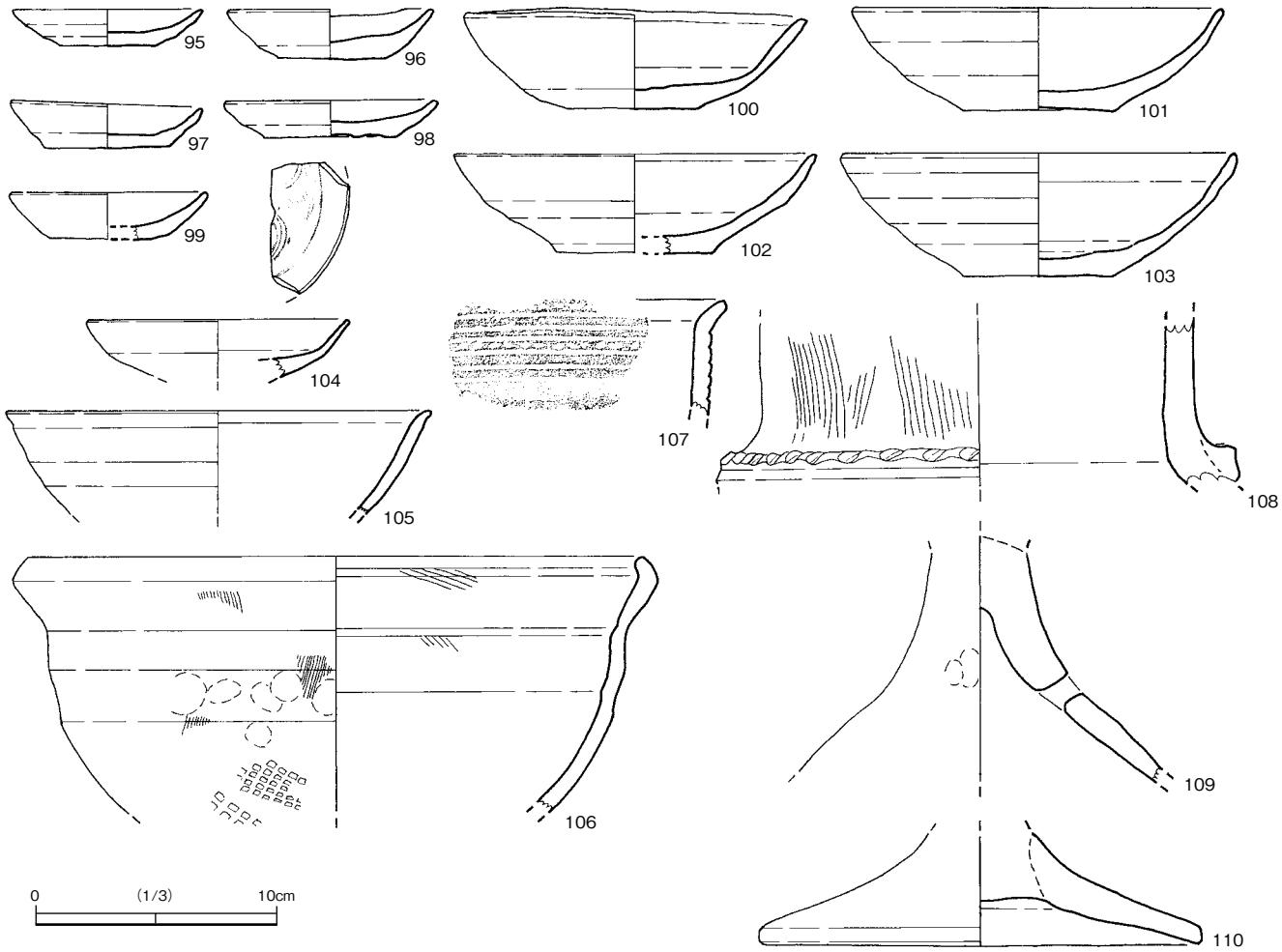


図49　第１面　下層確認トレンチ出土土器実測図

（２） 第２面出土土器

溝状遺構（図50～53　図版28～32）

ＳＤ９－Ⅱ

111～199は土師器の皿である。口径7.4～9.4cm（平均8.3cm）、底径3.6～6.0cm（平均4.6cm）、器高1.4～2.4cm（平均1.8cm）を測る。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が確認される。112・114・115・128・130・171・177・179・186・188・195は体部が直線的に立ち上がる。113・143・171・183は口縁端部が丸みを帯び、160・165・177は尖る。113は底径3.6cmを測り、出土した土師器皿中最小である。また、器高は2.4cmで、最も高い。159は底部中央に焼成後にあけたとみられる、径0.4cmの穿孔をもつ。163は左回転の底部回転糸切り痕が確認される。

200～234は土師器の杯である。口径13.0～16.8cm（平均14.5cm）、底径5.4～8.4cm（平均6.4cm）、器高3.6～5.2cm（平均4.3cm）を測る。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が確認される。207は体部がやや外反気味に立ち上がり、211・213・214・215・233は直線的に立ち上がる。201・214は口縁端部が丸みを帯び、233は尖る。201は器壁が厚く、230は薄い。206は底部が厚い。222は器高が3.6cmで、出土した土師器杯中最も小さい。223は底径が8.4cmを測り、出土した土師器杯中最も大きく、229は口径が16.8cmを測り、最も大きい。

235～247は土師器の椀である。口径14.4～16.8cm（平均15.5cm）、底径4.8～7.0cm（平均5.6cm）、器高4.4～6.1cm（平均5.2cm）を測る。内外面ともに回転ナデ調整で、断面台形や三角形に近い台形の低い貼付け高台をもつ。235は口径が14.4cmと出土した土師器椀中最小で、底径は7.0cmと最大値を測る。逆に246は口径が16.8cmと出土した土師器椀中最大で、底径は4.8cmと最小値を測る。237は器高6.1cmを測り、出土した土師器椀中最大である。

248は土師器の柱状高台皿である。高台部は底径6.2cmを測り、高さ1.8cmの貼付け高台で、中実である。249は土師質土器の鍋である。内外面ともにナデ調整で外面胴部に指頭圧痕を確認する。口縁部は屈曲して外反し、胴上部がやや張る。250・252～254は白磁の椀、251は皿である。250は内外面ともに釉が施され、高台部は露胎である。底径5.6cm、高さ1.2cmの削り出し高台をもつ。251は内外面ともに釉が施され、底部は碁笥底で露胎である。口縁端部は薄く、外へ折れ曲がる。252は内外面ともに釉が施され、高台部は露胎である。底径5.6cmの削り出し高台をもち、高台裏の削り出しは甘い。253は椀片と考えられる。残存部内外面ともに釉が施され、内面に櫛描文が確認される。254は残存部内外面ともに釉が施され、玉縁状の口縁をもつ。255は弥生土器の器台である。内面裾部に指頭圧痕が確認される。弥生時代後期のものと考えられる。

ＳＤ９－Ⅲ

256は土師器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が確認される。体部は直線的に立ち上がる。底径3.6cmで、出土した土師器皿中最小値を測る個体である。257は土師器の柱状高台皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が確認される。高台部は底径3.7cmを測り、高さ0.7cmの貼付け高台で、中実である。258は土師器の高杯脚部である。内面をケズリで調整している。

ＳＤ11

259～261は弥生土器の甕である。259は口縁片で、明赤褐色を呈し、外面口縁下に５条の沈線が刻まれている。弥生時代前期末のものと考えられる。260は口縁片で、橙色を呈し、外面口縁下に４条の沈線が刻まれている。弥生時代前期末のものと考えられる。261は口縁片でにぶい橙色を呈し、口縁端部に刻目が巡る。弥生時代前期末のものと考えられる。262は壺ないし甕の底部で、にぶい橙色を呈する。263は壺の底部で、にぶい黄橙色を呈し、外面にミガキ調整を確認する。264は弥生土器の支脚である。橙色を呈し、内面に絞り及び指頭圧痕を施す。弥生時代後期のものと考えられる。265は弥生土器の壺である。複合口縁の立ち上がり部で、橙色を呈する。外面に波状文を施す。弥生時代後期～終末期のものであると考えられる。

ＳＤ12

266は弥生時代の甕である。黄橙色を呈し、内外面ともハケ調整を施す。口縁下に刺突文が巡る。弥生時代前期末～中期初頭のものであると考えられる。267は壺の底部とみられ、橙色を呈する。268は甕で、口縁部が強く外反し、口縁端部に面をもつ。内面はヘラケズリ調整。弥生時代後期のものである。

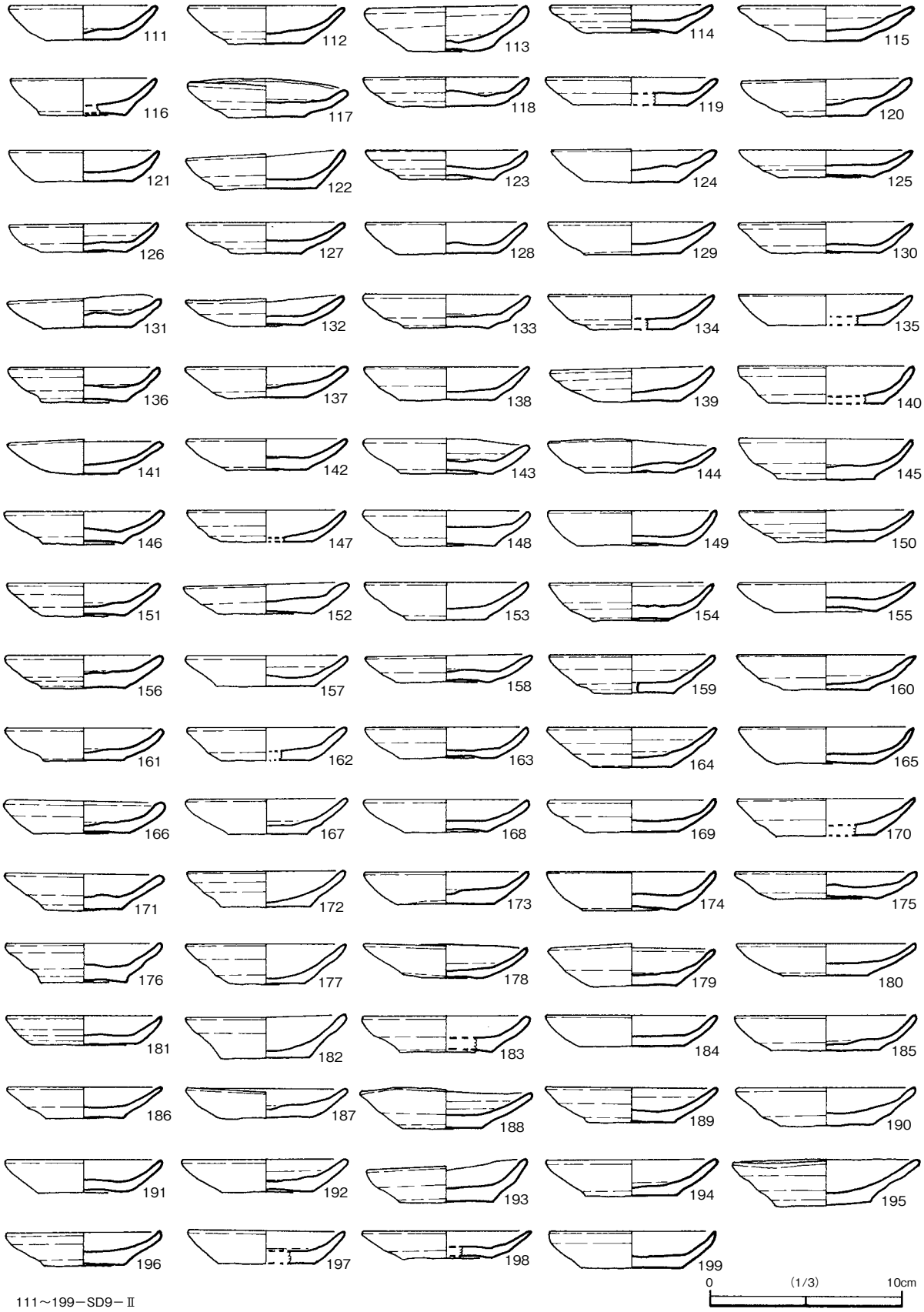


図50　第２面　溝状遺構出土土器実測図（１）

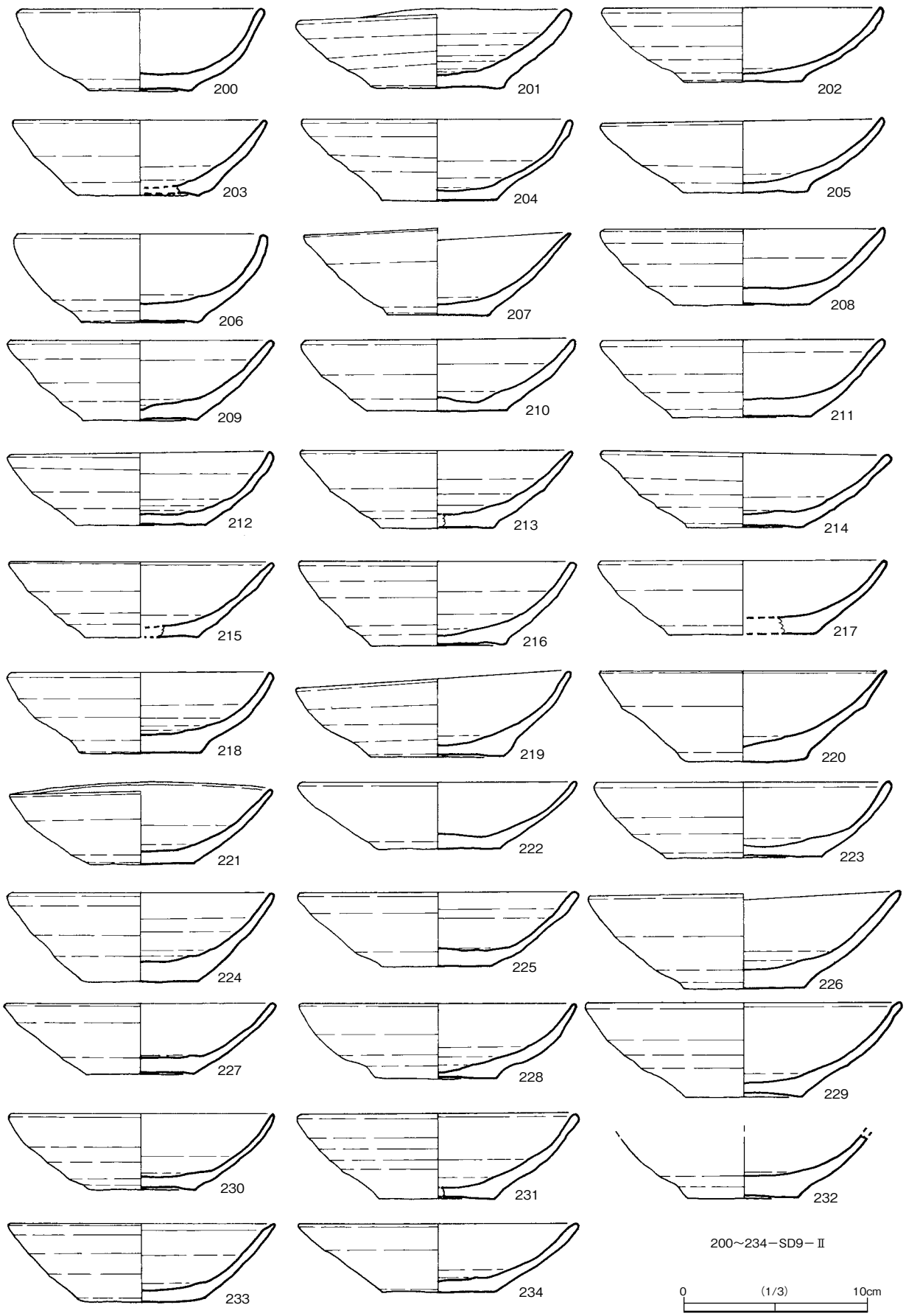


図51　第２面　溝状遺構出土土器実測図（２）

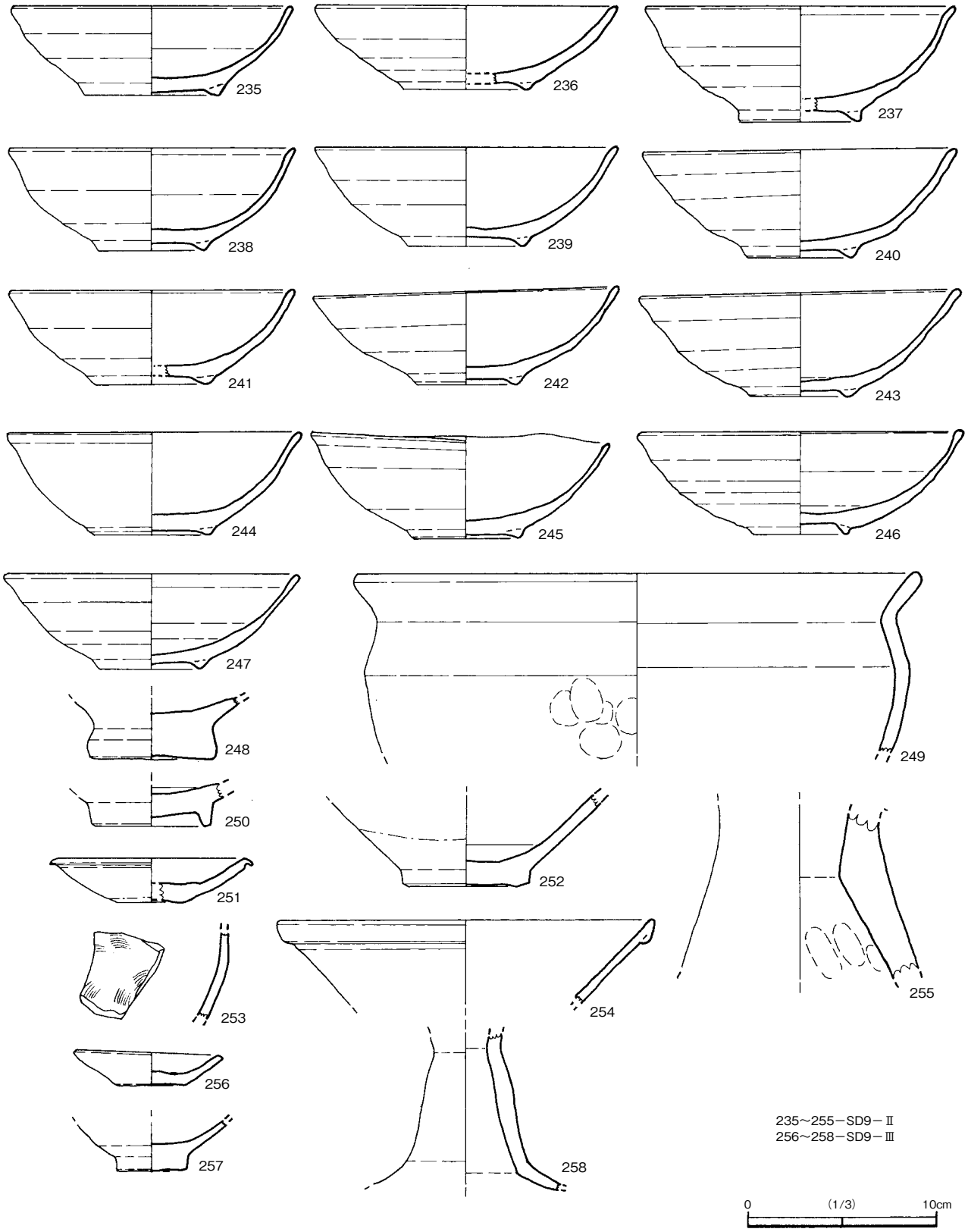


図52　第２面　溝状遺構出土土器実測図（３）

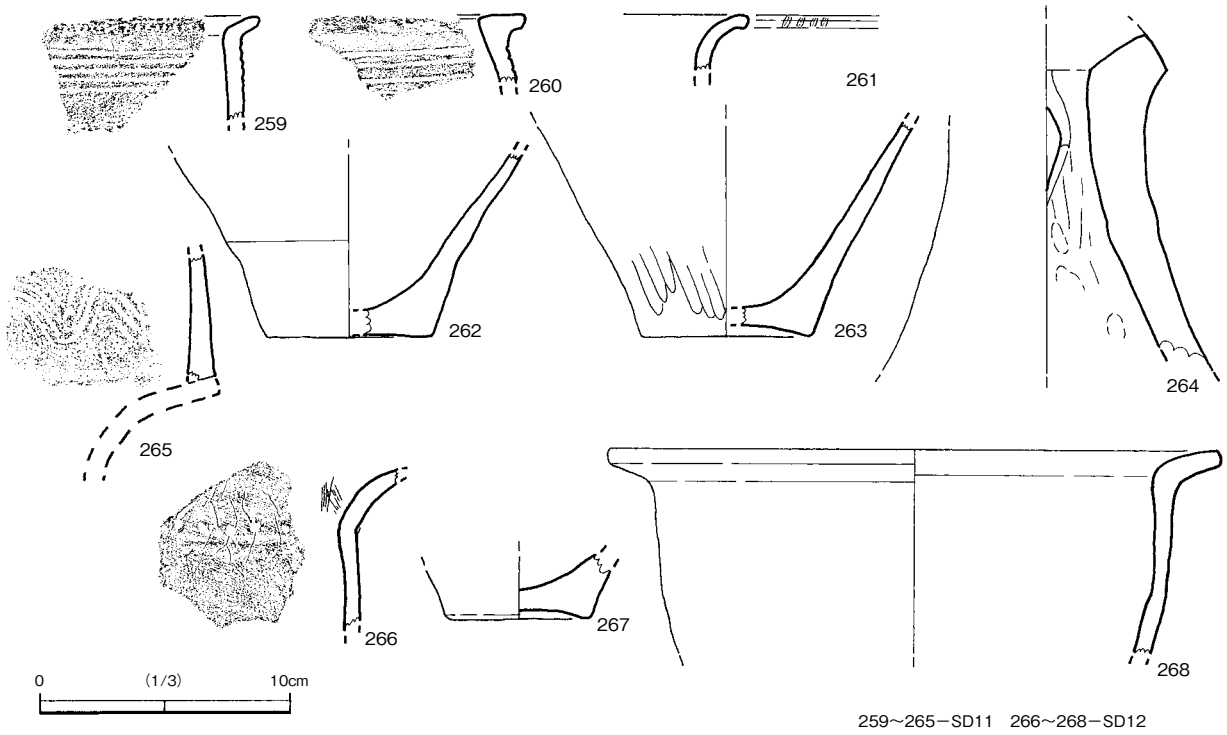


図53　第２面　溝状遺構出土土器実測図（４）

土坑（図54　図版32）

ＳＫ201

269～271は土師器の皿である。口径8.3～8.8cm、器高1.8～1.9cmを測り、灰白色を呈する。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は右回転糸切り痕が確認される。体部は直線的に立ち上がる。

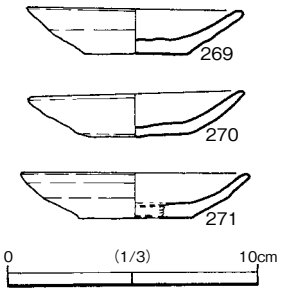
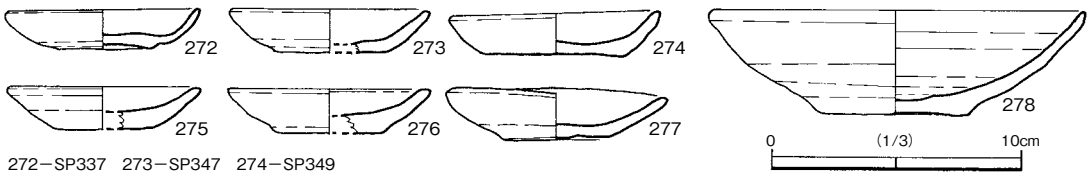


図54　SK201出土土器実測図

柱穴（図55　図版32）

272～277は土師器の皿である。口径7.5～8.3cm、器高1.6～2.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整で、ほとんどの個体で回転糸切り痕が確認される。273・275は体部が直線的に立ち上がる。

278は土師器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は右回転糸切り痕が確認される。



272－SP337　273－SP347　274－SP349
275－SP307　276－SP324　277－SP305
278－SP337

図55　第２面　柱穴出土土器実測図

砂礫堆積層（図56・57　図版33・34）

砂礫堆積層１

279～286は弥生土器の壺である。279は復元口径19.8㎝を測り、橙色を呈する。口縁部内面を肥厚し、口縁端部に刻目が巡る。頸部内面に一条の突帯が貼り付けられる。弥生時代前期末～中期初頭のものであると考えられる。280は頸部外面に一条の突帯が貼り付けられる。弥生時代中期のものであろう。281・282は複合口縁の接合部である。281は橙色を呈し、口縁部上面から立ち上がり部にかけて山形文が施される。弥生時代後期のものと考えられる。282は内面接合部に粘土帯を貼り足して整形している。弥生時代後期のものと考えられる。283は胴部片である。断面形が台形をした帯状の突帯が付く。284～286は底部である。284は弥生時代前期、285・286は後期のものであると考えられる。284は底部が肥厚し、沈線２条が刻まれる。287～297は弥生土器の甕で、287～294は口縁片、295～297は底部である。288～294は口縁部が大きく外反する。288・290～292は口縁端に面をもつ。288・290～292は弥生時代後期、289・293・294は終末期のものであると考えられる。287は口縁部が緩やかに外反し、口縁端は丸みを帯びる。外面の口縁下に３条の沈線が刻まれ、沈線下には刺突文が巡る。弥生時代前期のものであると考えられる。295は分厚い底部で、上げ底になっている。弥生時代中期のものであると考えられる。296は平底の底部で、外面に指頭圧痕が認められる。弥生時代中期のものと考えられる。297は薄い上げ底の底部である。298は弥生土器の支脚である。内外面ともに指押さえによって整形される。脚部は中空である。弥生時代後期のものである。299～301は弥生土器の高杯で、299は口縁部、300・301は脚部である。299は内外面ともにハケ後ナデ調整が施される。小片であり、複合口縁壺の可能性もある。300は内外面ともにハケ調整が施され、径1.0㎝の透孔が確認される。301は内面はハケ、外面はハケ後ミガキ調整が施される。径0.6㎝の透孔が３箇所確認される。300・301ともに弥生時代後期～終末期のものであると考えられる。302は白磁の椀である。残存部内面全体に釉が施され、外面は露胎である。削り出し高台をもつ。

砂礫堆積層２

303は弥生土器の壺、304～306は甕である。303は内折口縁壺である。口縁外面に山形文が巡る。304は口縁部が肥厚して外側へ屈曲する。口縁直下に指頭による圧痕を施した突帯が貼り付けられる。305は逆Ｌ字形の口縁をもち、口縁端部に刻目を施す。303～305は弥生時代中期初頭～前半のものである。306は口縁部が屈曲して外反する。内面にナデ、外面にタタキによる調整が認められる。弥生時代終末期のものである。307は須恵器で、長頸壺の底部とみられる。内外面ともに回転ナデ、底部は静止ナデ調整が認められ、貼付け高台が付く。

下層確認トレンチ（図58　図版34）

308は弥生土器の壺口縁片で、黄橙色を呈する。山陰系の複合口縁で、口縁部外面に６条程度の直線文が施される。309～311は弥生土器の甕である。309は口縁片で、灰白色を呈する。口縁は屈曲して外反する。弥生時代後期のものと考えられる。310は底部で、底径9.8㎝を測る。平底で、灰白色を呈し、外面に指頭圧痕が確認される。311は赤褐色を呈し、外面にハケ調整及び指頭圧痕が確認される。310は弥生時代中期、308・309・311は弥生時代後期のものと考えられる。312～315は弥生土器の高杯で、312・313は口縁片、314は杯部と脚部、315は脚部から裾部である。いずれも橙色を呈する。

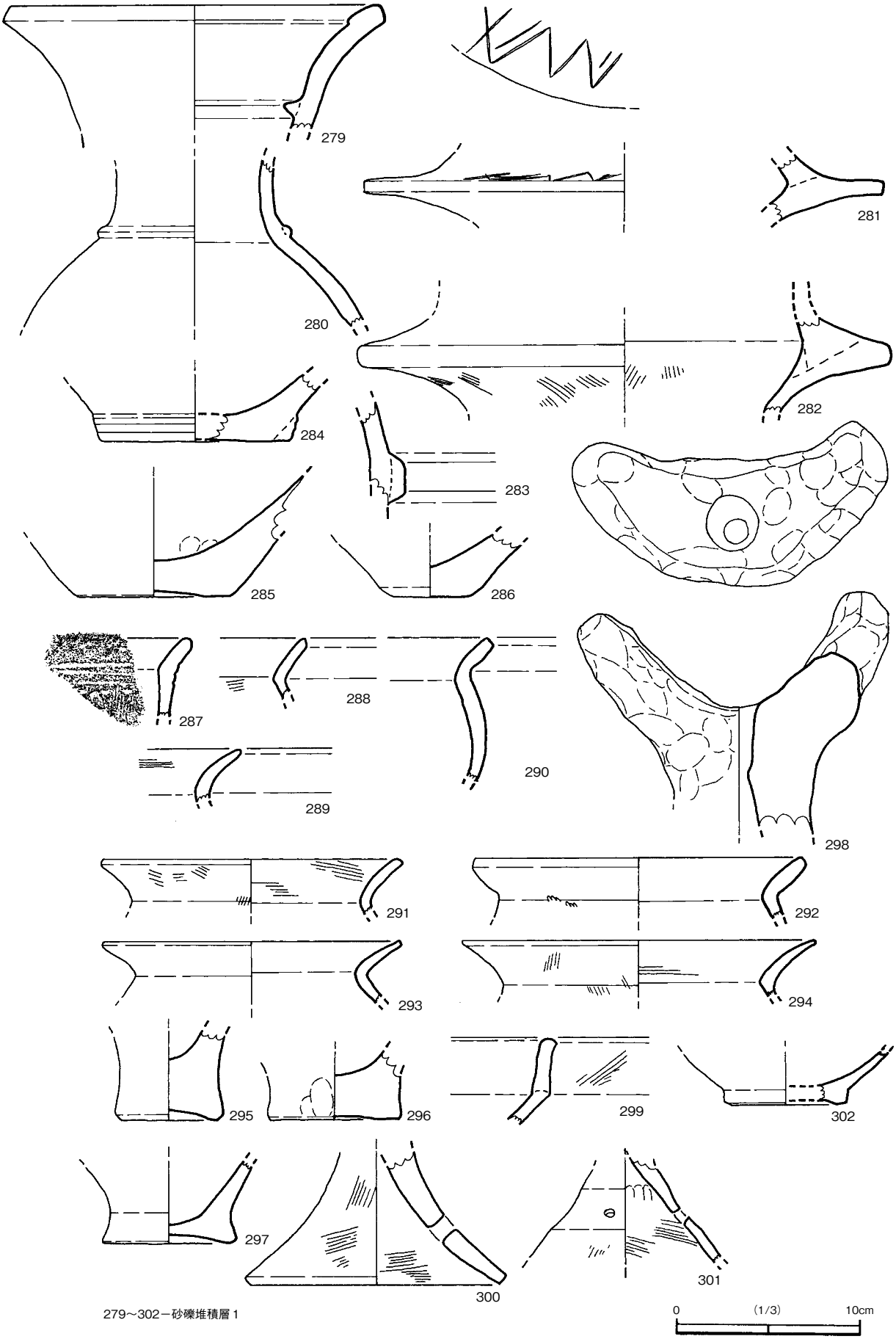


図56　第２面　砂礫堆積層出土土器実測図（１）

312･313は有稜高杯で、稜から先の口縁部が長く外反する。312は口縁端部に面をもち、弥生時代後期、313は口縁端部が面をもたず、弥生時代終末期のものと考えられる。314は有稜高杯で、稜から先が長くまっすぐ伸びる。内面はミガキ､外面はハケによる調整が認められる。接合部に指押さえが見られ、脚部は中空である。弥生時代後期～終末期のものであると考えられる。315は中空で、内面に絞りが確認される。３箇所に径1.0cmの透孔が開き、裾部はやや肥厚する。弥生時代後期～終末期のものであると考えられる。

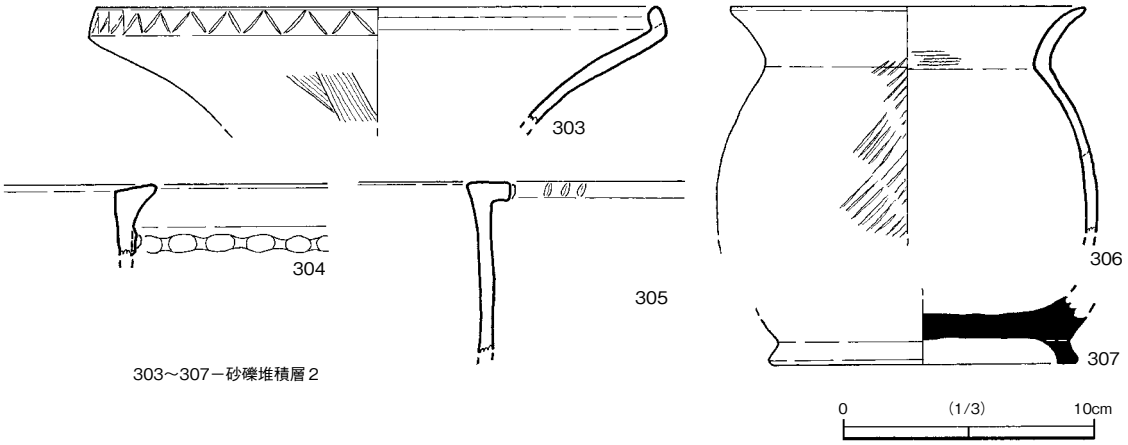


図57　第２面　砂礫堆積層出土土器実測図（２）

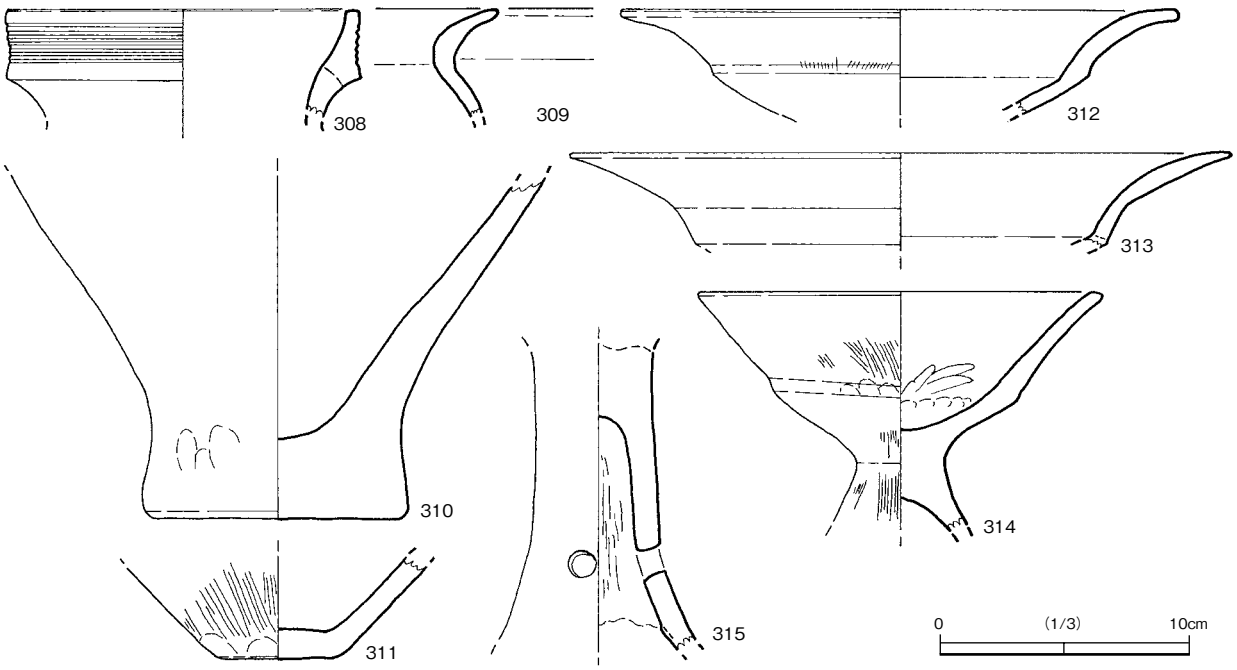


図58　第２面　下層確認トレンチ出土土器実測図

遺構面検出時（図59　図版34）

316・317・320は弥生土器の壺である。316は複合口縁の立ち上がり部で、明赤褐色を呈する。弥生時代後期のものと考えられる。317は胴部上半の破片で、ヘラ描沈線１条、貝殻沈線３条、貝殻羽状文が施文されている。弥生時代前期。320は底部で、橙色を呈する。外部を指押さえで絞り、上げ底になっていて、高台状の形態を呈する。弥生時代後期のものと考えられる。318・319は弥生土器の甕の口縁片である。318は口縁が小さく屈曲して外反する。外面口縁直下に３条の沈線が刻まれ、口縁端には刻目が施される。弥生時代前期のものと考えられる。319は口縁が屈曲して外反する。外面口縁下に櫛描文と刺突文が施される。弥生時代中期初頭のものと考えられる。321は土師質の足鍋である。指押さえによって整形される。322は瓦質土器の鉢の口縁片である。内外面ともナデ調整が施される。本遺跡で出土した数少ない瓦質土器の一つである。

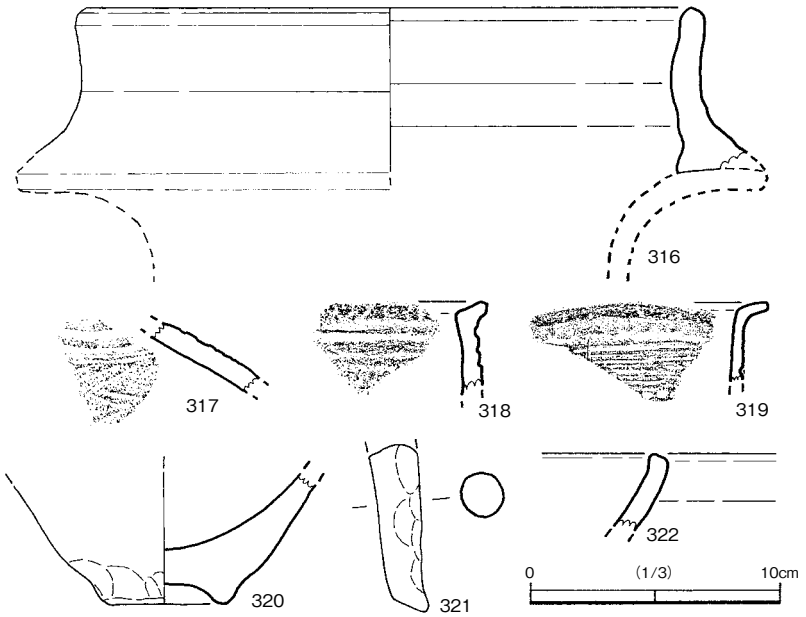


図59　第２面　遺構面検出時出土土器実測図

（３）　第３面出土土器

土坑（図60　図版35）

ＳＫ301

323は弥生土器の壺の底部で、底径8.0cmを測る。平底で、内面は黒色、外面は橙色を呈する。弥生時代中期のものであろう。

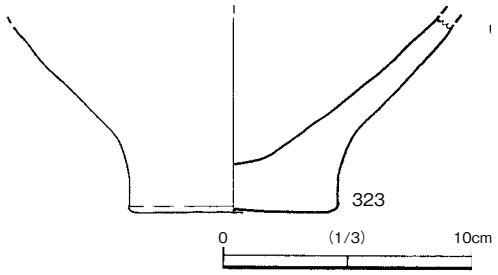


図60　SK301出土土器実測図

砂礫堆積層（図61　図版35）

砂礫堆積層３

324は縄文土器の鉢である。内外面ともにナデ調整が施され、口縁上部及び外面口縁下に沈線が施される。縄文時代後期中葉のものであると考えられる。325～327は弥生土器の甕である。325は平底で、底径5.6cmを測る。外面にハケメ調整が確認できる。326は上げ底で指押さえ痕が確認できる。327は内面ハケメ及びケズリ、外面ハケメ調整が施される。口縁部は屈曲して外反し、口縁端に面をもつ。弥生時代後期のものと考えられる。328は土師器の杯である。厚底で、口径15.2cm、器高5.5cmを測る。

砂礫堆積層４

329は縄文土器の深鉢である。内外面ともにミガキによる調整が見られる。外面胴部に３条以上の沈線が施され、沈線中に刺突文が巡る。上から２～３条間に擬似縄文が見られる。縄文時代後期中葉のものであると考えられる。330～332は弥生土器の壺である。330は口縁部にナデ、外面部にミガキによる調整が確認できる。口縁は屈曲して大きく外反して開き、内面に1条の突帯が貼り付けられる。外面頸部下位に６条の沈線が施される。331は口縁が緩やかに外反して開き、内面に1条の突帯が貼り付けられる。332は口縁が短く外反して開き、口縁端に面をもつ。330～332は弥生時代中期初頭のものと考えられる。333は弥生土器の壺、334は甕の底部である。共に平底で、333は厚底、334は薄底である。335は弥生土器の高杯の口縁片である。復元口径29.3㎝を測る有稜高杯で、稜から先の口縁部が大きく外反する。弥生時代終末期のものであると考えられる。336は土師器の高杯の脚部である。内面にケズリによる調整が見られる。古墳時代のものであると考えられる。337は支脚である。復元底径7.2㎝を測り、中空で裾部に指頭圧痕が認められる。弥生時代後期のものと考えられる。338は器台である。内面に絞り痕が見られる。受け部は、上側が欠損するが大きく開く。弥生時代後期のものと考えられる。

遺構面検出時（図62　図版36）

339は弥生土器の蓋である。内面及び外面つまみ部に指頭圧痕が認められる。弥生時代前期～中期のものであろう。340は弥生土器の甕の底部である。底部は上げ底で、内面に粘土を充填して厚底にしている。弥生時代中期のものである。341は弥生土器の壺の胴部である。帯状突帯が貼り付けられ、ハケ施文原体によると思われる右上がりの刻目がある。突帯の上位側に刺突文が巡る。弥生時代終末期のものであると考えられる。342は弥生土器の壺の底部である。丸底に近い平底タイプである。弥生時代終末期のものである。343は土師器の高杯である。内外面ともナデ調整で、外面脚部付け根に指頭圧痕が認められる。杯部の底に充填痕が確認できる。

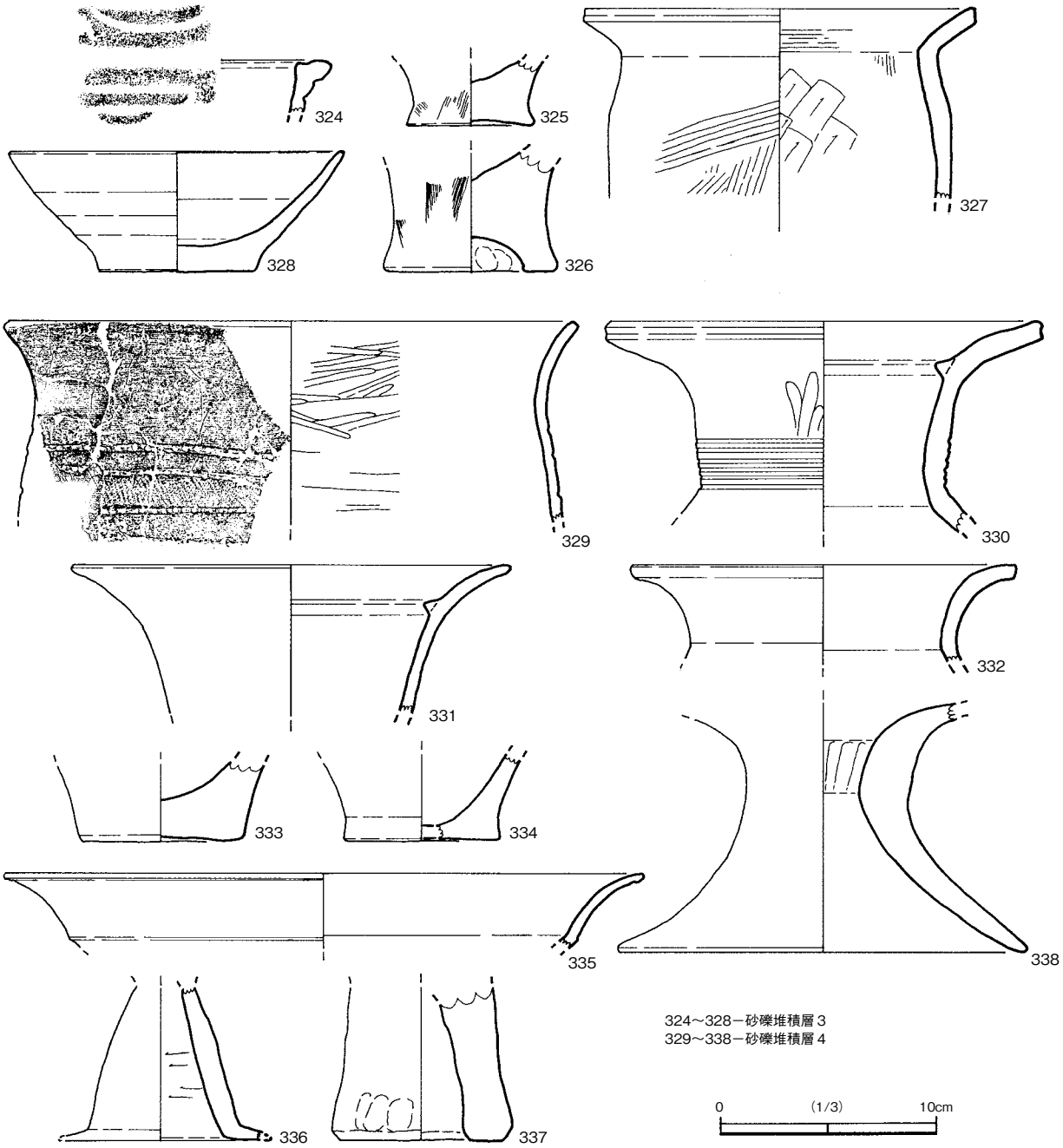


図61　第３面　砂礫堆積層出土土器実測図

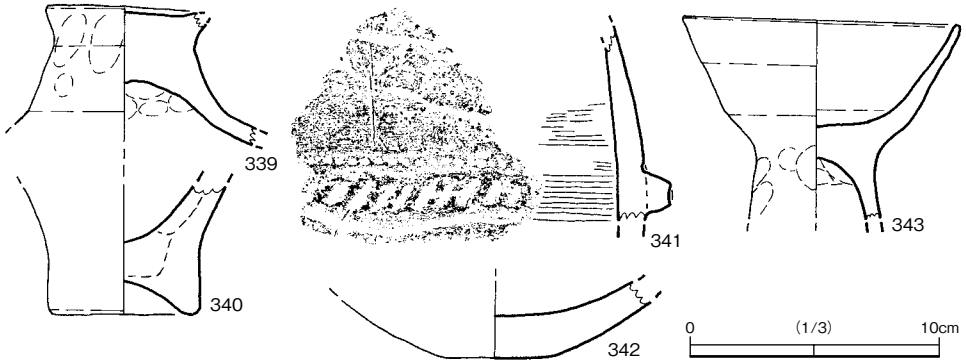


図62　第３面　遺構面検出時出土土器実測図

（4） 出土石製品・鉄製品（図63　図版36・37）

石製品

344～349は石鏃で、平均値は、長さ2.22㎝、幅1.55㎝、厚さ0.31㎝を測る。石材は344・345が姫島産黒曜石、346～349は安山岩製である。344・345・347・349は凹基無茎式である。346・348は平基無茎式に近い形態で、腹面に主要剥離面を大きく残し、縁辺部に微細な２次加工を施す。製作技法が簡略化された縄文時代終末期の特徴を示す石鏃である。346はいわゆる五角形鏃、349は飛行機鏃の形態的特徴を有する。

350は磨製石斧である。石材は塩基性片岩で、全体に磨きがかかるが、器面磨滅により顕著な磨痕は確認できない。351～353は泥質片岩製の打製石斧である。

354・355は砂岩製の敲石である。354は長軸片面に敲痕、355は長軸両面に敲痕が確認される。356は紡錘車である。角閃石安山岩製で外径4.2㎝、厚さ0.7㎝、孔径0.5㎝を測る。全体に丁寧な研磨を施す。357は石製紡錘車の未製品である。側縁に整形痕、片面に研磨痕が認められる。

鉄製品

358・359は鉄鏃である。358は茎関及び頸部と茎部で、残存長5.1㎝を測る。359は茎部で残存長3.2㎝を測る。360～363は鍛製の折れ釘である。

364は刀子である。錆化が激しいが刃部であると考えられる。365は馬具の轡の部品とみられる。断面が楕円の留め金具が付着する。

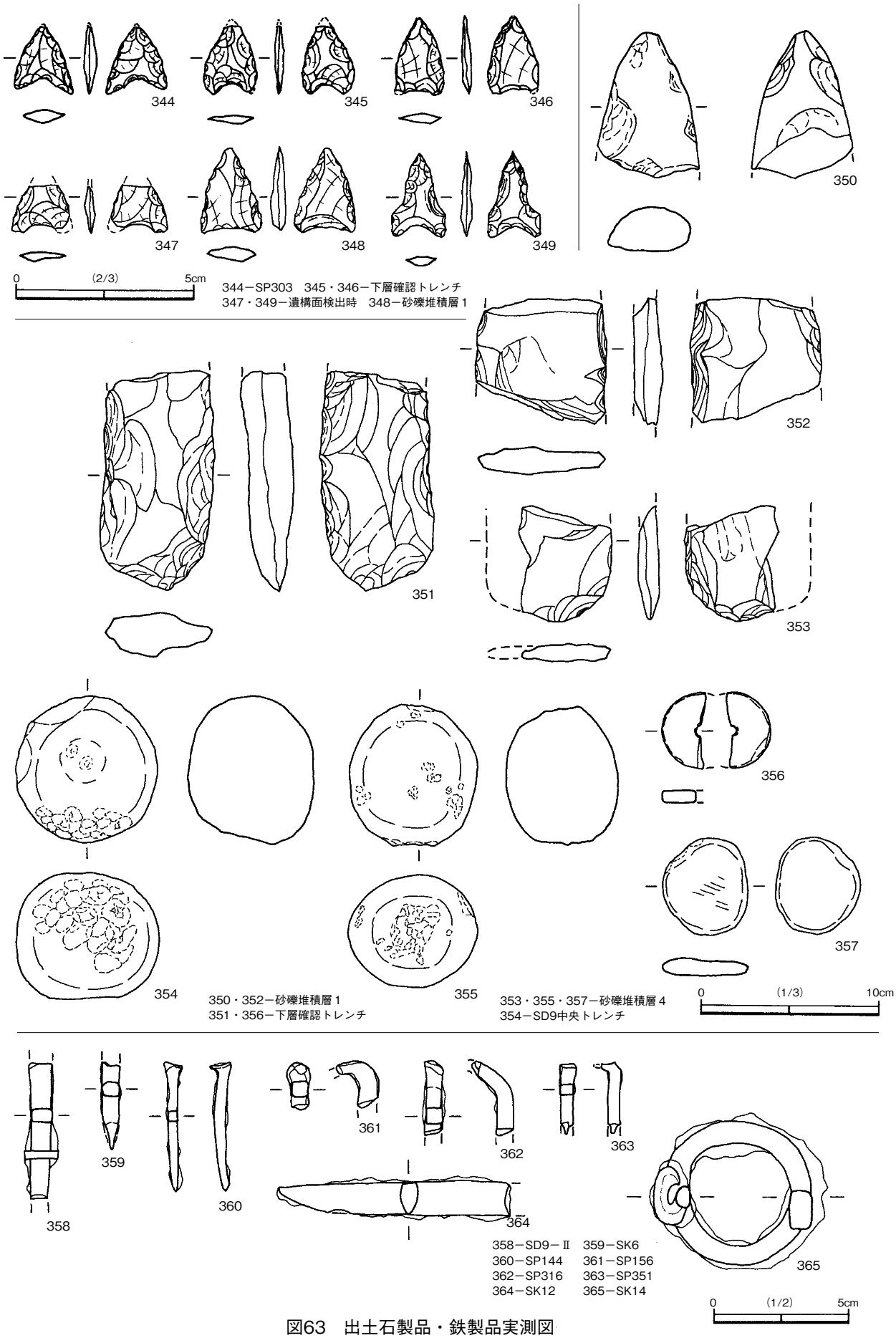


図63　出土石製品・鉄製品実測図

表４　土器観察一覧

※「復」は復元値、「残」は残存値、「推」は推定値

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
1	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	復 7.2	復 5.0	1.2	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
2	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	8.2	3.9	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
3	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	8.6	5.2	1.3	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
4	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	復 7.9	4.2	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
5	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	復 8.6	4.2	1.3	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
6	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	復 8.4	4.4	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
7	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	8.0	4.2	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともナデ。底部回転糸切りか。
8	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	復 8.2	4.0	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
9	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	皿	復 9.8	復 6.6	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
10	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	杯	復 14.6	7.2	4.2	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
11	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	土師器	杯	復 14.5	7.2	4.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
12	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	瓦質土器	鍋	推 28～29		残 3.6	密	含砂粒少	やや硬質	黒褐色	黒褐色	内外面ともナデ。口縁部外側へ屈曲する。胎土にぶい黄橙色。
13	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	白磁	椀	復 15.2		残 4.3	密	砂粒含まず	硬質	灰オリーブ	灰オリーブ	残存部全面に施釉。口縁部肥厚し外面に折り返す。胎土灰白色。
14	1	1	ＳＤ９－Ⅰ	弥生土器	支脚			残 13.5	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	内面ハケ後ナデ。外面ハケ後ナデか。指頭圧痕あり。２本の角状突起。胴径８㎝。
15	1	2	ＳＤ 10	土師器	皿	復 8.4	復 5.2	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
16	1	2	ＳＤ 10	土師器	杯	復 14.0	5.6	4.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
17	1	2	ＳＤ 10	土師器	杯	14.6	5.2	4.8	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
18	1	2	ＳＤ 10	土師器	杯	復 13.2	7.0	3.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
19	1	2	ＳＤ 10	土師器	杯	復 15.2	6.4	3.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
20	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	復 7.6	4.6	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
21	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	復 7.8	復 4.4	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
22	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	8.2	3.9	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
23	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	復 8.4	4.5	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
24	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	7.7	4.8	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
25	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	復 7.8	復 4.0	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
26	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	8.2	4.4	2.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
27	1	1	ＳＫ 17	土師器	皿	復 8.4	4.4	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
28	1	1	ＳＫ 17	土師器	杯	復 13.6	6.4	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
29	1	1	ＳＫ 17	土師器	杯	復 13.2	6.5	3.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
30	1	1	ＳＫ 17	土師器	杯	14.2	5.4	4.2	密	砂粒含まず	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。口縁部大きく歪む。
31	1	1	ＳＫ 17	土師器	杯	14.4	7.1	4.2	密	砂粒含まず	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。口縁部歪みあり。
32	1	1	ＳＫ 14	土師器	皿	復 7.8	復 4.2	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量（cm）			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
33	1	1	ＳＫ14	土師器	皿	7.9	5.2	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
34	1	1	ＳＫ14	土師器	皿	7.8	4.7	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
35	1	1	ＳＫ14	土師器	皿	復7.8	4.0	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
36	1	1	ＳＫ5	土師器	皿	復8.2	復4.8	1.8	密	含砂粒少	軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面ともナデか。底部回転糸切り痕あり。
37	1	1	ＳＫ5	弥生土器	支脚			残9.4	粗	含砂粒多	やや軟質	赤褐色	橙色	内面ナデ、くびれ部に絞り。外面ハケ。器面磨滅のため調整不詳。胴径6.0㎝。
38	1	1	ＳＫ19	土師器	皿	復7.0	復4.0	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
39	1	1	ＳＫ19	土師器	皿	8.1	3.7	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
40	1	1	ＳＫ19	土師器	皿	8.4	4.4	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
41	1	1	ＳＫ19	土師器	椀	16.2	6.9	5.4	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。高さ0.6cmの貼り付け高台。
42	1	1	ＳＫ19	白磁	椀		6.7	残2.5	密	砂粒含まず	硬質	灰白色	灰白色	内外面とも施釉。外面下方から高台にかけて露胎。高さ0.6cmの削り出し高台。
43	1	1	ＳＫ19	土師器	ミニチュア甕	5.4	2.5	4.3	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面外面ともにナデ。手捏ねによる成形。内外面に指頭圧痕あり。口縁部肥厚して外反する。
44	1	1	ＳＫ20	土師器	皿	復7.8	復5.0	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
45	1	1	ＳＫ20	土師器	皿	復7.8	4.0	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面ともナデか。底部回転糸切り痕あり。
46	1	1	ＳＫ20	土師器	皿	復7.8	復4.8	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面ともナデか。底部回転糸切り痕あり。
47	1	1	ＳＫ20	土師器	皿	8.2	4.3	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
48	1	1	ＳＫ20	土師器	皿	8.4	5.0	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
49	1	2	ＳＫ31	土師器	皿	8.2	4.3	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
50	1	1	ＳＫ16	土師器	皿	復7.8	復4.6	1.3	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
51	1	1	ＳＫ16	土師器	皿	8.0	4.2	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
52	1	1	ＳＫ16	土師器	杯	復14.4	6.9	4.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
53	1	1	ＳＫ12	土師器	杯	14.4	6.2	4.5	密	砂粒含まず	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
54	1	1	ＳＰ119	土師器	皿	7.8	4.5	1.3	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
55	1	1	ＳＰ119	土師器	皿	8.0	4.8	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
56	1	1	ＳＰ119	土師器	皿	8.9	4.5	2.3	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
57	1	1	ＳＰ119	土師器	杯	7.9	4.4	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
58	1	1	ＳＰ119	土師器	杯	14.2	5.8	4.4	密	砂粒含まず	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
59	1	1	ＳＰ119	土師器	杯	14.5	6.1	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
60	1	1	ＳＰ119	土師器	杯	15.2	6.2	4.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
61	1	1	ＳＰ190	土師器	杯	11.6	5.7	3.6	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
62	1	1	ＳＰ190	青磁	皿			残2.9	密	砂粒含まず	硬質	灰オリーブ色	灰オリーブ色	残存部全面に施釉。見込み部及び外面に櫛描文。胎土灰白色。
63	1	1	ＳＰ112	土師器	柱状高台皿	10.0	5.5	5.6	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
64	1	1	ＳＰ82	弥生土器	壺			残5.7	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	器面剥落のため調整不明。複合口縁。口縁屈曲部外面に刺突文の痕跡。
65	1	2	ＳＰ24	土師器	皿	7.8	3.9	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
66	1	2	ＳＰ78	土師器	皿	8.1	4.3	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
67	1	2	ＳＰ41	土師器	皿	復8.6	4.6	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部左回転糸切り痕あり。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量（cm）			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
68	1	2	ＳＰ 46	土師器	皿	9.6	6.6	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
69	1	2	ＳＰ 59	土師器	椀		5.5	残 4.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.7cm の貼り付け高台。
70	1	1	ＳＰ 157	土師器	杯	13.8	6.4	4.4	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
71	1	1	ＳＰ 157	土師器	杯	15.6	7.7	4.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。口縁部歪みあり。
72	1	1	ＳＰ 152	土師器	杯	復 14.4	復 6.2	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
73	1	1	ＳＰ 110	土師器	杯	復 15.0	6.6	3.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部糸切り痕あり。
74	1	2	ＳＰ 13	土師器	杯	復 15.0	7.0	3.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
75	1	2	ＳＰ 36	土師器	杯	14.7	6.5	4.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
76	1	1	ＳＰ 162	土師器	杯	復 14.4	復 6.0	4.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
77	1	1	ＳＰ 135	土師器	杯		6.0	残 3.1	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
78	1	2	ＳＰ 46	土製品	鞴羽口	幅 8.5	残厚 8.5	残長 8.5	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	端部被熱し、ガラス質成分付着。
79	1	1	ＳＸ 1	土師器	皿	復 7.8	4.0	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
80	1	1	ＳＸ 1	土師器	杯		復 5.8	残 1.4	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
81	1	2	遺物包含層	土師器	皿	8.4	4.0	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
82	1	2	遺物包含層	土師器	皿	8.2	4.5	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
83	1	2	遺物包含層	土師器	皿	8.5	4.0	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
84	1	2	遺物包含層	土師器	皿	復 8.4	4.9	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
85	1	2	遺物包含層	土師器	皿	復 8.0	4.3	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
86	1	2	遺物包含層	土師器	皿	8.3	4.4	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
87	1	2	遺物包含層	土師器	皿	8.4	4.6	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
88	1	2	遺物包含層	土師器	皿	8.2	4.8	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
89	1	1	遺物包含層	白磁	椀		5.7	残 3.1	密	砂粒含まず	やや硬質	施釉部灰白色	露胎部灰白色	内面施釉、外面残存部は露胎。高台裏の削り出しの浅い削り出し高台。高台高 0.8 ㎝。
90	1	2	遺物包含層	白磁	椀		5.6	残 1.8	密	砂粒含まず	硬質	施釉部灰黄色	露胎部灰白色	高台部露胎。削り出し高台。外底面に「二」の墨書。見込み部蛇の目釉剥ぎ。胎土灰白色。高台高 0.9 ㎝。
91	1	2	遺物包含層	青磁	椀		5.4	3.3	粗	砂粒含まず	やや硬質	オリーブ黄色	オリーブ黄色	内外面とも施釉。器面下方から高台にかけて露胎。削り出し高台。高台高 0.8 ㎝。
92	1	2	遺物包含層	青磁	椀			残 2.0	密	含砂粒少	やや硬質	オリーブ灰色	オリーブ灰色	内外面ともに施釉。外面に鎬蓮弁文様。
93	1	2	遺物包含層	須恵質	こね鉢			残 3.9	粗	含砂粒少	やや硬質	灰色	灰色	内面口縁付近及び外面横ナデ。見込み部付近縦ナデ。
94	1	1	遺物包含層	土師器	壺	頸部復 14.0		残 14.4	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	胴部内面ケズリ、口縁部ナデ。胴部外面ハケ、口縁部ハケ後ナデ。複合口縁。
95	1	2	下層確認トレンチ	土師器	皿	復 7.6	3.8	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
96	1	2	下層確認トレンチ	土師器	皿	8.2	4.4	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
97	1	2	下層確認トレンチ	土師器	皿	7.8	5.0	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
98	1	1	下層確認トレンチ	土師器	皿	復 8.4	5.5	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
99	1	2	下層確認トレンチ	土師器	皿	復 8.0	4.8	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
100	1	2	下層確認トレンチ	土師器	杯	13.7	5.5	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
101	1	1	下層確認トレンチ	土師器	杯	復 15.0	6.2	4.2	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
102	1	1	下層確認トレンチ	土師器	杯	復 14.6	復 6.5	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内面器面磨滅により調整不明。外面回転ナデ。底部回転糸切りか。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
103	1	1	下層確認トレンチ	土師器	杯	復16.0	6.0	5.0	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
104	1	1	下層確認トレンチ	青磁	皿	復10.6		残2.3	密	砂粒含まず	硬質	灰オリーブ色	灰オリーブ色	内外面とも施釉。見込み部に櫛描文あり。胎土灰白色。
105	1	1	下層確認トレンチ	白磁	椀	復17.0		残4.2	密	砂粒含まず	硬質	灰白色	灰白色	残存部内外面ともに施釉。胎土は灰白色。
106	1	2	下層確認トレンチ	瓦質土器	足鍋	復25.0		残10.4	粗	含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内外面ともハケ後ナデ。底部にタタキ痕。胴部に指頭圧痕。
107	1	2	下層確認トレンチ	弥生土器	甕			残4.7	粗	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。外面口縁下に6条のヘラ描沈線文。3～4条間、6条下に刺突文あり。
108	1	2	下層確認トレンチ	弥生土器	壺	頸部復15.0		残6.7	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面ナデ、外面ハケ。頸部に粘土帯が貼り付けられ、刻目が巡る。
109	1	2	下層確認トレンチ	弥生土器	高杯			残10.1	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	外面に指押さえ痕あり。器面剥落のため調整不詳。1箇所以上に径1㎝の透孔。
110	1	2	下層確認トレンチ	弥生土器	高杯		復18.0	残4.5	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面剥落のため調整不明。裾部接合痕あり。蓋の可能性あり。
111	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.4	復4.0	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
112	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.9	3.9	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
113	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.1	3.6	2.4	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
114	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.4	4.8	1.4	粗	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
115	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.7	復3.8	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
116	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.4	復4.4	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
117	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.9	3.9	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
118	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.2	4.8	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
119	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.4	復5.8	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
120	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.7	4.2	2.0	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
121	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.6	4.9	1.7	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
122	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.9	5.0	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。口縁部大きく歪む。
123	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.2	4.9	1.5	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
124	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.4	4.9	1.7	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
125	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.8	4.8	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
126	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.6	4.4	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
127	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.0	3.6	1.6	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
128	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.2	5.2	1.6	粗	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
129	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.4	4.9	1.7	粗	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
130	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.8	復5.6	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
131	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.6	4.5	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
132	2	1	ＳＤ９南ＴＲ	土師器	皿	8.0	3.9	1.6	粗	含砂粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
133	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.2	復4.4	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
134	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.4	復4.2	1.8	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
135	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.8	復6.0	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部摩耗により糸切り不明。
136	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.6	復4.2	1.8	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
137	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.0	4.0	1.6	粗	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
138	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.2	復 4.8	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
139	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.4	4.5	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
140	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.8	復 6.0	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
141	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.7	3.7	1.7	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
142	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.0	4.1	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
143	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.2	4.7	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
144	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.4	4.6	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。口縁部大きく歪む。
145	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.8	5.0	2.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
146	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 7.8	復 4.0	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
147	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.0	復 4.6	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
148	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.2	4.9	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
149	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.4	復 5.6	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
150	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.9	復 5.0	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
151	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 7.8	4.2	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
152	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.0	4.9	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
153	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.2	復 4.0	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
154	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.4	4.0	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
155	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 9.0	復 5.2	1.5	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
156	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 7.8	復 4.2	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
157	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.0	5.1	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
158	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.3	4.8	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
159	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.4	4.0	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。底部中央に径0.4cm の穿孔あり。
160	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 9.0	復 4.5	1.8	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
161	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 7.8	復 4.2	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
162	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.0	復 4.4	1.7	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
163	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.3	4.8	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部左回転糸切り痕あり。
164	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.4	4.0	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
165	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 9.0	5.0	1.9	密	含砂粒少	軟質	橙色	橙色	器面磨滅のため調整不明。
166	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.8	4.9	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
167	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.0	4.1	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
168	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.3	4.2	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
169	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.4	4.8	2.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
170	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 9.0	復 5.2	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
171	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.8	4.0	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
172	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復 8.0	復 4.6	1.9	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
173	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.3	4.8	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
174	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.5	復4.8	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
175	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復9.2	5.3	1.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
176	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.8	4.4	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
177	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.0	3.8	2.1	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
178	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.3	4.1	1.8	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
179	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.5	4.4	2.2	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
180	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復9.2	4.4	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
181	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.9	5.0	1.5	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
182	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.0	4.5	2.2	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
183	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.3	復4.8	1.9	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
184	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.6	5.3	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
185	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復9.2	復5.6	1.8	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
186	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.9	4.0	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
187	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.1	5.0	1.6	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
188	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.3	4.1	2.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
189	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.6	4.5	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
190	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復9.2	4.8	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
191	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復7.9	4.6	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
192	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.1	4.7	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
193	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.3	4.9	2.2	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。口縁部歪みあり。
194	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.6	復4.6	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
195	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	9.4	4.7	2.4	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
196	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	7.9	4.1	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
197	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.1	復5.0	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
198	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	復8.4	4.6	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
199	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	皿	8.6	5.2	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
200	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復13.0	5.4	4.4	密	砂粒含まず	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
201	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	14.2	6.8	4.3	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。口縁部歪みあり。
202	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復14.8	6.0	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
203	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復13.2	復6.6	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	黄橙色	黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
204	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	14.2	6.0	4.4	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
205	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	15.0	6.5	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
206	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復13.2	復6.2	4.8	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
207	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	14.2	5.4	4.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。大きく歪む。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
208	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 15.0	復 7.0	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
209	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 13.8	復 6.0	4.3	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
210	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	14.4	7.4	3.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
211	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 15.0	7.4	4.2	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
212	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	13.9	7.0	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
213	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.4	復 6.0	4.2	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
214	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 15.1	6.2	4.2	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
215	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.0	復 6.0	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
216	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.4	7.2	4.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
217	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 15.2	復 7.8	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
218	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.0	6.4	4.4	密	含砂粒少	やや軟質	黄橙色	黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
219	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.5	7.0	4.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
220	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 15.2	6.8	4.9	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
221	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	14.0	5.6	4.4	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
222	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.6	6.6	3.6	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切りか。
223	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 15.4	復 8.4	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
224	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.0	6.0	4.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
225	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.6	5.8	4.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
226	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	16.5	6.5	5.2	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。口縁部歪みあり。
227	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.2	5.8	3.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
228	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.6	6.4	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
229	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 16.8	6.0	5.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
230	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.2	5.6	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
231	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.6	復 6.0	4.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
232	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯		5.9	残 3.4	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右？回転糸切り痕あり。
233	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.2	6.8	4.2	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
234	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	杯	復 14.8	6.0	3.7	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
235	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 14.4	7.0	4.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.6cm の貼り付け高台。
236	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 15.6	復 6.4	4.4	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.4cm の貼り付け高台。
237	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 15.8	復 6.3	6.1	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.6cm の貼り付け高台。
238	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 14.6	5.6	5.4	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.5cm の貼り付け高台。
239	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 15.4	5.8	5.2	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.5cm の貼り付け高台。
240	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	16.0	5.4	5.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.6cm の貼り付け高台。
241	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 14.8	5.6	5.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.5cm の貼り付け高台。
242	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復 15.8	5.0	5.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ 0.5cm の貼り付け高台。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量（cm）			焼成		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
243	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	16.3	5.2	4.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ0.5cmの貼り付け高台。
244	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	15.2	5.9	5.4	密	含砂粒少	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。高さ0.4cmの貼り付け高台。
245	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	15.2	5.4	5.5	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。高さ0.5cmの貼り付け高台。口縁部歪みあり。
246	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復16.8	復4.8	5.4	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ0.4cmの貼り付け高台。
247	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	椀	復15.0	5.0	5.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。高さ0.6cmの貼り付け高台。
248	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師器	柱状高台皿		6.2	残3.2	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内面器面磨滅により調整不明。外面ナデ。高さ1.8cmの貼り付け高台。
249	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	土師質土器	鍋	復29.0		残9.4	粗	含砂粒多	軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面ともナデ。胴部に指頭圧痕。器面磨滅のため詳細不明。口縁部屈曲して外反する。
250	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	白磁	椀		5.6	残2.2	密	含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内外面とも施釉。高台部露胎。高さ1.2cmの削り出し高台。
251	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	白磁	皿	復9.8	復3.4	2.3	密	砂粒含まず	硬質	灰白色	灰白色	内外面供に施釉。底部は碁笥底で露胎。胎土は灰白色。
252	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	白磁	椀		5.6	残4.8	粗	砂粒含まず	硬質	灰白色	灰白色	内外面とも施釉。外面下方から高台にかけて露胎。高台裏の削り出しの甘い、高さ0.6cmの削り出し高台。
253	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	白磁	椀？			残4.5	密	含砂粒少	硬質	灰オリーブ色	灰オリーブ色	残存部内外面ともに施釉。胎土は灰白色。内面に櫛描文あり。
254	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	白磁	椀	復19.4		残4.4	密	砂粒含まず	硬質	灰白色	灰白色	残存部内外面ともに施釉。胎土は灰白色。玉縁状口縁。
255	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	弥生土器	器台			残9.2	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄橙色	褐灰色	器面磨滅のため調整不明。裾部に指頭圧痕あり。胴径8.2cm。
256	2	1	ＳＤ９－Ⅲ	土師器	皿	7.5	3.6	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
257	2	1	ＳＤ９－Ⅲ	土師器	柱状高台皿		3.7	残2.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
258	2	1	ＳＤ９－Ⅲ	土師器	高杯			残7.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内面にケズリ。外面器面剥落のため調整不明。
259	2	1	ＳＤ11	弥生土器	甕			残4.1	粗	含砂粒多	軟質	明赤褐色	明赤褐色	外面口縁下に５条の沈線。器面磨滅のため調整不明。
260	2	1	ＳＤ11	弥生土器	甕			残2.7	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	口縁部ナデ。外面口縁下に４条に沈線。
261	2	1	ＳＤ11	弥生土器	甕			残2.3	粗	含砂粒多	軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	外面口縁部に刻目か。器面磨滅のため調整不明。
262	2	1	ＳＤ11	弥生土器	壺ないし甕		6.6	残12.0	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	器面磨滅のため調整不明。
263	2	1	ＳＤ11	弥生土器	壺		6.6	残8.4	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	底部付近にミガキ。器面磨滅のため調整不詳。
264	2	1	ＳＤ11	弥生土器	支脚			残13.8	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内面絞り及び指押さえ痕あり。外面器面剥落のため調整不明。
265	2	1	ＳＤ11	弥生土器	壺			残5.0	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	外面に波状文あり。内面器面磨滅により調整不明。複合口縁の立ち上がり部。
266	2	1	ＳＤ12	弥生土器	甕			残4.5	粗	含砂粒多	軟質	黄橙色	黄橙色	内外面ともハケ。口縁下に刺突文が巡る。
267	2	1	ＳＤ12	弥生土器	壺		5.7	残2.5	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面磨滅のため調整不明。
268	2	1	ＳＤ12	弥生土器	甕	復24.0		残8.1	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	口縁部ナデ。内面ヘラケズリ調整。
269	2	1	ＳＫ201	土師器	皿	8.3	4.1	1.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
270	2	1	ＳＫ201	土師器	皿	8.3	3.6	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
271	2	1	ＳＫ201	土師器	皿	復8.8	復4.4	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
272	2	1	ＳＰ337	土師器	皿	7.5	3.9	1.6	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
273	2	1	ＳＰ347	土師器	皿	復7.8	復4.2	1.7	密	含砂粒少	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内外面とも回転ナデ。底部摩耗により糸切り不明。
274	2	1	ＳＰ349	土師器	皿	8.1	5.7	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
275	2	1	ＳＰ307	土師器	皿	復7.7	復3.8	1.7	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り痕あり。
276	2	1	ＳＰ324	土師器	皿	復8.0	復4.2	1.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部摩耗により糸切り不明。
277	2	1	ＳＰ305	土師器	皿	8.3	3.9	2.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。全体に大きく歪む。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量（cm）			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
278	2	1	ＳＰ 337	土師器	杯	14.7	5.8	4.1	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
279	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺	復 19.8		残 6.7	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。口縁端部内面肥厚、端面に刻目。頸部内面粘土帯貼り付け。
280	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺	頸部復 7.0		残 9.0	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。内面指押さえ痕あり。頸部外面突帯１条貼り付け。
281	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺	外径復 28.0		残 3.5	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内面ナデ。外面器面剥落のため調整不明。複合口縁。外反した口縁上部に山形文。
282	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺	外径復 28.8		残 5.0	密	含砂粒少	やや軟質	褐灰色	浅黄橙色	内面ハケ。外面上部ナデ、下部ハケ。複合口縁の接合部。内面接合部に粘土帯を貼り足して成形。
283	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺			残 5.5	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	内外面とも器面剥落のため調整不明。断面形台形のの突帯が付く。
284	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺		復 8.0	残 3.6	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも器面風化のため調整不明。底部肥厚して沈線２条あり。
285	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺		復 8.0	残 6.5	粗	含砂粒多	軟質	黒色	灰白色	内外面とも器面剥落のため調整不明。内面底部に指押さえ痕あり。
286	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	壺		復 4.0	残 3.3	粗	含砂粒多	軟質	黒色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。
287	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕			残 4.2	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内面口縁部ナデ。外面ハケ、口縁部ハケ後ナデ。口縁下３条の沈線、沈線下に刺突文あり。
288	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕			残 3.3	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともナデ。口縁は屈曲して外反する。
289	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕			残 2.9	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内面ハケ後ナデ、外面ナデ。口縁部屈曲して外反する。
290	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕			残 7.8	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。口縁部屈曲して外反する。
291	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕	復 15.7		残 3.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面ともハケ後ナデ。口縁部に褐灰色の煤付着。口縁部屈曲して外反する。
292	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕	復 17.4		残 3.3	粗	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面とも口縁部ナデ。外面肩部ハケ後ナデ。口縁部屈曲して外反する。
293	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕	復 15.9		残 3.4	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともナデ。器面風化のため詳細不明。口縁は屈曲して外反する。
294	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕	復 19.0		残 3.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面ともハケ後ナデ。口縁部屈曲して外反する。。
295	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕		復 5.2	残 4.8	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。底部上げ底。
296	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕		7.0	残 3.8	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。外面指押さえ痕あり。平底。
297	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	甕		6.4	残 4.5	密	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面ともナデ。底部黒褐色。うすい上げ底。
298	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	支脚	腕部幅 17.0	孔径復 1.4	残 12.0	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも指押さえによる成型。脚部中空。
299	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	高杯			残 4.7	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	明褐色	内外面ともハケ後ナデ。複合口縁の接合部と立ち上がり部。複合口縁壺の可能性あり。
300	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	高杯		復 13.4	残 7.2	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面ともハケ。孔径 1.0 ㎝の透孔あり。
301	2	2	砂礫堆積層1	弥生土器	高杯			残 5.9	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内面ハケ、外面ハケ後ミガキ。内面上部に指押さえ痕あり。孔径 0.6 ㎝の透孔３箇所。
302	2	2	砂礫堆積層1	白磁	椀		復 5.4	残 2.9	密	砂粒含まず	硬質	灰白色	灰白色	内面残存部全体に施釉。外面残存部全て露胎。高台高 0.8 ㎝の削り出し高台。
303	2	1	砂礫堆積層2	弥生土器	壺	復 22.0		残 4.5	粗	含砂粒多		黄灰色	黄灰色	内面ナデ？、外面ハケ。口縁部貼り付けて内側へ屈曲する。口縁部外面に山形文が巡る。
304	2	1	砂礫堆積層2	弥生土器	甕			残 2.8	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面磨滅のため調整不明。口縁部肥厚して外面へ屈曲する。口縁直下に指頭圧痕を施した突帯。
305	2	1	砂礫堆積層2	弥生土器	甕			残 6.8	粗	含砂粒多	軟質	にぶい褐色	灰黄褐色	器面磨滅のため調整不明。逆Ｌ字形の口縁に刻目が巡る。胎土黒褐色。
306	2	1	砂礫堆積層2	弥生土器	甕	復 14.0		残 9.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内面横ナデ、口縁部ハケ後ナデ。外面タタキ、口縁部ナデ。
307	2	1	砂礫堆積層2	須恵器	長頸壺		復 12.0	残 2.6	密	含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内外面とも回転ナデ。底部静止ナデ。高さ 1.0 ㎝の貼り付け高台。
308	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	壺	復 13.8		残 4.2	粗	含砂粒多	やや軟質	黄橙色	黄橙色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。山陰系複合口縁。接合痕あり。口縁部外面に６条程度の直線文。
309	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	甕			残 3.3	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	口縁部ナデ。器面剥落のため調整不詳。口縁は屈曲し外反する。
310	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	甕		9.8	残 13.5	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	器面剥落のため調整不明。外面底部に指押さえ痕あり。
311	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	甕		4.4	残 4.0	粗	含砂粒多	軟質	赤褐色	赤褐色	内面器面剥落のため調整不明。外面ハケ。底部に指押さえ痕あり。
312	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	高杯	復 20.0		残 4.1	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面器面剥落のため調整不明。外面ハケ後ナデ。有稜高杯。

番号	出土面	出土地区	遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土		焼成	色調		調整・備考
						口径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
313	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	高杯	復 26.0		残 3.7	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。有稜高杯。
314	2	1	下層確認トレンチ	弥生土器	高杯	復 15.0		残 9.1	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	口縁部ナデ。内面ミガキ、外面ハケ。接合部指押さえ痕あり。有稜高杯。
315	2	2	下層確認トレンチ	弥生土器	高杯			残 12.1	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内面絞り。外面器面剥落のため調整不明。３箇所に径１cmの透孔。裾部内面を肥厚。
316	2	1	遺構面検出	弥生土器	壺	復 23.8		残 6.5	密	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	器面磨滅のため調整不明。複合口縁の立ち上がり部。
317	2	1	遺構面検出	弥生土器	壺			残 2.9	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面剥落のため調整不明。上部からヘラ描沈線１条、貝殻沈線３条、貝殻羽状文施文。
318	2	1	遺構面検出	弥生土器	甕			残 3.5	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面剥落のため調整不明。口縁は小さく屈曲し外反する。外面口縁直下に３条の沈線。口縁端に刻目か。
319	2	1	遺構面検出	弥生土器	甕			残 3.2	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面ともナデ。外面口縁下に櫛描文と刺突文あり。
320	2	1	遺構面検出	弥生土器	壺		4.2	残 5.2	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面剥落のため調整不明。底部側面に指頭圧痕あり。底部上げ底。
321	2	1	遺構面検出	土師質	足鍋			残 6.5	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	指押さえによる成型痕あり。器面摩耗により調整詳細不明。
322	2	1	遺構面検出	瓦質土器	鉢			残 3.0	粗	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	褐灰色	内外面ともナデ。胎土灰白色。
323	3	1	ＳＫ 301	弥生土器	壺		8.0	残 7.6	粗	含砂粒多	軟質	黒色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。
324	3	1	砂礫堆積層3	縄文土器	鉢			残 2.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄色	にぶい黄褐色	内外面ともにナデ。口縁部及び外面口縁下に沈線。
325	3	1	砂礫堆積層3	弥生土器	甕		5.6	残 2.9	密	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面器面磨滅のため調整不明。外面ハケ。
326	3	1	砂礫堆積層3	弥生土器	甕		復 7.6	残 5.4	粗	含砂粒多	やや軟質	黒褐色	にぶい黄橙色	内面器面磨滅のため調整不明。外面ハケ。底部は上げ底で指押さえ痕あり。
327	3	1	砂礫堆積層3	弥生土器	甕	復 17.2		残 8.7	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	口縁部ハケ後ナデ。内面ハケ、ケズリ。外面ハケ。
328	3	1	砂礫堆積層3	土師器	杯	復 15.2	7.0	5.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り痕あり。
329	3	1	砂礫堆積層4	縄文土器	深鉢	復 25.8		残 9.3	密	含砂粒少	やや軟質	黒褐色	橙色	内外面ともミガキ。外面胴部に３条以上の沈線。沈線中に刺突文。上から２～３条間に疑似縄文。
330	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	壺	復 19.4		残 9.7	粗	含砂粒多	軟質	淡橙色	淡橙色	口縁部ナデ。内面器面剥落のため調整不詳。外面ミガキ。内面に突帯１条貼り付け。外面頸部下位に６条の沈線。
331	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	壺	復 19.6		残 11.9	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。口縁部内面に突帯１条貼り付け。
332	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	壺	復 17.4		残 4.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明褐色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。
333	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	壺		復 7.0	残 3.6	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。
334	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	甕		7.2	残 4.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい黄橙色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。
335	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	高杯	復 29.3		残 3.4	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも器面磨滅のため調整不明。有稜高杯。
336	3	1	砂礫堆積層4	土師器	高杯		推 9.6	残 7.0	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面ケズリ。外面器面剥落のため調整不明。
337	3	1	砂礫堆積層4	弥生土器	支脚		復 7.2	残 7.0	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。裾部指押さえ痕あり。
338	2	1	砂礫堆積層4	弥生土器	器台		復 18.0	残 11.3	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも器面風化のため調整不明。内面に絞り痕あり。
339	3	1	遺構面検出	弥生土器	蓋	つまみ径推 6.5		残 5.5	粗	含砂粒多	軟質	褐灰色	にぶい黄橙色	内外面ともナデ。内面および外面つまみ部に指頭圧痕。
340	3	1	遺構面検出	弥生土器	甕		復 5.6	残 5.0	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。底部上げ底、内面粘土充填。
341	3	1	遺構面検出	弥生土器	壺			残 7.7	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	内面ハケ、外面器面剥落のため調整不明。胴部突帯貼り付けハケ施文原体による刻目あり。突帯上位側に刺突文。
342	3	1	遺構面検出	弥生土器	壺		復 4.0	残 2.9	粗	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも器面剥落のため調整不明。
343	3	1	遺構面検出	土師器	高杯	復 10.8		残 7.9	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色 橙色	浅黄橙色	内外面ともナデ。外面脚部付け根付近に指頭圧痕。坏部底を充填。

表５　石製品観察一覧

※「復」は復元値、「残」は残存値、「推」は推定値

番号	出土面	出土地区	遺構	種類	石材	法量（cm）			重量（g）	色調	備考
						長さ	幅	厚さ			
344	2	1	ＳＰ 303	石鏃	黒曜石	復 2.0	1.6	0.36	0.7	灰白色	凹基無茎式。
345	2	1	下層確認トレンチ	石鏃	黒曜石	復 2.1	1.4	0.25	0.6	オリーブ灰色	凹基無茎式。
346	2	1	下層確認トレンチ	石鏃	安山岩	復 2.2	1.4	0.27	0.7	オリーブ黒色	平基無茎式。
347	2	1	遺構面検出	石鏃	安山岩	残 1.7	復 1.7	0.27	0.2	オリーブ黒色	凹基無茎式。
348	2	2	砂礫堆積層1	石鏃	安山岩	2.4	1.7	0.4	1.5	オリーブ黒色	平基無茎式。
349	3	1	遺構面検出	石鏃	安山岩	2.4	1.5	0.3	0.8	オリーブ黒色	凹基無茎式。
350	2	2	砂礫堆積層1	磨製石斧	塩基性片岩	残 8.1	推 5.6	2.5	142.5	オリーブ灰色	全体に磨きがかるが、器面磨滅のため顕著な磨痕は確認できない。
351	1	2	下層確認トレンチ	打製石斧	泥質片岩	残 12.2	5.9	2.5	284	灰色／灰白色	
352	2	2	砂礫堆積層1	打製石斧	泥質片岩	残 6.9	残 7.2	1.5	128	灰色／灰白色	両端ともに欠損。
353	3	1	砂礫堆積層4	打製石斧	泥質片岩	残 6.4	残 5.2 推 7.0	1.0	49.4	灰色／灰白色	刃部１／３欠損。
354	1	1	ＳＤ９中央トレンチ	敲石	砂岩	長寸 8.1	短寸 7.8	7.0	671	黄灰色	長軸片面に集中して敲打痕。
355	3	1	砂礫堆積層4	敲石	砂岩	長寸 7.8	短寸 7.2	6.2	454.5	灰白色	長軸上下に敲打痕。
356	2	2	下層確認トレンチ	紡錘車	角閃石安山岩	外径 4.2		0.7	9.4	明褐灰色	穴径 0.5 ㎝。全体に丁寧な研磨を施す。
357	3	1	砂礫堆積層4	紡錘車（未製品）	角閃石安山岩	長寸 5.4	短寸 4.7	0.9	28.1	灰白色	側縁に成型痕、片面に研磨痕あり。

表６　鉄製品観察一覧

※「復」は復元値、「残」は残存値、「推」は推定値

番号	出土面	出土地区	遺構	種類	法量（cm）				備考
					長さ	幅	断面	厚さ	
358	2	1	ＳＤ９－Ⅱ	鉄鏃	残 5.1		0.8 × 0.5		茎関及び頸部と茎部。
359	1	1	ＳＫ６	鉄鏃	残 3.2		0.7 × 0.6		茎部。
360	1	1	ＳＰ 144	釘	4.8		0.4 × 0.3		折れ釘。
361	1	1	ＳＰ 156	釘	残 1.8		0.6 × 0.5		折れ釘。
362	2	1	ＳＰ 316	釘	残 2.7		0.6 × 0.5		折れ釘。
363	2	1	ＳＰ 351	釘	残 2.7		0.4 × 0.5		折れ釘。
364	1	1	ＳＫ 12	刀子	残 8.7	1.2		0.6	刃部。
365	1	1	ＳＫ 14	馬具（轡）	径 5.2		1.4 × 0.8		断面が楕円（長径 0.8 ㎝）の留め具付着。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、12～13世紀代を中心とする掘立柱建物群や土坑、溝状遺構、土坑墓などが検出され、当該期の土師器を主体として、縄文土器、弥生土器、土師器、輸入陶磁器、瓦質土器などの土器類、石鏃や石斧などの石器類、鉄鏃や刀子などの鉄器類など数多くの遺物が出土した。そうした中で、ここでは本遺跡の特徴的な項目についていくつか取り上げて、まとめとしたい。

１　遺構について

⑴　掘立柱建物群について

本遺跡からは、第１面８棟、第２面４棟、第３面９棟、計21棟の掘立柱建物跡が検出された。全体規模がわかる中で最大のＳＢ10は４間×２間、床面積は39.01㎡を測る。梁行の全容は不明だが、桁行５間（10.6m）の大規模な掘立柱建物（ＳＢ６）も検出された。こうした大型建物を中核として、同時期数棟で一つの単位となる屋敷地を構成していたものとみられる。検出された建物群は、少なくとも第２面・第１面については、ＳＤ９で区分された２単位の屋敷地の状況を示すものであろう。

これらの建物群の棟方向をみると、21棟中17棟が、北から東または西に40°～48°の範囲で建てられており、その棟方向に統一性が認められる。これは、佐波川右岸の条里割の方向[1)]とほぼ合致することから、条里割の中に整然と建物群が建設されていたことがうかがえる。

なお、１間×１間の小規模な建物は第３面に集中しており、これらの棟方向は、条里割の方向ともかけ離れるうえに統一性が無い。一方、第３面でも西半部の比較的規模の大きい建物群は、条里割の方向とほぼ合致している。これらは層位的には、条里と関連するとみられるＳＤ９掘削以前の段階のものであり、その棟方向が何に起因するものか注目されるところである。条里の施行の問題とも関連するとみられるが、さらに周辺地区の調査の進展を踏まえた総合的な検討が必要であろう。

⑵　溝状遺構ＳＤ９について

Ⅰ地区中央部を横断する形で走る、最大幅3.76m・深さ0.9mの溝である。埋土の粘質土堆積層は大別して三層に区分され、少なくとも３時期にわたって利用された溝である。地形は北西から南東に向けて若干下がっているが、調査区内での溝底のレベルはほぼフラットな状態である。また、粘質土の堆積状況から、流速はゆるく淀んでいた可能性もある。本調査区の北西側で市教委によるトレンチ調査が行われているが、その際にこの溝に続くと思われる溝の一部が検出されており、総延長は30mを超えると推定される。

ＳＤ９の流路方向はＮ40°Ｗ～Ｎ45°Ｗで、佐波川右岸の条里割の方向[1)]と合致する。このことから、条里制または条里の区割りに関係する溝である可能性は高い。ＳＤ９の盛期は、後述のようにＳＤ９－Ⅱから出土した土師器群などから12世紀末～13世紀前半代であると考えられる。しかし、溝最下層のＳＤ９－Ⅲの出土遺物は少なく、掘削された時期を特定する明確な資料としては充分でない。当地域における条里制開始時期との関連については今後の成果に期待したい。

⑶　土坑について

今回の調査では、土坑44基を検出した。特徴的な土坑としては、土坑墓の可能性がある土坑（ＳＫ９・201等）が挙げられる。第２面で検出されたＳＫ201を除く５基（ＳＫ９・12・31・32・33）は、

第１面に掘り込まれたものである。これらの土坑のうち、ＳＫ９・31・201については、埋土のリン酸カルシウム分析をおこなったが、土坑墓である確証を得る結果には至らなかった。しかし、いずれの土坑からも土師器の杯や皿が出土しており、その出土状況や土坑の規模・形状等から、土坑墓である可能性が高い。これらは建物群と時期的に大きな隔たりはないとみられ、いわゆる屋敷墓を構成していたものとして注目されよう。

⑷　砂礫堆積層について

人為的に造られた遺構ではないが、本遺跡からは第２面・３面において砂礫の堆積が計４箇所で認められた。共通する特徴としては、①遺構面の上層から遺構面の下層にかけてチューブ状に砂礫が流れ込んでいる、②ほとんどが粘りの無い、質の異なる砂質の層が幾層も重なって構成され、こぶし大までの礫を若干含む、③弥生土器を中心に大量の遺物を包含する、④底面は起伏に富む、等が挙げられる。砂礫の堆積状況や底面の様子から、剣川や支流の流路が調査区中を通っていた時期があるものと考えられる。また、剣川の氾濫時に大量の砂礫を流入させたことも考えられる。建物群の中での建て替えを示すものや大別３期にわたる変遷は、こうした大小の洪水に起因するものである可能性があろう。また上位側周辺地区に弥生時代を中心とした集落の存在を予測させるものといえよう。

⑸　第２～３面間の黒色土層について

Ｉ地区東半の第２面と第３面の間には、水田土壌かとみられる黒色土層が広がっていたため、これについて土壌分析を行った。しかし、花粉やプラント・オパール等の分析状況からは水田の痕跡とは認められなかった。したがって、条理地割に関連するとみられるＳＤ９の掘削以前の第３面段階や以後の第２面・１面の段階においても、この地は屋敷地として立地し続けたものといえる。

２　遺物について

⑴　ＳＤ９－Ⅱ出土土師器について

今回の調査では、土師器の椀、杯、皿の出土数が多く、報告書掲載分だけでも200点を越す。とりわけ、ＳＤ９－Ⅱからは、椀・杯・皿がまとまって出土しており、一括性の高い良好な資料として注目されるものである。

椀は13点が出土した。内10点が灰白色を呈し、残りは橙色系である（表７）。口径14.4～16.8㎝（平均15.5㎝）、底径4.8～7.0㎝（平均5.6㎝）、器高4.4～6.1㎝（平均5.2㎝）を測り（表８）、杯よりも大振りの個体が多い。口径と底径の関係を見ると、口径が最大値で底径が最小値のものがあり、その逆もあることから、口径と底径との相関関係は明確には言及できない。器壁、底部共に薄目で高台は低いが、断面形は台形をしたものと三角形に近い台形をしたものとがあり、三角形の低い高台のものは含まれていない。

杯は35点が出土した。橙色系と白色系の比率を見ると、ほぼ６：４になっている（表７）。このことは、第１面から出土した杯の色調の傾向[2)]と比べて、若干白色系が多いことを示す。口径13.0～16.8㎝（平均14.5㎝）、底径5.4～8.4㎝（平均6.4㎝）、器高3.6～5.2㎝（平均4.3㎝）を測り（表８）、椀よりも小型の個体が多い。第１面出土杯の法量の平均値とほとんど同じである。

皿は、89点が出土した。橙色系と白色系の比率を見ると、ほぼ８：２になっており（表７）、圧倒的に橙色系が多い。このことは、本遺跡出土全土師器皿中の傾向ともあてはまる。口径7.4～9.4㎝（平

均8.3cm)、底径3.6～6.0cm（平均4.6cm)、器高1.4～2.4cm（平均1.8cm）を測り（表８)、第１面の皿の平均値と変わらない。

これらのＳＤ９－Ⅱ出土土師器の編年的位置付けであるが、長門地域を中心にした小南編[3]年のＩ期の範疇に納まるが、杯における橙色系の比率からみれば、後出的要素が強い。また周防地域では、紀年銘資料として注目される玉祖神社出土の白色[4]椀や周防国府跡第78次調査ＳＥ5305出土資[5]料などと対比すれば、ＳＥ5305出土資料に比較的近い内容をもつものとみられる。ただ、ＳＤ９－Ⅱにおける椀の高台の退化傾向に注目するとすれば、個体差の問題はあるものの、これより相対的に新しい様相ととらえることができよう。このＳＥ5305出土資料については実年代比定に異論もあるが、ここでは従来の年代観も踏まえながら、ＳＤ９－Ⅱ出土土師器について一応12世紀末～13世紀前半代に位置づけておきたい。

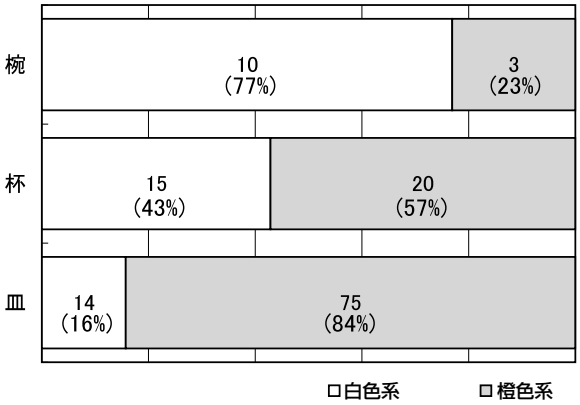


表7　SD9－Ⅱ出土土師器の色調

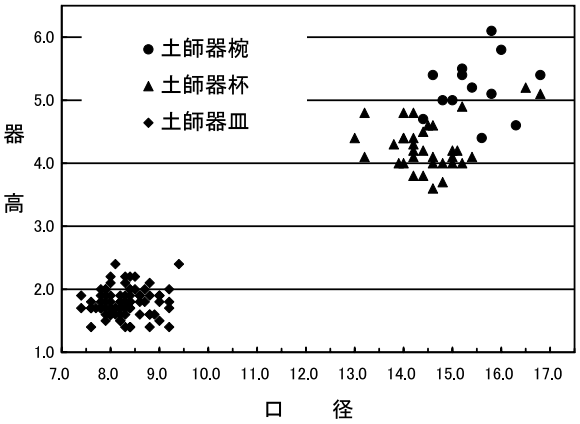


表8　SD9－Ⅱ出土土師器の法量分布

⑵　柱状高台皿について

今回の調査では、柱状高台を持った皿が３点出土した（図64)。八峠興氏による柱状高台皿の分[6]類によれば、63はⅢＢ類、248はⅡＢ類、257はⅡＡ類にそれぞれ属する。257は下右田遺跡第９次ＳＥ222から出土したも[7]のと類似する（図65ａ)。時期としては、八峠編年では、11世紀～12世紀前半代に属するものであろう。248は、類例に乏しいが、高台部がやや低く内傾して立ち上がる特徴から、257よりは相対的に新しいものであると考えられる。63は皿部の立ち上がりが浅く、器高は底径と同じ程度に高い。類似する器形の下右田遺跡での出土例はこれまでない。ＳＰ112の底から、ほぼ欠損の無い状態で出土した（図20)。逆さまでほとんど水平に置かれていたと考えられることから、地鎮のために据えられた特別な器であったろうと考えられる。八峠編年によれば、12世紀後半代にあたると考えられる。

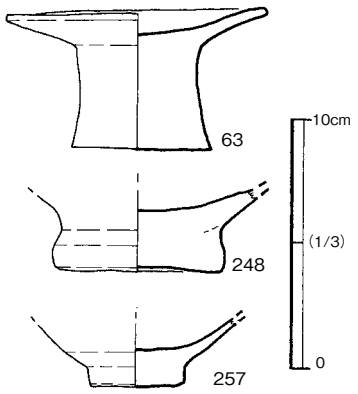


図64　本遺跡出土の柱状高台皿

これまでの下右田遺跡で出土した柱状高台[8]皿には、図65ａ～ｄのような形状のものもあるが、中央部に穿孔のあるタイプ（図65ｅ）もある。また、高台部が中空の「高台付皿」も数点出土している（図65ｆ・ｇ)。本遺跡からは穿孔のあるタイプと高台付皿は出土していない。

こうした柱状高台皿については、県内でもこれまで各地で出土しているが、１遺跡あたりの出土点数は少なく、また完形での出土例も乏しいことなどから、あまり注目される資料ではなかった。今回

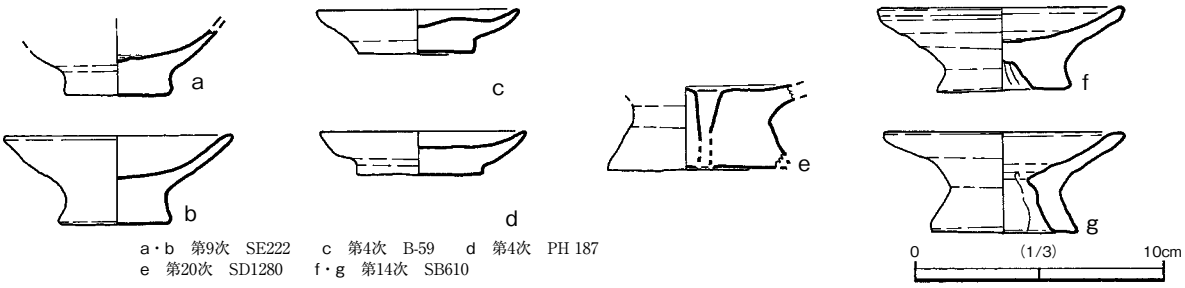


図65　下右田遺跡概出の柱状高台皿および高台付皿

も出土点数は少ないものの、１点はほぼ完形で、しかも具体的な用例の一端をうかがいうるものとして注目される資料といえる。柱状高台皿は、時間軸のある程度限られた資料であり、従来高台付皿として分類されてきたものの再検討も含め、今後さらに地域的な編年の確立が必要であろう。

３　おわりに

今回の調査を通じて、下右田遺跡の西端地区における中世村落の構造の一端が明らかとなった。調査地区は剣川に近接し、当時必ずしも居住環境に適したとは言い難い場所であるが、大型建物を含む屋敷地の一角が確認された。条里に関連したとみられる溝も確認されており、屋敷地自体もこれに規制された構成と推定される。こうした屋敷地は、これまでの調査でも囲郭溝を有する単位として確認されており、西南約100mの地点でも検出されている。これら各単位の性格や相互の関係等が問題となるが、さらに周辺地区の調査の進展を踏まえた総合的な検討により、下右田地区における中世村落の全体像に迫る必要があろう。

なお、第３面の下に古墳時代や弥生時代の遺構面があるかどうかについて確認したが、第３面の遺構面を形成していた砂層が深く続き、さらにその下は大きな礫の層が続く状況であった。治水や利水は人々の生活にとって必要不可欠な技術で、古来人々はさまざまな方法で自然と闘ってきた。本遺跡に暮らしていた人々も、剣川や佐波川の氾濫に苦しみながら、ようやくこの場所に生活の場を築けるようになったのではないだろうか。調査区で見られた砂礫堆積層や同一地での居住継続の痕跡などからは、自然と人為の相克の様を彷彿とさせる。

註
１）防府市教育委員会編『防府市史　通史Ⅰ　資料Ⅱ』2004
２）第１面出土土師器杯の白色系の割合は、約35％である。
３）小南裕一「長門地域の中性土師器編年試案」『上太田遺跡・市の瀬遺跡・南ヶ畑遺跡』山口県埋蔵文化財センター　2004
４）杉原和惠「周防一宮玉祖神社所蔵の考古資料－皇朝十二銭と紀年銘土師器の紹介－」『山口考古』第22号　2002
５）吉瀬勝康『周防国府跡第78・84次発掘調査概要』防府市教育委員会　1995
６）八峠　興「柱状高台考」『中世土器研究論集』中世土器研究会　2001
７）大林達夫・吉瀬勝康・原田光朗『下右田遺跡第９・10・13・14・15・17次発掘調査概報－市道開出塚原線改良事業に伴う発掘調査概報－』防府市教育委員会・周防国府跡調査会　1999
８）各報告書中では、皿・台付皿等に分類されているが、八峠分類に照らして柱状高台皿とした。

参考文献
山口県教育委員会編『山陽自動車道・防府バイパス下右田遺跡　第４次調査概報・総括』1980
山口県教育委員会編「防府市　右田・一丁田遺跡」『防府市　右田・一丁田遺跡　徳山市　的場・宮の馬場遺跡　徳山市　久米市遺跡』1973
佐々木達也『下右田遺跡第20次発掘調査報告－宅地造成に伴う発掘調査報告－』防府市教育委員会・周防国府跡調査会　2002

図　　版

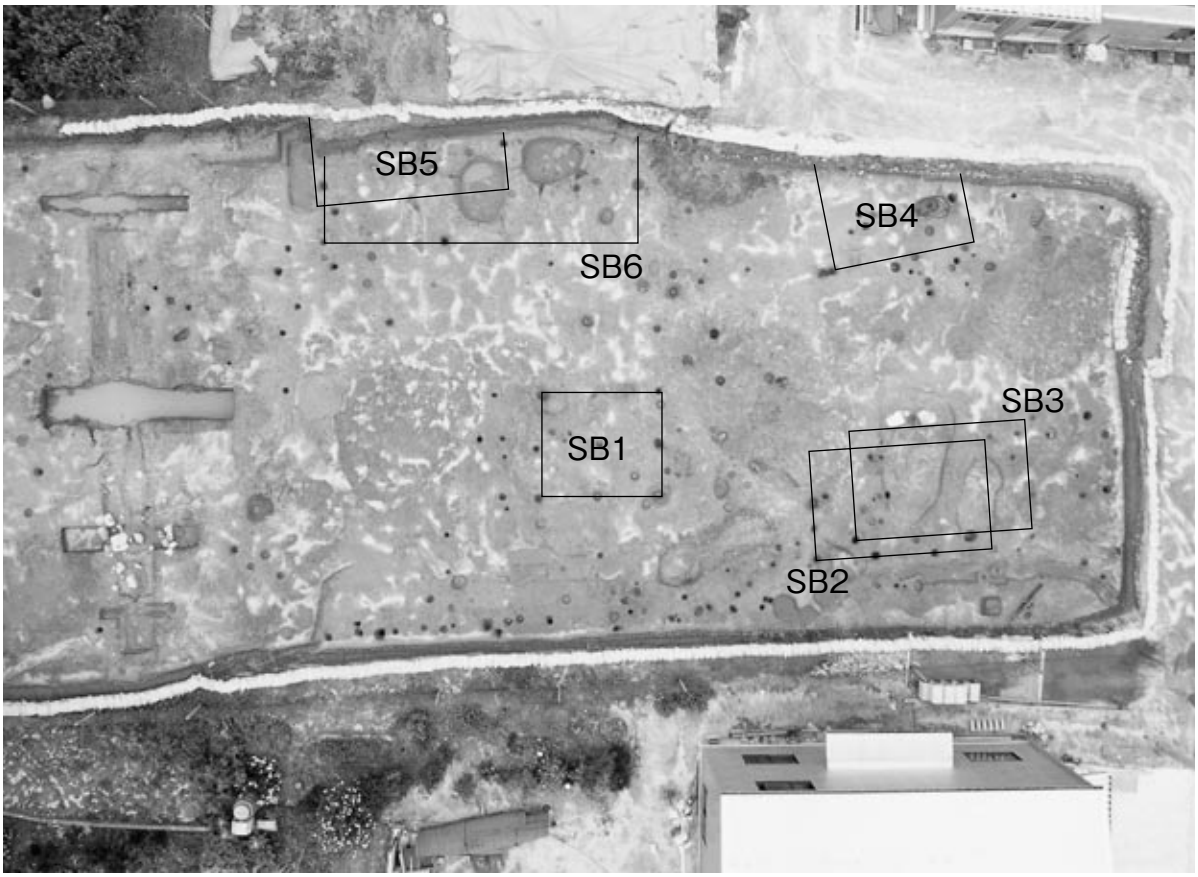
調査区遠景（南西から）

図版２

調査区全景（南東から）

Ⅰ地区　第１面完掘状況（南東から）

Ⅱ地区　第１面完掘状況（南東から）



Ｉ地区　掘立柱建物群（南東から）

ＳＢ７・８　完掘状況（南東から）

図版４

ＳＤ９－Ⅰ　完掘状況（北から）

ＳＤ９　中央トレンチ土層断面（南東から）

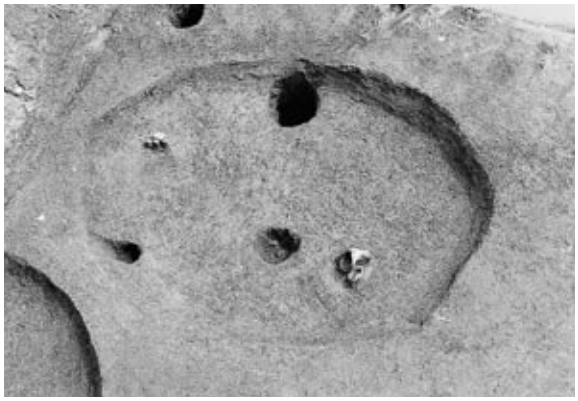
ＳＤ９－Ⅰ　土器出土状況（北東から）

ＳＤ10　土器出土状況（北西から）

図版６

ＳＫ17　土器出土状況（北西から）

ＳＫ14　土器出土状況（南西から）

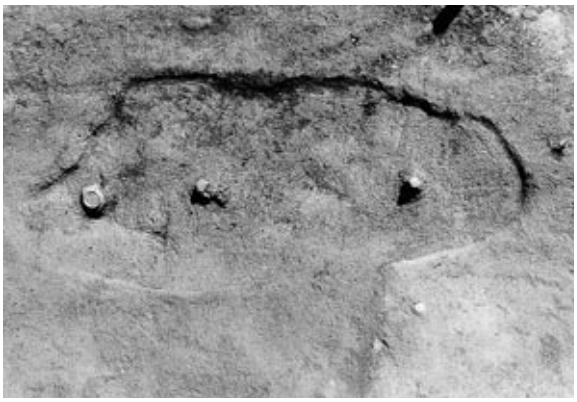


ＳＫ５　土器出土状況（南から）

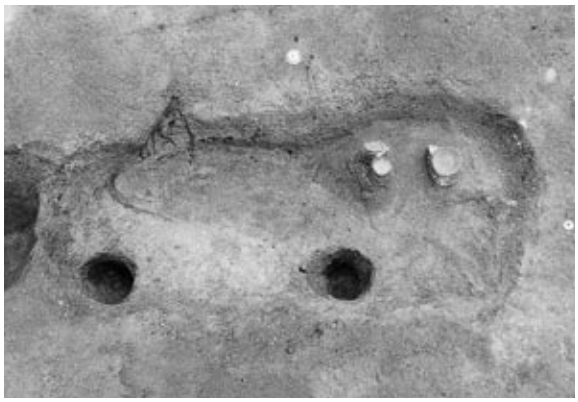
ＳＫ６　完掘状況（南西から）

ＳＫ10　土器出土状況（東から）

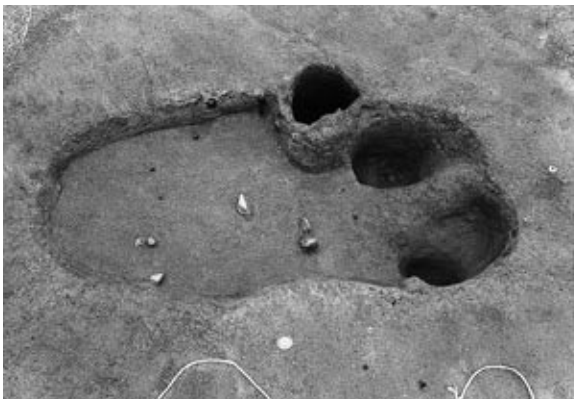
ＳＫ12　土器出土状況（北東から）



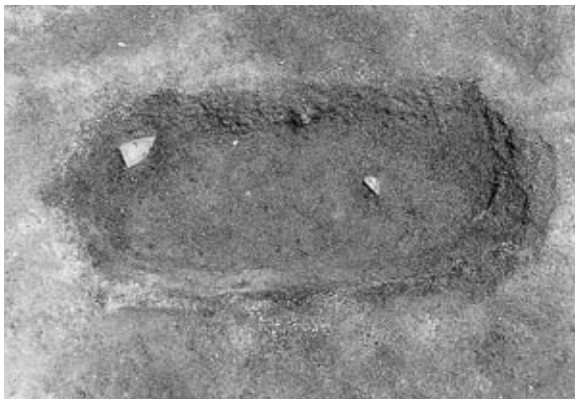
ＳＫ９　土器出土状況（西から）



ＳＫ31　土器出土状況（北西から）

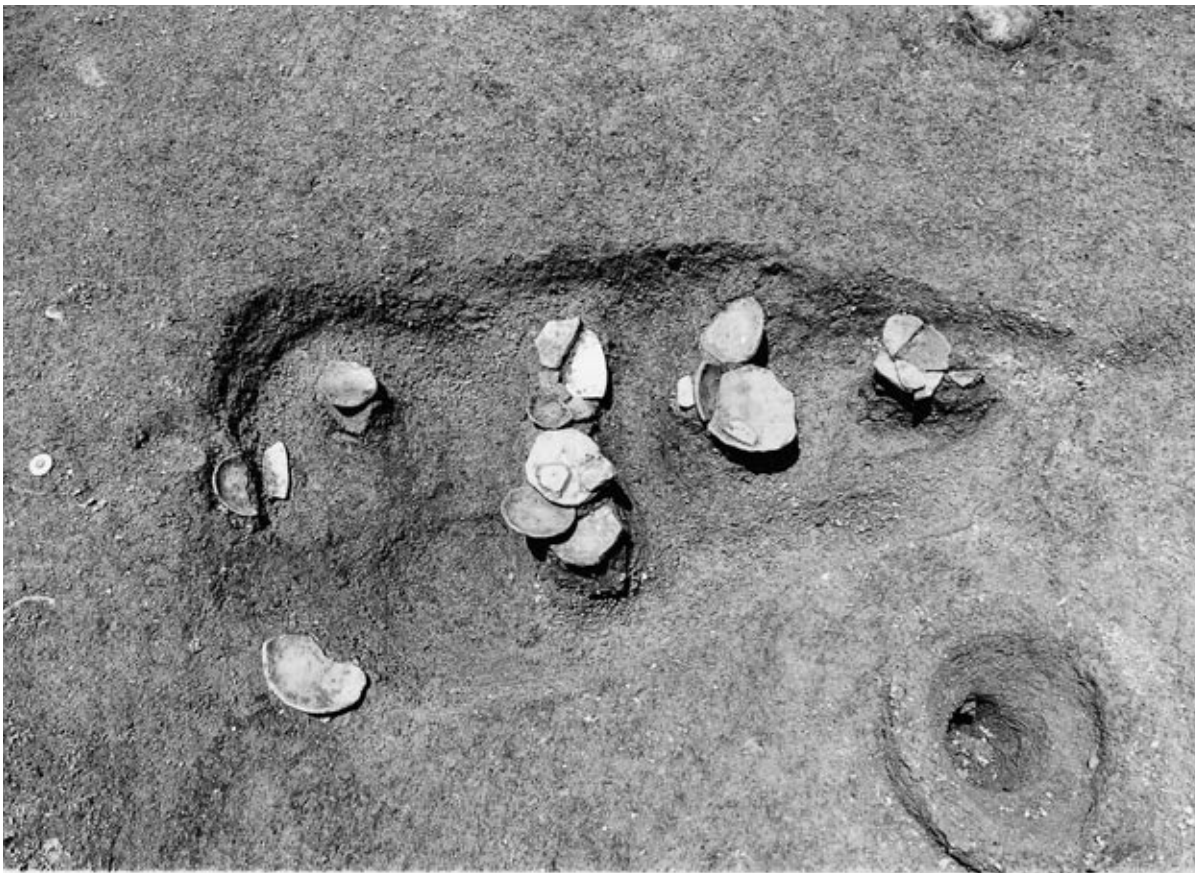


ＳＫ32　土器出土状況（南西から）



ＳＫ33　土器出土状況（西から）

図版８



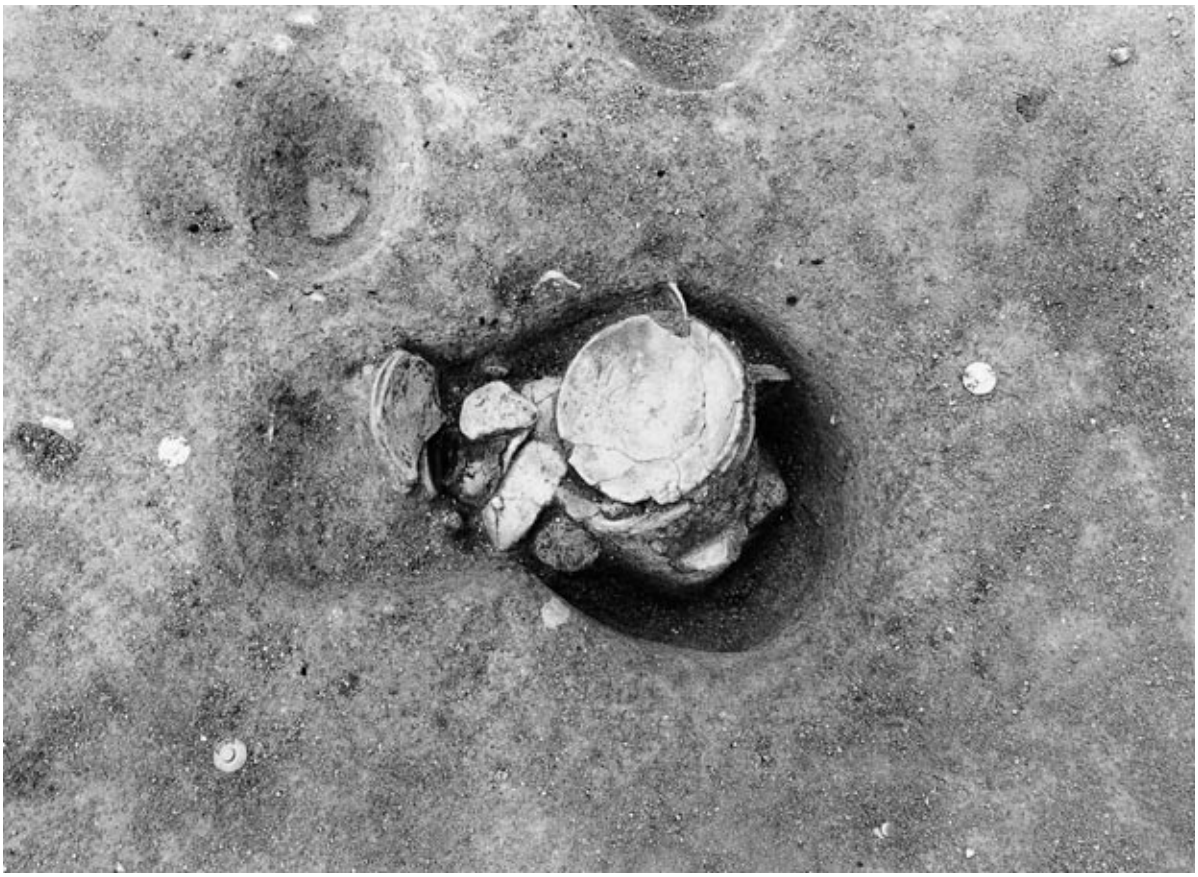
ＳＫ19　土器出土状況（北から）

ＳＫ16　土器出土状況（北西から）

ＳＫ23　土器出土状況（北から）

ＳＫ24　土器出土状況（南から）

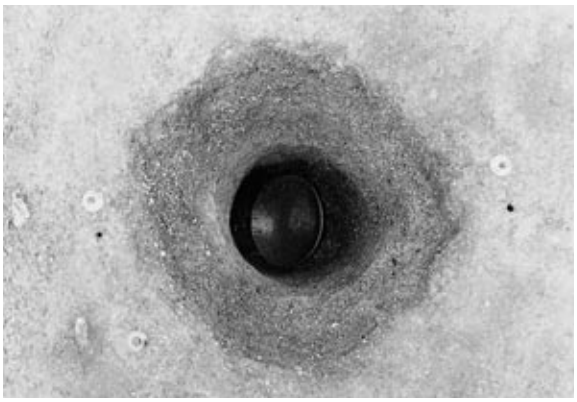
ＳＫ25　完掘状況（南東から）



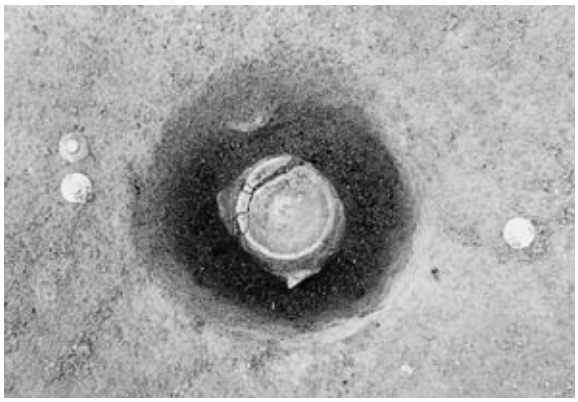
ＳＰ119　土器出土状況（東から）

ＳＰ112　土器出土状況（南から）

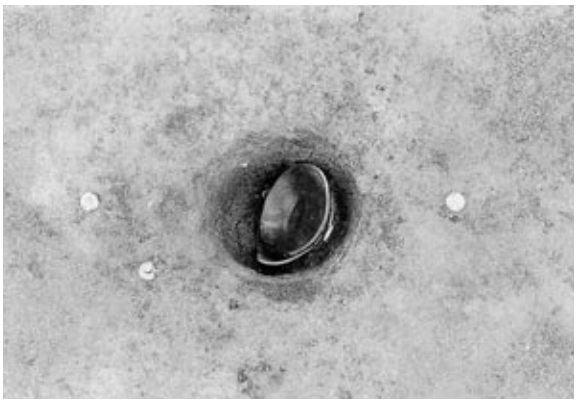
図版 10



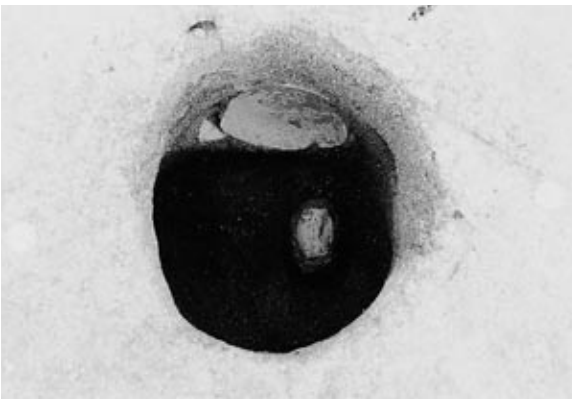
ＳＰ36　土器出土状況（東から）



ＳＰ152　土器出土状況（西から）



ＳＰ157　土器出土状況（南から）



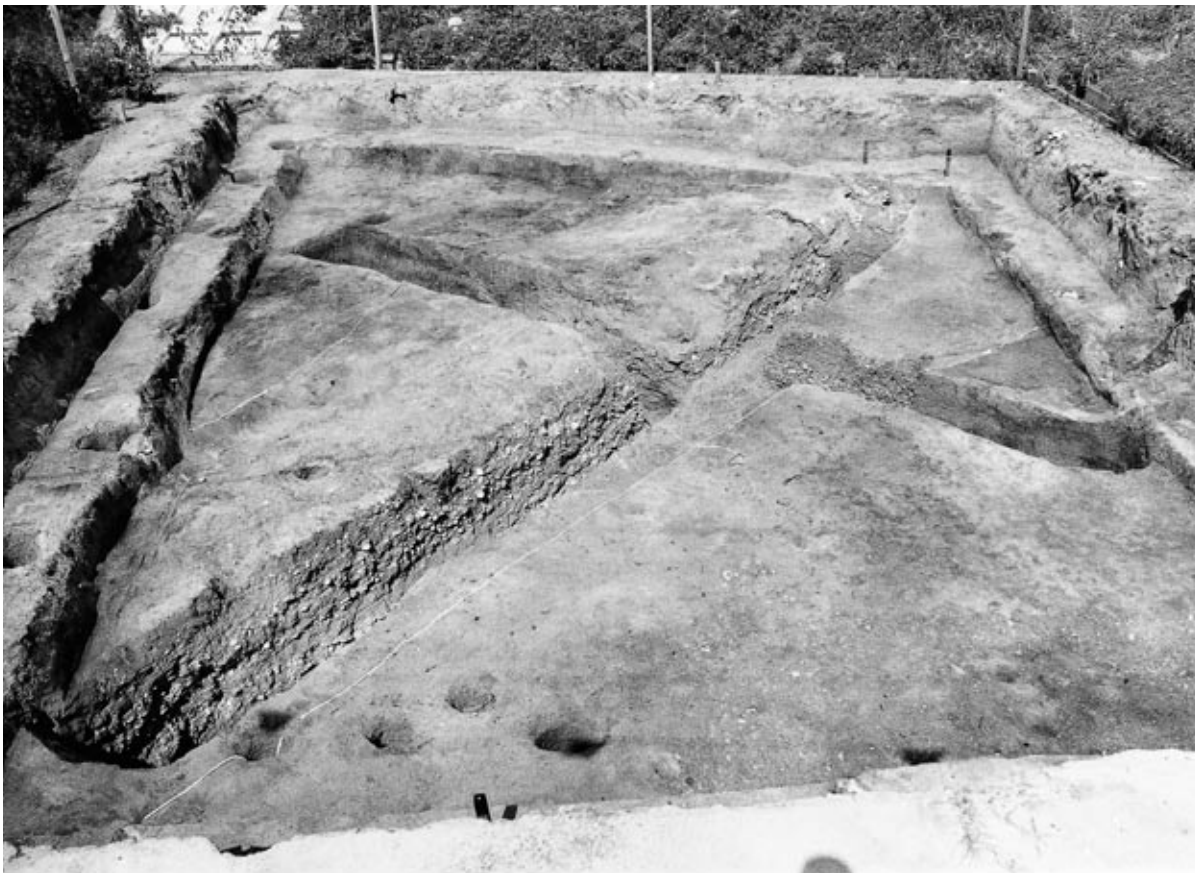
ＳＰ13　土器出土状況（南から）

ＳＸ１　土器出土状況（南西から）

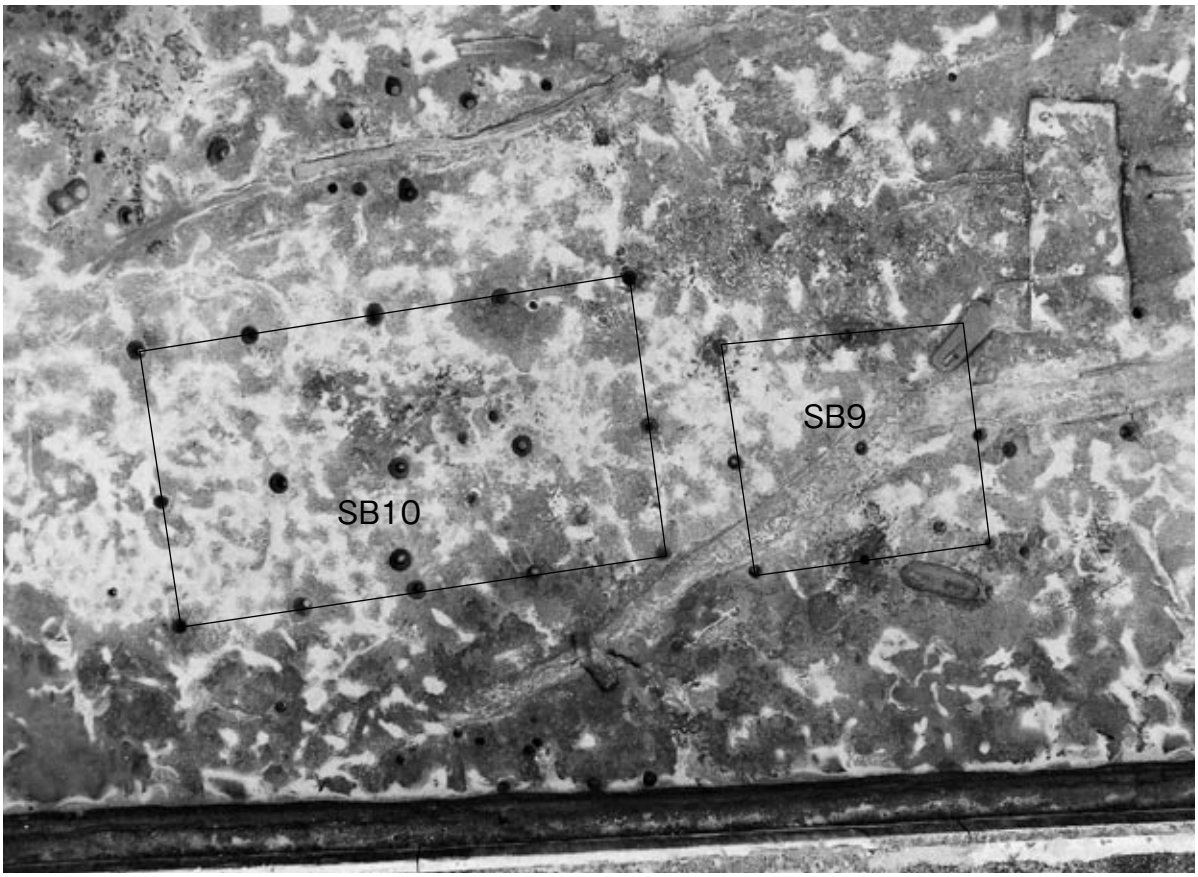
Ⅰ地区第２面東側　完掘状況（北西から）

Ⅰ地区第２面西側　完掘状況（北西から）

図版 12



Ⅱ地区第２面　トレンチ掘削状況（南西から）



ＳＢ９・10　完掘状況（南東から）

ＳＤ９－Ⅱ　土器出土状況（北から）

ＳＤ９－Ⅱセクション１　土器出土状況（南西から）

図版 14

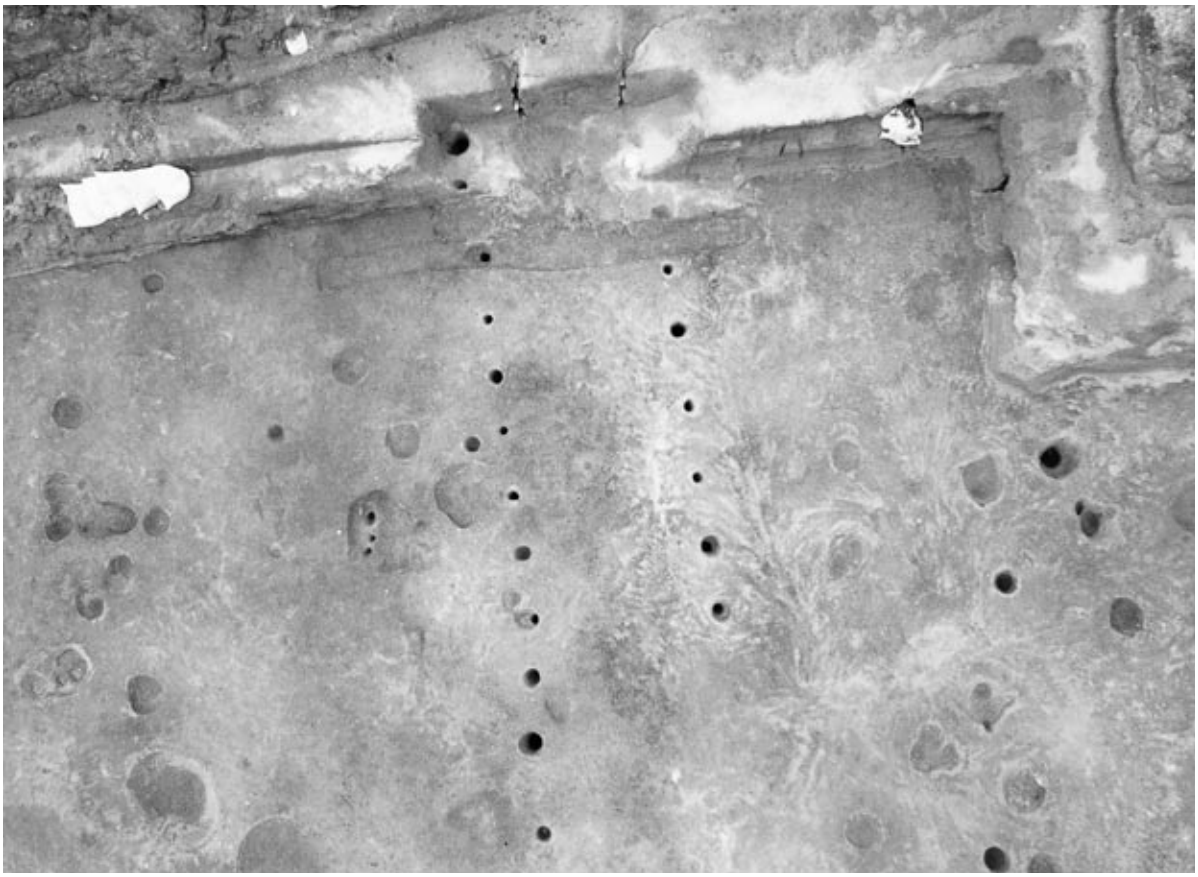
ＳＤ９－Ⅱセクション２　土器出土状況（南東から）

ＳＤ９－Ⅱセクション３　土器出土状況（南から）

ＳＤ９－Ⅱセクション４　土器出土状況（北西から）

ＳＤ９－Ⅱセクション５　土器出土状況（北西から）

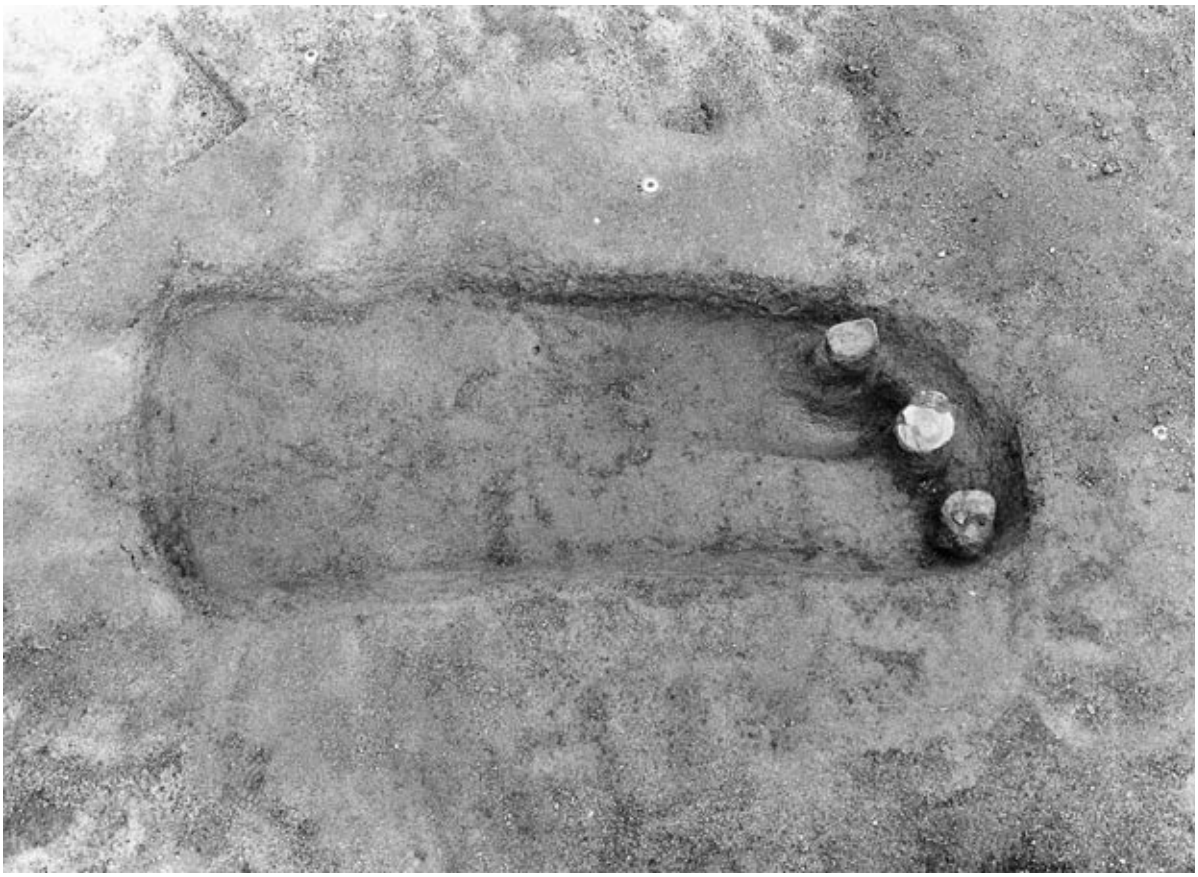
ＳＤ９－Ⅲ　完掘状況（北西から）



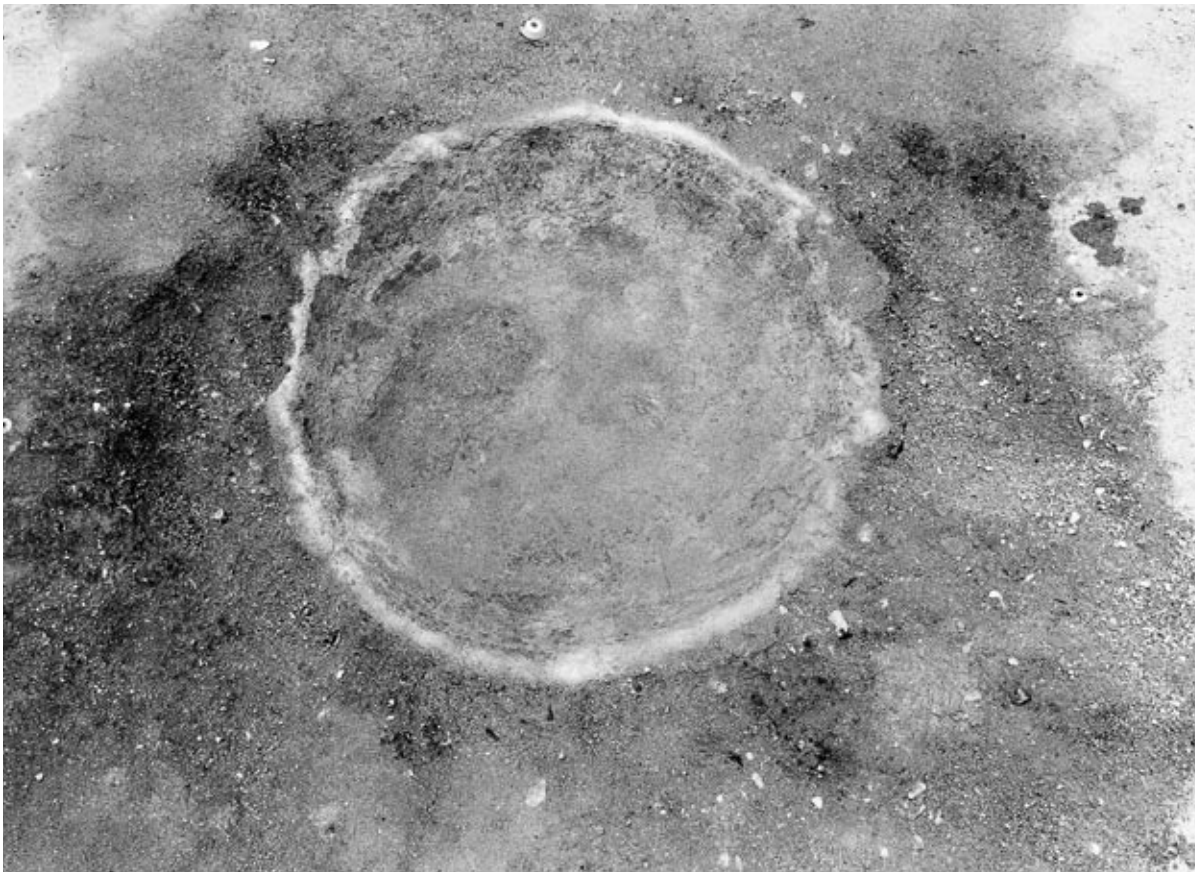
ＳＤ９－Ⅲ　杭列　完掘状況（北西から）

ＳＤ11・12　完掘状況（北東から）

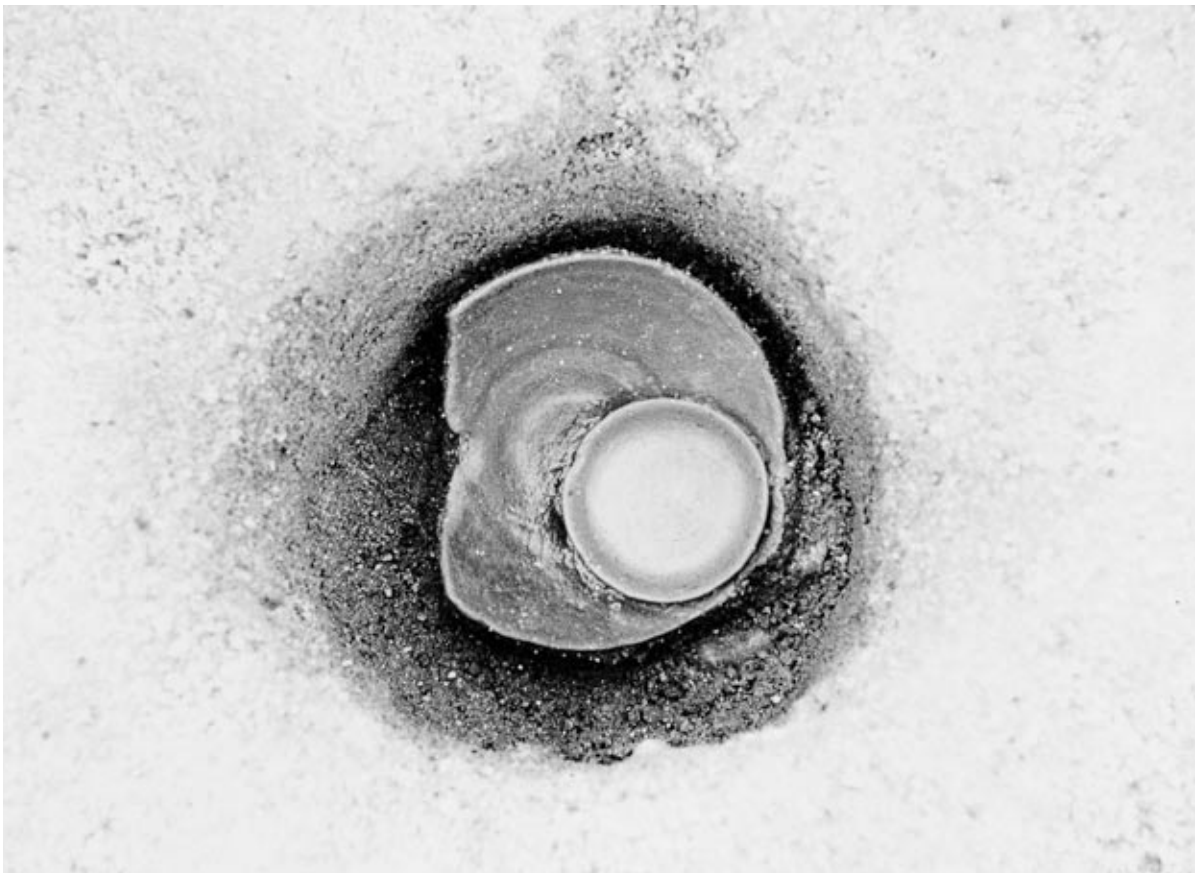
図版 16



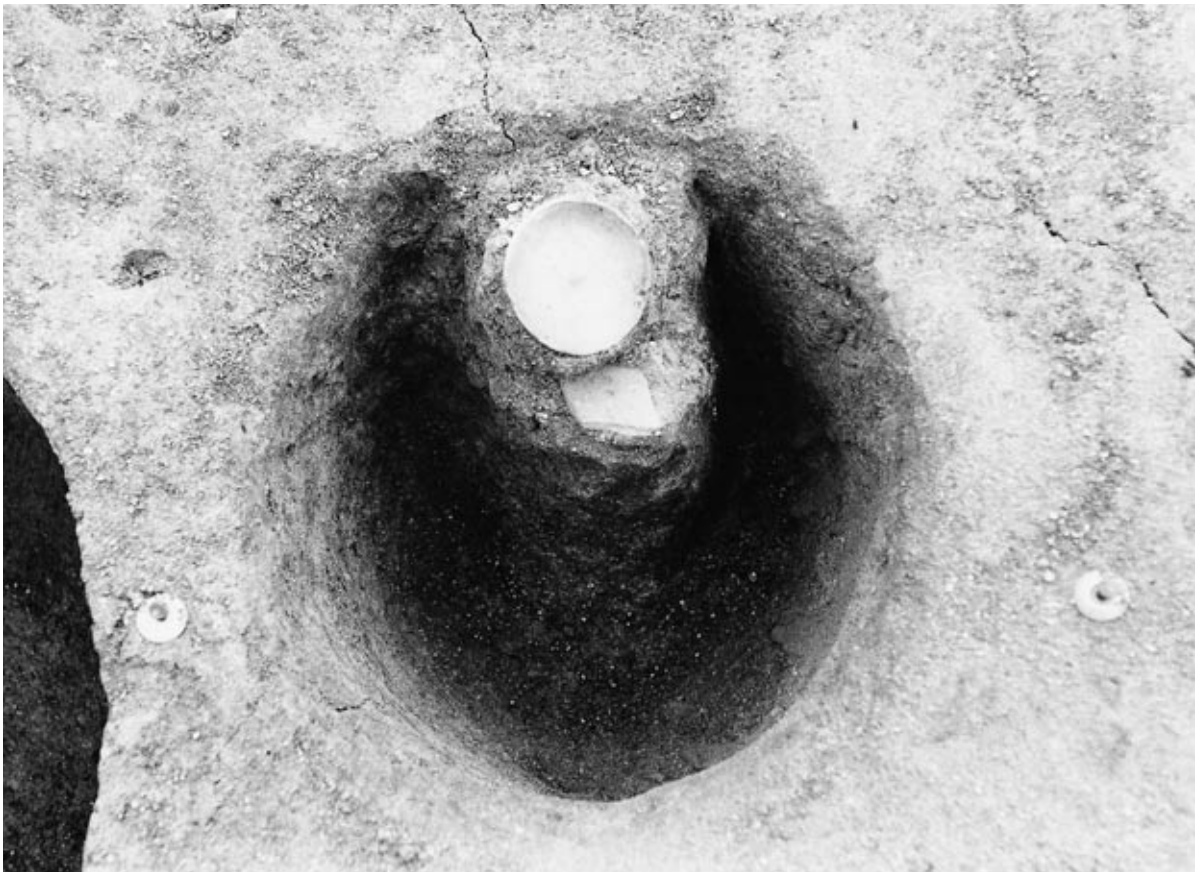
ＳＫ201　土器出土状況（西から）



ＳＸ２　完掘状況（東から）



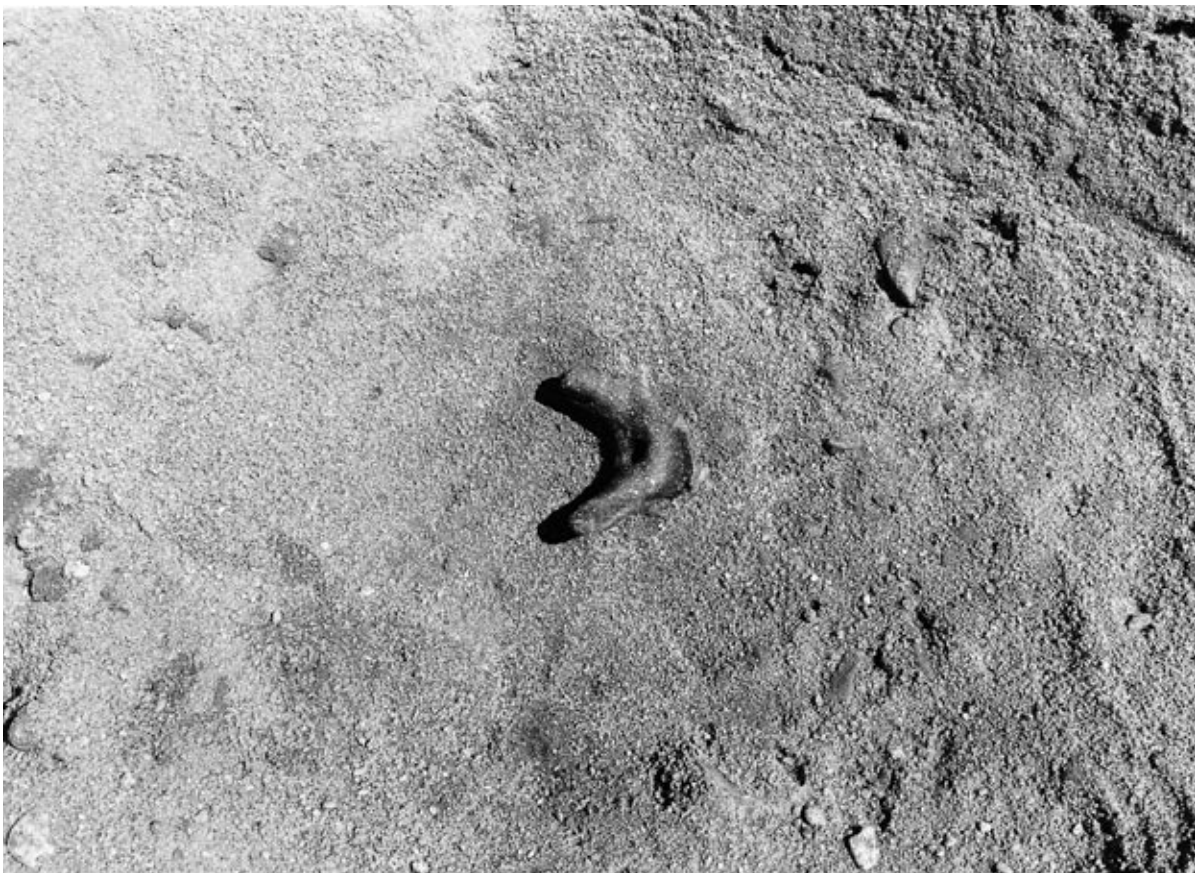
ＳＰ337　土器出土状況（北から）



ＳＰ349　土器出土状況（西から）

図版 18

砂礫堆積層１　完掘状況（南西から）



支脚出土状況（南から）

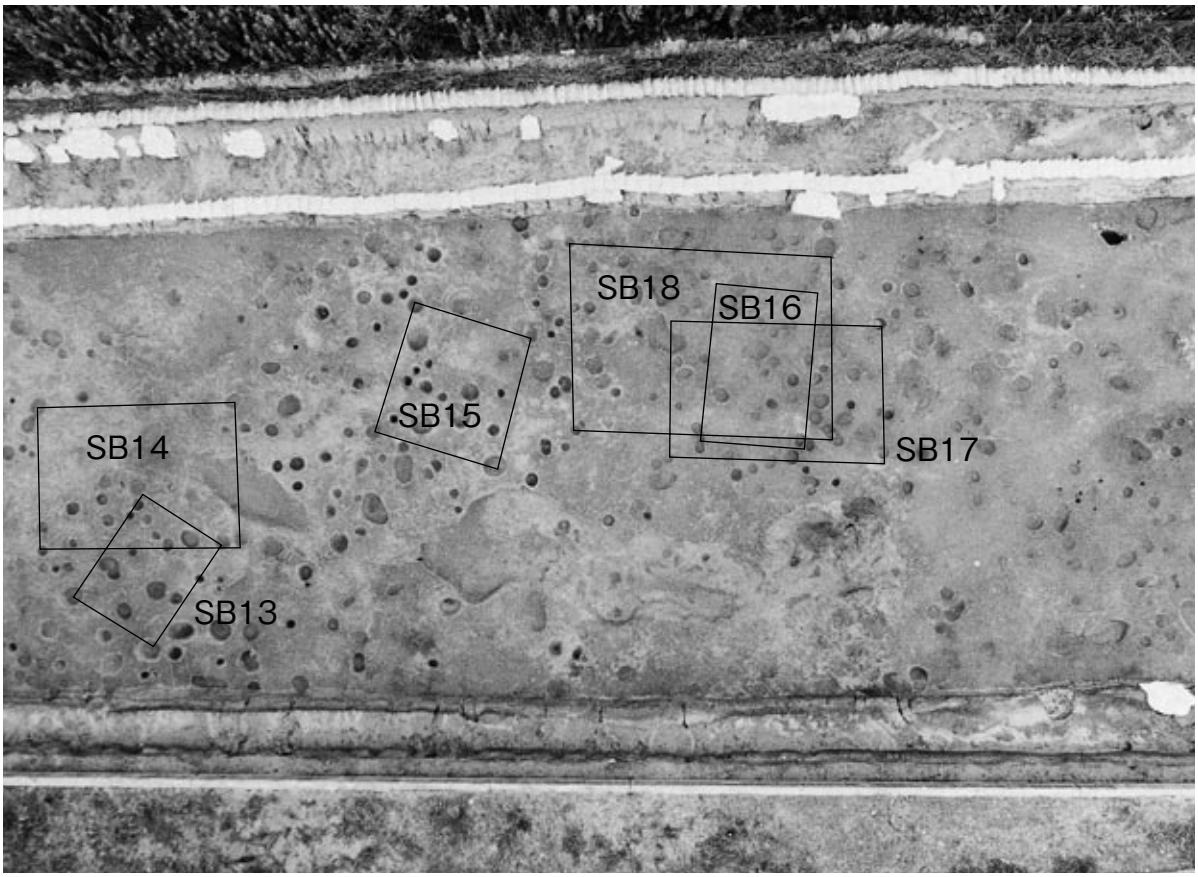
Ⅰ地区第３面　完掘状況（南東から）

Ⅰ地区第３面東側　完掘状況（南東から）

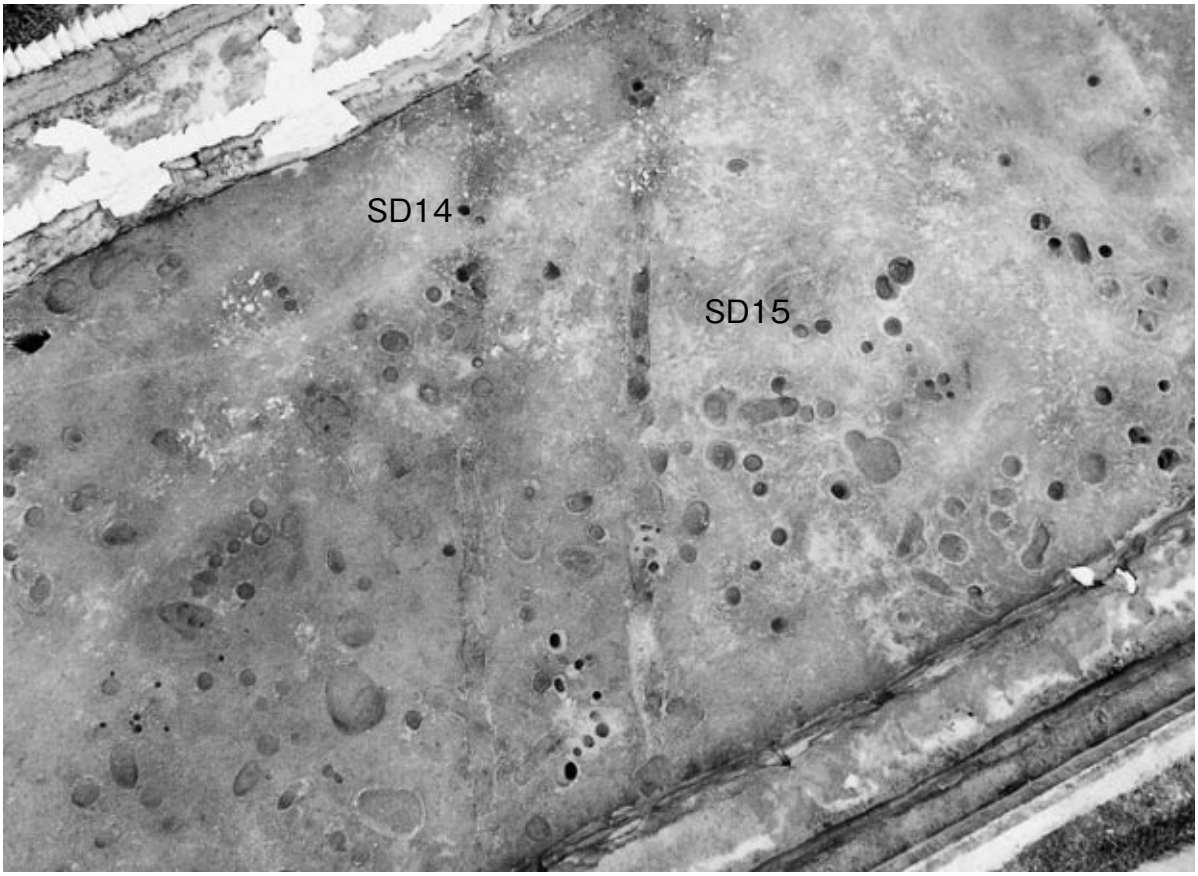
図版 20

Ⅰ地区第３面中央　完掘状況（北西から）

Ⅰ地区第３面西側　完掘状況（北西から）



Ⅰ地区　掘立柱建物群（南東から）

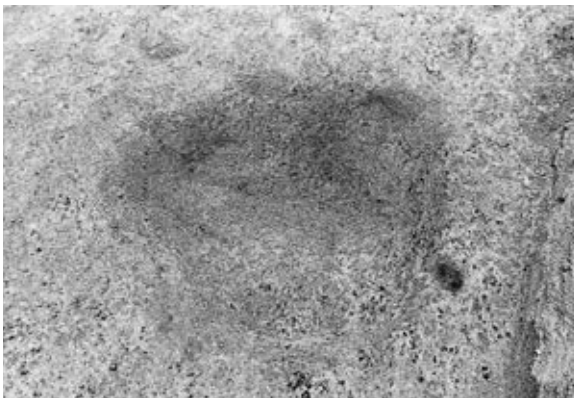


ＳＤ14・15　完掘状況（南から）

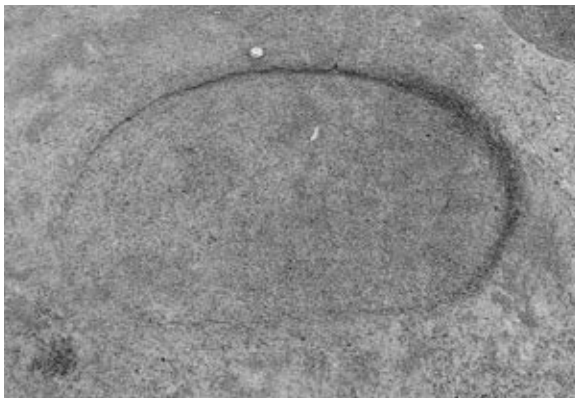
図版 22

ＳＫ301　土器出土状況（東から）

ＳＫ320　土器出土状況（西から）



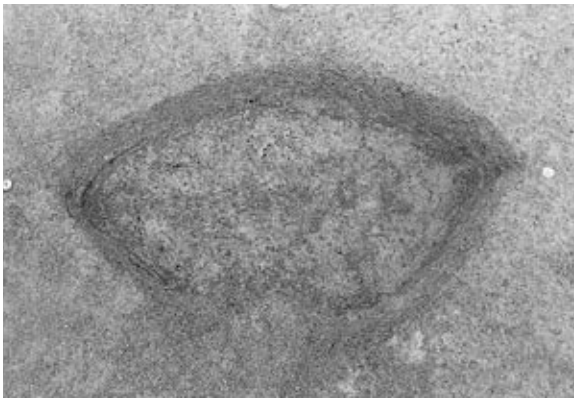
ＳＫ303　完掘状況（南から）



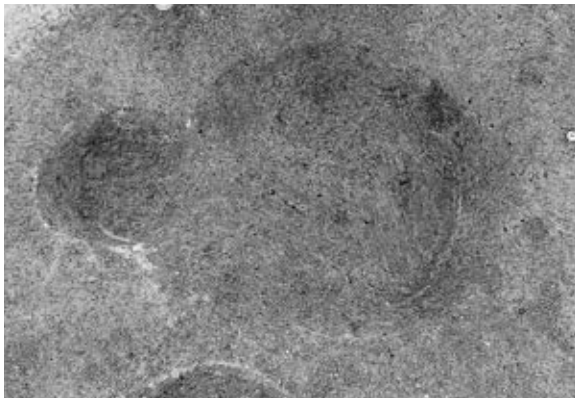
ＳＫ306　完掘状況（南から）

ＳＫ311　完掘状況（南西から）

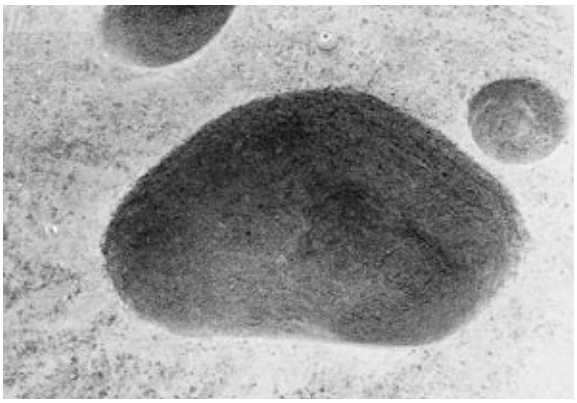
ＳＫ312　完掘状況（南から）



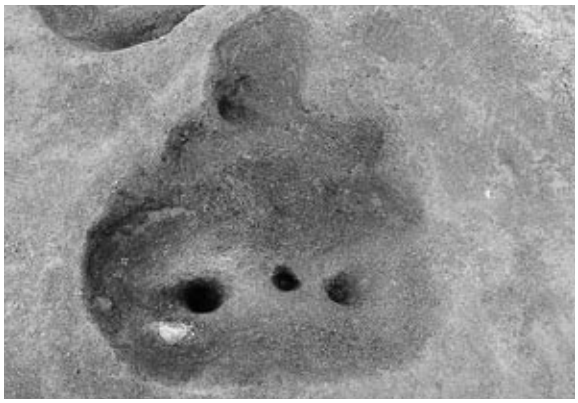
ＳＫ313　完掘状況（東から）



ＳＫ307　完掘状況（南から）



ＳＫ321　完掘状況（北から）



ＳＫ322　土器出土状況（北東から）

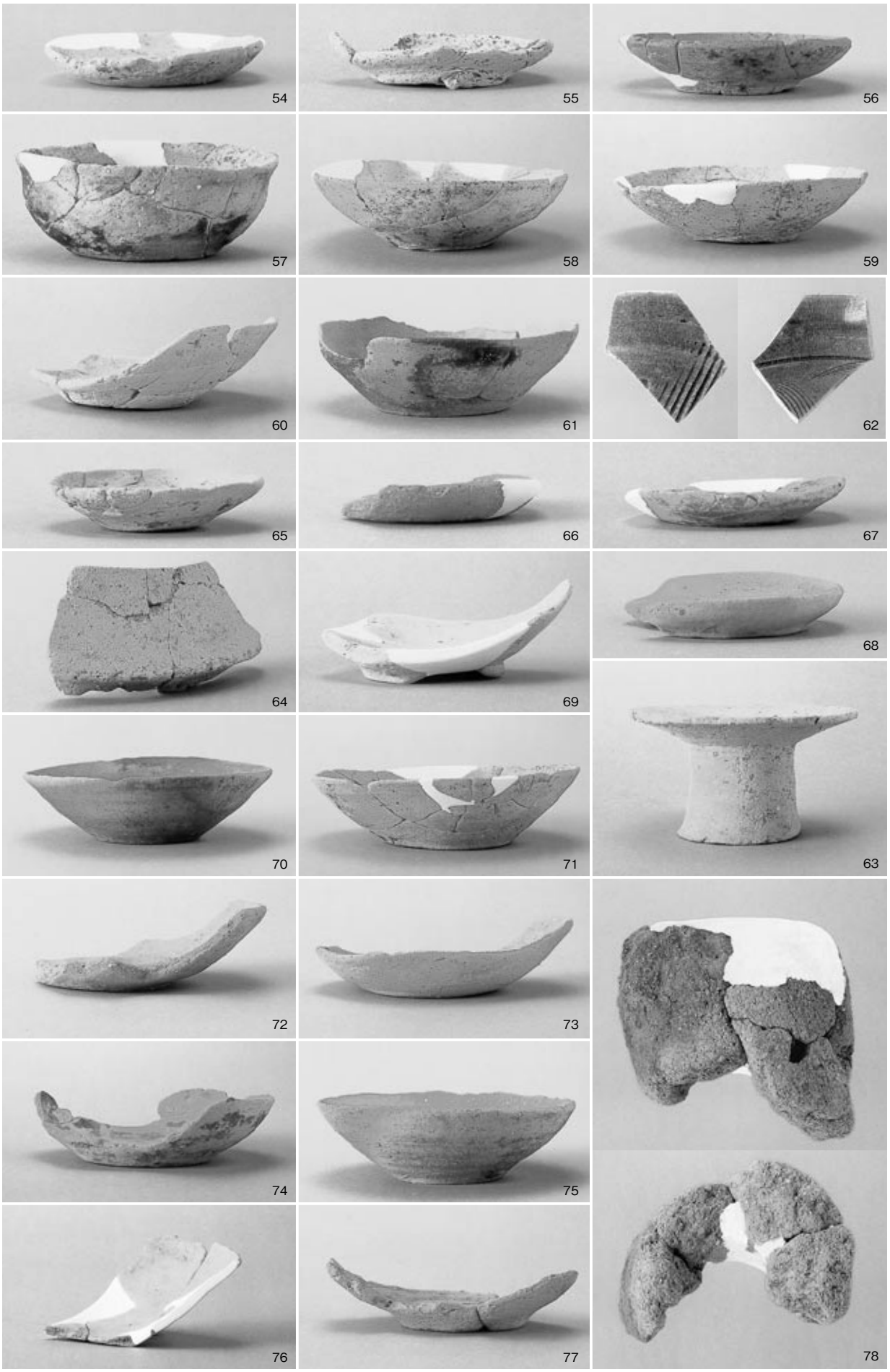
図版 24

出土遺物（1）

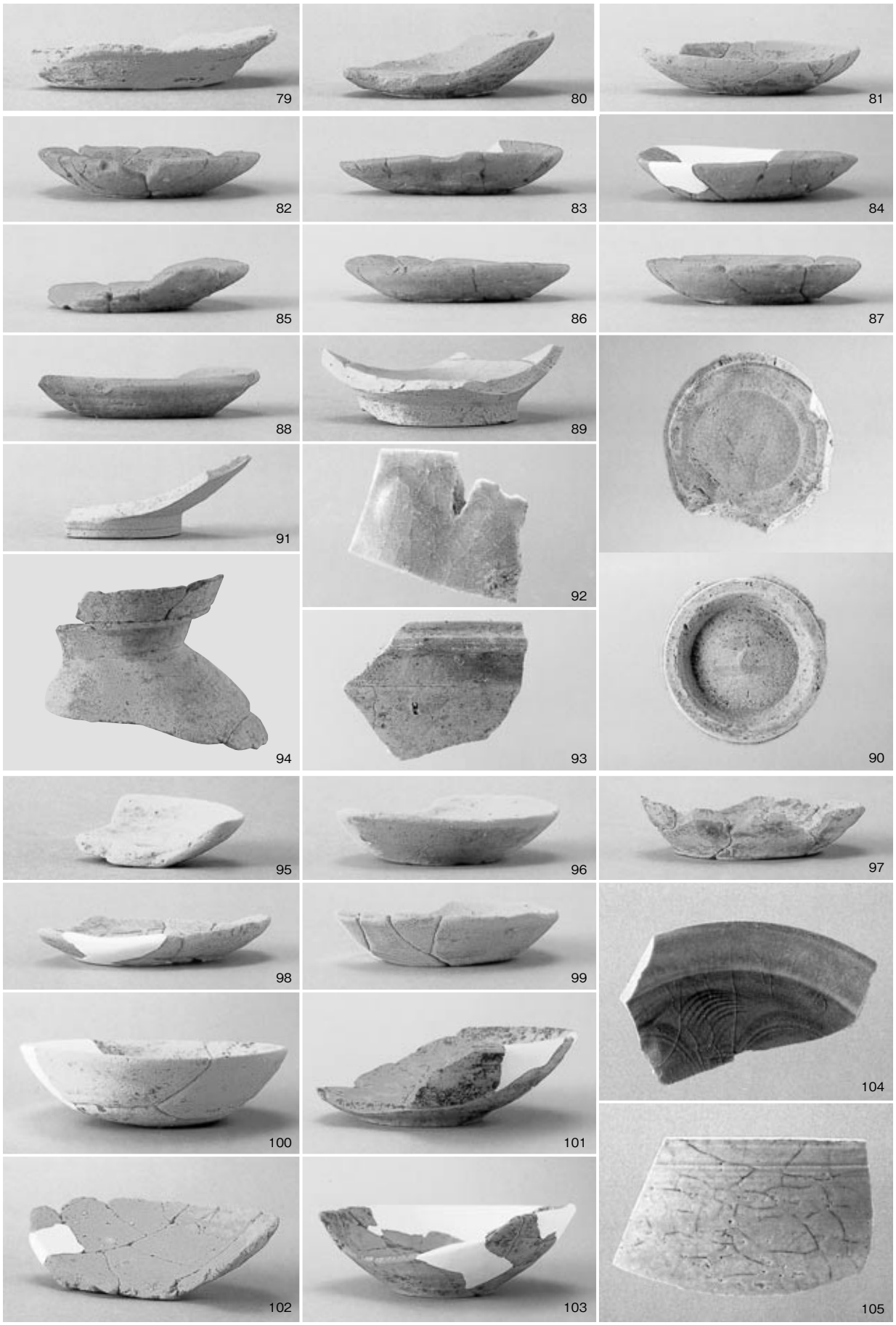
28
29
30
31
32
33
34
35
36
38
37
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53

出土遺物（2）

図版 26

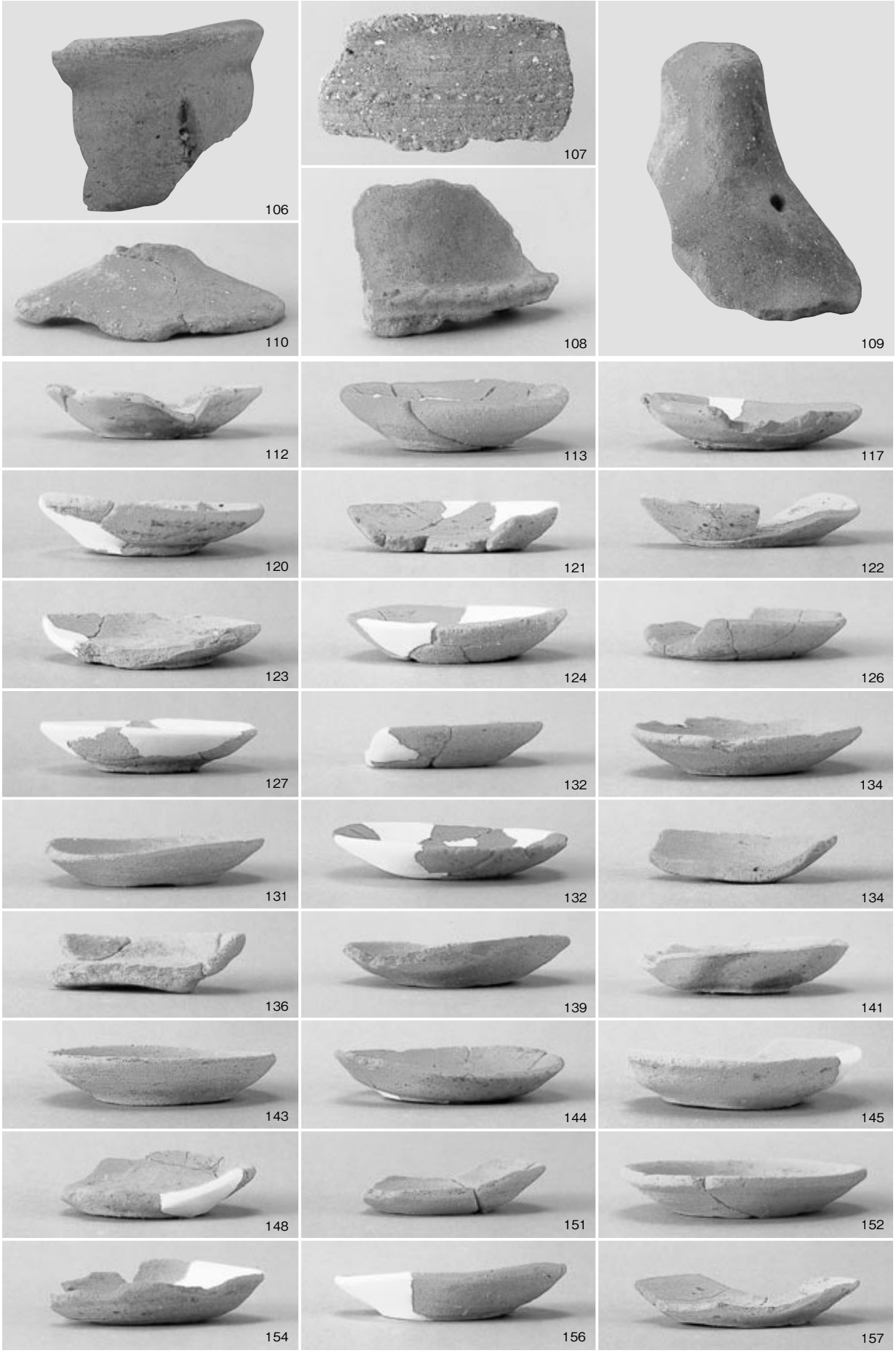

54
55
56
57
58
59
60
61
62
65
66
67
64
69
68
70
71
63
72
73
74
75
76
77
78

出土遺物（3）

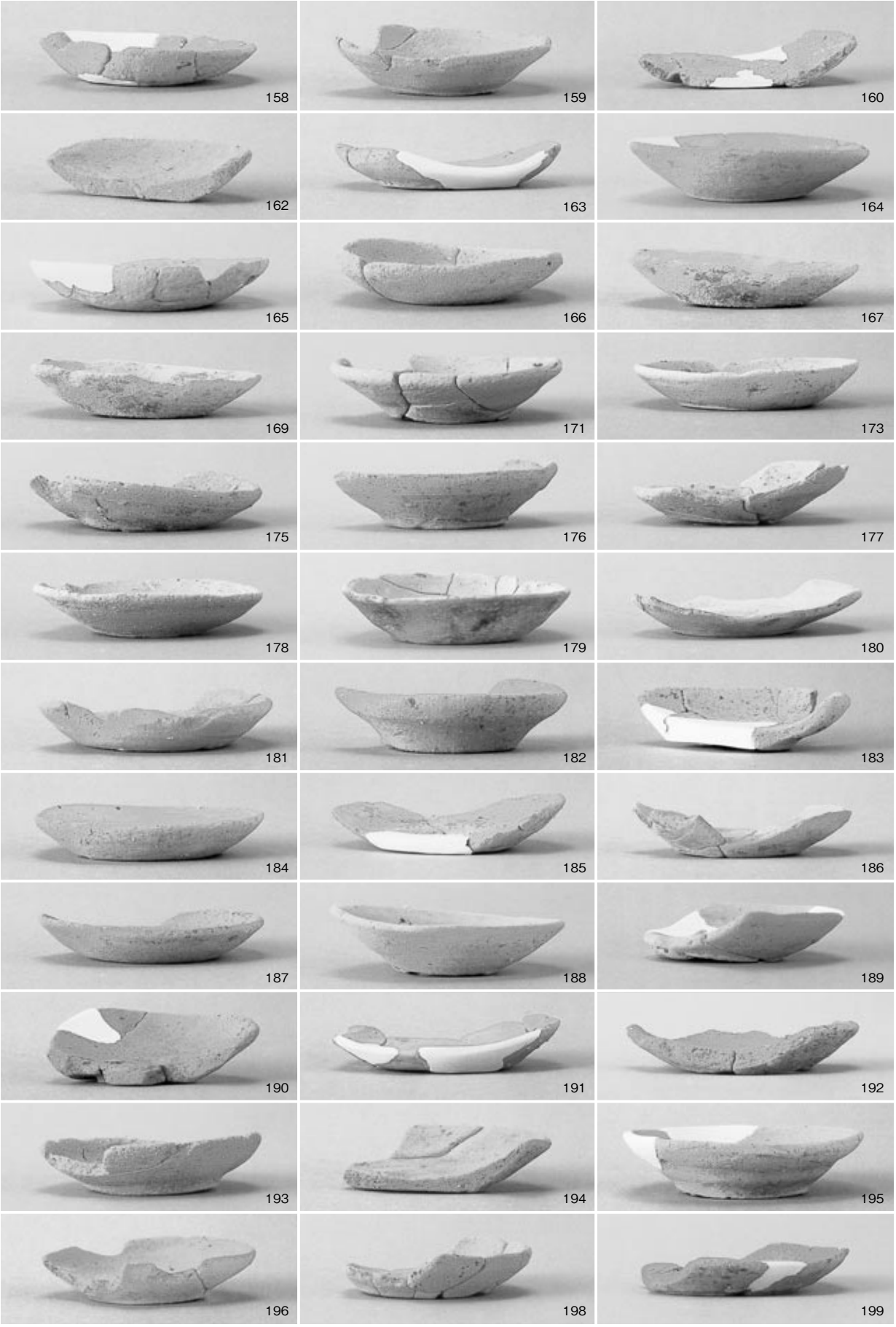

79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
91
92
90
94
93
95
96
97
98
99
104
100
101
102
103
105

出土遺物（4）

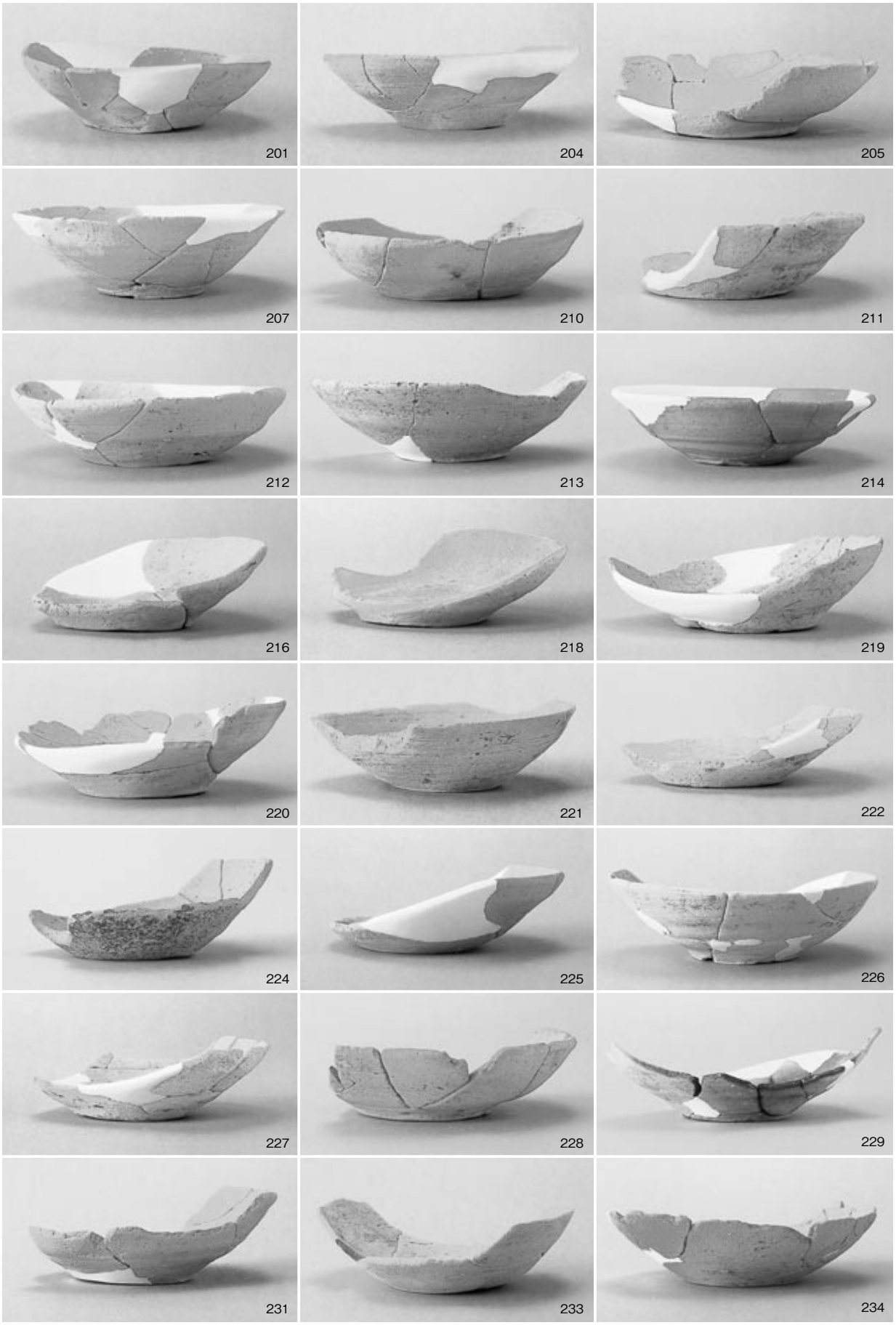
図版 28


106
107
108
109
110
112
113
117
120
121
122
123
124
126
127
132
134
131
132
134
136
139
141
143
144
145
148
151
152
154
156
157

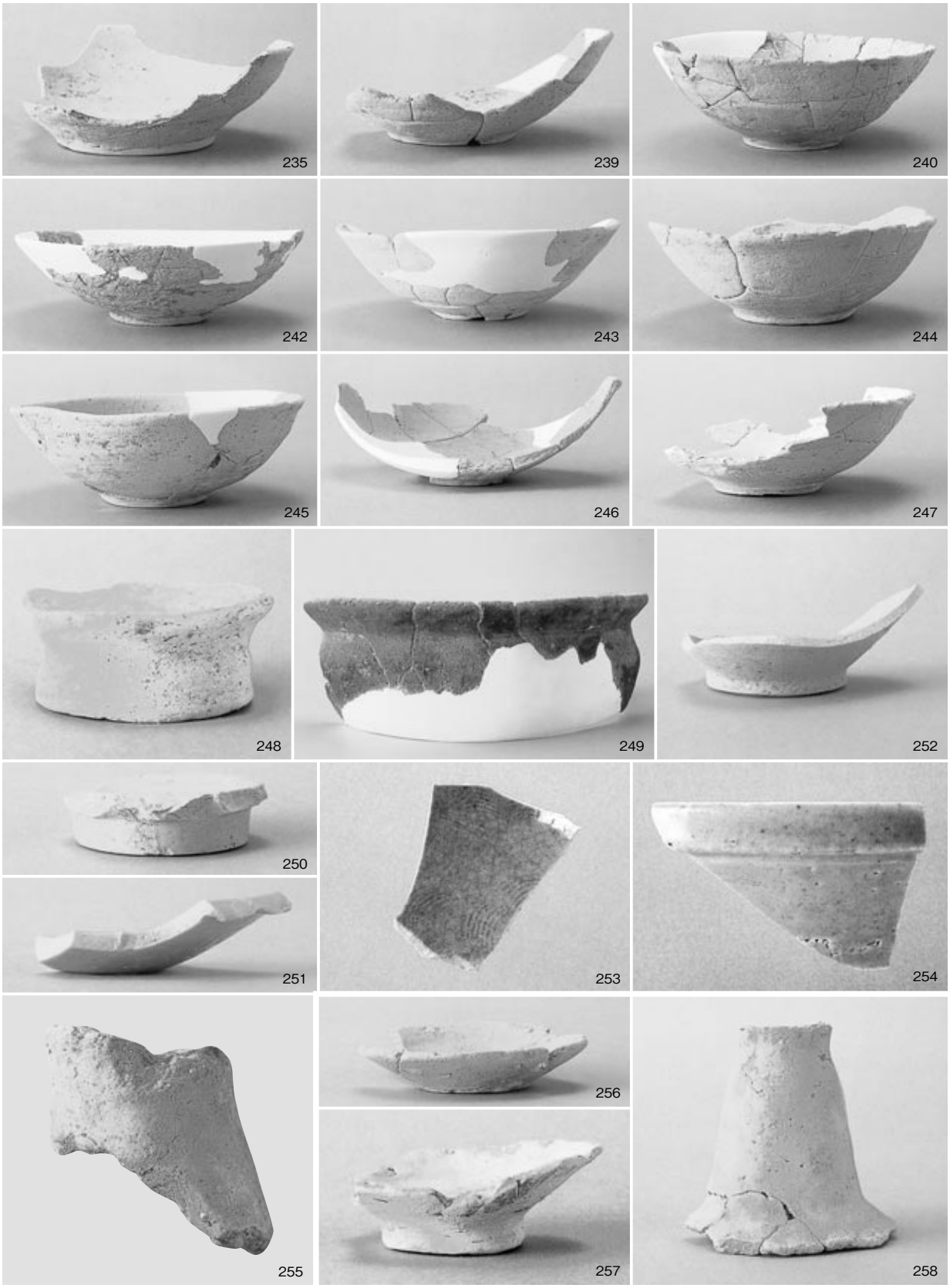
出土遺物（5）


158
159
160
162
163
164
165
166
167
169
171
173
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
198
199

出土遺物（6）

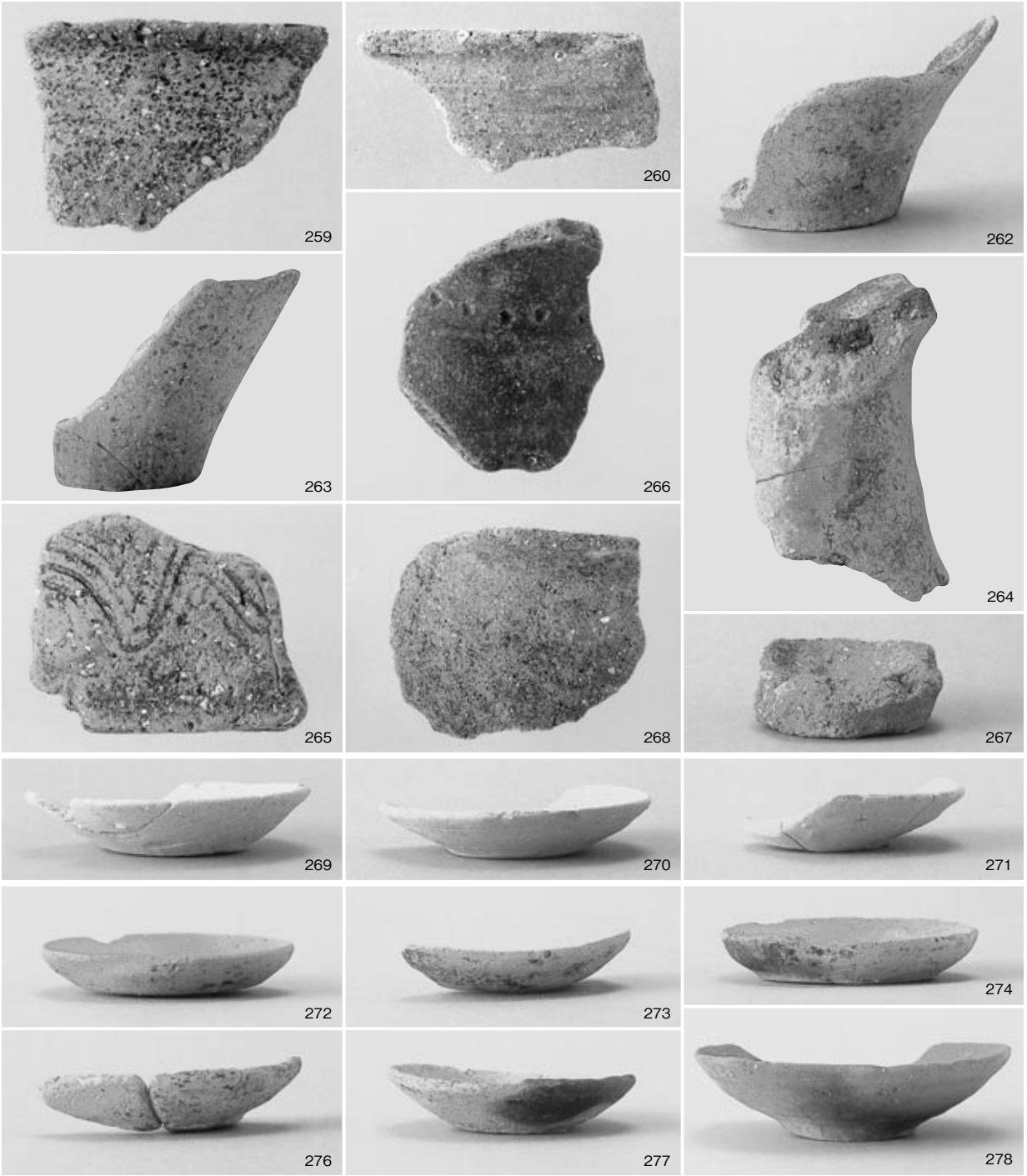

201
204
205
207
210
211
212
213
214
216
218
219
220
221
222
224
225
226
227
228
229
231
233
234

出土遺物（7）


235
239
240
242
243
244
245
246
247
248
249
252
250
251
253
254
255
256
257
258

出土遺物（8）

図版 32

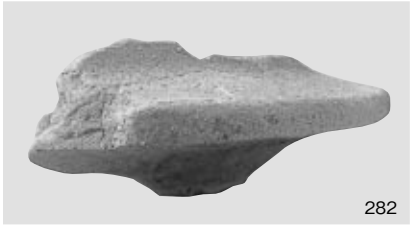

259
260
262
263
266
264
265
268
267
269
270
271
272
273
274
276
277
278

出土遺物（9）

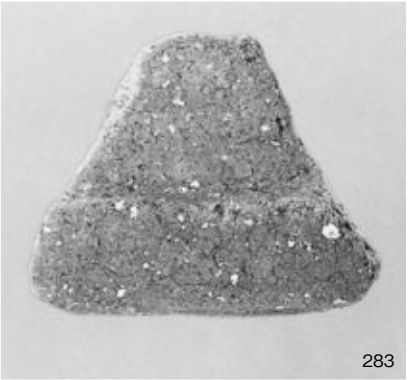
279

281

280


282

284


283

285

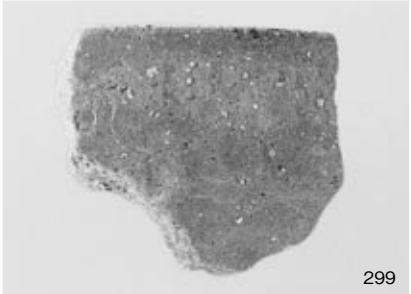
286

295

296

287

297


299

298

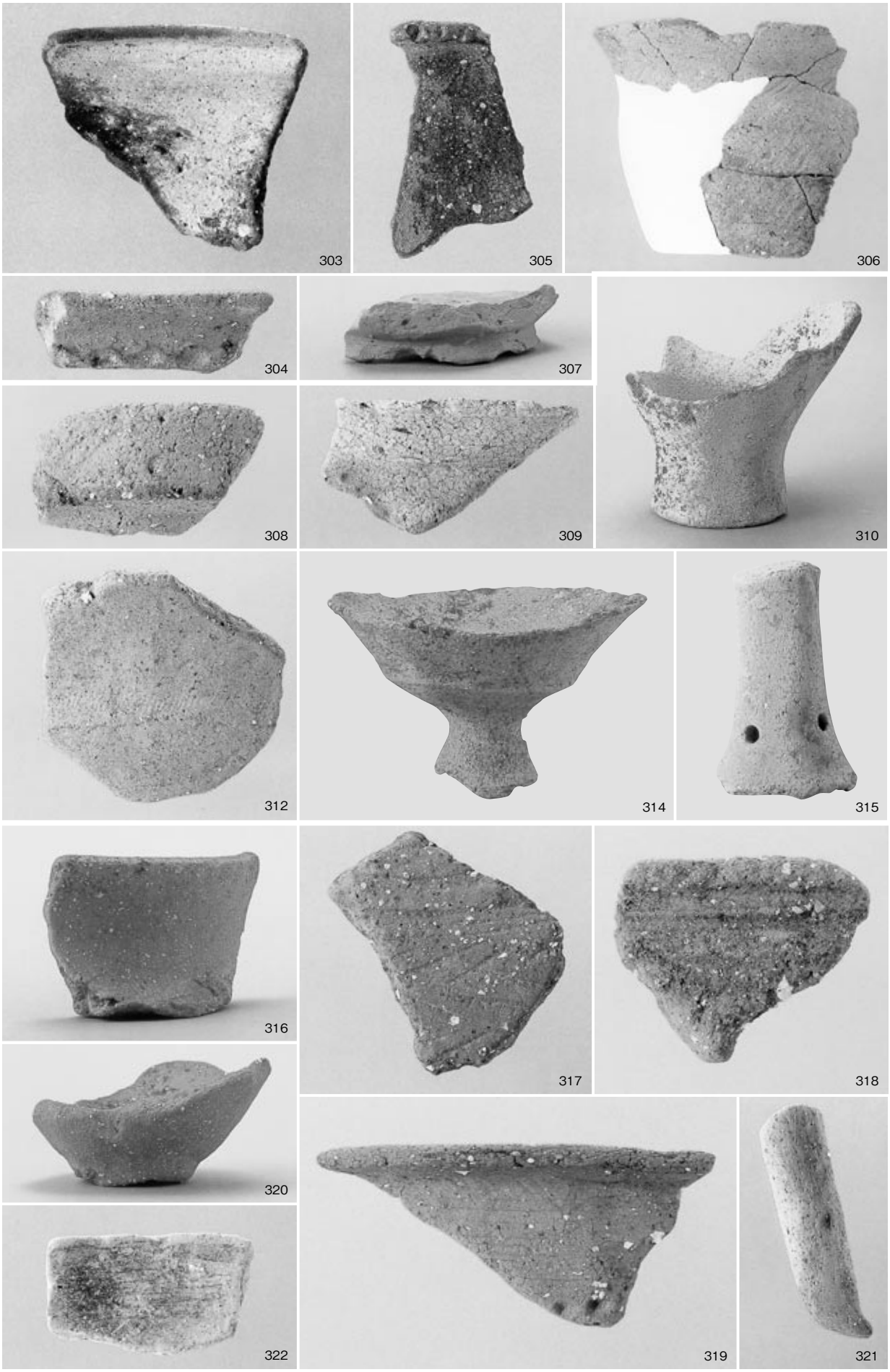
300

301

302

出土遺物（10）

図版 34


303
305
306
304
307
308
309
310
312
314
315
316
317
318
320
322
319
321

出土遺物（11）

323

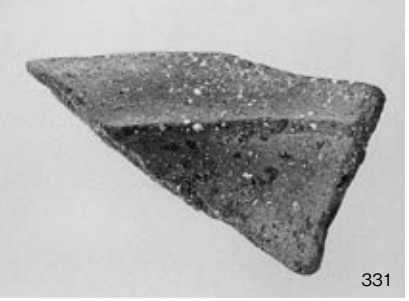
324

325

326

327

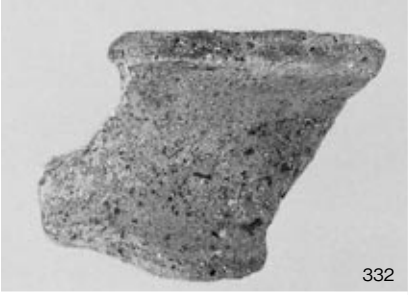
328


331

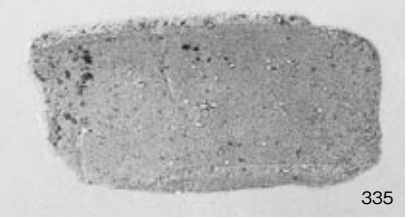
329

330

333


332

334


335

336

337

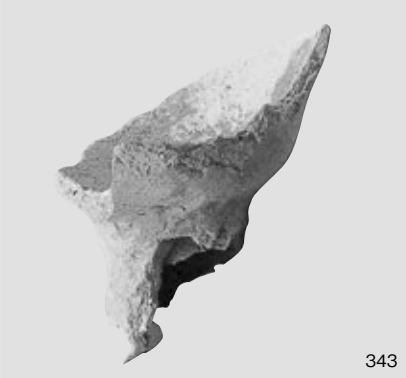
338

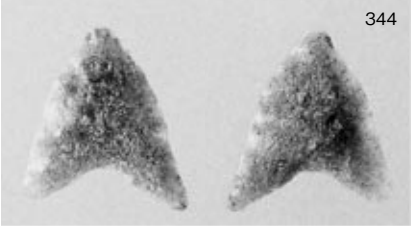
出土遺物（12）

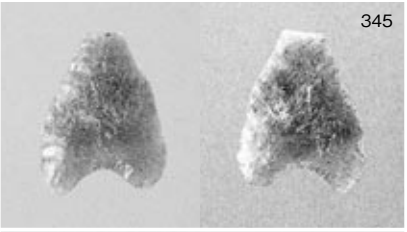
図版 36

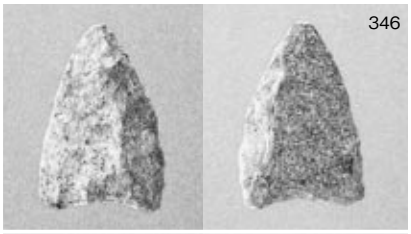
339

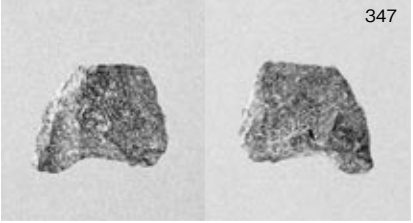
341

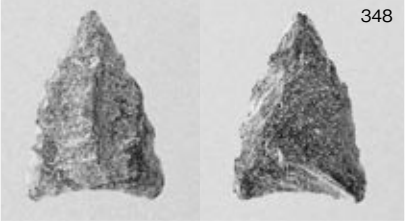

343

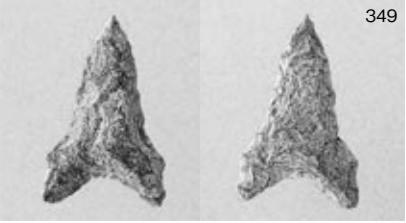

344


345


346


347

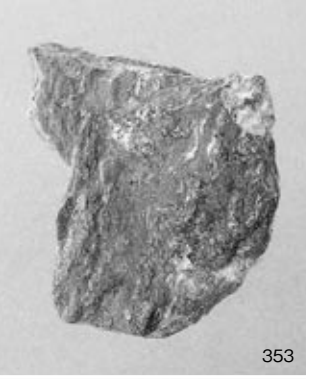

348

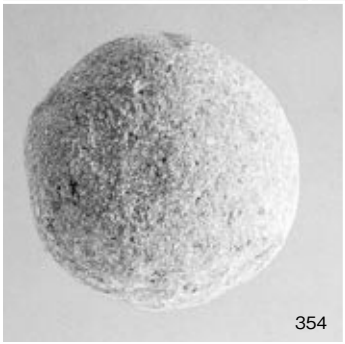

349

350

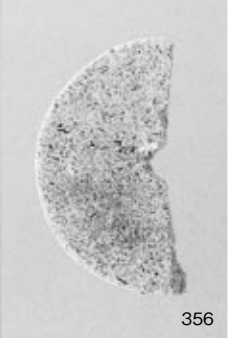
351

352


353

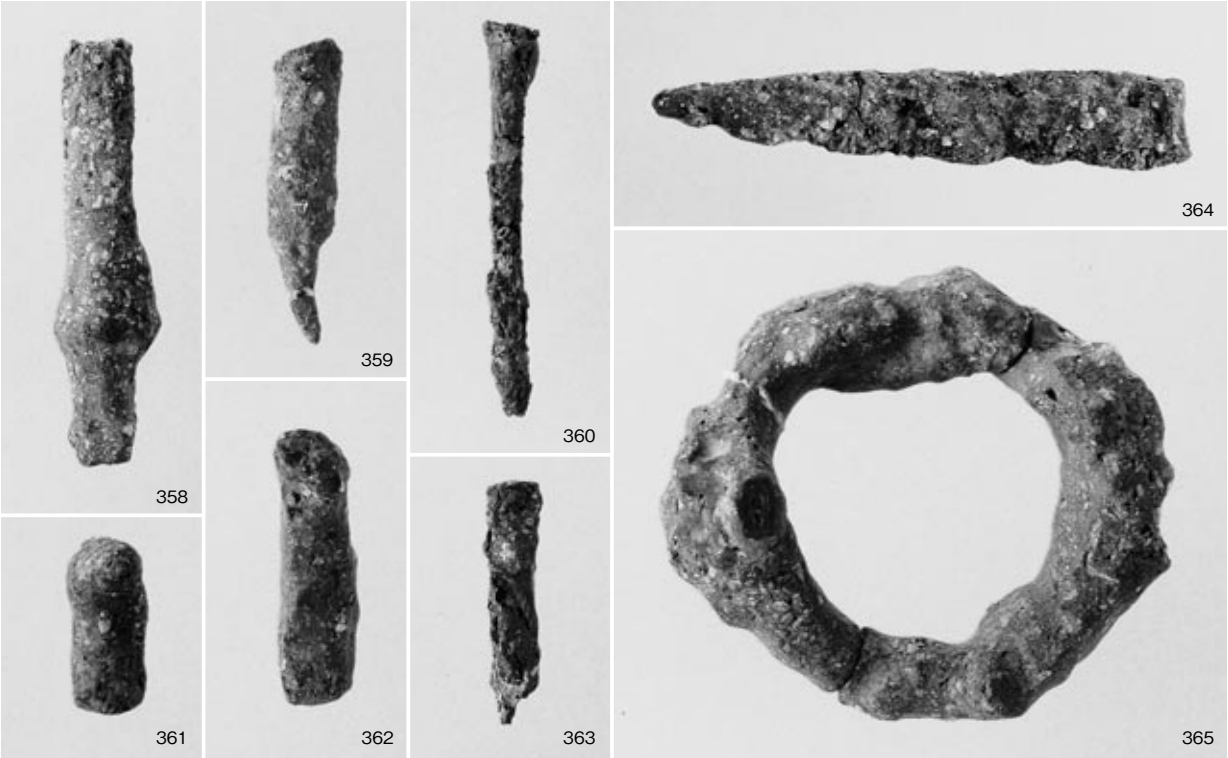

354

355


356

357

出土遺物（13）



出土遺物（14）

報 告 書 抄 録

ふ　り　が　な	しもみぎたいせき　かみさとちく
書　　名	下右田遺跡（神里地区）
副　書　名	
巻　　次	
シ　リ　ー　ズ　名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第53集
編　集　著　者　名	城島史朗　　椿　　英一
編　集　機　関	山口県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒753－0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発　行　年　月　日	西暦2006年3月23日（平成18年3月23日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもみぎたいせき 下右田遺跡 （かみさとちく 神里地区）	やまぐちけん 山口県 ほうふし 防府市 おおあざたかい 大字高井	35206		34°　4′　22″	131°　33′　11″	20050509 ～ 20050930	2,100	道路工事

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下右田遺跡 （神里地区）	集落跡	古代末 中世初	掘立柱建物　21 溝状遺構　18 土　　坑　44	縄文土器 弥生土器 土師器 磁器 石製品 鉄製品	12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物 幅約４ｍの溝状遺構

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第53集

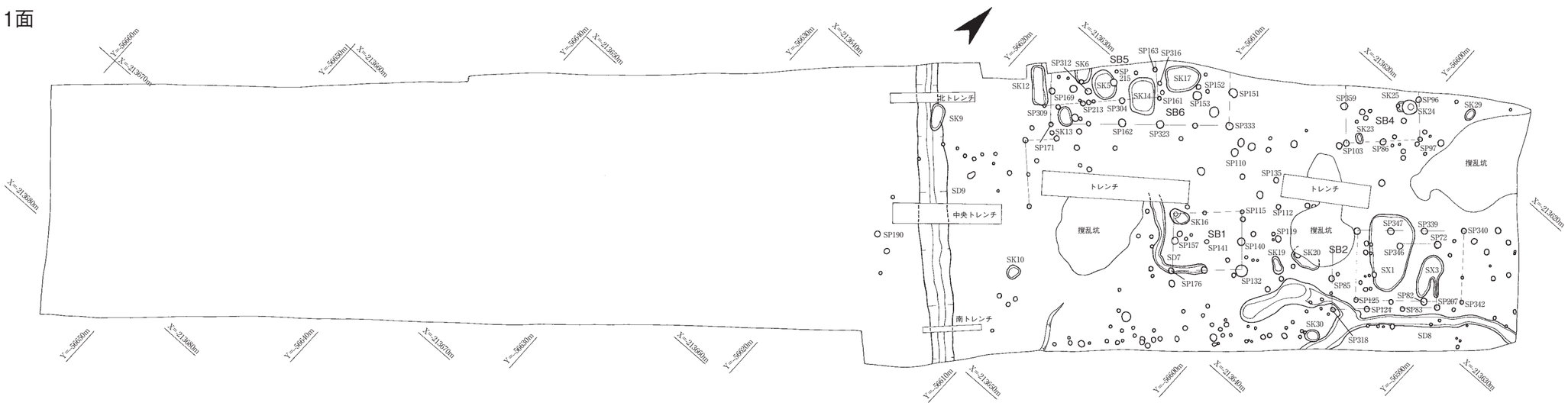
下 右 田 遺 跡

（神 里 地 区）

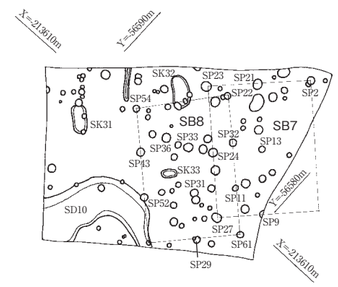
2006年3月

編集・発行　財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町3番22号
印　　刷　瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927　山口県下関市長府扇町9番50号

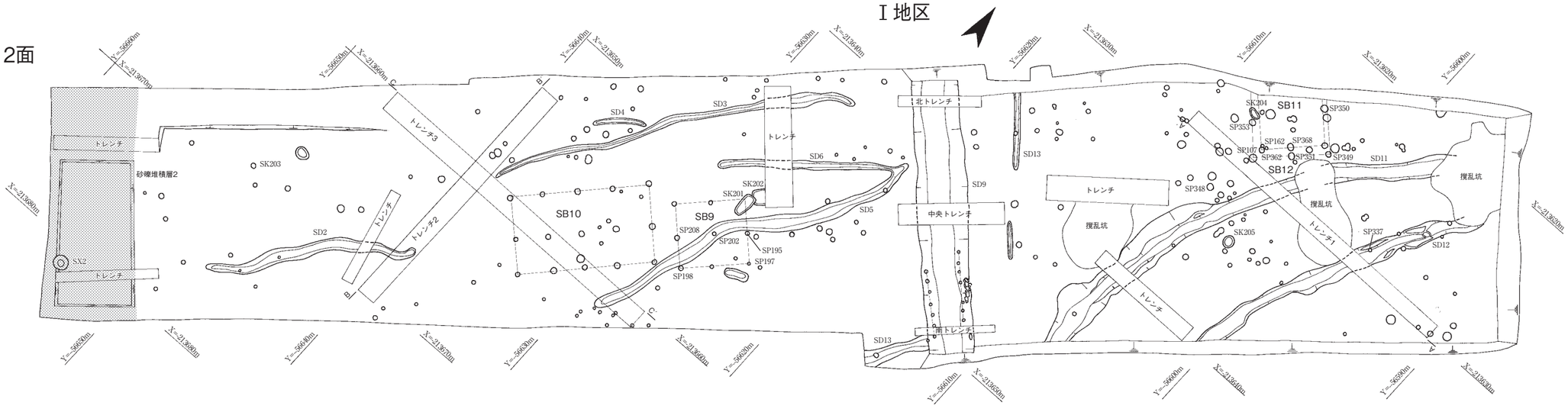
1面



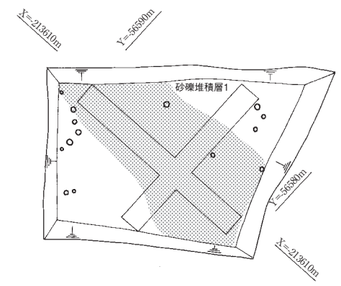
Ⅱ地区



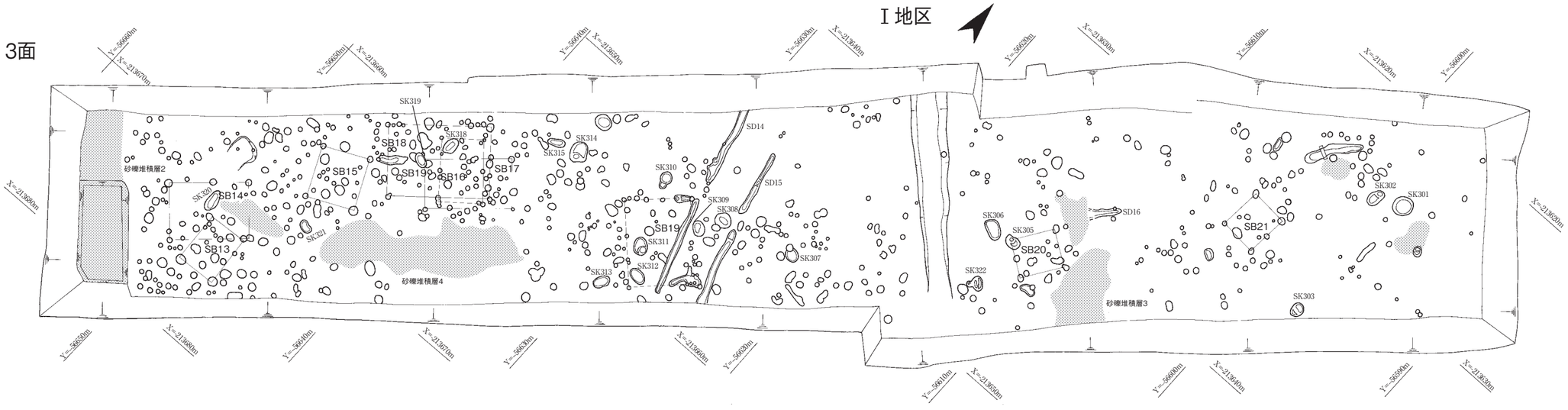
2面



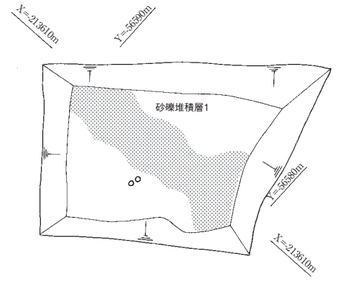
Ⅱ地区



3面



Ⅱ地区



遺構略号凡例
SB：掘立柱建物跡
SD：溝状遺構
SK：土坑
SP：柱穴
：砂礫堆積層

0 1/250 10m

下右田遺跡（神里地区）遺構配置図